

超次元ゲームネプ  
テューヌmk2 希望と  
絶望のウロボロス【凍  
結】

燐2

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは女神候補生達の勇気と希望の物語。

これは必要悪の魔神になった優しき少年の物語。

これは異世界から来襲者による混沌を振りまく邪神の物語。

積み重なっている希望、迫りくる絶望。それ等は円環を描いて、世界を行く末を定める。

最後に残るのは希望か絶望か、未だ真実は闇の中。

前作、超次元ゲームネプテューヌ 未知なる魔神の続編です。

TINAMIでも投稿を開始しました。

3 / 21日から大幅修正を開始。もうちょっと自分に納得が出来る内容にしたい

4 / 29日に修正終了。

12 / 27日、限界を感じ凍結決定。

# 目次

天獄のデイスぺア

オリジナル設定の詳細	1
プロローグ	17
終末へのプレリユード	
墓守り	31
無力差	45
事実	56
悪夢	66
崩壊	77
愛憎	87
来迎	101
犯罪、選択	112

自立	126
幻想	134
日☒	144
浸食（10／8日大幅修正）	152
異物	164
当然	175
国益	185
白闇	194
血舞	206
空夜	221
被害	236
夢見	245

始末	過去	現実	外伝：アイン・アルの一生	神殺	魔剣	悪獣	篡奪	産罪	墜子	空我	妖精	渴望
382	368	358	352	343	334	320	307	297	288	280	270	260

トゥルーエンド 『真実』	女神Ⅱ	女神	ノーマルルート。『神の世界』	空亡	バットエンドルート。『人の世界』	天性	爆発	深層	考察	答案	亡匿	相対
483	473		460		450	440	431	422	412	402	392	



## オリジナル設定の詳細

ここでは、ネプテューヌシリーズをそれなりにやってきた作者が、いい年しても溢れ出る厨二心と妄想が暴走して自己解釈して作り出した用語の説明をさせていただいております。

出来るだけネタバレを抑えたいのですが、作者の文章力はダメなので、作中で紹介できそうにない事もバリバリ書いて、修正もよくします。

※ぶっちゃけ本編見なくてもこれ見れば代々話の流れが分かってしまう内容になる可能性大なので本編見てから見る事をオススメします。





『マスターワールド  
基幹世界』

オリジナル設定。

『もしかして』というIF世界の元となる最重要世界。人間で例えるなら心臓のような物で、この世界の行方によって地獄のような世界や天国のような世界が楽々と生まれてしまう、そしてこの世界がもし滅んでしまった場合は他の世界も共に滅んでしまうので、細心の注意が必要。

勿論、異世界からの介入により前例が作られてしまえば別の世界に別の異世界から介入される可能性が上がってしまい世界が混沌とするため、それを嫌って基幹世界は最重要機密として後述する管理者は隠すことが多い。

『ブラッディハード  
冥獄神』

キヤラクター：零崎れいざき紅夜こうや

守護女神とは対極する存在。正のシェアエナジーとは逆に負のネガティブエネルギーを使う。

守護女神は人の祈りよって生み出されるが、ブラッディハードは人の想いよって生まれず人が高純度のネガティブエネルギーの結晶体『冥界メモリー』を取り込むことでその存在へと墜ちる。

その特性上、ブラッディハードになれる人材は数万年に一人現れる程度の確率で、人のネガティブエネルギーを扱う為に精神的に大きく負担が掛かるので、ブラッディハードになった存在は長生きすることはなく、正の存在である守護女神を生物的反応で憎悪を抱き血で血を洗う争いが確実に起きる。

ブラッディハードは女神の転換期に出現することが多く、守護女神はこれを倒すことで今一度自身の存在を確固たる者できるので、守護女神にとっても倒すべき敵で討伐後には数千年以上の栄光が約束されると言ってもいい。

紅夜の場合は異端中の異端で、守護女神の力を反転させたネガティブエネルギーを浴びて通常のブラッディハードにより圧倒的なまでの力をしたが同時に暴走する極めて危険性も多く、紅夜自身の肉体である『罪遺物』が原因で体の一部がモンスター化し、ネガティブエネルギーの怨念に似た意思が意識が乗っ取ろうとしている。

因みに短命のブラッディハードだが、精神的に強い者が膨大なネガティブエネルギーを吸収しながらも自我を長く保ち続け『ネクストフォーム』に進化する個体も少数だが確認されている。

## 『冥獄界』

### オリジナル設定

人の負が集まるとされるギョウカイ墓場の更に奥にあるとされるモンスター誕生の地。

常にモンスターが生まれ、殺し合い地獄のような場所でブラッディハードの領地。

そこでは女神の加護はないので、弱体化されていないモンスターは破格の戦闘能力を持つている。

因みに他人の負によって乗っ取られる狂暴化した個体を【汚染化】モンスター。個体に内包した負が一定のレベルまで増幅し女神の加護を単体で跳ね除ける程に強力になった個体は【猛争化】モンスターと呼ばれる。

## 『神界』

### オリジナル設定

女神を生み出す神聖な場所、女神に必要な最低限の知識や武術を教え込む教育所、殉職した女神の墓場がある。

女神の加護をゲームギョウ界に付与する重要な拠点とも言えるシステムがあり、これに乗っ取られるとゲームギョウ界の命運を握られる事と同威儀であるためにシステムの創造主である空はシステムそのものを隠蔽しているので誰も空以外誰も知らなかったが、前作にて期待を抱いたネプテューヌ達にはこのシステムの事を説明しており、こ

のシステムを逆手にとってネプテューヌ達も一時的に限界突破の力を得る事が出来るが、デメリットが大きすぎるので本当の最終手段としている。殉職した女神の墓場も空とイストワール、ゼクスしか知らなかったが後に解禁してネプテューヌ達も通う場所になりつつある。

一部の場所であるが冥獄界と神界両方とも全てのゲームギョウ界と繋がっている。

### 『管理者』

キャラクター：夜天やてん 空そら

可能性に頼る事は混沌の渦に沈める事、ゲームギョウ界最初の女神が大好きだったゲームギョウ界を守るために空が管理者という役職を無理やり得た。(ゲームギョウ界の管理者は今の所空だけ)

主に世界に起きた異変等を処理する為の存在だが、基本的に流動する時空において全く前例がない(異世界から侵略等)事しか動く事が少なく、自然のままただ世界の記録していることが多いが、管理者の中には積極的に事象に介入して好みの世界を造り出す者もいる。酷い状況になると世界の修正力が働き、管理者を殺す因子を持ったなんらかの生物が生まれ管理者を滅ぼす。そうなった場合は別の存在が管理者になるか、管理者不在のままでも世界は問題なく回るので放置される事や、そもそも最初から監理者がい

ない世界もある。

空の場合は未知の可能性を恐れて無理やり即知の展開に持つていくように裏で暗躍したり、異世界からの侵略者からゲームギョウ界を守ってはいるが結果的に見れば大量殺害をする暴君であることは変わらない。最終的に倒され監理者としての権利を使う事を辞めるが、それは女神達の作り出す未知の可能性を信じているが故に選択であり今の女神の心が折れてしまえば、遠慮なく同じことをすると宣言している。

因みに空は少々特殊な監理者で、本来であるのなら世界の記録が媒体しているアカシックレコードにアクセス制限があり過去と現代を見れても未来を見る事は出来ない代わりに世界の事象に介入して新しい設定を次々作り出すことが出来る。

### プロセスサユニツト

#### 独自解釈

シエアエナジー又はネガティブエネルギーによって構成される武装。

シエアエナジーそのものを纏う事で女神の戦闘能力を底上げ、多少異なる場合があるが全員が飛翔能力を得る。

遙か昔は「人と女神を繋ぐ物」と言われていた。それは女神の力に少しでもなりたいたいという人の科学力による努力の結晶によって作り上げられ、シエアエネルギーを宿しな

がら、女神に大幅なパワーアップを及ぼす物で合った。想いの力によって戦闘能力が変化する女神にとってプロセツサユニットは人との繋がりを感じさせる最強の剣と盾となる。

しかし、本来別の存在とも言える人と女神の距離が近づきすぎて引き起こった災厄によつて空によつてその技術が生まれる可能性は尽く潰されていつている。

今現在は空の干渉されずに日夜、対マジエコンヌ戦を想定したプロセツサユニットが開発されている。

### 守護女神

キャラクター：ネプテユーン・ノワール・ブラン・ベール

ネタバレになるので今は書きません。

### 守護女神候補生

キャラクター：ネプギア・ユニ・ラム・ロム

ネタバレになるので今は書きません。

ハイド・モジュール  
神格技能

人々の想いによって力を発揮する女神と冥獄神が一定のレベルへと到達した時に使用可能となる世界そのものと干渉する能力。

同じネクストフォームと呼ばれる段階へ進化した者が取得するが、女神自身の才能によつて人間形態でも使用できる個体は確認されている。

女神は主に概念や次元を操作する能力が多く、冥獄神は自身の能力を強化する者が多い。どちらも大量のシエアエネルギー又はネガティブエネルギーを消費する為に乱発してしまえば命に係わる諸刃の剣。(勿論消費が少ない能力もある)

逆に言えば大量のエネルギーを得る場所であるのなら使用回数は跳ね上がる。女神なら自ら守護する大陸ならばシエアエネルギーを回収しやすく、冥獄神の場合なら冥獄界なら使用回数は格段に上がる。しかしアイン・アルのように大量のモンスターを召喚して装備したり、強化したりする神格技能・ハードモジュール <rb>無尽の塵塚怪

</rb>><rp>>( </rp>><rt>サルページ・インフェルノ</rt>><rp>></rp>></ruby>は周囲にモンスターを満たすことでネガティブエネルギーを確保して、モンスターを吸収し続けることで消費と回復を両立させる突破りの能力もある。

ナハトヴァール・エーヴィヒカント  
砕け得ぬ紫微の黒暗天

キャラクター：夜天 空

本来『絶壊の審判者』を制御している出力と制御機能を全面開放させた。リミッター解除モード。

全身の『神縛枷鎖呪術式』を元の姿である『魄翼』と呼ばられる形状不安定な物へと戻す。その際に空の服や体に燃え上がる様な刺青が浮き上がり、黄金の十字架が特徴的な魔導書を展開する。その魔導書からは空が生まれる前からのありとあらゆる魔法の技術などを記録しており、そこから扱う魔法の数々は星の如く多種に及ぶ。更に『永遠結晶エグザミアの欠片』と呼ばれる核から無限に生み出される魔力によって、惑星を対象にするような大規模殲滅魔法であろうとも、それを何重に重ねて連続で撃ち続けることが出来る。恐るべきは空自身の『絶壊の審判者』がほとんど抑えられず解放されることで、並の存在なら触れただけで消滅するほど。ただし、このモード中は無差別に『絶壊の審判者』が発動中の為に世界を壊し続ける為に長時間になるほど世界が破壊尽くされ消滅してしまう危険性がある。空にとっては切りたくない切り札の一つ。

始原の女神

キャラクター：レインボハート

今は亡き女神であり、ゲームギョウ界が出来た時の人の妄想等によって生まれた女



神。

人の思想に影響されやすく、災害によって荒んだ人の心によって徐々に性格が変わってしまつていく自身に恐怖していき、最終的にネガティブエネルギーによって暴走してしまつた人類を救うために人間の要求を聞き入れ、暴力や大衆の見世物、ストレスの捌け口として精神と肉体をボロボロにされた後に教会の権力を失脚させるために殺害されるが……。

バンテオン・エヘクトル  
神殺しの頂点

キヤラクター：零崎 空亡

未だに解明が出来ていない謎の能力。神々の力を自分の意志で物にしたり反射したり、相手の身体能力を倍にした能力を得たり彼女の存在を知っているのなら、誰もがそれを欲し、誰もがそれを恐怖し亡き者にさせようとする。

本人の努力もあり、非戦闘時は神に触つても無害なのだが、その力は空でさえもバグと言わせる物で、神相手なら絶対に負けること傷つけることすら出来ない。逆に神に関わらない物、普通の一般人などは彼女を唯一傷つけられるが彼女自身恐るべき再生能力があり頭を潰されても生きていられる。更に他の神を力をコピーしたり、神殺しの武器を一瞬で製造したりするので事実上無敵に近いが罪遺物とは相性が悪い。因みに他の神

の力をコピーして行使することはパズルの形に嵌められないパズルを無理やりはめ込むような行為であり、乱用すれば世界が自己矛盾で消滅するのでコピーしても彼女は滅多に使わない。

### 罪遺物

キヤラクター：零崎 紅夜

多元宇宙単位マルチバースを十六個も取り込んだ本来存在することすら烏滸がましい旧神の中でも禁句とされる存在。

全ての未来を否定した零崎紅夜（作中の紅夜ではなく、ゲームギョウ界に来る前の紅夜）が手当たり次第に生きる者全てを殺戮し続け、その力を邪神が作り出した『死ネクロノミコン境界法』を並行使用して自らの体を改造していき、多元宇宙単位マルチバースという想像もできない超質量の存在体となった。それは負が負を呼ぶように内包した世界であり、殺戮と憎悪と暴虐に染まったとんでもないネガティブエネルギーを未来永劫生み出す無限機関となっている。

更に生物としてカテゴリーを超え、前例を生み出したが故にこれ以上生み出していけないと世界の理から外された『円環外れ』なので世界に対して事象に介入する等の強力な特殊技能を全て無力化（そもそもその場所にいないという事にされているから）。本

来であるのなら、世界に干渉すら出来ないのだが、『死ネクロノミコン・デイズスター界魔境法』の力で常に顕現しているのに、特殊技能が完全に効かないという訳ではないが、その質量の力によって強引に弾かれるのがほとんどで、その多元宇宙単位を取り込んだ質量を攻撃と防御に回してしまえばただのパンチも世界単位を破壊するほどの規則外な威力。現在の所有者である紅夜はメンタル的に使えないので、デペアの力と■の魔導書によって嚴重に封印されているが……。

DESTROYER  
絶壊の審判者

キヤラクター：夜天 空

空の特殊能力で本人曰く最も使い勝手が物凄く悪い。決まれば回避不能の絶対なのだ、まずこの能力は世界に干渉して、破壊対象を認識して行使というパソコンで例えるなら超膨大なデータの中で検索をして見つけた物を破壊するという手間が必要。その特性上、相手の存在は大きければ大きい程能力発動も早くなり、相手が異世界からの侵略者等本来であるのなら絶対に見えないイレギュラーな存在ならば即発動できる。相手に直接触れても発動できるがその場合は触れた部分しか破壊できない。コントロールが難しすぎるので大幅に制限を掛けており、封印を解除すれば周囲を破壊してしまうため、世界を守る側の空が使用することは滅多にない。

ネクロノミコン・デイザスター  
死界魔境法キヤラクター：???  
???

千の貌を持つとされる邪神ニヤルラトホテツプが作り出した史上最悪の魔導書。自身の父である邪神皇アザトースが生み出した種を核にして、ありとあらゆる邪神の叡智を記されたこれは封印されている全ての邪神を召喚する媒体にすることを可能として、『アザトースの種子』を通じて無限の宇宙の中心で眠っているとされるアザトースから直接、無限の魔力を取り出すことが出来る。

作成者のニヤルラトホテツプも使えるが、人間と言う可能性がどこまでこの狂気と恐怖に満ちた魔導本を高めてくれるかを鮮血と破滅に彩られた救いようのない物語を糧に力を増して、世界を破滅させてきた元所有者たちの一片の隙間もなく絶望と狂気に染まった暗鬼の魂達をたつた一つの若い少年が支配して操作する人材を発見する（ニヤルラトホテツプは部下にあらゆる手を使ったが尽く失敗して何度も殺される羽目になる）この所有者は自分自身で痛めつける事を好むので邪神の力は武装やちよつと力を貸してもらう程度で暗黙系の魔法でその力を使っている者が見ても、恐ろしい事をしていく程度の認識しか出来ません。

因みにこの魔導書ページ開いて見ただけで1D10/100、魔法を解いたら魔導書

を見ただけで1/1D10です。

因みに世界を破壊させようとしていた所有者はニャルラトホテツプが最も気に入っている旧神の隷属によつてその意志は破壊され、後にこの魔導書の所有者とニャルラトホテツプはある意味で親子関係なので、心の中では父親息子（お互いいい歳なので恥ずかしがっている）と言いつ合っているほど仲は良く、普段は悪友同士の様にある人物とどう虐めてやろうかと好きな女の子をスカートをめくる子供の様な思考で無駄に洗練された無駄のない無駄な邪神の知識で使っている。

### 始次元概念体

キャラクター：テイシフオネ

その力は全能なる母と言われている。原初の混沌、世界という概念が存在していなくなった太古の流転の中にあつた闇の一部が具現化した存在。その特性上世界に起きる全ての現象の上位互換であり、特殊能力などは一切を無効どころか反射して、自身その物が世界の一部であるために世界と同情して現象すら改ざんする。弱点といえば自分自身で何かを生み出したりすることが難しいので、戦闘はカウンターが主になるが、そもそも彼女を敵に回せば全世界のそのものと対決するという事に近いので、そもそも戦おうとしていること自体が間違っている。

世界単位<sup>ユニバース</sup>

オリジナル設定

今自分達が生きている次元。

多元宇宙単位<sup>マルチバース</sup>

オリジナル設定

全次元宇宙単位<sup>オールムニバース</sup> 一つの次元の集合体。空や紅夜達は別の多元宇宙単位からやってきた

オリジナル設定

ありとあらゆる全ての次元の集合体。

## プロローグ

世は新しき時代に進む。

新たな法律。

新たな正義。

新たな秩序。

嘗て世界を管理と言う名目で運命すらも掌握した異世界の天使がいた世界の形はもうない。

彼女に逢うための犠牲を当たり前に続くだけの世界はない。夢を叶える為に産まれるその時を待つ舞台は崩壊している。

全ては、みんなが笑い合える明日を望む守護女神達、その守護女神達を支えると決意した紅き未知なる魔神、それに協力する人間達によって作り出された世界はまだ始まったばかり。

夢は始まったばかり、モンスターの消失世界の中で人々は女神に日々感謝しながら平和な毎日が続く。

だが、いいことばかりではなく新しい世界に適応できない者達や、それに己の糧を得

るために暗躍する者達も少なくはあったが存在し、そんな時は守護女神達はお互いに協力し合いながらそれを裁き、話し合いをすることで少しずつ前に進み始めた。

その裏では、モンスター誕生地であり希望を正当化するためにゲームギョウ界にモンスターを配給し続けた冥獄界と呼ばれる世界では、紅き魔神は己の力を持つて世界そのものをコントロールすることで、モンスター発生を防ぐことに尽力していた。

全てはうまく行っている――。

紅き魔神が冥獄界へ去ってから一年、誰もがそう思った時、始まったのはマジエコンと呼ばれるツールの異様な普及とモンスターが再び姿を現したことだった。

人間側の代表として女神達の傍でサポートする教祖と呼ばれる中で、女神を援助するため、そして歴史を整理するために生み出された精霊であるプラネテューヌの教祖、イストワールは直ぐに事の重大さを理解して他国にも協力を要請したのちに対処に当たった。

まず、マジエコンと呼ばれるツールの一部にはオーバーテクノロジー技術が使われており、その機能はハッキング機能に優れ、瞬く間にゲームギョウ界中に広がった。違法



ダウンロードが誰でも簡単に誰にも痕跡を残さず出来る夢の様なアイテムに経済は崩れ始め、更にいなくなつたはずのモンスターが押し寄せてくるこの事態。この二つはまるで繋がっているように起き、同時にマジエコンを製作したと言われる組織はマジエコン又と名乗り、自らを信仰する神を崇めれば、更なる祝福が与えられることが噂で広まってしまう。

それは、人間にとって感染性の強い毒の様に広がり女神を信仰する者達は、徐々に少なくなつてしまつた。生まれたその地の女神しか信仰してはいけない暗黙の掟はなく、信仰自由化により誰もが好きな物に信仰できる世界に彼らの活動を止める者は少ない。

悪い事だけではなく、人間の中にはモンスターに対抗できる公式組織を作ろうとした動きが活発となり、生まれた大陸の女神を信仰しなければならぬ事を嫌つた人たちが、自由な信仰を求めるために作り上げた組織である『ギルド』が注目されるようになった。元は流れ者達が自らの手で生きていくためにモンスターを討伐することで収入を得るために迅速にモンスターに対しての情報を得るための情報経路が大きく役に立つたのだ。これにより、ある程度武術を嗜んでいるのならその実力に合わせて安全なエリアでモンスターが討伐できるようになつた。

しかし、これは同時に女神の価値を下げる事にも繋がりが、今の状況は悪い方に行くばかりではあつた。

プラネテユースの教祖であるイストワールは、広がるマジエコンの流出先を特定するべく他の大陸の教祖に協力を要請し、女神達はモンスターがゲームギョウ界に一度顕現する為姿を現す大地、同時に死んだ者の魂が集まる場所である『ギョウカイ墓場』へ調査へ向かったのであった。

本来ギョウカイ墓場の門番をしている女神でありモンスターである『ゼクスプロセツサ・ドラゴニス』の身を心配するイストワール。

そして、冥獄界への連絡する唯一の方法であった夜天 空無きゲームギョウ界では女神達も落ちていくシエアエネジーに焦りを隠せないでいた。



紅い雲が日の光を遮断し、その大地はまるで鮮血が万遍なく沁みた色をした大地。そこから辺には、時代の流れと共に人々の記憶から曖昧になり存在そのものを忘却された物が辺りに散らばっている。そんな目に痛い真つ赤な世界は死んだよう冷たい。なぜならばこの場は死んだ者だけが許される場所。その身が死に、魂魄となった物だけが足を

踏み入れる事を許される神聖なる墓場。

その中で飛び交う四つの閃光とそれを叩き落とす漆黒の影。また、小さな体で巨大な戦斧を振り回す少女が、闇夜より更に黒い常闇の一撃にひれ伏す。

「ブラン!!」

「このお!!」

小石を蹴るように吹き飛ばされた仲間内の一人が彼女の名を叫び、逆上して更なる攻撃を仕掛ける女神。感情が入り過ぎ、その動きは大降りとなってしまう。しかし、その一撃は人智を超えた女神の一撃、並の人間であるのなら木端微塵に吹き飛ばであろう守護するための破壊の力。

美しい黒の軌跡を描いた斬撃は、対極である雪白の色をした美しき大剣にとって妨げられる。

「んー、いいアングル。ってか、お前らそんな体のラインがくつきりしている服装でよく戦えるよな? 脱げば脱ぐほど速くなる魔法少女もびっくりだぜ。いや、俺にとってはいい褒美だから全く問題ないけどな」

「ぐっ……、減らず口を!」

「おっと、女が男に力比べってか? いや、時間稼ぎか」

黒白の双大剣を構えた青年から大人へと変わっていく頃のそんな若々しい声を発す

る影のようなコートを羽織ったそれは一人で四女神を圧倒していた。その服装は絶対なる存在感を醸し出す黒。星の煌くこと無き夜の天空より真つ黒なコートに顔は深いフードによつて隠されているので分からないが、二十歳ぐらいの印象を受ける背丈だ。

「喰らいなさい。」

空間に展開された緑色の魔法陣。黒の女神は口元を鋭くさせた。罅迫り合い状態で動けないそして計算された角度からの石槍の攻撃は、この青年がどう動こうと最低一発は当たる。その隙に強引に押しつけるそんな計算が合った。更に後ろには紫の女神の斬撃が待ち構えている。相手の全ては未知数であるが、幾度も重ねる斬撃の感触からしてあのコートの防御機能はないと直感している。その上から斬撃を加えられれば、奴の体が鋼鉄でないかぎり確か女神の刃は容赦なく奴の体を切り裂く。だが、目の前の闇は戦いを楽しんでいる笑い声と共に力を抜かせた。

「マジックに頼まれた砂糖たつぷり染み込ませたリングたつぷりのアップルパイより甘いぜ!!」

力を込めていた女神の大剣はそのまま押し切るように見えたが、素早く体を低くして、そのまま地面に滑らせるような回し蹴りは、黒の女神を態勢を崩しには十分すぎた。緑の女神は一瞬、判断に迷った。思いもしなかった黒の女神の軌道によつて配置した魔法陣を全て使ってしまうえば黒の女神に当たる可能性が合ったのだ。直ぐに先読みをし

て目標を定めようとするがあまりに遅すぎだ。

次の瞬間には、もう片方に握っていた深い闇色の太剣を体を回した勢いで殴り上げるように振り上げられる一撃によって、見た目では想像も出来ない力を出すことは出来る女神は宙に舞う。

「一瞬間を盾にしたか。ま、ちよつと遅かったけどな」

「はあああああ!!」

剣先に滴る血を地面に振り落した瞬間、薄い紫色と緑色をした光の推進剤を莫大に噴出しながら突貫する二つの閃光。戦闘中に余所見をするという、致命的な隙に全てを込めた二人の刺穿は彼の足元から螺旋を描く様に高速回転する紙片ペーヅによって防がれた。それに紫の女神は信じられないように目を開く。

「これは——」

「詠唱は面倒から破棄つと、アームズ・コネクト・クトゥル霊刃天成・海魔!!」

その言霊を合図に紙片ペーヅが爆ぜる。次の瞬間、どこからともなく溢れた水色の液体は彼の手によつて生きている様に操作され、土石流の如く強烈な波に二人は成すすべなく距離を強制的に開かれ、人為的に生み出された津波に？み込まれ捕縛された。オマケとばかりに上空で体制を整えた黒き女神も液体で造られた触手が、彼女の足を掴み容赦なく地面に叩き落とし、立ち上がるうとしていた白き女神も共々容赦なく呑みこんだ。四

女神を喰らった操作された水禍は壁の形を作り、四女神達は口から気泡を零しながら、信じられないと言わんばかりに声を出す、ケラケラと声音の低い枯れた声で、男の声を発する黒ずくめの何者かは、四女神の捕縛姿を面白おかしく笑う。

「んー？聞こえない？あ、違った分らない。まあ口の動きと表情から大体察することとはできるけどさ、一々解読するのは面倒なんだよ。確か、読唇術って言ったよな？あいつには教えてもらったけど、あれだよなもう殴って吐かせた方がいいってタイプなんだよ。ミⅡゴの技術を応用すれば生物なら大体の情報が抜きだせるし」

これは別の世界、彼の言霊によって召喚されたのは定まった星辰が揃うまで暗き海淵で眠る邪神の寢殿から溢れる冒瀆的な魔水。不快で不気味な緑色に濁った水の中でも、かく女神達、シエアエナジーによって構成されたプロセッサユニットは邪神の気に汚染されその光を失い停止する。寧ろ水の中にいるのに手足は、まるで触手のような物で縛られているような感触に女神達は鳥肌が立つ。暗黒を見ているような黒いコートは召喚された汚濁の魔水のような緑化した汚水を被ったような深緑色へと変化していた。

「流石に寢殿の中の水は無理か、出来たらできたでこいつらのS A N値がヤバかっただろうけどな」

なんとか抜け出そうと抵抗を続けるが、縛る力は強くなるばかりで更に呼吸困難によつて生み出される焦心は冷静な判断を狂わせる。この世で頂点とも言える存在であ

る女神達はあっさり蜘蛛の巣に捕まっていた。

それを口を鳴らし、大剣に地面を突き刺して空いた手で顎を擦りながら卑猥な目で観察をする。

「改めてみるけど、あれだな。若々しくて初々しくて綺麗だな。是非ともぐちやぐちやに汚してみたい。俺が会ったことがある女神ってどうも性に対してオーブ的な奴が多いからこういうタイプは本当に久しぶりなんだよな。俺はロリコンだか約一名はノータッチで行くけど」

うんうんと頷く彼に対して、女神達は気持ち悪いと気持ちを一つにした。

「さてと、ごちそうさまでした。それじゃお仕事だ」

ありがたや、ありがたやと美女に纏わりつく触手という凶を仏に感謝するように両手を擦るように崇め、荒々しく地面に突き刺していた大剣を抜き取り、コードの中の闇の中で刀の様に目を細めた。既に女神達は指一本も動かせないほどまでに体を動かさない。そればかりではなくプロセツサユニツトもドロドロに溶かされていく。

「薄い本ならここから濡れ場だろが、残念。意識からの絶頂アウトタイムだぜ——  
—— 霊刃天成・壊地《アームズ・コネクト・ツアトウグア》!!」

今度は、焦土とされた大地のような焦げた色に変化する。闇の中で蠢く邪神の中で賢者の力を持つとされる神格の力を得た事によって、女神達が自分が拘束されていること

すら忘却するほどの強烈な不快感と恐怖が肌を指すほどの禍禍しい魔力が空間を震わせた。

「問題だ。基魔砲少女は拘束した相手にする次なる一手は——？」

両手に握りしめた大剣は紙片へと戻り、彼の手で再構築する。幾つもの装甲が鋭利に積み重なった鋼鉄の手甲、それにはぶつしりと宇宙的外道な知識によつて描かれた狂気の呪法が描かれており、持ち主の魔力を更に増幅することが出来る。この世のものではない明らかな異物。激しい紫電を散らしながら彼の中心には抑止力のない魔力が螺旋を描いている。

「ま、答えは聞いてないけどな」

フードの奥で愉快に笑いながら嵐の様に狂い回る魔力を一瞬で掌握させ、放った。

両手、両足を構築され動きを完全に停止され、回避する手立てを最初から殺された女神達は遊ばれ倒されたという屈辱すら感じぬ間すら許されず、邪神の力を得て撃ちだされた砲撃に成すすべなく意識を刈り取られた。轟音と共に地面を削り、女神の抵抗に難なく対抗できていた拘束はいとも簡単に引き千切れるほどの威力であり、魔力の光が晴れたその先には咄嗟にシエアエネルギーで防壁を貼った女神達しか残っていない。

「よし、任務完了ってな。いやー、あつちから来てくれた助かったわ。一人一人倒して拉致ってくるのは面倒だったし……あつちも終わったな」



無残に倒れ、動かない女神達を確認してアームズ・コネクト霊刃天成を解除して、コートの色は元の闇色へと戻る。掃除が終わったように手をパンパンと叩いたところで後ろから気配を感じた所で、無造作に地面に投げられる二つの音。振り向くとそこに転がっていたのは、体中が傷だらけで女神達の様に意識がない二人の女神候補生の憐れな姿だった。

「ふん…、やられなかったか」

「マジック、言つたら？ 買ひ物出る時は出来るだけ予定を入れるなつて」

「そんなことは知らん」

ゴミを捨てる様に放り投げたのは、黒い眼帯を付けた濃い死臭を放つ美女だ。

女神だけに許された象徴とも言えるプロセッサユニットを展開しているが、それは女神の様な、誰もが見て美しいと賞賛、崇める物ではなく、墓場で死体の血を啜って美しく花を咲かせる彼岸花のような恐ろしさがあつた。そんな異形の存在を前に彼は少しも動揺せず、むしろ人混みの中から知り合いを見つけたような反応だ。

「えつと……こいつとこいつは、パープルシスターとブラックシスターという名前だけ、ぶつちやけどうだった？」

「話にならない。貴様がやられた場合は全員まとめて相手にしても私だけで殲滅できる」

「なんとも、自信たつぷりな発言なことだ」

「事実だ」

当たり前前の事を当たり前前のように冷酷な声で語るマジック・ザ・ハードに彼は気づかれないようにため息を吐く。ここはゲームギョウ界と冥獄界の境目となる場所であり、負が流れやすい場所だ。同時にここはマジエコノムを崇める人々の意志が集まる場所であり、ここはマジエコノムを信仰する者の意志により生み出されたマジック・ザ・ハードにとってここは自分の庭の様な物。

そして相手は女神であり、地の利や流出している負によって弱体化、こちらはそもそも人の闇から来るシエアが多いのでこの地特有の女神弱体化は緩和できるので、こちら側が圧倒的に有利に戦えるのは目に見えている。とは言え、そんなことを目の前の彼女に言えば無表情で得物が振り下ろされるのが安易に想像が出来るので、彼は思った事を胸に閉じ込めた。

「とりあえず俺は帰っていいか？これからまたマジエコノム製造の基地を野郎どもがちゃん働いているか、その上の者が納金を誤魔化したり無理な労働させてないか視察する仕事だし、今日の事も実務記録としてちゃんと残して、明日の部下達のスケジュールで怠ける奴が出ないように見直ししたり、とか調子に乗って過激な行動してマジエコノムの評判を落とす様な事をしないように釘を刺さないといけない。あと、自炊できる奴が少なすぎだろ、インスタントや外食に頼ったら体に悪いから俺は朝昼晩と給食おぼちゃんみたいに働くんですけど!」

「この女神達を運べ、まずはそれからだ」

「俺はこれから女神達よりヤバイ特売セールの主婦達の相手しないといけないんだが」  
「命令だ」

「今日のセールはリングゴが安いぞ。アップルパイ一杯作れるぞ」

「いつもの量が作れない場合は貴様の首を刈る」

「サー・イエツサー！——  
アイムス・コネクト・ハスター  
霊刃天成・禍風!!!」

禍々しい黄金色に染まったコート。マジック・ザ・ハードでさえ目で追い切れない程の速さでギョウカイ墓場を駆け抜けていくその後ろに姿に忌々しいと口を尖らせた。

彼の姿が完全に見えなくなった所で、地面に倒れている女神達が本当に意識がないのか再度痛めつけて確認する。女神としてのプライドか、誰一人として最後まで女神化が解除されなかったが、マジック・ザ・ハードは気にせず空を仰いだ。この世界を見渡す機械的な瞳、我らが信仰するマジエコンヌ様が眠っている神聖なる寢床である歪な形をした建造物。まるで世界の歪みが具現化したような異物な形をしたそれを武器を解除してマジック・ザ・ハードは膝を地面に付け、腕を胸に、頭を垂れた。それは高貴なる存在に絶対なる信仰と崇高を約束した信者が良いことを報告する姿である。

「——  
全ては犯罪神マジエコンヌ様の為に」

闇にとっての希望が、光にとっての絶望が始まる。

それは誰にも止められなく事無く、静かに歯車が回り始めた。

破壊した世界の果てに作り出された新しい世界は、破滅への一步を進み始めた。

## 終末へのプレリユード

## 墓守り

——三年の月日が流れた。

ギョウカイ墓場にて消息が分からなくなった女神達の行方不明は、混乱を防ぐために国民たちには伏せられたが、人間ではどうしようもない強大なモンスターへの脅威が、薄々と女神はいなくなってしまうのかと噂が広がりつつあるそんな時期。

ゲイムギョウ界のモラルは低下続きであった。

増加するモンスターによる被害が止まらず、それによって国民の鬱憤が溜まり、それを和らげる娯楽にあったのは誰でも簡単にダウンロードが行えるマジエコン。最初は政府が取り締まっていたのだが、女神不在の出来事に徐々に権限や発言力が失っていき、いつしかマジエコンを提供できる謎の組織『マジエコンヌ』が信仰対象へと移り変わっていく。

貧困や裕福関係なく誰もが自由に遊べる。世の中にそんなことを実現する夢で描かれる様なアイテムに誰もが魅了されていき、それが邪教と分かかっていても親は子に女神ではなく、マジエコンヌを勧めるそんな時代になりつつあり、そこに誰もが笑顔になれ

るような世界は合っても、それは女神達の望んだ明るい未来とは決して言えない民度の低い無法世界へと腐っていった。

その様は、目の前の現実から体を背けた世捨て人が闇の部屋に閉じこまっていくように見えた。



青い空でもなく、灰色の雲が覆っている訳でない。そこには不気味な紅い雲が世界を覆っていた。

見渡して分かる物は。原型が残っているか分からない謎の物質。人々が忘れた物が辿りつく場所であり、死んだ魂が集まる世界。到底、人の住める大地ではない負が蔓延するそれに足を進める二人の影があつた。

腕が隠れてしまうほど大きいコートを羽織り、二葉のリボンでサイドテールを作った幼い顔つきであるが大人びた雰囲気がある少女とミニスカートのセーターと一見すれば、今時の可愛らしい服装をした童顔の少女だ。

ビクビクと足を震わせて体を小さくしながら歩く、クリーム色をした少女の前を歩く茶髪のサイドテール少女は、その頼りない姿を見てため息を吐いた。

「ギョウカイ墓場、空からは天国と地獄の境界線、死した魂が集い、負が冥獄界に流れる場所って言うていたわよね」

「そ、そ、そ、そうですよね…」

恐怖を隠せない震える彼女を見て困ったように頭を掻く少女——『アイエフ』。

本来であるのならこの場所に来るのは、自分だけであつた筈なのだが、うっかり今回の依頼の事がばれた。そして彼女の親友である『コンパ』が付いていくと言いだし、結局二人で来たことに改めて後悔が溢れ出した。その様子にコンパは大丈夫です！と頼りない声でアイエフに向かって叫ぶ。

「コンパ、分かっていると思うけどここは相手の組織のど真ん中よ。そんな声を出したら見つかるわよ」

「ご、ごめんなさいです…でも、私もねぶねぶ達を助けたくて…」

「分かっているわよ。全く紅夜からは連絡無し、空も別世界で任務とか言つて帰つてこない。それを狙つた様にマジエコン又つて意味の分からない組織のお蔭で女神のシェア率はどん底にされて、ネプ子達もここに來てから三年間も音沙汰無し…：…本当に厄介極まりないわ」

まるで墓場でもいる様な寒気を感じながらアイエフは身震いをする。耳を澄ませば荒々しく叫ぶモンスターの咆哮。距離はある物の油断は出来ない。明らかに今のレベルでは太刀打ちできない凶暴なモンスターがうようよと徘徊している可能性が高い。どんな気配も直ぐに感知できるように感覚を鋭くして近くの大きい岩石の裏へ移動する。

「コンパ、イストワール様から貰ったシエアクリスタルは持ってきているわよね？」

「はいです！バツクの一番奥に大切にしまっています!!」

コンパがバツクから取り出したのは、虹色に輝く手のひらサイズの宝石。女神の信じる人々の精神エネルギーを教祖のみが伝えられるという特別な技術で結晶化したシエアクリスタル。プラネテューヌの教祖であるイストワールが製造したこれを使用すれば、一時的に女神に大きな力を付与することが出来るアイテムだと伝えられている。もし、捕まっているようであればこれを使い、女神を復活させ共に脱出せよ。それがアイエフ達の任務である。

「…つと、よし。周囲にモンスターはいないわね」

「あいちゃん、女神達がどこにいるか知っています？」

「知らないわよ。全く無茶な任務ね…、知らないこんな広い場所でネプ子達を探して連れ戻せって」



見上げる程に大きな岩石を軽々と登り、低い姿勢でコートの中から双眼鏡を取り出して、周囲を警戒するアイエフ。煮え滾る焦点を抑えながら冷静に周囲を見渡し安全なルートを絞っていく。戦闘になれば騒ぎになり、何が出てくるか想像がつかないからだ。人間である身なら苦戦したとしても、女神にとつては倒せる相手。調査と名目でここに訪れた女神達のレベルならば、徘徊しているモンスターに苦戦することはまずないと考えられる。なぜ、帰ってこれない理由と考えた時、この近くに四女神でさえ圧倒するほどのモンスターがいるのか、全く想像がつかない『何か』がいるのか。

「会つたらミイラとか勘弁してよね……」

イストワールの力により、生きていることは絶対だと調べられているが、逆に言えばそれ以外の事は全く分からない状況だ。蟻一匹でも見逃さないつもりで、更にモンスターに見つかからないことを意識しながら、血眼になつて探し始めるアイエフとそれを理解し邪魔にならないように静かに待機するコンパ。この周囲にはいないと判断して、岩石から降り、アイエフを先頭に先ほど確認したモンスターの徘徊する以外の場所を慎重に移動していく。

モンスター誕生の地と最も近いこの大地、故にブラッディハードの事が何度も頭に過るが、今は女神の事に集中すべきだと意識を切り替える。

「あいちちゃん、誰かの声がするです」

「畏の可能性もあるから私が先行して調べるから隠れて待つてて」

女神同士の友好条約が結ばれるまでの一年間、それから屈辱を飲みながらの三年間の間の鍛練を重ねた。昔と比べた頃と違って自信を持って強くなっていると自負しているがだからこそ、人間である身ならば、一切の傲慢は許されない。自分に自信がある物と言えば足の速さとルウィー出身だからこそ会得できた魔法。モンスターのような馬鹿げた力がある訳でもなく、女神のような自由に空を飛べ、圧倒的な戦闘能力がある訳でない。常に全力を出し切ること、それが人である身に許された事。

「いたわ」

「ねぶねぶ……」

岩陰から見えた景色は障害物が少ない開けた場所だった。その奥に岩石に不自然に開けられた所には人影がある。双眼鏡で確認してみればケーブルのような物が女神達を捕縛している姿がよく見えた。

「迂回していくわよ。いきなりこんな開けた場所、何かある可能性があるわ」  
「……分かったです」

今まで以上に真剣な雰囲気アイエフにコンパはお互いに表情を引き締める。救いだっただと思えることは全員が同じ場所に囚われていたことだろう。奥に進む事に重くなる空気、地獄への道に進んでいることを冷や汗が流れ、息が詰まるが一切の気は抜け

ない。一体どこから何が出てくるのか、一歩踏み出すごとに集中力が汗と共に流れ、地面に落ちていくような感覚が襲う。それでも歩むことを止めない二人は、戦士としての素質があるのだろう。そんな二人に天は微笑んだのか、それとも嵐の前の静かさなのか、二人は無事に女神の元にたどり着くことが出来た。

「コンパ」

「はいです」

阿吽の呼吸。バックから取り出したシエアクリスタルを苦悶に歪む女神達の前に献上するように出す。この世界の女神を信じる想いの結晶が、独りでに浮かびそして温かな光が溢れた。シエアクリスタルに込められたシエアエナジーが解放され、温かな光の粒子が、シエアクリスタルの放つ光が弱っていくごとに女神達の顔色を徐々に生気を戻していく。女神候補生二人に四女神、この世界ではこれからの未来に必要な存在、そして次の世代に繋げなければならない可能性——

「へえ、信仰するだけでいざ居なくなったら別の物に縋る奴が大半だと思ったが、まさか神様を助けるために地獄の一丁目に来る輩がいるとは中々いい信仰者がいるな。いや、友達思いと言うべきか？」

「!!!」

「脅かし成功——。自己紹介は必要かな？」

いつの間にか、岩石の上に見下ろす影。闇夜を思わせるそのコート姿は何者かは、自らの意志で地獄に墜ちた者を重なった。

「———こうさん?」

「違う! あいつは、紅夜じゃない!!」

「そうだよ胸の大きいお嬢ちゃん、俺の名前は———レイス、今は名乗っている」

名乗った黒のコートに全てを隠した何者かは、アイエフの動きより先に地面を蹴り、彼女たちの後ろをさも簡単に取った。あまりに自然でその流れる動作に警戒心が一気に上がる。口調は友好的だが、その内心は一切読めない。今の状況はコンパは女神達の方に引き、それを守るようにアイエフが立っている。深いフードによって表情は見えないが、精神を逆撫でしつづ面白がっているその控えめな男の笑い声に嫌な冷や汗が流れ始める。

「って、結局俺は名乗ったな。さて、戦の始まりはお互いに名前交換から始めるべきだと思っただが……どうだ?」

「言うわね。私が貴方と戦った所でどちらが最後に立っているのか分かって言ってるのなら、貴方は卑怯者よ」

「そう言われてもな、無名の墓石とか寂しいだろう?」

「まだ死ぬつもりも殺されるつもりもないわ。これでもまだうら若き乙女よ」

—— どうする。必死に思考を回転させる。

彼から誘うように溢れる闘気、明らかに人間レベルではない。最低でも女神、最悪の場合はブラッディハードと同レベル。

逃げるという選択肢を選んだ時、どう考えても二人で逃げ切ることは不可能だ。ならばどちらかを囷にする？死ぬ気なら時間は稼げるかもしれないが、相手が目の前の一人だとは思えない。そもそも、いきなり姿を現したのだ、既に侵入者の連絡が仲間に流れていると考えてもいい。コンパの足では逃げきれないかもしれないが、逆にコンパを囷にする選択肢は最初から除外している。それは彼女が親友だからという簡潔な理由だ。

「ふうーん……、小さいな」

「これでも需要あるわよ」

「ははは、確かに大きなお友達から喜ばれそうな体型だな。かなりタイプだ」

「それじゃ、私の顔に免じてここは見なかった事にしてくれないかしら？」

「名前も知らない合ったばかり美少女のお願いか、ドラマチックじゃないか。いいだろう、俺は花粉症で今日は目がとても痒い、今から急いで目薬を買ってくる。途中で女神達を助けようとしている不屈き物を見たような気がするが、目が痒いから後で確認してこよう」

そう設定を言い残すとアイエフ達に背を向け、歩き出してその背中はずいぶん消え

るまでアイエフは震える手で持つカタールを収める事はしなかった。一見すれば無防備に見えるそれも、一切の油断はない。もし飛び掛かったその瞬間、地面に倒れているのは自分だと安易に想像ができた。コンパは、今まで以上にないぐらいの深い安堵のため息を吐くが、アイエフの顔は強張ったままだ。何故なら、俺は——その一言が意味深げに強調されていたからだ。

「コンパ、逃げ——」

「侵入者——発見ツツツ!!!」

空から古びた鐘を鳴らす様な煩く高い男の声と共に黒い鉄槌が流星の如く落ちていく爆発。

振り下ろされた巨大な力より先にコンパの手を引き、爆風に押し出されながら地面に転がり、カタールを地面に突き刺して直ぐ様に態勢を整える。

「くくくく——ふはははははははははは！まさか、まさか！こんなところにくる酔狂がいるとはなあああ!!レイス以外にやつとやりあう相手が来た！感謝するぞ人間!!」  
目の前で天を穿つ勢いで高く笑う男の声。人間のものでは狂気を叫びながら、アイエフの数倍はあるだろう背丈に全身は攻撃的で刺々しい黒鎧が悍ましい。体の至る所に飾られた頭蓋骨の様な形とその手に握る黒光りする長いハルバート、その暴虐的な雰囲気と激しい闘気は正に戦いの中でしか生きられない狂人戦士そのもの。

「さっきの奴より絶望的なまでに話の余地はないわね。コンパ！私が引きつけるから撤退の準備を！」

「で、でも、女神さん達がまだ……！」

「ここで私達が倒れたら、次にここに来る度胸がある奴なんてゲームギョウ界にはもう、いないわよ!!!」

両手に持ったハルバートを回転させ、構えた瞬間その姿は霞んだ。未だに立ち上がっていないコンパを突き飛ばし、同時に地面を蹴った。次の瞬間、稲妻が落ちたと錯覚するような土煙と耳を劈くような地響きが衝撃波のように響き渡る。土煙の間に見えたのは、地面にめり込んだハルバートの刃と獲物を見つけた鈍く輝く飢餓の眼光。

もしあと一步、行動が遅かった場合は、粉碎され地べたに転がる肉の塊になっていた。それだけの威力を前に戦慄しながらも、冷静に心を落ち着かせながら周囲を確認する。未だにシエアクリスタルは女神達の前に浮かんでおり淡い光を放っている。だが、未だに女神復活の予兆は一切見えず、そしてここで“女神”復活まで時間稼ぎが出来るとは到底思えない。

「鮮血と喝采に溺死しろおおお!!!」

「あ」

殴るように振り下ろされる凶刃。その狙いはアイエフではなかった。

速く復活してと殺意をむき出しにする獣を目の前にしながら意識を傾けてしまったコンパだった。風を切り裂く刃を前に脳裏に過つたのは楽しい仲間たちの思い出、悲痛の叫び声に救いの手はブラッディハートと女神でさえも届かない程に遠く見えて。

「エクスマルチブラスターッ!!」

奇跡のように女神『候補生』は目覚め狂気の刃を止めた。

「ぐ、うう!?!」

横からの高威力のビームによる突然の奇襲に振るつた斬撃は的が外れ、態勢を大きく崩した。呆然と口を空けアイエフを対象に解放された『二人』の姿にコンパは瞳に希望が照らされる。

「はああああ!!」

プロセツサユニットから光の推進剤を莫大に噴かせ大気を貫く、薄い紫色の閃光。まだ態勢を整えていない狂人との距離はほぼゼロ、力の限りを振り絞つたシエアエナジーは銃口に集まり解き放たれる。

震えながらも引き絞られるトリガー、銃口を溶ける勢いで放たれる極太の光線によって線上にあつた岩石をも貫きながら、その奥にその奥まで直進して狂戦士の断末魔が、耳に届かない距離まで指を離す事はなかった。



そして二人は目撃する。一人は淡いピンク色の流れるように伸びた髪をして花畑でひらひらと飛ぶ小さな蝶のようなバックアッププロセッサが特徴的で、万能兵器マルチプルビームランチャー M・P・B・Lを持ち、もう片方は身の丈を超える程の女神専用を作り出された戦車砲と言っても過言ではないほど巨大な銃であるXエクスマルチブラスター M・Bと素早く動き敵を撃ち貫く為に軽量化されたプロセッサユニットを身に纏う二人の女神候補生の姿を。

「ネプギア、それにユニも……」

「良く分かんないけど、ギリギリ？ だったわね……。ごめん、もう限界」

「アイエフさん、コンパさん。お姉ちゃんを……」

復活してからのフル稼働。例えるなら、温めていないエンジンをいきなり臨界まで動かせる無茶な行動に女神化は解除され、熱が完全に抜けた様に意識を失い地面に倒れるネプギアとユニ。そんな二人に駆け付けるアイエフとコンパ。

「どうっ？」

「二人とも過剰なシェアエナジー消費に気を失っただけです。でも、これでねぶねぶ達を助けるだけの時間が——」

「……無理ね」

「どうしてですか？」

影が出来るように頭を下げ指を指す方向。捕まった女神達の足元には宙に浮いてい

た筈のシエアクリスタルの神々しい輝きは無くなり、そこらに転がる石の様に灰色へとなっていた。

「多分、この二人を復活するだけしか無かった」

「それじゃ……」

「撤退するわよ」

鉛の様な重たい声。コンパも苦し紛れに頷くことしか出来ない自分の無力感を抱きながら、二人は女神候補生二人を抱えてギョウカイ墓場から脱出するために足を進めた。

切り捨てた希望とその背中に抱えた希望、その二つのあまりに重さが現実の残酷さを嘸み締めるだけしか出来ない人間の限界を感じさせた。

## 無力差

「持ってきたシエアクリスタルが小さくて全員復活は無理だった見たいだな。まあ、欲を絞って六人を復活じゃなくて、一人か二人を集中させて助けようとすれば話は別だったかも知れないな。甘い、甘い」

誰にも悟られることなく全てを傍観していた黒コートに身を隠したレイスは、岩陰から影のように現れ、地面に落ちた輝きを失ったシエアクリスタルを拾い暫く観察した後、ポケットに押し込んだ。そして、三年前に倒し、捕縛した女神達を見つめる。

四人ともレオタードの様な服装をしたおり、一人を除いてスタイルは抜群であり、凡人ならばだらしなく涎が口から滴ることすら気づかないほどの絶世の美人揃いである。加えて、機械的な触手に体中を縛られているこのシチュエーションだ。苦悶の表情で歪みながら、弱弱しく抵抗らしい抵抗をしない彼女たちの姿を見れば、禁断の性癖に目覚めても可笑しくはないだろう。

「……最初は興奮してたけど飽きたな。ああ、眠い。」

くわぁーとフードの中で大きくため息を吐いた。誰もが絶賛するほどの物でも、それを三年見続ければ至高の宝石であっても飽きる事間違いない。何か進展があれば別だ

が、残念ながら抵抗されると立場が悪いという理由もあり、そういうお楽しみは無いのだ。

いつの間にか仲良くなった部下が、日々の発散にそういう店を紹介してくれたことはあるが、可愛い部下が目を光らせているので無理だろう。もし行くことになったら絶対に泣かれる。女の涙ほど男にとって弱いものは無いのだ

頭を搔きながら、厄介だと呟きながら足を進める。その先は、大きく削れた岩石。先ほど女神候補生によって吹き飛ばされた四天王の一人、ジャツジ・ザ・ハードの元だ。一応レイスにとっては上司に当たる人物だ。

「おーい、派手にぶっ飛ばされたけど大丈夫か？」

「……………」

意識が別の場所にあるのか、それとも別の事を考えているのか、後者は性格的にありえないかもしれないが、レイスの声に息を吹き返したようにその巨体を漸く持ち上げた。体中には砂埃が被っており黒色の鎧がまるで錆びているように見えた。

「あの程度、なのか」

無傷のジャツジは吐いた感情は落胆だった。

「あれが俺の敵なのか、実れば俺を絶頂させる程の敵となる守護女神が……………」

「心配する俺は無視かよ」

レイスがため息を吐き、下げた顔は地面へ向かってブツブツと自問自答を続け呟き意識が別の世界へ旅をしているジャツジに対して、問題ないと結論を立て、レイスが背を向けた瞬間、凶刃が振り下ろされた。

地面が爆発すると錯覚するほどの轟然の一撃。その狙いは間違はなく狂わずレイスを狙って放たれた死への裁き。

しかし、その一撃が粉碎したのは地面だけであり、いつの間にかレイスはジャツジの振り下ろしたハルバードの隣に立っており、爆風に煽られたコートと共に、脱げないようにフードを片手で抑えた姿でジャツジを見上げる。

「おい、いきなり攻撃するって何事だ」

「……………」

「俺は聖人じゃないし、お人よしでもないぞ、怒る時は怒るぞ」

「やはりお前しかいない」

はい？と頭を傾げるレイスにジャツジはハルバードを地面から抜き取り、その刃の先端をレイスの振れるギリギリの所で止める。

「俺を満足できるのはお前しかいない。お前しか俺を絶頂に導いてくれない。鮮血と喝采で得られる快楽に溺れさせてくれるのはお前しかいない……………」

「いや、そんな愛の告白みたいに言われても困るんだけどな」



い。欲望のままに暴力を振りまき、致命的な攻撃は避け続くが、散弾のように飛び散る石片を全て躲すことは不可能であり闇色のコートは桜が散るようにボロボロになっていく。

「ひひひひひひひひ!!!」

「下品な笑い声していると女にモテねえぞ——ジャツジイイイ!!!」

「お前と戦えるのなら女なんていらねえんだよ——レイスウウ!!!」

なお、この二人の地形すら変えてしまうほどの熾烈な攻防劇は勇気ある四天王の一人が止めるまで続いた。



白い霧のような物が纏わり体の感覚がなく、まるで幽霊のように彷徨っている気分。彼女は自分が今いる場所は現実ではなく夢だと実感した。

霧の中に薄らと浮かび上がるのは、薄暗い洞窟の中で一人の少女が膝を抱えて蹲っていた。薄ピンクと白色のハイソックスにセーラー服のような淡いワンピースの服装をした健気に可愛らしい少女だ。しかし腰まで伸びた薄紫色の綺麗だった髪は、土や草で汚れており、同じように服も転げ落ちたように汚れていた。

あの日、少女は——ネプギアは家出をしていた。

理由は愛しい姉が自分を相手にせず、新しく仲良くなつた男の人と仲良くなつたからだ。

所謂嫉妬だと彼女自身も分かっていた。それでも、彼女はあまりに世間に触れる機会はなく、彼女の見る世界にはいつも一緒にいた姉という存在はあまりに大きく、同時に依存しやすい存在だった。

故に自分に向けてくる笑顔と彼に見せる笑顔。それは守護女神戦争に向かう際に見た姉の自信に溢れた大好きな笑顔とは違って、輝きが違っていた。

それを理解した時、ネプギアはこう思ったんだろう——『自分のいるべき場所が無くなっていく、否奪われている』事に。そんな思いに自身でも驚く程に警戒心と敵意で彼に接した。そして、それを味方するどころか、彼を庇う最愛の姉の姿にネプギアの決定的な物が壊れてしまった。

後は簡単な話だった。現実を否定して目の前の世界から背を向けて逃げ出し、姉の言葉にも耳を貸さず無我夢中で走った。走って、これが夢であることを祈りながら無我夢中に走り出した。

そして、不注意から崖から転落、人間であるのなら大怪我は確定だが女神候補生という仮にも人間を超越した女神の存在故に重傷ほどではなかった。しかし、足を痛めて歩



くことすら困難になっていた。

激しい痛みが気持ちで落ち着き、辺りを見渡すと既に夕日は沈み闇夜が空を覆い始めていた。場所は見知らぬ森の中、モンスターの増量が無くなったとしても、その時はまだゲームギョウ界にはモンスターが存在しており、真面に歩けないネプギアは格好の餌食だと言つてもいい。

だが、モンスターの脅威を考える程にネプギアの精神状態は冷静ではなく、迷子になつた子供のように姉の名を叫んだ。現実是非道で、涙と声が枯れても誰もネプギアの手を取る者はいなかつた。

結局、あの男を怨めばいいのか、自身の愚かな行動を憎めばいいのか、正当化する思いと自己中心的な思いがグルグルと回り、完全に真夜中になり遠くから遠くから響くモンスターの咆哮に漸く現状の置かれている状況を理解して暗雲に空が埋め尽くされ、振り出した雨に体を引きずりながら偶然見つけた洞窟に身を隠すことになった。

そして――。

「懐かしい夢……」

カーテンから差し込んだ陽光に薄らと卵のような丸い瞳を空けた。見慣れた天井、まだ眠気は重く鎖が体を縛っているような感覚。顔だけを動かして、近くに置いてあつた

お手製の目覚まし時計を止めて、時間を確認すると起きてもいい時間だと思考して、重々しく上半身を起こした。目に入ったのは寢覚まし時計の横に置いてある大切な写真。唯一の姉の姿が抱き着いて、自分も思わず抱き着いて、左右に挟まれ息苦しそうな顔を紅くする彼の姿。

「お兄ちゃん……どうしているんだろう」

あの家出兼迷子事件。ネプギアが入ったのは運悪くその森を主である危険なモンスターの巣であり、夜に戻ってきたそのモンスターと接触して襲われる寸前に姉と彼が駆けつけてくれたのだ。二人の圧倒的な力の前に主はあつと言う間に瞬殺され、彼は謝罪の言葉を姉からは涙を流しながらの謝罪の言葉だった。直ぐに彼はネプギアを抱え、豪雨の中も構わずそのままプラネタワーに直行。そこには看護師になったばかりの姉の親友とプラネテューヌに籍を移したもう一人の親友が待っていて、色々とそれからは大変だった。一つだけ確かなのは、プラネテューヌの教祖に正座で長い時間、説教を受けた事だろう。

「考えても仕方ないよね……。お兄ちゃんは別の世界に居るんだし、空さんがいないと連絡できないし、……でも」

あの時、あの夜の様に、助けてほしかった。出かけた言葉を心で抑えた。

ブラッディハードが、どんな存在であるかは既に教えてもらっているし、理解も出来

ている。それに最初から五年から、十年ほどはこちらの世界に戻ってこれないと伝えられていても、気持ちには晴れる事はなかった。重い気分のまま着替えを済ませ、旅の準備の為に日用品を入ったバックを持った所で扉がノックされる。

「起きていたのねネプギア」

「……あ、おはようございますアイエフさん」

扉が空き、姿を現したのは姉の親友で良くしてもらっているアイエフの姿だった。髪が撥ねている所を見ると彼女もまだ起きたばかりらしい。

「用意は出来たかしら」

「あ、はい。ユニちゃんは……?」

「コンパが行っているわよ。これからイストワール様の部屋で合流して、これからの事を話すわ」

はい、と返事をして、頭の中に自分達がいなくなった時間の中で状況はどうなったんだらうと無意識に深刻な表情を見せるネプギアにアイエフは影が差す暗い表情で口を開く。

「……ごめんなさい」

突然謝罪の言葉を口にするアイエフにネプギアは、作り笑顔でいいですと答える。三日、それがギョウカイ墓場から無事に救出された二人の女神候補生が休養の時間だつ

た。ネプギア自身は三年間も長時間囚われた感覚があり、肉体的にまだ重りが付けられているようで、腕が鈍ったと言つてもいい、そしてなにより精神的には辛い事が合った。女神候補生として修練は欠かせなかつたなのに、絶対的な力を前に敗北して囚われた。いくら、あの場所が原因で弱体化したとしても、あの堕天使のようなプロセスユニットを纏つた女神は、ネプギアともう一人の女神候補生、ユニと協力しても全く歯が立たなかつた。

「私が、私達が頑張ればきつと……」

もつと力があれば、お姉ちゃんの助けに……押し殺すように呟かれた言葉にアイエフの表情が歪む。プラネテューヌに戻り起きたネプギアは、まだ落ち着いた様子だったが、ユニの場合は姉がいないと知ると傷を気にせずもう一度ギョウカイ墓場に行くと言いだし、イストワールが必死に説得していた姿が未だに濃く記憶に残っている。

それから、アイエフはネプギア達に会うごとに謝罪の言葉を口にしてている。己の無力を呪うような声で。気持ちのどこかでは恨みの言葉を吐いていたかもしれない。でも、日々が経つごとにむしろ彼女達は自分から死地に向かつて女神候補生を救出したのだ。マジエコンヌによってシェア率が八割以上も抑えられているこのゲームギョウ界の中で、命を賭けてまで女神の為に尽くそうとしている人は少ないと言つてもいい。結局の所、感情の問題だった。

「お願いだから無茶しないでね。私も付いていくから」

「ありがとうございます」

自分の身を案じてくれている想いに感謝しながら、改めて考え直す。

このゲームギョウ界で出来ることを。

まだ終わっていないと、まだ自分たちが残っていると言い聞かせながら、底から溢れ

る感情と共に静かに言い放つ。

「私だって——女神だから」

握りしめたその手は、未だ何も掴めていない。

## 事実

「……………貴方は知っていたのですか。ギョウカイ墓場が犯罪組織マジエコンヌによって占拠されることを、マジエコンヌによって女神のシエアが奪われる事を、私がギョウカイ墓場に女神達を向かわせ結果は女神達が囚われる事を、そして女神候補生だけがアイエフさんとコンパさんの手によって救出されることを」

『そういう展開があつた、それだけ』

場所はプラネタワアの会議室。そこには少女がいた。ただ背は人と比べて生まれた赤子より更に小さく、大きさは広辞苑を縦にしたぐらいの身長。妖精のような外形をして分厚い本に乗っている。幼い顔つきだが、賢者のような怜悧を感じさせる存在。

彼女こそが、プラネテューヌの教祖であり、ゲームギョウ界の歴史を記録する者であり、嘗て女神教育者であつたイストワールだ。

彼女は怒っているような、悲しんでいるような、そんな様子で小さいその手に握られた拳をどこに向けばいいのか分からずに目の前に表示されているディスプレイを睨む。

「神は全員に都合のいい存在であつても、一人に都合のいい存在ではない……………貴方はそう言いました。試練と言い換えればそれは聞こえのいいものですが、貴方の想像が未来

にそのまま反映されることはありませんッ……！」

『僕に何をさせたいんだよ。僕はもうゲームギョウ界にはよつぽどがない限り関わる気はない。老兵は静かに消える様に、元ゲームギョウ界の支配者だった僕は、今の世代の守護女神達によつて倒され、未来の選択肢を譲つたのさ』

ぐつとイストワールは場面向こうの親に対して歯を鳴らせた。

状況は最悪だからこそ、絶つた存在から言い渡されたのは今の時代を捨てると言つて  
いるようなものだ。

感情論では動くことが多い人物だが、他人の感情論では動くことは少ない。だが理解はしている。何度も見た存在だからこそ、今の状況とこれから起こる未来を知り、最善の選択肢と最悪の選択肢を知っているのだ。

『……イストワール。僕なら犯罪組織マジエコンヌを物理的になら”一日”で潰せる。  
”一週間”あれば社会的に抹殺できる。けどそれは、僕がしたことであつて、この世界の希望の象徴たる守護女神は指を加えて眺めていたことになる。それを見て、知つて、女神を信仰する国民はどう思う？最後の砦、必要とされるジョーカー、希望という輝きは結局は、本人たちの手によつて執行されなければならぬ。僕がすれば女神以上の存在として崇められるか、信仰されるか、はたまた恐怖の原因となる』

「……………しがつ」

『お前が継るべき存在は僕じゃない。次世代を担う女神候補生だ。時には崖から突き落とすことも必要だよ。この世界の神は異例として、人と同じように笑い、育ち、成長していくのだから。上がってこれずに朽ちてしまえば、それは仕方がないということと終わり。世は運と成功と失敗が線上に幾度もなく交差して離れて続けていく物』

神とは己の存在を理由に忠実に役目を全うする機能でしかない。

しかし、人間の様に進化していく守護女神ならば、折れた剣を叩き直し更に強度を増した剣を打ち直すことも可能だと語る。

それに混沌の可能性を孕むが、終極的に言えば世界はマジエコノヌの手によって墜ちるか、女神によって救われるかの二通りしか存在しない。

『信じるべき因子は直ぐ近くにあるよ。僕なんて君を作ったのに親らしいこと何一つも出来なかった育児放棄野郎だよ?』

それなら、場面越しから分かる程に悲しげな声で喋らないでほしいとイストワールは叫びそうになったが、慎ましく叩かれたノックに流れそうな涙を急いで袖にふき取った。

『来たよ、主人公が』

待ち遠しい物が訪れ感謝の言葉を口にするように讃えた。ドアが開き、入ってきた四人の女性。失礼しますと上司を前に言うようにアイエフが入り、続けてコンパ、ユニ、ネ



プギアが入室する。その表情は四人ともどこことなく暗い。

「お、おはようございます…」

「おはようございます。ネプギアさん、それに皆さん……」

『やつほー、三年ぶりだね』

「その声、空さん…!?!」

三年ぶりに聞く懐かしい美声に一同は驚く。なにせ、最後に彼女たちが覚えているのは突如、机に『ちよつと任務タスクに行く」という近くのコンビニに買い物に行くような軽い内容の書置きがされていたのだ。

当然、次元を渡るようなネプギア達にとっては理解できない技術を平気で行う規則外を探すことは不可能であり、イストワールに通信をお願いしても音信不通だったのである。

「——今までどうしていたのよ! 貴方がいれば、今頃なにもかも解決出来ていたのに!」

『はあ……、そんなこと言ってたら君は一生候補生だよ? ノワールを超える事なんて無理無理』

「なんですつて?!」

「ユニちゃんそれ以上はダメ!」

イストワールの隣に表示されているディスプレイに掴みかかろうとしたユニを止めたのはネプギアだった。

『ノワールなら自分の手で解決することを選ぶよ。人間に頼るのはいい、だけど僕には頼るな。僕は君達と肩を並べる存在でも、後ろから支える存在でもない。むしろ、君達に立ち塞がる壁だ（それにしても、ネプギアだけじゃなくて、ユニもか……珍しいね）』  
「でも、貴方ならお姉ちゃんを助けることなんて簡単でしょ!!」

『自分の足がまだ折れていないのに手を伸ばす。そんな甘っちょろい奴の手なんて取らないよ。足の一本や二本無くなるような死闘後に頼られるのなら、考えるけど一回負けて五体満足なのに僕に頼るな女神候補生』

イストワールから伝えられなくても、既に知っている展開故に何があつたのか既に知っている空は辛辣に言い放つ。この世界に女神以上の存在がないからこそその言葉だ。彼女たちが諦めれば、次に立ち上がる者はいない。更に立ち上がったとすればそれは人間であり、人間が立ち上がり成果を出してしまえば女神の立場は崩壊する結果になる。そんな世界的から見た視点をまだ考えるまでに至っていないユニは、納得できないままで、ネプギアは複雑な思いで空の声を発するディスプレイを見つめている。

「相変わらず手厳しいわね」

『まあ、正直君達ならなんとか出来るよ。それに下手に僕が出て刺激させてしまえば捕

まっている女神達がどうなるか分かんないし』

出来なかつた道筋ルートも見たことがあるのだが、その時はその時だと諦めるしかない。世の中、全て正義が勝つとは定まってはいいのだから。更に力を振るう事は相手を恐怖させること、同じ舞台の上で戦い合うのならともかく、突然出現した脅威に追い詰められた者の行動が冷静じゃなくなりどうしようもない悲劇を呼ぶかもしれない。

『まあ、あの時みたいに邪神とか僕みたいな異世界からの来訪者だったりしたら話は別なんだけど』

「空さん。質問なんですけど、いいですか？」

『どうかした？言つとくけど、あつちの組織について概要はあまり話さないよ。あくまで別の世界軸での話だし、違つたりしていたら君達が危険な目に合うかもしれない』

先に釘を刺され口を閉じるコンパ。空の知りえる情報はあくまで経験談でしかない。同じ始まりだからと言って、同じ道を辿り、同じ終わり方をするとは決まてはいない。誰かの何気ない行動で誤差が生まれ、全く別の答えへたどり着く。計算式のように世界は出来ていない。それをしようとした空は自笑しながら、別方向に疑問を膨らませていた。

自分の知りえる道筋ルートなら間違いなく彼女は、最初から犯罪神としての地位にいたはずだ。だが四年前、とある化物によつて無理やり女神の地位でありながら犯罪神に墜とさ

れた。その墮天された存在を戻す方法はなく、自分の手でマジエコンヌを滅ぼした筈だった。

イストワールから簡単に説明を受けた犯罪組織マジエコンヌ。先代の女神たるマジエコンヌの存在を知っている者は、このゲームギョウ界には存在しない筈なのにどうして犯罪神として崇められているのが不明点であった。

思いつく限りでは、

・偶然犯罪組織を立ち上げた者が偶然マジエコンヌと名乗った言葉の偶然。現実性がなさすぎる。

・マジエコンヌの存在を知ってなおかつ、マジエコンヌを信仰する者。根強くある四女神の信仰から、信仰を奪うのが容易ではない、更に信仰スピードも異常なので絶対とは言えないが夢語りに近い。

・マジエコンヌ自身が指示を出している。看取った側としては信じたくないが現実性のある話。

・誰かがマジエコンヌの存在を利用する。彼女を看板として自らの存在と目的を隠す為にマジエコンヌの名前を利用している。あり得なくもないが、そんなことをしようする連中はいたとしてもマジエコンヌだけでは圧倒的に力が足りない。

『(うーん、どういう事なんだろう。これも世界の修正力って奴？それにしても強引すぎる様な、確かに女神以上の存在が生まれないように組み込んだ理は破壊されたから、いつかはそういう奴も出るだろうとは思っていたけど、速すぎるし賢すぎる。そもそもモンスター類は紅夜が抑えているのになんで再出現したんだ？誰かがマジエコノ又がばら撒いたディスクを量産したのか？……分かんないことが沢山あるなあ)』

「空さんはゲームギョウ界外の存在なら手を貸すという事ですが、ゲームギョウ界内なら私達の手で解決しろという事です。しかし、今はゲームギョウ界の女神を信仰するシエア率は控えめに言っても絶望的です」

「控えめで、絶望的って……相当不味いってことですよね。手はあるんですけど？」

『勿論、手があるから僕がこうやって連絡を入れた。もうどうしようもなく君達が諦めていれば見捨てるさ。さて、話す前に一つだけ忠告がある——紅夜にもし会ったら逃げろ全力で』

湖に落された雫が大きく波紋を造るように。その一言は彼女たちの心を酷く揺らした。妙に濁いた口の中から必死に言葉を紡ぐ。

「ど、どういう意味よ……？どうして、紅夜に会ったら逃げないといけないのよ……」

『女神と冥獄神。この二つの存在はお互いを殺し合う関係だ。君達と過ごした紅夜はまだいい意味で不安定だったから落ち着いていたけど、もう紅夜という魂が冥獄神に近づ

いている。完成していれば幾らかは冷静だろうけど、今は悪い意味で不安定な状態で宿敵を見たら、正気でいられるか……』

「ねえ、紅夜はこつちの状況を理解していると思う？」

『冥獄界に流れる負という激流に流れる声を識別して理解して納得するほどの余裕があれば来ると思う。だけどダメだ。アイエフやコンパはいい、だけど女神は絶対に会わない。近づくな。触れるな。殺される————餓えた野獣は生きるために獲物を喰らうのが当たり前、そんな本能を抑えるほど紅夜は強くない』

デイスプレイから発せられる威圧感を込めた言葉。反論は許さないその脅迫のよう

に発せられる事実一同は口を開くことが出来ない。

四女神が集まっても傷一つなく圧倒した存在。その容姿もこの世の物であろうかと疑問を抱く程に美しい。しかし、夜天 空と言う存在は鬼神のような容赦の無さと厳しさの中に微かな優しさを持つ人物であることをイストワールは知っている。故にこれは紛れの無い真実だと確信を持って領いた。

『そういうことで、女神候補生でも女神としての義務を果たせよ。君達がすべきことは女神の救出とシエアの回復、それ以外の事は考えない方がいい。辛くなるだけだし、イストワール。後は頼むよ』

そんなことはないと訴えたかったが、反論するほどの力がなく肩を震わせることしか

できない二人の女神候補生。二人に何を語ったならいいのか、姉の様に頼りなる存在が女神たちを殺す存在に近づいている事実は、あまり現実的には思えず受け入れがたいものであった。しかし、それを理解しなければならぬ。何故なら彼女たちは女神候補生なのだから。相変わらず恐ろしいと思いつつ、イストワールはゆつくりと語り始める。ゲームギョウ界の希望を。

「犯罪組織マジエコンヌの目的で最も考えられるのは、犯罪神マジエコンヌと呼ばれる災いの召喚。それも時間の問題となってきたゲームギョウ界ですが私達にはまだネプギアさんやユニニさんを含めた女神候補生がいます。そしてもう一つ、空さんの作り出した女神が不在時に大陸を補助システム——ゲームキャラという存在が」

それを聞いても、ネプギアとユニニに気持ちちは晴れる事は無かった。

## 悪夢

ネプギア達一同はイストワールによつて教えられたこの状況を妥協できる可能性を持つ存在。秩序と循環を司る存在、ゲームキャラに力を貸してもらおう為にバーチャフォレストに訪れていた。

機械的なステージを絡むように伸びている巨大な蔦が特徴的で、元は大樹の中に潜むダンジョンを攻略するために造られたこのダンジョンは街から近く、守護女神の機能が近い理由もあつて比較的弱いモンスターが集まる初心者レベルのダンジョンだ。

そして今、この地に足を踏み入れた女神候補生二人とアイエフ、コンパは苦戦しながらもモンスターを倒していた。

「こ、なんでモンスターがこんなに強いのか!?!」

「昔ここに来た時はそんなに苦戦したこと無かつたのに!」

最初は問題なく進んでいた四人であつたが、奥地と呼ばれる一段落レベルの高い領域に進んだ途端、モンスターの強さが一気に変わった。まるで別格となつたように。

疲労を隠せない様子で荒い息を整えようとしている二人にアイエフは消滅していくモンスターを指さした。



「ネプギア、ユニ。こいつ等は【汚染化】したモンスターよ」

「【汚染化】…?」

「えっと、いーすんさんによるとシエアが低い地域は冥獄界の影響によって内包していた負が解放されて一時的にモンスターさんが凶暴化して物凄く強くなる事って説明していただきます」

「レベルアップといえば分かりやすいかしら」

逆に言えば【汚染化】されているモンスターこそが最も力を持っている姿であり、人の負の念がむき出しになっている危険極まりない災害の種だ。ネプギアとユニは居なかつた時間の中でそんなことまで起きている事に、この場所は街から徒歩でも行ける程に近い場所であるのに驚愕を受ける。

「シエアが低くなるとこんな現象が……」

「世間はマジエコンヌに信仰していればこの現象が引き込むって思っているけど、実際は酷くなる一方よ。全く信仰する相手が間違っているっての…!」

足元に転がっていた小石を乱暴に蹴るアイエフをなだめようとするコンパ。もつと力があれば、そんな甘い幻想が頭に何度も廻る。

候補生でも、女神なのに、何も出来なかつた。あまりに無力だつた自分が原因で生じてしまつた現実がここにあつた。

悔しさに握りしめた拳が白くなっていくのを拾い上げる者がいた。

ネプギアの手を優しく包み込んだ温かみ、面を上げると天使のように微笑むコンパがいた。

「きつと、大丈夫ですよ」

「でも、私は……」

「ね、ね、ぶだつて、色んな失敗をしたです。そんな時に何度も泣いて直ぐに立ち上がって頑張ったんです。必要なのは後悔じゃなくて直ぐにそれをバネにして立ち上がる事です。だから大丈夫です。まだゲームギョウ界は終わっていないです」

「……ありがとうございます……ッ」

温かい言葉に涙線が緩くなる。ネプギアだけじゃなく、ユニもそっぽを向きながら震える声で感謝の言葉を口にしていった。

「ごめんなさいね。重い所はいつも貴方達が背負う羽目になるから……」

「心配しなくてもいいわよ。——ええ、いつも雲みたいに掴めない空をぎやふんと言わせるチャンスよ。私の華麗な銃撃で直ぐにマジエコンヌを撃ち抜いてあげるわ!」

「……まだ終わりじゃない。うん、まだ私達は頑張れるんだ……!ありがとうございますますアイエフさん、コンパさん!」

昔を思い出して一息ついた。あの鬼畜外人でなしの空から悪魔のような微笑みの

鍛練。

正確に冷酷に相手のレベルを計算した上で、限界の少し先まで肉体的にも精神的にも追い詰める。慈悲も容赦もない訓練に四女神が何度阿鼻叫喚したか、更に肉体的に不死身属性がある紅夜は更に酷いものであり、そのあまりに激しい流血沙汰に抗議（物理）、反論（物理）の争いの果てに空が折れイージーモード（女神達にとってはルナティックモード）に移ったのは懐かしい記憶の一つだ。因みにルウィーの女神候補生は特例として無しだったことに全員がそれぐらいの常識は合ったのかと安心したのは言うまでもない。

「よし、それじゃ頑張るです。エイエイオーです！」

「私達に出来ることなら何でも言ってみてね。これでも、ネプ子達の背中を守るぐらいには鍛えたんだから」

「はい！皆さんよろしくお願いします！！ユニちゃんも力を貸して！」

「……本当にしようがないわね。ネプギアだけだとめそめそしているだけだし、手伝ってあげるわよ」

女神の重い枷を除けば二人は若い少女。頼りになる仲間を引き連れて歩き出す。何も掴めていない。解決するだけの力もない。だけど、諦めず折れずに進めば何かを掴めることを信じて。彼女たちはただ道行く道を進んだ。

彼女達が歩み、その道はかつて敵同士だった女神の大陸の為に自国のゲームキャラの力を借りるためにやってきた一人の女神が進んだ道だった。



「兄貴、ボロボロだけど大丈夫か？」

「ブレイブが止めないと最後までやっていたかもな。トリックは性格的に止めないと思うし、マジックだったら喧嘩両成敗で俺とジャツジ両方ぶっ飛ばされていたと思うぜ。はあ、全く……このブラッディ企業の行く末どう思うよりンダ？」

同時刻、ネブギア達より先に歩む二人の姿。一人はネズミの耳の形をした物がついているフードが特徴的なコートを羽織っている少女だった。コートのボタンは全て外れており、その下には下着のみで、長いブーツと黒い長ズボンの姿は年相応の少女の服装ではなかった。悪く言えば路地裏で集まる不良の一人と思われても可笑しくはない。

見た目で判断するのなら絶対に近づきたくないその少女より更に異様な存在感を放つ者。全身が黒一色で統一されている。深いフードから見える影も、陽光によって伸びる影も、その姿も全てが光の届かない、闇夜を被ったコートで全身を隠している。その姿は世界を浸食するかの如き闇のようだ。

「それにしても四天王を相手に出来る兄貴は本当にすげえよな。確か四女神も兄貴だけで倒したんだろう?」

「そうは言ってもなあ…、あの土地だと女神達の力は弱るし、あいつら戦いだけに集中していなかった。だから簡単に付け入る隙って奴があるんだ」

「兄貴、謙虚なのはいいけどよ。マジエココンヌの幹部としてもうちよつとびしつと！決めてもらわないと部下に示しがつかねえよ?」

マジエココンヌ四天王は象徴として語られる事が多いのに対して、レイスの場合は実際に人と接したり、部下に指令やメンタルケア、更には料理までこなす。本人は飯が上手ければ、効率が上がると大枚はたいて作り出した本部の食堂は、いつも賑やかで夜でさえ会議や酒盛りなので明かりが消えることはないのだ。

例えるなら四天王は社長でレイスは部長という立場だろう。常に無理難題を押し付けられ自室で頭を抱える姿をコーヒーを頼まれ持ってきたリンダはよく見ていた。

「それだよ。なんで俺はいつの間にかマジエココンヌの幹部になつてんの?俺はあくまで雇われの身でマジエココンヌに入ったんだが……」

「え、マジック様はあいつは私だけの部下だ。って言ってたぜ」

「……あんにゃ野郎、雇用契約書をあいつの顔面に叩きつけてやろうか……」

実際そんなものはないのだが、報告の度にジャッジとエンカウントして襲われる（生

命的な意味で)この職場は酷いと意気消沈した声で呟く。そんな上司に怒られ沈むサラリーマンのように猫背の寂しい背中をリンダと呼ばれた少女の勢いよく加速された平手がバンつと叩かれ甲高い音を立てた。

「やめてくれよ。兄貴がいなくなったら私らみたいな社会不適合者の集まる場所が無くなっちゃう」

「自分でそれを言うか?お前、両親はいないみたいだけど、一人で生きていくだけのお金あるだろう?」

はははと笑って返して無理無理と手を横に振るつた。

「私のクソババアは薬の中毒死、クソジジイは死んだあとで知ったんだけど人身販売者だっただけ?どう見ても、世間は私を狂った親から生まれた狂った娘って見えるんだろ。うな。だから、金がいくらあっても到底生きていけねえよ。ゴロツキの中でしか腐った精魂の中でしか、生きていけないんだよ」

「まあ、否定はしないけどさ。お前の歳だとセーラー服とか着てさ、白馬に乗った王子様に憧れる年ごろだぞ。もうちよつと夢見ようぜ。それか、教会とかで実績でも積みめれば幾らかマシになると思うけど?」

良くも悪くも歪んだ娘だと黒コート姿のレイスはそう思っていた。恐ろしい現実を夢もなく放り込まれ、それでも生きる意志がある少女。必要ならば泥を啜っても、雑草

を喰らう事も抵抗は一切ないだろう。

「女神が気に入らない。あんな私より年下のような奴が女神とか。大人はそれを崇める信仰しろ——は、バカじゃねエかあいつ等。そんなことを思ってしまったて、それを吐いてしまう私に表の世界では生きていけない。人間は女神を信仰するそんな当たり前のことが出来ないんだからな」

生まれる世界が違えば——そんな甘い幻想を思い浮かんでしまいリンダの頭に手を置いて乱暴に撫でた。手入れしていない薄い黄緑をした色の髪がレイスの手の中で踊った。リンダは恥ずかしそうに上目使いでレイスを見つめた。

「……兄貴は私を子ども扱いするんだな」

「俺の方が歳上だからな。ま、お前の言い分も理解できる。ぶっちゃけ俺も女神は好かん。あれは綺麗であるために造られた物だからなあ。美しい女であっても善い女じゃねえ、いつかは誰もが飽きるぜ。まるで流行したアイドルが突然消える様にな」

「ぶぶ、面白い例えだな流石兄貴！」

「そうだろう？ま、リンダ。お前はまだ若いんだから出来る事を増やしてくれ喧嘩だけじゃ世界は何も答えてくれないぞ」

「その本音は？」

「早く優秀に育ってくれえ、上司四人。策略とか篡奪とか作戦とか得意かもしれないが

個々の存在が違いすぎてまとめ切れない。あいつ等もそれを理解できているからまだマシだけどーだからって俺に押し付けるか!？」

例えば、エンカウトすることに襲ってくる戦闘狂脳筋。

例えば、ロリコンが褒め言葉だという一桁以上はババアだと言い放つ作戦立案者。

例えば、性格的に女神側についても可笑しくない見た目はロボットアニメの主人公機  
の優しき正義の剣士。

例えば、詰めが甘いアップルパイ大好きマジエコンヌ側の女神。

個性が強すぎる故に連携することかまわずない。どうして部下を任せられる重要な立場にされたか頭を悩ませた。そんな苦悩する姿にリンダは笑みを浮かべて作り拳から親指だけを突き上げてレイスに向ける。

「この星に産まれた時から運命だった!」

「信じたくない真実。今から引き籠りたい」

「と言いながら、私達の面倒を見てくれる。これが私得の男のツンデレ」

なんだよそれーとレイスとぼやきながら頭を掻きながら何気ない雑談をしながら、目的地にたどり着いた所でその足が止まった。

「漸く、目標の者だぜ」

『ッ、どうしてこの場所が!!』



狼狽える女性の声。開けた場所の中央に神々しく置かれた祭壇の上に置かれたディスクが鈍く光る。

「ゲームキャラさん、お前の物語はここで終わってしまった!——つてね」

「兄貴。ここはゲームキャラを見た者はこれ以降いなかった……とか」

「いやいや、第三部完ツ!ご愛読ありがとうございました!!じゃねえ?」

『!?転移出来ない……結界!?!いや、これは!!』

「来るもの拒まず、出るもの拒む、後は俺の指定した対象を時空間を切り取って封じ込める封鎖領域ゲフエングニス・デア・マギーって言うんだ。星を砕く程の砲撃魔法ぐらい用意しないと外には出られないぜ」

レイスが手を上げた。まるで空に飛びつた白鳥の羽の様に紙片ペーヅが散る。舞う。集う。顕現されるのはかつて一つの大陸を争った二つの神柱の中の一つ。光すら反射しない程の常闇の刃。斬ると言うより叩き潰すと言ってもいい巨大な刃。

真面な人でも持った方が潰されてしまうほどのサイズを軽々しく肩に担ぎ、リンダと共に中指を逆らうように天に向ける。

「残念。死レを誘イう幽霊スからは逃げられない」

その瞬間に振り落されたのは処刑者が繰り出す断罪の一撃だった。

## 崩壊

「よう、名も知れない美少女さん。三日ぶり」

まるで別世界でも潜り込んでしまったようにあれほど牙を剥いて襲撃してきたモンスターが雲のように消えて突然地震でも起きたかと思うほどの轟音が響く、パーチャフオレスト。異変に気づき、最悪の事態が脳裏に過ったネプギア達はその場に急いだ。木々の間が生み出した自然のトンネルを走り抜き、光の差し込む非人工的な広い空間へと出た。そこには、バラバラに粉碎されたゲイムキャラだった物。彼女達に気づいたレイスは嗤っているような声で黒剣を肩に担いだ。

「兄貴、こいつ等は？」

「ほらこの前言ったろ？あのピンク色の髪をしたのがプラネテューヌの女神候補生で、あつちの黒髪がラストイシヨンの女神候補生だ。あと二人はギョウカイ墓場に女神救助の為に来た勇氣ある馬鹿二人だ」

「うへえ、命知らずな奴」

リンダの口から思わずあり得ない者を見た様に声が零れる。

あそこは煉獄の地。正しき魂は転生する場所。穢れた魂は冥獄界に落される場所。

生命を持つ者が足を踏み入れる事すら烏滸がましい神聖で邪悪な墓場。今はマジエコンヌが支配しているその大地に足を踏み入れる事は間違いなく死を意味する。

何故なら、あそこは女神の守護範囲に入っていない故に【汚染化】された凶悪なモンスターが一般的に周囲に這っており、更に一人一人女神すらも上回る力を持ったマジエコンヌ又四天王に見つかってしまえばただでは済まない。そのあまりにも危険な場所故にマジエコンヌの本拠地もそこに造るのは危険と判断されたほどだ。弱肉強食の世界、強い者だけが存在を肯定できる魔境の地。ただ崇めていた者が、神の危険を知り命を賭けてまで助けにいくほどの覚悟を持った人がいたのかと感心しながらリンダは頷く。

「あ……、あなたは……」

その場で彷徨うように現れた死神のような存在。憧れであり絶対的な存在であった四女神を一人で倒した『何か』。無様に敗れた記憶が蘇る。死臭を放つ禍々しきプロセッサユニットを纏い、振るわれる鎌の一撃に叩き伏せられ苦しむことしか出来なかった未熟な記憶が鮮明に蘇ってくる。

「貴方が……、お姉ちゃんを……」

「そんな熱い目を向けられても、照れるぜ」

烈火の如き怒りの視線にレイスは変わらさず笑う。どうして酷い事をしてきたのに、そんな顔で居られるのか彼女達には理解できない。

「ふざけないで！私は貴方を絶対に許さない。蜂の巣にしてやる!!」

「おーおー、恐い怖い。リンダ下がってる」

激昂に流されるように女神化。ユニの体には女神を象徴するプロセスユニットが、展開させ姿が変わる。軽装な姿からスクール水着のような服装。流れるように伸びていたツインテールも髪色は黒ではなく、白く染まり螺旋を描く髪型に。身の丈以上のある攻撃的な巨大な砲台を軽々しく構え、その双眸から敵意を燃やし引き金を躊躇なく引いた。

撃ちだされたエネルギーの弾丸は音速の速さで大気を貫く。銃口から弾丸を予測して回避する事は出来ても、既に殺意が込められ放たれた魔弾をレイスは肩に担いでいた黒剣を縦に振るった。

「緑の女神の突きの方が速かったな」

甲高い音が鳴り響く。一刀両断、切り裂かれた魔弾は空中に拡散していく。ぎりりと歯を強く噛む。砲口の上に投影されたターゲットスコップを除き、

肩を狙い三発。

頭を狙い二発。

足を狙い四発。連続して魔弾は飛翔する。

そこに一切容赦も躊躇ない。元より憧れであり、最大のライバルとして定めている姉

を倒した相手。全力で倒しに行く以外の思考は全て排除されている。

「は、あまーい。あまーい」

精神を逆撫でするような笑い声で全てを切り裂く。その場で、誰もが剣舞が見えた者はいなかった。腕が動く、そう見えた瞬間には既に振られた後であった。

「ほら、どうした？俺はまだ傷一つない。その程度か——候補生」

「——舐めるなあ!!」

煽り言葉を？み込み、怒りを更に燃やした。ネプギタ達の声は冷静を失ったユニの耳には届かない。砲口が上下に開き、シエアエネルギーが紫電を散らしながら収束していく。赤子ほどの大きさまで圧縮された球型が造られ、迷いなくトリガーが引かれる。固定化され、荒れ狂うエネルギーは一定の形に押し込まれていたのが、一方の方向に解き放たれ、加速した光の束が大気を貫く。

射線上に立ち尽くす変わらず幽霊のように嘲笑うレイス。面白おかしく気味の悪い笑い声を響かせながら、鈴音のような音の直後に剛剣が振り下ろされた。たったそれだけで神という絶対的な存在が放った閃光が切り裂かれる。

更に、光の束の間に駆ける細い剣閃は、一瞬の判断によって銃を盾にしたユニの体をトラックが猛スピードで撥ねた如く、その体は後ろに吹き飛びステージの枠を破壊しても止まらず、太い蔦に体を捻じ込む形で漸く停止した。

レイスは蚊を掃ったような満足気に頷き、黒剣を地面に突き刺して、その柄に両手を重ねその上に顎を置いて除く様にネプギア達を見た。フードの奥の闇の中に光る眼光に三人の体が震えた。

「次、どうぞー」

長い時間縛られた面接官の疲労に籠った声のように呼んでくる。後方で退避していたリンダが笑う。残酷だ卑怯だ鬼畜だと楽しげに、四女神を単独で討伐した相手に女神『候補生』が何を出来ようか。

「……どうして、どうして……こんなことを……!」

拳を握りしめ叫ぶネプギアにレイスは鼻で笑う。

「自己満足、それ以上も以下もない。仕事が終わった時の達成感。趣味が物作りでイメージした通りに完成に近づいている時とか喜びを感じるだろう? そんな感じで好きな事を俺はしている。お前だって好きで女神なんて肩苦しい職種をやっているんだろ? それはお前が望んでやっている事だろ? それと同じさ」

「貴方と……貴方なんかと一緒にしないでください!!」

「いや、同じさ。世間による善と悪の目あるだけで、お前も俺も好きな事をやっているだけだ」

欠伸をしながら退屈な視線がフードの奥からネプギア達を射抜く。素人ならば地面

に剣を突き刺し体重を掛けて休憩している様は一見隙だからけに見える。しかし、理解できない者と相対して混乱するネプギアの隣で、この状況をどう打破しようと思いを動かしているアイエフは誰かが近づいた瞬間、見えない速さの不可視の斬撃により両断されるのが安易に想像が付いた。

「ブラックシスターのように姉を傷付けられて怒っているのか？それとも女神様には理解できない俺が怖いか？少なくとも、俺も気長い性格でもないし動かないなら、こつちから行くぞ？」

「——ッ！」

漆黒の剛剣を抜き取り、天に向け力の限り振り下ろした。爆発並の大きな轟音を響かせ、その衝撃は小規模の地震のように周囲を激しく揺らす。

同時にその強靱の刃から発せられた剣圧が、破壊した地面によって発生された周囲の砂煙が雲状に広がらせ姿を隠した。

「コンパ、左右を警戒して！ネプギア上から来るからしれないから貴方も女神化して応戦用意！」

大樹の中に製造されているこのダンジョン構成からして下から来ることは少ない。

更に先ほどの一撃、本気なら既に奈落の底に突き落とされていただろうが、それをしていないのは近くにレイスの部下であるリンダがいたからだろう。故に襲撃場所は限られ



てくる。

空を飛べないアイエフとコンパが左右からの奇襲に、逆に女神化すれば飛べるネプギアは上に注意するように指示を飛ばす。相手との実力が離れすぎて、気を失っているユニの回収のタイミングが掴めない。下手に背中を見せば一方的に倒されるのは考えなくとも理解できる。

藁の隙間から漏れるように差し込む陽光。地面を見たアイエフは自分達以外の影を見た。

「へえ、前の去り際といい優秀だな名も知らない美少女!!」

「ネプギア!!」

上を見れば陽光を喰らうように大剣を背中に隠しているレイスの姿。アイエフの声はネプギアには届かない湧き出る感情が怖い、恐ろしいと、理解できない異物に警報を出す。

どうして平和になったゲームギョウ界に酷い事をするのか、どうしてそんな簡単に誰かを傷付けることが出来るのか、悪魔のように笑い、破壊行動を繰り返すレイスの姿がどうしようもなくネプギアから常識から外れた存在で、何より頭に過るのは女神なのに何も出来ずに囚われた弱い自分が語る——女神姉に勝った相手が自分勝てるわけがない。

「殺す気はない。だが——腕か足の一本二本は勘弁しろよ」

震えては武器を掴めず、目の前の恐怖を覆す勇氣は心になく、そもそも戦う前から負けるというイメージを浮かべて硬直する体は良いのような薪人形を作りだしていた。

アイエフが叫ぶ、コンパがネプギアの肩に触れて突き飛ばそうとしている。だが、先ほどのレイスが地面に向けて放った斬撃を思い出せば、集まっている段階で何をしようが無意味だ。

死を与えんと振り下ろされる無慈悲な断罪の一撃。

深いフードの奥で煌く紅と蒼の双眸は、最後まで簡単な事なのに方向性を定めることが出来ない愚者を映して心底つまらないと思いつながら剛剣を振り下ろそうとした瞬間、視界の全てが真っ赤に染まった。

遅れて爆発音と爆風に体が吹き飛ばされ、地面に落され転がって漸くレイスは冷静に撃たれたと理解した。

「な、何が起きたです!?!」

「……………都合展開って奴よ。ああもう、空気を読みすぎよ!」

「お兄、ちゃん…………」

燃え上がる炎の如き大型の回転式拳銃の銃口から残煙が上る。彼女達が振り向くと

体を隠すような漆黒のコートに所々に美しい緑色のラインが描かれた服装をした一人の男性が歩く。

最も特徴的な炎を見る様な紅蓮と蒼穹を見る様な紅と蒼のオッドアイ。黒染みた銀色の荒れた髪。幼さが微かに残り成人に近づいた十代後半の整った精鋭な顔つきだが、顔の左顔だけを残して包帯が巻かれている。よく見ると腕にも特に左手にはギブスでも付けているのかと疑うほどに過剰な量の包帯が巻かれている。

なによりネプギア達が驚いたのは空気だ。三年前、女神同士の友好条約が結ばれたその記念すべき日に彼は笑顔と共に去った。

優しげに笑い、誰よりも強くて姉の次に憧れた人物。女神の対極の力を持ちながら、それを世界の為に使うと、前に進む事を決意した輝かしい人。

だが、目の前にいるのは一瞬だけ見れば別人だと勘違いしてしまうほどだった。

何日も寝てないのだろう、目元に濃く浮き出た隈。長い年月の中で風化しながら激しい戦争に身を投じてボロボロになったコート。枯れ果て疲れ切り、死が来るのを待っているかのような生の抜けきった闇を映す瞳。それはまるで墓場から死んだこと自覚無く彷徨う生霊を連想させた。

「ユニを、回収して、ここから、脱出しろ」

途切れ途切れ振り絞るような喋り方で懐かしい声。

「お兄ちゃん…、どうしたの…？怪我、してるの…？？」

あまりに可笑しい記憶の中で笑っている彼と今の彼は存在そのものが違うようだった。雲泥の差と言ってもいい。口の中が嫌に渴いてきて吐き気がする。カタカタと歯が鳴り、レイスを相対した時より恐怖を感じた。それは女神だけにぶつけられる物が原因だった。虚無を見る様な静観な瞳に宿った唯一の感情が狂うように彼女達にだけに注がれる。

「ネプギア!!」

「あ、あ……」

体が栓を抜かれたように力が入らずその場で膝が地面についた。楽しかった記憶に亀裂が走りバラバラと涙と共に剥がれ落ちていく。優しかった彼は、変わり果てた姿で女神達に容赦なく憎悪に燃え滾る双眸で殺意を込めて突き刺すように睨んでいた。

# 愛憎

## 『冥獄界』

それは一言で説明すれば地獄だ。肉体が滅び、その魂魄が良きものであるか、悪きものであるか区別する神聖で邪悪なる煉獄の地ギョウカイ墓場にあるシステムから選択された穢れし魂が落される場所。

嘆き、悲しみ、苦しみ、怒り。

人の叫び。人の殺意。人の断末魔。

最も深く、激しく、暗く、その感情は総合して『負』と呼ばれる。それは災禍を読み起こす種であるが故に、別の場所に保管して管理する必要があった。だからこそ必要になったのはゲームギョウ界で顕現している希望の象徴、守護女神と対極なる絶望の象徴、『負』によって生み出されるモンスターに対しての命令権を持つ者。

## 冥獄神ブラッディハート。

鮮血を纏い、負を背負い、人々の負の総意を治める器。

穢れ、歪んだ、狂った神は愛情と憎悪の矛盾の中で未だに自我を保っていた。

煉獄の業火すら生温い、地獄の劫火に魂を焼かれながら。



なんとか、なんとかネプギアに当てずに奴に直撃出来た。

近くにアイエフとコンパもいる。懐かしいな、最後に会ったのが四年前だったよな。

もう一つ、女神の心配がしたので横目で探すとユニもいた。大樹の蔭に体が埋もれていた気を失っていた。十中八九目の前の男か女か、全身をコートで覆い隠した黒ずくめの所がやっただらう。

「……こうさん、怪我したんですか……？」

心配するような震える声。コンパの声だ。昔を思い出して少し顔が大人っぽくなったのかな。目の前の彼女を見ると錆びついていた当時から記憶が徐々に思い浮かんで、それがとても懐かしくて少し笑いそうになる。

「……怪我、じゃ、ない」

コンパの問いに頭を横に振るって否定した。怪我ではない傷跡と言った方が正しいのかな。

とにかく、再会を素直に喜んでるほど余裕はない。炎の魔銃『イオマグヌット』の爆熱弾を真面に直撃したのにも関わらずコートが焦げ、煙を上げる程度で済んでいる俺と同じ真っ黒のコートの存在が非常に不愉快だ。

足を進める。涙を流しながらこちらを見つめているネプギアを通り過ぎて、背中に携えた黒曜日に破壊力を求め、双剣に分ける機能を破棄し、ラストイシヨンのとある技術者に改良してもらった紅く分厚い片刃の機械剣『紅曜日』を抜き取って殺意を込め剣先を倒れている奴に向ける。

「起きて、いる、ん、だろう」

「ありや? ばれたか?」

「殺す気、で放った、から、な。その、コートが、耐火性質、でも、なければ、今頃、お前は、消し炭だ。それに、お前の、仲間らしき奴は、一切の、感情の波を、見せない。という、ことは、お前の身の、心配する、必要はない、ということだ」

「なるほど、ある程度の人の感情が読める……:~:~:~:というか、負限定的に鋭いのか冥獄神様  
ブラッディハード  
?」

——素直に驚いた。ブラッディハードの存在はこの世界にとってトップシークレットとされている。それを知っているという事は、少なくともこいつは教会の誰かに繋がっているのかそれとも吐かされたのか——いや、違うだろう。

そんな回りくどいことをしなくてもいいじゃないかマジエコノヌに取られた女神達  
が。

「うわ、殺気が一気に濃くなくなったけど地雷踏んだかな？ どう思うよりリンダ」

「兄貴……こんな状況でも余裕持てるのは素直に凄いなと思うけど、食い殺すような勢いで睨まれているぞ」

劇場で踊る愚者を面白いと言わんばかりに目の前のこいつは笑う。————不愉快だ。

その目を潰して、臍物を引きずり出して、口に押し込んで、噛み砕かせて殺す。殺す。殺したい。

フードの中に手を入れ、こちらを価値を値付けするような気味の悪い視線で体中を舐められている様な感触に吐き気を感じながら

「ま、安心しろ。まだお前が妄想するような酷い目には合わせてない」

その一言で人間であることを前提に緋曜日を急所、心臓目掛けて突き刺した。

「ぬおっ?!冥獄神化しなくてもその速さ、少なくとも女神よりは強いな!!」

奴の体を緋曜日が貫く、その寸前の所で体を横にずらして躲された。距離を離そうとするクソ野郎に直ぐ様に緋曜日の引き金を引いた。その瞬間爆熱推進装置が唸りを上げた。魔力を込めた弾丸が柄の上の排出口から吐かれた瞬間、剣の特殊機構によって魔







たように揺れた。クソ野郎は割れた額に流れる流血を上手そうに舌で絡め取り、俺は足が自分の足でなくなつたようにガクガク震えその場から動けなくなつた。

「リンダ、一足早く離脱してろ」

「兄貴、怪我が……!」

「ノープログラム、お前の大好きなハンバーグ作つてやるから帰りに挽肉買つて逃げとけ」

リンダと言われた女性は心配そうな顔で後ずさりをした後、全速力でダンジョンの奥に消えていく。そしてクソ野郎は、腹部を切り裂かれその部分が焼肉にされていながら、額が割れて血を流しているのに、クソ野郎は狂つた様に笑っている。まるで楽しいゲームをプレイしているように。

「全員、逃げろ、こいつは正気、じゃない……!」

「さあ、こいよ。その真つ赤に燃える憎しみの情熱をもつとぶつけてこい。漸くチュートリアルが終わりかけたところだぜ?」

「………あなたは」

振り向くとそこには数年前より背も伸びて一層綺麗になつたネプギアが居て、それを見た瞬間に心臓が大きく鼓動する。

意識が真つ黒に染まってたつた一つの言葉が白く文字で刻まれる。

“コロシテシマエ” 体の先から先まで意識を奪われてしまう様な酔ってしまいう様な甘い甘い言葉。

あれほどまで言う事を聞かなかつた足に力が入った。異様なまでに緋曜日を握る力が強くなった。そして俺は緋曜日の刃をネプギアの首筋を狙って――



『お前が正気に戻れバカ野郎ウウウウ!!!』

周囲に若い男の声が大鐘のように響いて、紅夜の腕が止まった。

『お久しぶりだね！ワイワイ再会を喜びたい所だけどさ！紅夜の意識がただいま混濁混沌していて、まともじゃないんだよね！しかも女神を見たら思考が殺戮マシーンになるから逃げて!!今必死で抑えているけどそんなに長く持ちそうにない!!』

紅夜に憑りついている『天壤デスベリアベセルドラゴンの邪悪龍』本人推薦の愛称としてデペアと名乗っているドラゴンの訴えが空間を満たすように広がる。

三人の脳裏を駆け巡ったのは空の警告だった。『会うな。近づくな。触れるな。殺される』その言葉が永遠とリピートされる。

「紅……夜……?」

「——ッ」

三人は見た獲物を見つけた様に開かれた口の間を光る唾液、目の前のレイス・グレイブハードすら眼中にない程に釘着けにした。その視線の先にはネプギアが居た。

小さな悲鳴と共にネプギアは後ずさりする。目の前の存在はもう過去の中にいた優しい人ではなく、ただこちらを殺したいという黒ずんだ欲望に憑りつかれた存在。

カタカタと歯が鳴り、瞳に涙が溜まっている。

「私の、私の所為だ」

—— 助けてほしいなんて祈ったから。

女神なのに祈ってしまったから。

祈られる望まれる方がそうしてしまったから。

—— これは罰だ。

弱い自分を助けるために狂った救世主が現れたのだ。

「……アイエフ、コンパ、今すぐに、ネプギアを、ユニを、俺の前から、消してくれ……ッ」  
溢れ出る殺意を無理やり抑え込むような苦し紛れな言葉。燃える様な衝動を必死に食い縛り、余りの力の入れように血が流れるが知った事ではなかった。

目の前の無垢な少女の存在をブラッディハードの本能が拒絶する。耐え切れない異

物を見つけてしまった様に、早急に始末しないといけない焦燥感とケダモノのような悍ましき空腹感が二人の殺害する抵抗感を無くしていく。包帯の中から除く冷酷なる氷刃のような瞳と餓えた獣が今まさに首を目掛けて喰らいつくような、そんな充血しきつた情熱の瞳を前に一番先に動いたのはアイエフだった。

「あ、アイエフさん……」

ネプギアの手を握った。今にも泣きそうに体を震えて、押し込みようにネプギアの手を引っ張り、コンパに握らせる。

「ネプギアをお願い……」

「あいちゃん間違つてないです筈です。……みんなで、女神様が決めたから、間違つて……ない筈なんですよね」

変わり果てた紅夜を見ながらコンパは虚ろな声で問うが、アイエフは何も言わず未だに気絶状態であつたユニを回収する為に大木のような根に飛び降り、ユニの場所まで疾走する。その背中が見えなくなるまで紅夜とレイスは黙つて互いに鬨気をぶつけ合いながら動く事は無かつた。

「やっぱ、あの小さな美少女（胸の小さな方）は善い女だな。引くとこ引いて、ちゃんと感情を押し殺しながら冷静に状況判断できている。みんなのまとめ役つて所だな。そしてそんな彼女に慕われている様子のお前が素直に羨ましいよ」

その瞬間、白と黒の閃光と炎の軌跡を描く閃光が交差する。

「デペア、いいだろう？ ブラッディハードになっても」

『君アホだろ、ただでさえシエア低下で「汚染化」モンスターのパラダイス状態なのに、ここでその権化が暴走気味に顕現してみろ！ あつという間に地獄絵図の出来上がり！ せめてもうちよつと街から離れろ!!』

内心舌を打ち、黒ずくめの回転切りからの脚撃が片腹を抉るように突き刺さり小さな悲鳴を上げる。

斬馬刀のような重量感のある大剣を片手ずつ持ちながら、その動きは踊っているかのように多彩で動きが読めない。ただ速いだけでなく、その身のこなしは蛇のようで、その木を抉る様な巨熊の一撃は切り裂くだけではなく打撃としても破壊力がある。柔と剛の異なる技術を同時に行使しながらの連撃は到底人の身で完成することは思えない程の完成度を誇っていた。

小さな傷や骨が砕けるような打撃、内臓を抉り返すような衝撃を受け紅夜の体は血まみれになる。弾丸が飛び出し血の様な噴射剤が剣圧の威力を底上げし、着弾すればその周囲を消し飛ばす炸裂弾を炎の魔銃イオマグヌットの銃剣は確かに一般人であるのら一太刀で沈めれる程に、周辺に蠢くモンスターも数発で抹殺できるほどの技術を会得していたが、あまりに相手が悪すぎた。

「まずは、腕一本いただくぜ！」

「やって、みろオ!!」

哄笑を上げる悪魔を打倒する為に裂帛の声を上げ連続でトリガーを引き、同時にデペアの力を紅曜日に譲渡する。魔力の溜め込んだ弾丸が解放され、更に凶悪なドラゴンとしての力が燃え上がる火炎を形を与える。

操られるように焼き尽くす炎は鞭のように伸び、その先端が槍のように鋭くなり背後からレイスを貫かんと加速するのを既に予測していたレイスは後ろを見ずに黒い大剣を炎の槍に投擲して炎を切り裂き同時に力尽きたのよう煙のよう黒い気体に変わり、空中に分散する。チツと舌を鳴らしてレイスは、イオマグヌットの連弾を避けながら後方に下がる。それを逃さないと紅夜が上段に構え魔力を集中、鞭のようにな細い炎は分散しながらレイスの周囲に炎の道を描き逃げ道を塞ぎ、

「炎龍……一閃ツツツ!!」

本命の龍の如く太った巨大な炎剣が振り下ろされ、周囲を地獄と化した。

「……やったか」

『まだに決まっているだろうアホ!!!』



緋曜日の残弾を確認した瞬間、

勝利を確認し勝利に酔った致命的な隙、

生きている者を炭化させる程の熱量の海の中で蒼と紅の二つの眼光が輝く。

「ちよつとだけ本気をだしてやる」

道化師のような相手を煽る口調ではなく、初めて対等の者と相対する戦士の様な威厳に満ちた声で炎の中で白の大剣を天に向ける姿が紅夜の瞳には映り、

——  
逃げる。

不死身のはずの肉体の中にある本能が叫んだ。

「リアクタードライブ」

最大火力で周囲を炎の海と化した。それがまるで蠟燭で燃える小さな炎に見える程の星すら焼きつくせるだろう太陽を、前に触れてないにも関わらず紅夜の体を焼く。既に相棒の声は聞こえない紅夜が見えたのは、ただ満足そうに黒ずくめではなく、真紅に染まったコートを羽ばたかせる見たことがある男の顔。

「フォーマルハウト・エクスプロージョン  
邪淫なる炎帝神威」

結界を覆われた空間は、邪神降臨に溢れた超高熱によって燼滅した。

## 来迎

「……そう、ですか。ゲームキャラの回収は失敗、そして紅夜さん……いえ、禍々しきモンスター<sup>①</sup>の王であり、神である絶望の象徴、ブラッディハードもこの世界に……」

レイスの来襲を突如として出現した紅夜の手によつてなんとか無事にバーチャフォレストから撤退することに成功したアイエフはイストワールの元へ報告していた。

その場にはユニやネプギア、コンパの姿はない。ユニの治療の為にコンパは付き添い、ネプギアは部屋に閉じこもつてしまった。

「直ぐにでも他のゲームキャラ、他の大陸に向かう必要があります」

「イストワール様、ユニには治療の時間が必要ですし、ネプギアは……」

「……………」

あんなことがあつたのだ仕方ないと慰めの言葉は言いたくても言えない。彼女意思関係なく彼女達は女神を求めるしかないからだ。辛いことがあつたのだからゆつくりと休みの時間を用意出来る程に猶予はなく、ここで指を銜えていれば、シェア率は完全にマジエコン又側が独占してしまう。そうなつてしまえば例えゲームキャラの力を全て回収したとしてもこの状況をひっくり返すのは不可能だ。あの四女神を打ち倒した

人物と会ってしまったのは明らかな自分の情報収集不足だったという事に頭を痛めた。

この世界の元管理者の言うとおり、ブラッディハードは敵となったのだ。例え本人にその気に無かったとしても、その本能と立場がマジエコノムより恐るべき存在と化している。不謹慎ではあるがいつその事、ブラッディハードとレイス・グレイブハードが共倒れしてくれば一番良いのだが、二人ともどちらかが死んだとは思えなかった。

「貴方達が会ったあのレイスと名乗った人物にまとめた報告書が先ほど提出されましたが、ご覧になりますか？」

「……見せてください」

イストワールが机に置かれていた書類を指さす。レイスの存在を始めて目にしたとき、感覚と空気が違いが咄嗟に紅夜と違うと叫んだアイエフだが、冷静に考えればどうしても重なってしまう。声も性格も違う、深いフードで容姿は確認できないが、どことなく親近さがあった。まるで紅夜とよく似た、兄弟でも見ているような奇妙な感覚。

しかし、紅夜の家族なんて実際聞いたことがない、本人も分かっている。アイエフ達が知っている紅夜という存在は『零崎 紅夜という元の形を修復する為に用意された仮初の意識と感情』でしかない。故に記憶によって繋がれた家族と言う縁は紅夜には存在しないのだ。

紅夜は元の人格に一度会ってブラッディハードの力を創って譲ってもらったと冷静

に考えても可笑しな所があるが、元々別次元の空と交流があったのだ常識で測れないそんな力が合ったとしても別に不思議ではない。元の人格の紅夜は陽炎のように何か目的があるように消え、消息は不明、というより肉体を失っている状態の幽霊をどう探せと言うのだ。

「マジエコンヌ唯一の幹部【レイス・グレイブハード】。普段は裏工作するマジエコンヌメンバーへ作戦立案、同時に前線指揮者。マジエコンヌ開発の代表取締役。力を象徴する四天王とは違い、マジエコンヌという組織を運営、管理しているのは彼の功績による。異様なカリスマ性以外にその戦闘能力は四女神を同時に相手にして打ち倒す程。口調は荒々しい所もあるが、その人格は真摯であり部下と上司からの信頼も厚い謎の人物。戸籍履歴は一切不明の絵に描いたような謎の超人。こんな奴の相手はぶっちゃけムリゲーだと思います。……気持ちにはわかるけど最後どうなのよ」

愚痴りたくなるのも分かるが、報告書に書かないでほしい。とため息を吐きながら読み上げた書類を机の上に戻す。

「分かりませんわね」

「ええ、だけどこれだけははっきりと言えるわ」

それは…？と頭を傾げるイストワールにアイエフは今までの事を思い出しながら答える。

「あいつは犯罪神を信仰していない。あいつには別の……何かがあるわ」

女神を倒す程の実力者。そして組織を束ねる程のカリスマ性を持ちながら、マジエコンヌに信仰していないことは今までの事ではつきりと分かる。まず、女神を救助に向かったアイエフとコンパを見過ごしただけではなく、来襲してくるだろう骸骨の凶戦士を遠回しに警告したのだ。あれがなければ女神救出所か、アイエフ達も含めてギョウカイ墓場から無事に出る事すらなくあそこが墓場になっていだろう。

そして、先ほどの邂逅した時だ。四女神を一人で倒す程の実力が女神候補生二人と人間二人を相手に無事で要られるはずがない。逃げた女神に再び捕らえることすらなく、むしろあの戦い方はまるで実験対象を観測している様子で、何が目的なのか謎が深まるが、レイスという存在は犯罪神マジエコンヌを信仰する行動としてあまりに破綻しているからこそ、奴には信仰心の欠片もない事は分かる。

「だとすれば、犯罪組織としての目的とは別の目的がある。そしてレイス・グレイブハードは目的を叶えるために犯罪組織に所属していると……そう考えているのですねアイエフさん」

「はい、敵意とか殺意が全くあいつにはありません。女神候補生とは言ってもユニの射撃を初見で完全に見切り、一撃で沈黙化させました。四女神全員を一人で圧倒したという情報は間違いないでしょう。でも、仕事という名目であいつはこれからも襲ってくる

可能性が高いです。……これからは、奴の目から逃げるように行動するしかありません。……私が行きます」

今、情緒不安定のネプギアを無理やり外に出すわけにもいかない。コンパも元々は看護師なのだ。戦いには向かない、ユニも怪我がある、そしてレイスと再会すればまたペースを崩され冷静さを奪われるだろう。例え女神候補生と共に旅に出るとしたら、マジエコンヌだけではないブラッディハードも警戒すればいけなくなる。

「……あなた一人、何が出来ますか？」

「もう、ここで指を啜えていられないんです。女神でもない私はどう足掻いてもシエアも集めれないでしょうが、ネプ子達と紅夜の作り出した今が壊されていくことが我慢ならないんです……！」

かつて魔王『ユニミテス』と名乗った元女神マジエコンヌによる災害があった。

モンスターによって沢山の傷ついた人がいた。

だが、それは既知の中で女神の必要性を上げるために利用する者がいた。許せなかった。何もかもを積み木のように命を思わず重ねていく言動と利用価値だけを考えた。あの外道から世界を変えたいとお互いに手と取り合い集まった女神達の想いとそれを裏から支えると決意した少年の信念と覚悟の上に進みだした未来が穢れていく様をアイエフは我慢できなかつた。

「私は、もう、誰も、見捨てたくないんです……!」

あの状況ではどうやっても女神を救えなかった。だから見捨てた。見捨ててしまったのだ。

唯一無二の親友に手を伸ばせても、掴めなかった。何故なら、それをやってしまえば失敗する確率が高かったから。

己が無力に涙を流れた。イストワールも同じだ。ギョウカイ墓場で守護を担当している親愛なる義兄から連絡が途切れ心配で心配で、感情を優先してしまい真面な情報が無い状態で、女神達に依頼してギョウカイ墓場に調査を向かせたのが、そもその過ちであったと。

望みは限りなく薄い、否それはあるかないかすら分からないこの状況に二人はこれから先の事を考える勇気がなく、黄昏ていた。

「——おじやまするよ」

と、聞き覚えのある声と共に扉が開かれ真白色のコートと黄金色の長髪が流れる様に触れながら、それは部屋に足を踏み入れる。

「……ええ?」

「確かに関わらないとは言ったけど、この世界の事は割と好きだし思い出があるから



……来ちやつた」

ヤレヤレとため息を吐きながら薄暗い部屋の中に入室する黄金の影。

まるで高名な絵師が己の想像する絶世の美少女を作り出したように絵の中で描いた人物のような浮世離れた美しき。それぐらいに現実感のない程の美貌。独特の光沢を放つ畏怖を覚える銀色の双眸がアイエフ達を映し、一步踏み出すと同時に腰まで伸びている神々しい黄金の髪が揺れた。

何色に染まつていない孤高な白いコートを身に纏つて、かつて世界を呪縛するほどに狂うほどに恋をした世界の管理者はアイエフ達の前に止まつた。

「……夜天……空」

一人を生み出す為に他の生物を全て操つた外道で冒瀆的な最悪者。アイエフはこれが現在なのか夢幻なのか疑いながら震えた口を開く。

「状況は絶望ど真ん中ストレートつて所かな。僕が来たから安心しろ————なんて頼りにされる気も頼りにする気もないけどさ、あの時の同じ仲間ではなく協力者として、本ツツツ当に仕方なく手を貸す」

コートのポケットから取り出したのは白い特徴的な物がないただのハンカチ。

それを未だに涙を流していたアイエフに渡した。もう片方から取り出した物にイストワールは顔色を変え直ぐに目を細めて冷静になる。

「それを…どこで?」

「プラネテューヌに合った小規模のマジエコン開発工場から」

机に置くそれはゲームギョウ界で流行っているハツキングツール『マジエコン』だ。空は机に腰を軽く落して口を開く。

「さっき潰して取ってきた。ああ、死者は出してないよ。全員牢獄にぶち込んでいるから煮るなり、焼くなり、尋問するなり、好きにして」

「あ、相変わらずやることが過激ね…」

さっきまでの悲哀はどこへやら、イストワールとハンカチを受け取り涙を拭きとったアイエフからは喝いた笑いしか吐き出てこない。

「さて、後でネプギアとユニにドキツ☆腑抜けた女神を調…:洗…:復活させようポロリ(グロ)があるかも阿修羅☆モードをさせるとして「いま、調教とか洗脳とか言いかけたでしょ!」お、これが問題児の書類?見せてもらおうよ」

右から左にアイエフのツツコミをスルーしつつ、アイエフが持っていた書類を手に取り、目を通すと面倒だと言っているように頭に手を当てながら深いため息を吐いた。

「こつちに来ながらマジエコンを解体ばちしてきたんだけど、ブラックボックス部分に今のゲームギョウ界の科学力じゃ実現不可能な技術が組み込まれていた。しかもこれは魔術術式と言って特別な物で——邪神が一枚噛んでいるかもしれない」

三人しかいない広いエリアに嫌に響く声に二人のごくりと喉が鳴る。ルウィーでの悪夢が思い出される。四女神と紅夜の手でも結局、封印することしか出来なかった空ですら破壊は不可能と語った邪神が生み出した機械仕掛け悪魔。

「ルウィーの方で封印しているあれを解読しようとするアホはいるかもしれないけど、いくらなんでもこれは完成度は異常だ。普通なら天才と呼ばれる分類でも十年は必要、しかも知ってはいけない事を知って精神的にやられるデメリットもあるから、どんな天才や超人でも無理だ。邪神の叡智か加護を持つ者がいれば話は別だけど……」

「現実的じゃないわね。確かに信仰自由化しようとしたときの衝突でそういう者に手を出そうとする輩は居たかもしれないけど、ゲームギョウ界は空が相手をする邪神と因縁めいた伝承とかアイテムとかかないのよね？」

表情を歪めながら手を空は横に振るう。歪んだ形であつたがゲームギョウ界の守護者として活動していた空からすればそれは絶対に容認できない存在だ。

「合つたら全力で排除するよ。状況によればゲームギョウ界の全ての生物から記憶を抹消することもする」

「ですよね……」

「だとすればやっぱり、空さんのような異世界からの……？」

「うーん、あのルウィーでの事件から邪神リーダーをゲームギョウ界に表面上に貼って

いたんだけどなあ……。ごめん、こればかりは調査不足」

お手上げとばかり手を伸ばす空に二人はため息を放つ。

「ま、難しい事はゆつくりと片付けるよ。そろそろ紅夜について知りたいじゃない？」

「……………あれはもう紅夜と呼べるものなの？」

「モンスターという存在が溢れないために人々の負の総意の器となることをあいつは決意した。自ら地獄に墜ちた苦しみと痛みは想像を絶する。例え肉体がもつても他人の負によつて精神汚染が激しいだろうね。自我を失うのも……………時間の問題だろうね」

淡々と伝えられる言葉にアイエフは眩暈がして、思わず机に手を付けた。その表情は青い。覗き込む心配するイストワールを大丈夫だと言うように手で押して、最悪な事態が頭から浮かび吐き気がする。

女神は希望の象徴となつてみんなの笑顔をすることを夢見た。だが人の意志は喜びと共に苦しみもある。モンスターによつて苦しみに火と油を注ぐことを辞めさせるために紅夜は全てを？み込むことにした。それがどれだけ愚かであろうとも前に進むと決めたのだ。だが実際、負を受けれる瞳になつた紅夜は負の権化そのものとなつてしまつていた。この三年間、女神が捕らわれたからマジエコンヌよつて支配されつつあるこの世界に一体どれだけ負が溢れたのか、その結果どれだけ紅夜に負担を掛けることに繋がるのか、それは調べれば出てくるモンスタアの被害、そして女神の加護の薄い地域

で頻発する「汚染化」したモンスターが物語っている。

「これが君達が選択した未来だ」

爆発しそうな思いを必死に止めようとしているアイエフの姿に静かに空は呟いた。

「ッ……………」

「空さん……………その言い方は！」

「紅夜にも言った後悔はない？ っつて、女神にも言ったそんな未来は不可能だって、それでもそう言った結果がどんなことが起きようと僕は知らない。——理想はいつも平和で、現実はいつとも残酷だ」

世界を焼くほどの狂恋した空は変わった。今まで自分を押し続けた怨霊が成仏でもしたように物事に対して静観して、ただ当たり前の事をいう普段に戻りつつある。

そして語るのは、今の状況は何がそうさせたのか、女神と冥獄神が突き進んだ結果であつたと。

「君達は夢を見て鳥かごから出たいと訴えた。見える景色がどんなものでも、どんな過酷な環境があつても、構わないと言ったから警告して僕は君達を空に向かって離れた。せっかくの楽園を君達は消して飛び立ったんだ。可能性という混沌の為に循環していた秩序を破棄したその選択は過ちだったのか、もう遅いけど考えてみたら？」

## 犯罪、選択

幼女。

それは——伝説なり。

幼女。

それは——神秘なり。

幼女。

それは——刹那なり。

一つでもいい、考えてみてもらいたい。想像してもらいたい。

例えば無邪気に走り回り向日葵のような笑顔見せる姿。

見える全てに好奇心を抱きキラキラと星の様に輝かせる純真無垢な瞳。

小動物のように頼りない、しかしその弱弱しさには思わず守ってあげたくなる母性本能を擽る物。汚れを知らず甘える猫のようなボイスに一体どれほどの破壊力があるか。

しかし、それはあまりに短い時。

大きくなれば自身の格好に気を使い始め、化粧、服、バック等に興味が沸いて沢山の

金が羽を付けてどこかに消えていく。

無邪気に触れ合っていた時期も性別という概念を理解し始めると一気に距離が離れ、独り立ちを始めてしまう。

更に成長してしまえば女性同士でグルーブを作り騒がしく笑うようになり、多感な時期は複雑な心境を作り出して色々と難しくなってしまう。

「——そう、幼女とは花が咲く前の小さな蕾が見せる一時の夢」

紅い雲が世界を覆うこの目に悪いこの大地に立ちながら果ての無い空を見るフードの奥からオッドアイの双眸が映した。

その隣には恐竜のような外形をしながら全く野性的な厳格さはなく、むしろ体つきは肥満したピエロのような姿をしたマジエコンヌ四天王が一人トリック・ザ・ハードは遠い目で遠い空を見つめていた。

「残酷に流れる時間が疎ましい。この刹那が永遠に続けばいいのに——」  
「違うぞ。トリック……」

その夢を断固否定した。それは可笑しいのだ。否そんな時が永遠に止まるような事はあつてならないのだ。

「夢は夢でなきゃいけない。幻想が現実となつてしまえば、陳腐となる様に、俺達はそこにある儂い物である短いその輝きを愛し続けるんだろう——トリック」

「ふん、すまない。我が同士レイスよ。俺は間違っていた」

「気にすることは無い。夢を見ることもまた価値のあるものだ。俺はそう思っている」

手に入らないと思ってるからこそ、それを追い求める探究心。好奇心と愛情があれば人は退屈できずに生きていける。それを信じるレイスから伸ばす手にトリックは鼻で笑い力強くレイスの手を取った。その演技っぽい友情の握手を見つめるもう一つの大きな影。

「無駄にかっこいい事を言っているつもりだろうが、俺はお前達を自首させた方が子供の平和が守られるだろうと真剣に考え始めているのだが」

「ノリが悪いぜブレイブー、お前だって子供の笑顔を見るのが好きだろう？」

「ああ好きだとも、しかしお前たちの愛情は卑猥な妄想で染まっているだろう」

レイス達が振り向くとそこには歴戦を潜り抜けたような薄汚れた白を基準にした装甲を身に纏い、子供が好きそうなアニメの合体ロボットののような姿をしたマジエコンヌ四天王が一人ブレイブ・ザ・ハードは目の前の変態二名に頭を抱えた。

この二人、好きなのだ、幼女が。

未発達達を見ては河原で見つけた如何わしい本を見て思春期の男性が興奮するように黄色い声でハイテンションになるのだ。

その他にはギャルゲーなどをレイスを買ってきては、二人はロリボイスに身を振じる



のだ。控えめに言おうとしても、やっぱり変態という言葉が似合いすぎている。同じ職場に居る者として、ブレイブは手を出して子供に酷いトラウマを植え付ける牢獄に閉じ込めた方がいいと真剣に考えていた。

「は、その眼に答えてやろう——ロリコンで何が悪い!!」  
「こいつら、どうしてド変態なのに無駄に優秀なんだろうか」

たった三年で女神のシェアの大半を奪ったのは間違はなく目の前の二人が功績が大きい。トリックの巧みな情報操作をバックにレイスが的確に相手をそのカリスマ性で次々と?み込んでいく、更にその腕つぶしはシェアの低下とギョウカイ墓場の特性上、弱体化したとしても四女神相手に圧勝するという場違い強さを誇っている。

性格も忠実であり、組織の運営と管理の中で忙しい身でありながら、お互いに剣を交える鍛練も欠かせない。故にブレイブ本人は気に入っている人物だ。幼女好きと云う点を除けば理性的で弱き者に対すれば手を伸ばす優しい心を持っていることを知っている。しかし、人は不完全であるように彼もまた目で覆い隠せない程の欠点を抱えているのも事実であった。

「天才と何とかは紙一重というかむしろ完全に向こう岸と言う奴だ。所でレイス、例の物は?」

「心配するなトリック、俺とお前の仲だ。勿論用意したぜ」

トリックの神妙な表情にわざとらしく髪を上げたレイスはその手に持っていた幼女の姿がプリントされた紙袋からソフトを取り出しトリックに差し出す。レイブは黙ってウザいと心の中で愚痴った。

「これだ。『大集結☆ヒロインみんな妹で可愛いロリっ娘。私達お兄ちゃん大好き♪R—18』確かに届けたぜ」

「ふっ、まさか一週間後に発売をに控えたゲームをフラゲできるとは、ふっ手が…手が震えてきたぜ……！」

「犯罪組織の中にその製作会社で働いている奴がいてな、バグ修正したばかりのほやほやをいただいた。自家発電しすぎてオーバーロードしないようにな」

一目で可愛い少女達が沢山プリントされているパッケージだった。それをトリックは天から授けられた物を受け取るようにこれ以上に無いぐらいの丁寧な姿勢でそれを受け取った。

「まあ、ゲームならまだいいだろう…」

色々と言いたいこともあるが、もし現実的にそれをやろうとすれば、例え仲間であっても問答無用で斬るつもりなレイブは安息のため息を放つ。そんな思想を知らずレイスはもう一つ取り出した今度は先ほどと違ってかなり過激な姿の少女がパッケージを飾っていた。

「もう一つ、『公衆トイレに隠しカメラを「アウトオオオオオオオオオオ!!!」どあああ!?!いきなり斬りかかるなよ!」

「なっ、何をするのだブレイブ!? 血に迷ったか!」

息を継がぬ速さで背中に装備された火炎を纏う大剣を抜き取りそのまま、一切の迷いなくレイスの手に合ったソフト目掛けて振り下ろした。彼の大きさと大剣ではレイス事範囲に入っていたが、レイスの超人的な反射神経と身体能力によって斬られたのはソフトとまだソフトが入っていただろう幼女の姿がプリントされた袋だけだった。危なかったと冷や汗を掻きながら同時に大剣を纏う熱に溶かされたソフトの姿に啞然と口を空けるレイスにブレイブの怒りの雄叫びが響く。

「貴様らああああ!!!」

「なんでこんなに怒ってんの!」

「知らぬわ!これだから頭の悪い脳筋正義は嫌いだ!!」

騎士のような構えから更に一閃、二閃。レイスとトリックに迫る。

紅い軌跡を残しながら嵐の様な剣舞に斬られたエロゲーを名残惜しそうに涙と共に捨て黒剣を具現化して、トリックは周囲に何重にも重ねられた魔法陣展開して応戦が開始された。

「貴様らは俺が斬る! 明るい未来に生きる子供達の為に!!!」

レイスが渡そうとしたのもまたちよつと特殊なジャンルのエロゲーだと言う事なのを知らぬブレイブは、レイスとトリックを相手に正義の断罪を下す為にためにその赤く輝く大剣を己の正義の為に振るった。慌てる様子のレイスも負けておらずその剣閃を上手く受け流しながら、トリックも魔法陣で受け止め、逸らしながら紅き剣閃を躲していく。

その後、喧嘩の臭いを嗅ぎつけたジャッジも乱入し、それを治めるためにマジックも介入して、大混乱の四天王大合戦となり、後に発端であるレイスはギョウカイ墓場の地図を作り直す羽目になり、涙目になったのは言うまでもない。



ギョウカイ墓場。

そこは煉獄というシステムである。死した魂が地獄に落されるか、天国に召されるか重要で人の立ち入らぬ禁忌の地。神聖で邪悪なゲームギョウカイ界では無くってはならないそこには裁判待ちの穢れた魂がモンスター化することが多い。そのモンスターは世間を騒がしている【汚染化】より更に進行が進んでいる。その理由としては地獄、つまり冥獄界に近い場所でありその影響を受けやすいのだ。本来であるのならこの地を守護

するモンスターが駆除するのだが、増えるモンスターを倒す所かそれらを隷属化する者達の手によって、この地は完全に魔境と化していた。

「幼女サイコー!!!」

稲妻を纏う紅い雲の下で喜びに満ちた叫声が木霊する。

黄色の装甲に恐竜に似た姿をした姿、その正体はマジコンヌ四天王の一柱、トリック・ザ・ハードである。

「気持ち分からなくもないが、もうちよつと静かにな？お前の声で幼女の美声が穢れてしまうだろうが」

「むっ、すまんすまん」

何気に酷い事をいつているのはレイスだ。しかし気にせずトリックはそれに視線を戻した。

彼らの目の前には液晶ディスプレイがあり、そこからは年頃10歳未満少女が冴えない男性に抱きついているCGが映し出されていた。場面下に表示されている枠の中には流れるように表示されている文字と同時にそれを読み上げる様に声が発せられる。

『お兄ちゃん♪』

「うおおお！俺も幼女に抱きつかれたい！お兄ちゃん発言されたい！ペロペロしたい!!」

まるでカメレオンのように長く伸びた舌が餓えた獣のように唾液が満ちるそれをレイスは触れた瞬間、蒸発させる見えない炎の膜を張っている。

さて、自分の欲望に素直なのはいいが、その領域は犯罪めいていると常識人なら思うかもしれないが、この場には二人しかいなくレイスはうんうんと深く同情するように頷く。この二人、見ての通りロリコンだ。

「俺は見て愛す側だな。確かに自分色に染めたい時もあるが強くやり過ぎると壊れるからな」

「ふむ、確かにそれも一理あるだろう……が、壊れないように調整するのもまた一興」天然だからこそその輝きが良いんだと言いたかったが、これを言うと言葉にまた返してしまい好きな物同士だからこそその衝突が発生してしまう。ここがギョウカイ墓場でなければ容赦なく譲れない所での議論が飛び掛かっていたところであったが、昨日の四天王大合戦の所為でマジツクの目が非常に厳しい。その目を盗んでプレイしているので、レイスとトリックはいつばれるか分からないスリルを味わいながら、自爆だけではないようにお互いを意識しているがあまり意味をしていないように見せてしまう。

『ねえ、今日はパパもママもないから一緒に寝ようよー?』

『僕は勉強中なんだ。期末テストも近いし、今日は勘弁してくれ』

そうしている間にも話しは進み。寝間着姿の幼女が上向けなってベットに倒れ込む

CGがディスプレイに映りだされた。

なんと、寝間着は上しか着ておらず誘惑するような足組から微かに露出している白い下着を血眼となつて息荒く見つめる変態二名。

「被りたいなトリック」

「同感だ。レイス、ペろペろしたいお」

最早口調が安定していないトリック。無成熟な体が放つ禁断の妖艶の魅力に頭をやられたようだ。レイスも食い入るように見つめながらロリボイスを楽しんでいたが話が進むにつれて、目を細くしてトリックに視線を持っていく。それに気づいたトリックは速く進めろとした目つきでレイスを睨む。

「貴様の嫌いな【機密事項です☆】であつたり【ブツピガン！】ではないぞ。それをやろうとすると貴様は嫌がるからな」

「いや、……その他にも苦手なジャンルが…」

嫌な記憶が頭痛と共に蘇つて顔色が悪くなる。そんなレイスの調子に心配することなく、トリックは目の前のエロゲーに夢中で急かしてくる。

心の中でため息を放ちながら嫌な汗がにじみ出る指で文章を進ませると選択肢が表示された。

『しょうがないな、と毛布を掛ける』

と

『少しっしだけ……』

隣の変態は俺もこんなに風に誘われたいと叫んでいるが、レイスは悟ったようにここは近づかない選択をしようと心に決める。その選択が愚かだったことに気づくのは遅かった。

「さあ、貴様も紳士（自称）を名乗るのなら既に答えは決まっている筈だ」

耳元で囁かれる悪魔にしてはあまりに薄汚れた誘惑。というか、口から零れていく涎が生理的に忌諱されるレベルだ。レイスでなければ悲鳴と共に逃げられても可笑しくない。

「あー……うん」

記憶の中で蘇ったのは月が隠れた闇夜の中で妖美に笑い、本能を撥るような淫声で体の動きを封じながら跨り踊る黒い女性。レイスは元氣なく生氣なく答えると『しようがないな、と毛布を掛ける』に合わせクリックする。

『まったく、いつになっても手間のかかる妹だな』

と、ディスプレイの中で主人公は立ち上がり毛布を掛けようとする。



その選択にトリックは目を開いて、レイスに見るとそこで漸くレイスの顔色が悪い事に気づき、もしやとプレイ中のソフトのジャンルを見る。

「まさか……………」

「…………リアルにされるとな…………アハハは」

虚ろな目で力なく笑うレイスにトリックは嫌な記憶が蘇りカタカタと歯を鳴らし、プレイ中のパソコンを力の限り殴った。

「…………童貞では無かったのか!？」

「そこかよ!？」

「仲間だと思っているのに酷い…………酷いぞレイスウウウ!!!」

「お前一回、枯れる程【ピーー】される!!」

「幼女ならどんなプレイを受けて立つ!!」

「童貞が吼えるな!!」

「少しイケメン面をしているからって、調子に乗るな!!」

「テメエ、真つ暗闇で動き完全に捕縛された状態で徹夜で絞られてみる!その朝、親友が何も言わず赤飯を出してきて、ベット自分で洗う?大きいゴミ箱用意しようか?って物凄く遠慮がちな目で言われて見ろ!!因みに赤飯は美味しかった!」

「惚気か貴様あああ!!!」

「買い言葉は売り言葉に。殴られ宙を舞ったパソコンが地面に落ち修復不可能なまでに壊れた最後に映したのは幼女は主人公を押し倒している場面だった。既に臨戦態勢に突入し距離を空けた二人に行き場のない怒りをぶつける様にパソコンが踏みつぶされた。激しいスパーク音と焦がれたケーブルの独特な臭い、なにより周囲の温度が一気に下がっていく死臭に二人の動きが時間を停止された党に止まる。

「……楽しそうではないか」

冷たくもその声音には明確な殺気と炎の様な怒りが込められている。

（（； ㇗。））ガクガクブルブル とお互い目を合わせ滝のように汗を掻きながら、そして絶対零度の冷気が身体を硬直させる。逃げ場ないここは既に逃走を許さない領域に囚われていた。

「その会話の内容じーっくーりー聞きたいなあ?」

錆びた機械のようにギギギギと頭部を反転そこには

「なあ? トリックそしてレイス」

一言で言おう

---

鬼がいた。

マジック・ザ・ハードが去った後。

プラネテューヌで今流行りの映画。ネプ神家の一族、その有名なシーンである湖の水死体の如く地面に半殺しの二人が突き刺された。

騒がしく、荒々しく、危険極まりない場所であるが、今日もギョウカイ墓場は平和である。

# 天獄のデイスペア

## 自立

涙で濡れた枕に顔を沈ませ、暗い部屋の中でネプギアはベットの所で座り込んでいた。カーテンは外の世界と遮断するように閉められ、外から様子が見え、陽光すら差し込まない。外はまだ昼時であったが、外との境界性を閉鎖されたようなこの部屋では、蛍光灯すら照らされることは無く、ただ黒一色の空間へとなっていた。

「疲れた……」

溢れる涙も声も枯れてしまった。無様に今までの全ての鍛錬を嘲笑うかのような敗北。

誰よりも強いと信じていた四女神達を虫のように掃い倒す絶対なる覇者。

女神を崇めていた信者たちは、新たな神からの贈り物に心から歓喜して女神という存在は時と共に衰退していく日々。それでも微かに残った微かな希望も現れる暗黒の覇者の手に粉碎された。

誰よりも信頼を寄せられることが出来た人物から受けた憎悪の眼差し、そしてそうさせたのは自分の行いの所為だと強く自信を批判し続ける。心なんて引き裂きそうなほど

強い自己嫌悪が握りしめるその手を更に強くさせ、悲しみと悔しさの涙が溢れ出す。

「……………」

壊された希望は枯れ果て、代わりに絶望が咲く始める。

結局、誰かの背の後ろで物事を見てきてしまった弱い少女は、寄り添える場所を無くした事で簡単に倒れてしまった。立ち上がってしまえばまた現実が少女を突き刺す。だからここで朽ち果てた方が楽かもしれない。

「アイエフさんや…コンパさんの方が私より……」

その先を遮るようなノックの音。濡れた枕から顔を上げ、充血した瞳になったネプギア扉の方に向く。

「ごめん、なさい。今は……一人に、してください……」

「……………」

扉の奥で気配が止まる。誰にも会いたくない。誰とも目を合わしたくもない。誰とも会話したくない。鍵を閉めた部屋の中で、再びネプギアは枕に顔を沈めようとしたその時、甲高い発砲の音と共にドアノブが吹き飛んだ。

「……………えっ?」

突然の事に目を丸くするネプギア。魔力で編んだ弾丸が次々と扉に風穴を空けていき脆くなった部分に放たれた一蹴は扉を完全に粉碎される。飛び散る扉だった物が床

に散乱して、呆然とするネプギアを前に扉の欠片を踏む音と共に黄金の髪がゆらゆらと揺れる。徐に顔を上げると同時に銃口の冷たい感触が押し付けられる。

「——反応遅い、護身用の武器ぐらゐは最低でも手が伸ばせる場所に置いとけつて言つてなかつたけ」

「ツ、空さ、ん!?!」

「動くな、今の状況分かっている?」

カチツと安全装置を外される音に身が凍るように寒くなる。目を泳がし、自身の武器であるビームブレイドは確認するが手の届かない机に置いてある。例えこの場で女神化しようが、目の前の人物は自身より圧倒的に強い存在なのだ。どう抗つてもその先は頭を打ち抜かれる簡潔明白な死。今、ネプギアの命は、空の人差し指に握られている状況であつた。

「聞いたよ。本当に色々合つたそうじゃないか……それで、君はどうしてここにいる?」  
「わ、私は……………」

それ以上の言葉は口から出ることは無かつた。

唇を噛み締めても、答えが出なかつた。呆然と口を開いていたアイエフは首を左右に振つて空に掴みかかる。アイエフの力に従つてベットの从上から降りたが、銃口は未だにネプギアに向けられたままだ。

「あ、あんたいきなりなにしてんのよオ!!」

「ここで腐っていくだけならいっそ楽にしてやろうかと思つて」

「それじゃ、何も解決しないわよ!」

「いやいや、ちゃんと考えはあるよ」

殺意はなくても、殺す価値はあるという様に未だに白銀色の銃口はネプギアを逃さない。

「君を作り出しているシエアを君を殺す事で分散させ、新しい女神候補生を作り出す。かなり弱いかもしれないけど、部屋で籠っているより有益に女神として働いてくれるよ」

「空ツ!!」

「崇める存在の神は常に前を見続けなければならない。どんな絶望が降りかかろうが、それに断固と反発する強い意思は必要。それ故に神は折れたらいけない、導く存在が止まったり迷子になれば進む人の道は迷路に嵌ったように散り散りになるからね」

唄を歌うような美声から伝えられるのは紛れの無い現実。銃口を向けられたままのネプギアは何も語虚ろな目で空を見つめている。

「君がもう歩む事を止めてしまったのなら……いつそのことゲームギョウ世界の未来の為に死んで、君はネプテューヌの後を継ぐ所か、足枷にしかない」

「……………貴方に何が分かるんですか…」

好き放題言葉を並べる空にネプギアは蘇った死体のように立ち上がり、白くなるほどに握りしめた拳で睨むように空を睨むネプギアの双眸は悔しさと苦しさ等の負の色に染まっていた。

「負けて、捕まって、お姉ちゃんの造った世界はボロボロになって、お兄ちゃんは可笑しくなって、ゲームキャラは壊されて、私に…………私に何が出来るって言うんですか!!私だって頑張ったんです!私だけに出来る事を頑張って探した結果がこれなんですよ!!」

「努力の見返り、正当なる報酬が欲しいって?バカじゃない?理不尽こそが世界だ。そして絶対悪を否定した女神の選択によって生まれる“偏り”の中で、善悪のバランスが崩れていくこの未来こそが、想像通りの結末だ。それを自覚していたか、していなかったのか…………、ギョウカイ墓場で捕まっているあいつ等は計算していたのか知らないけど、それで紅夜は狂うのは必然だよ。むしろ、君達と会話できたことすら奇跡だと言ってもいいね」

「こうなる事、貴方は想像していたの…?」

「答えはイエス。流石にマジエコノ又復活は全くの予想外でも、紅夜が狂う…………そんな不回避な未来は想像がつく」

ありとあらゆるゲームギョウ界の世界軸を見続けた空の言葉。なぜ、言わなかったそ



んなことは口が裂けてもいえない。何度も遠回しに忠告されていた、なによりアイエフ自身そうなることを既に予想していかから。それでも、夢を見たかった。子供が大好きなご都合主義な絵本の内容のような夢のような世界を目指したかった。そして目指した世界に近づきすぎた代償が今ここに来ている。ただそれだけの事だ。

「おねえちゃん、そもそも間違っていたと言うんですか……」

「あいつがどれだけ頑張っても、可能性とは混沌だ。良い方に向けば簡単に悪い方にも向かう。それにあいつ等は頑張り過ぎた。故に人は女神を失った時に、新しい神に縋りつき、又は神無き世界の中で希望を持つと前に進む奴も出てくる」

「徹底的なダメだしね。……でも、私は今も女神を信じているわ」

えっ、と言葉を零しネプギアの顔はアイエフに向かう。

「依存するわけでもない、否定するわけでもない。共存していく世界をネプ子達は望んでいる。だから、私は世界の終りまで信じ続けるのよ。誰かが出来ない代わりに私は続けていくだけ」

「……………アイエフさん」

信者に勇気を貰う神って立場的にどうよと空はため息交じりに頭を搔く。

本来であるのなら信者に道を示すのが神の役目、そういう神と人との関係を嫌と言うほど見てきた空は頭を悩ませた。理解できない者からこそ、それが良い方向に行くのか

もしれないと思いがら。

「それに空の事なんてあんまり真に受けちゃだめよ。空が持つてきたえつと：「旧約聖書ね」そう、それに書いてあつただけど『年老いた者が賢いとは限らず、年長者が正しいことを悟るとは限らない』。空は現実を語るのは得意だけど、打開策は論理を無視しているから支持されにくいのよね」

「……………ふんッ、星の数ほどの思想を持つ人の意志を統一することなんて不可能ならば、誰もが悪だと断定する共通の敵を作り出して窮地に追い詰めれば、誰だって手を組む」  
「や」

「子供は崖から突き落とせば成長するとはいいませんが、空さんはやっぱり鬼畜ですね」  
「嫌われ者なら任せろバリバリ……………っで、気分はどう？」

空の微笑に気づき、ネプギアはその手を見た。小さな二つの手が目に映った。

溜め込んだ物を吐けたおかげか、体が軽くなった気がした

「ネプギア、確かにあなたの努力しているわ。けど、それじゃ通じない相手もいること。でもね、【艱難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ず】ってこと、失敗してもいいわよ。でもね……………折れないで、大丈夫よ。明日世界が滅びる事はないから」

「……………はいー」

光を戻した瞳で力強く拳を作った彼女の姿に空は安堵のため息を吐いた。

「——大変です！ユニちゃんがなくなつたです!!」

そして、走って部屋に飛び込み呼吸荒くしながら苦し混じりに吐いたコンパの言葉に二人は慌てるが、それを横目に空はカーテンを開いて外の様子を遠い目で見つめた。

## 幻想

——力があればどんなことも出来ると信じていた。

そう、姉の姿を見てそう思った。

記憶の中で輝くその姿は、人間形態でも女神形態でも色あせることはなかった。神々しく思うほどに黒き軌跡を描く美しい剣劇がモンスタ―共を有象無象と言わんばかりの無双するその背中を何度も見て負ける姿なんて予想すらしない。あの空でさえ、総合的能力のみで評価するならばノワールが一番と断言した程だ。

しかし、現実には儂く打ち砕かれる。

誰よりも尊敬して、誰よりも信頼している姉は囚われ、自分と同じ女神候補生だけが救われた。

理由は簡潔、自身が貧弱だったから。

弱かったから見下され手加減され、そして本来の力を使い切ることなく圧倒的差でねじ伏せられ敗北したからこそまだ余裕があり、回復が速かった。しかし、戦いという土台に自分たちとあの女神の様な姿をした女神モドキは同じ位置に立っていないのだ。そして無力な事に追い打ちを掛けるように世界は当然のように敗者である女神ではな

く、勝者であるマジエコンヌを信仰し始めていた。

「……………痛ッ」

「こんな所で走るな!!痛邪魔だろうが!!」

教会から抜け出し、場所も分からないまま走っていると人混みの中で人に当たった。

まだ体中が痛い、冷静になって体中を見ると包帯が至る所に巻かれていた。面を上げると顔を真つ赤にしながら怒る男性はユニを見ると忌々しく舌を打つ。

「ちつ、怪我人か。ガキは家に帰って寝てろ」

「…私は、…女神……………候補生……………」

「ああ!？」

青筋を浮かべて怒鳴る声にビクツと肩を触らして唾を吐く様に舌を打ち男性は去っていく。

川の流れる人の中に親が注意する声が聞こえる。その方向へ向くと子供がゲーム機を持ちながら歩いてきた。それがマジエコンである事が分かり、体に力が入り立ち上がり少年に声を掛ける。

「……………あなた……………それ、マジエコン……………でしょ」

「ん?お姉ちゃんだれ?」

「それはダメな物なの、捨てないと……………ダメなのよ!」

「えー、これさえあれば好きなゲームをダウンロードしまくりじゃん。これをくれるマジエコンヌはもつとサイコー！学校じゃみんなそう言っているよ？」

「だから……！」

再び親の声に子供がびくつと背が伸びる。怪訝な顔でユニを見て鼻で笑う。

「おねえちゃんもしかして女神信仰者？ダメだよお父ちゃんもお母ちゃんも女神は終わったって言ってるもん、みんなが楽しめるマジエコンヌこそがゲームギョウ界の神様ってみんな言ってるよ？じゃあね」

流行に遅れてしまった可哀そうな人を見る様な目で子供は、ユニの前から親元目指して人混みの中へ消えた。

「こんな所で立ってないで早く行ってくれない？通行の邪魔なんだけど」

子供の残した言葉が未だに理解できなく呆然としている化粧の臭いが濃い女性が睨みユニの前に立つ。その女性の持つ無駄に装飾された鞆の中にもマジエコンが見えた。

口から何か訴えたかったが、何も出来ず地面を見ながらその場から離れる。何も見たくも聞きたくもなかった。

「……どうして、いきなり出てきた神をみんな信仰するのよ……」

当てもなく歩いて辿りついた先は人気のない公園だった。

ベンチに腰を落して、無気力な声で訴える。勿論誰も答える者はない。

未だに世間の統一権を持つている教会だからこそ、面だつてマジエコンは浸透していいと思つていたが状況は深刻だった。あれから何人か子供や大人に声を掛けたが、ほとんど者が既に女神に対して希望を抱いていない。楽しんで娯楽を楽しませてくれるマジエコンこそがゲームギョウ界の神だと謳つている者もあの子供と同じように訴える者やマジエコンをお勧めしてくるものさえいたのだ。

「なにがマジエコンよ。なにがマジエコン又よ。犯罪神よ？ どうして誰も疑わないの……？」

その名の通り、犯罪の神。

どうしてそんな存在が人の利益になる事をしていいのか。

間違つている事をして罪悪感はないのか。

今まで信仰してきた人に答えるために女神に対してどうしてそんなに冷たくなれるのか。

女神候補生として誰よりも女神と近くに居たからこそ、女神の苦勞や努力を誰よりも見て理解しているから人間の無神経が理解できない者があつた。

「お姉ちゃんはあるなりに頑張つていたのに、国の発展のどれだけ真面目に考えてきたと思つているのよ……！」

「……仕方ないよ」

「何が仕方ないのよ！」

「……人は見えない未来より、身近な明日のことを優先するから……：：：艱苦するぐらいなら、安楽を選ぶから」

「それは好き勝手よ！おねえちゃんがどれだけ心血を注いできたと思っっているの!!」

「……：：：努力に伴う正当な報酬なんて……ない。それが世界単位であるのなら……：：：なおさら」

「だからって——！」

そこで漸く疑問が浮かんだ。自分は一体だれと話している。

ベンチに腰を下ろし、地面に向かって叫んでいたユニは表を上げて自身の隣に視線を移したそこには少女が座っていた。ルウィーの双子の女神候補生と比べると少し大人びて見えたが、それでも一桁も満たさない幼い少女。

歪みなく流れる様な背中に届くくらいのロングストレート。髪色は色素を失ったような雪の様に白銀色であり、その容姿は人形のように感情が薄かったが、壁画で描かれるような神秘的な少女だった。服装はユニにとって雲の様な例外の存在である空と同じ格好で髪色同様な白色のコートを身を隠すように羽織っている。彼女の幼くもどこか貫禄ある容姿と服装と合わさって、まるで儂い幻想のような印象を受ける人物だった。



「はい……冷たいよ」

「え、あ、……ありがとう」

近くに合ったであろう自動販売機から買ってきたのだろうか、布の手袋を着けた少女の手には二つのグレイプジュースの缶が握られており、その一つをユニに差し出す。一瞬、自分より幼い少女からの贈り物に年上としてのプライドが揺さぶられるが、かといつて断る事も悪いと混ざりながら結局、戸惑いながらそれを受け取った。

まだ昼時の熱い陽光と共に握られる間の冷たさかが心地よかった。

カチツと缶詰が外され、澄んだ瞳は遠い水平線を見るような視線でトクントクンと小さく呑み始める少女に不思議と先ほどまで燃え滾っていた怒りは鎮火され、預けられた猫のように静かになったユニも同じようにジュースを飲み始めた。グレイプの甘酸っぱい味が口いっぱいになり、ひんやりとした冷たさが火照っていた体を冷やしていく。半分になるまで一気に飲み干して口から離すと、こちらに視線を向けている幼い双眸がユニの表情を伺う様に映していた。

「落ち着いた……?」

「ええ、ごめんなさい。怒鳴り散らして」

「そう良かった。……お節介じゃなかったら、聞いていいかな?……貴方の胸の中にあるもの」

見た目は自分より小さな少女なのだ。だが、年下に見えず雰囲気と口調が一致していないように感じた。一番近い人物と言えばプラネテューヌの教祖のようで、外形は変わらず長い時間を生きている様な感じだった。

少しの躊躇の後、少しずつ語り始めた。

先ほどのこともあり、自身が女神であることは伏せたが、教会の関係者という形で女神達が囚われ、付いて行って無様に倒され、捕まって、仲間に救出されたが、女神を重んじる人は少なくなってしまい、別の希望に縋ったが結果は圧倒的な力の前にまた敗北したこと。

「……悔しいけど。女神のシェアの低下は教会によつてなんとか食い止められているかもしれないけど、いつ限界が来るのか……お姉ちゃん、ならきつと挽回できるような策が作れたかもしれないけど、私じゃ……」

「それで、あなたは…なにをしたいの?」

「……えっ」

同情なく人形の如き無表情な瞳で真つ直ぐユニを見つめた。

「貴方は、お姉さんから始まっている。お姉さんなら……お姉さんなら……お姉さんから、それがずつと頭を巡って、自分を信じていない……そんな印象を受ける」

金槌で頭を叩かれているような衝撃は響いた。

「……まるで、逃げているよう、お姉さんに逃げて「黙って!!」……」

それ以上言うな。そう言わんばかりに自分でも驚く程の音量で叫んだ。

少女はベンチから立ち上がり、ユニの隣ではなく前に移動にする。

「……頼っちゃダメなの？ 私はまだお姉ちゃんみたい……強くない」

「諦められる事は、幸福って私は言われた……。貴方はここで諦めて幸福？」

その言葉に拳に力が入る。

ふざけるな。

穢されていく世界を見ながら、諦める？

お姉ちゃんの世界を良くしようとその背中を見てきた自分が諦める？

まだ諦めていない人達がいるのに女神候補生の自分が先に諦める？

「そんなこと、そんなことは絶対にあっちゃいけない……!」

「だったら、どうするの？」

言われる無くてとも言わんばかりに気持ちを切り替えるようにジュースを豪快に飲

み干して、凛々しい表情へと変え、立ち上がった。

「ありがとう、少しだけ前が……見えてきた気がする」

少女は薄らと口を細くして、同じようにジュースを飲みほした。

「私はユニ、実はラストেশヨンの女神候補生なのよ」

「私は零崎空亡<sup>れいぎくうむ</sup>、初めまして女神様」

一瞬、零崎の性に紅夜の姿が思い浮かんだが、ユニは直ぐに偶然だと決めた。

何故なら紅夜に家族が肉親はいない。それを知っているからだ。

「まだ諦めるのは速すぎるから、もう少し私は足掻いて見せるわ。ありがとう励ましてくれて」

「私は……凄くないよ。それは元々、貴方が持つ意志<sup>ちから</sup>…それを少しだけ持ち上げただけ……」

「そう……それじゃ私は行くわ。少し頼りない友達が首を長くして待っているだろうか。だから少しだけ待っていてね必ずこの世界を救って見せるから——女神として」

心に付着した物が綺麗に取り除かれ体が軽かった。

深く未来を考えすぎていたかもしれない。だからこそ、溝に嵌ってしまい身動きが出来なかった。助かる手はあるのに、どこに捕まればいいのか焦って分からなかった。

簡単な事だった。

女神でありユニである。

ユニであり女神である。

たったそれだけで前に進むだけの価値はあった。

誰からの信仰や祈りを気にする前に自ら行動することこそが大切だと知ったからだ。

「またね。今度会ったらお礼をさせて」

「光栄の極み、貴方の様な女神様に会えて、また機会があれば」

二人は離れ、消えていく。

前にただ進んだユニの背中を見ながら、改めて神を名乗るにしては不思議な存在だと思いつつ空亡は青い空を眺めた。その澄んだ瞳は今にでも泣いてしまいそうで、あの仲間の元へ帰っていた女神を羨ましいと思いつつ、水面に雫が落ちたような小さな小さな声で、世界に問い掛けた。

「空さん、父さん……どこにいるの……？」



「ゲームキャラ？ああ、問題ないよ。あれって元々僕が作ったシステムだから、再度作り出す事も可能」

悩みが晴れた笑顔で帰ってきたユニに拳骨を決め、これからの方向を決めようとした矢先に語られる爆弾発言にネプギア一同は目を白黒して思考が停止した。

場所はプラネタワーの会議室、プラネテューヌを代表する場所である為、そこは五人と一書だけ座っても十分すぎるほどの広さだ。王族の城で見られるような縦に長い机を膝を置いて、手に顔を置き、暇そうに次のリアクションを待つ空に漸く回復したアイエフは頬をピクピクと動かしした。

「なんで、それを早く言ってくれないの……？こっちは見事に壊されて物凄い苦悩していたのに……」

「知らん。僕には関係ない」

そういう返事をするだろうかと予想していたイストワールは深淵にも届きそうな深いため息を吐いた。ネプギア、ユニは遠い目でこの人ならきつと犯罪神も単独で撃破できらんだらうなと思いつながら、コンパは周りに向日葵でも満開になったように笑顔に

なった。

「直してくれるんですか!？」

「状況が状況だからね。……本当、あんまり関わる気なんて無かったのに」

過去・現在・未来を掌握してただ一人の恋した女性を生み出す為の世界を否定され、破壊され革新されたゲームギョウ界に空の存在はもう必要ない。故に助ける義理も、意味もないのにどうしてもあの漆黒のコートに羽織ったレイス・グレイブハードの妙な既知感に引つ張られここにきてしまった事に後悔するようにため息を吐く。

それは、こつちが吐きたいと静かな怒りを燃えさせるアイエフの眼光に露骨にあはははと渴いた笑い声を零しながら、コートから淡く紫色に輝くディスクを丁重に机に置いた。

『は、初めまして皆さん、私がプラネテユーンのゲームキャラです』

「……………」

一同またも沈黙。マジエコン解体用のサンプルを入手するためにマジエコンの工場を来襲した上にまさかゲームキャラの復活までやっていたとは誰が予想していただろう。戸惑いの声がモールルス信号のように点滅する。イストワールは軋むような痛みがする胃を抑えながら、どうやってたらこの人に順序という言葉を刻むことが出来るのか模索するが三日所か、三千年以上の年月をかけて納得が出来る答えが導き出せるか不安

を抱く程だ。再起動を始めたネプギアは幼さを感じる丸っこい瞳をキラキラと輝かせ

る。

「初めましてゲームキャラさん、私はプラネテューヌの女神候補生、ネプギアです」

『……ああ、貴方が……プラネテューヌの女神、パープルハートによく似ていますね』

「お姉ちゃんをご存じなのですか？」

『ええ、四年前に事件があり、私の元に来たのです』

懐かしい記憶と同時に嫌な記憶も蘇ってアイエフとコンパは頭を抱える。事件解決に力を尽くしたが、自分たちのやったのはほとんど待機だった。それでも、四女神と紅夜の初めてであつとしても共同戦線の中でほぼ互角以上に戦ったあの機人は恐怖でしかない。大雑把であるが、それを聞いた事があつたのかネプギアとユニも納得した様に頷く。既に空から状況を説明してもらっているゲームキャラは助力の願いに喜んで応対する。

『——あの時、パープルハートと同じようにあなたに力を与えましょう。ゲームギョウ界の秩序と循環を守るために』

「……いいんですか？」

『貴方の瞳には光があります。パープルハートが見せたような、力強い意思があります。』

私はそれを信じるだけです。秩序と循環を司る者として、混沌と波乱を許すことは出来



「ませんから」

「ディスク故にその表情が見えないが、ネプギアにははつきりと微笑んでいるように見えた。底なしの闇の中でも、色あせることないような美しい光がゲームキャラの発行と共に溢れ出し、それはネプギアの中に入ってくる。今まで以上にならない胸の中から溢れる力を感じながらネプギアは頭を下げ、感謝の言葉を口にした。

「ありがとうございます」

「ゲームキャラは満足げに頑張ってくださいと笑うようにネプギアに応援したのちにその姿は粒子となって消えた。

「とりあえず安全な場所に転移させた。同じく他のゲームキャラにも伝達して、尚且つその場所は教祖のみ教えるように指示を出したから、大陸中を回って教祖たちを説得して回ってね」

「空さんが見つけてくれないんです?」

「僕が世界を救うことに貢献すると思う? 女神と人が作り出しているこの世界に僕が関与する必要がどこにある?。元より僕は異世界の存在、本来は手を出したらいけないかったんだよ」

「異世界の存在にユニとネプギアは一体どんな存在なんだろう感じながらアイエフとコンパはルウィーでの出来事を思い出し、冷や汗を掻くアイエフ達から視線を外して空

は呆然と天井を見ながら思考の海に飛び込んだ。

まず思い浮かんだのは、どこかの神々が遊戯の為に作り出した転生体だろう。定められた物語を壊すだけの力を与え、そこで死ぬ人を力で運命をねじ伏せて幸福な結末へと導く、それを見て楽しむ神々の遊び、知り過ぎた故の未知への好奇心による探検。

所詮、ゲームギョウ界も一つの世界であり、異世界の神々が何らかの気分によつて介入してくることがある。前例ならば千の貌を持つと言われる邪神ナイアーラトホテツプ等が興味を引ききたいと言う理由だけで数百人は死んだだろうルウィーでの誘拐事件。

どっちにしろ——来るなら容赦なくぶつ壊すつもりだけどね。この世界に行く末、滅びの末路。それは既に決定している。マジエコンヌが滅ぼすのか、ブラッディハードが滅ぼすのか、女神が勝利して一時の安泰の日々が続くのか、そんな些細な違い程度だ。

その手を握った。破壊の力。世界の流れを掌握して掴みとつた物を粉碎する概念の根元から強制終末。

大きすぎる異物が入ってきた時、この世界から元々ない物が突然入ってきた時はこの力は非常に照準しやすい。川に大きな石が放り込められれば、例え激流の中でもその場所は大方向把握できる。ゲームギョウ界に住む人間の赤子に転生した場合、特別な力を持つていれば即に見的必殺が可能。もし、何らかの不手際で能力を付与することなく魂

を生まれ場ばかりの肉体の器に入れるだけなら、警戒レベルは低めでもいい。

「距離的に次はラストイシヨンね」

「はい、皆さん大変だと思えますがゲームギョウ界の未来は貴方達に掛かっています。

……突然の激務を負わせて本当に申し訳ありません」

「プラネテューヌには私が、ラストイシヨンにはユニちゃん、ルウィーにはロムちゃんとラムちゃんがあります。私では何も出来ないかもしれない、でもお姉ちゃんがそうやったように私達も力を合わせてゲームギョウ界の希望になります！」

「私達も忘れないでね。諜報部として必要な情報は直ぐに集めるわ」

「わ、私もみんなの治療とか出来るです。みんなでねぶねぶ達を助けるです！」

賑わっている連中を横目で見ながら空は再び書類を引つ張り出す。レイス・グレイブハード。戸籍も出身も不明。

マジエコンに使われていたオーバーテクノロジーは間違はなくこいつが持つてきていると断定している。語られないように破壊の領域を世界の流れに同調させて大きな歪みがないか、調べる。

舌を鳴らした普段の一割程度しか出力を出せない状態では浅い場所しか分からない。かと言って全力を出すと自分でも訳が分からないまま何かを壊しかねない。やはり直接会ってみるのが先決だと定めてため息を吐きながら能力を使用を解除する。その様

子にイストワールはそつと空の肩に乗った。

「……紅夜さんの様子は見てきましたか？」

小さな声で誰にも聞こえないよう口調に空は首を微かに振った。

ゲームキャラの様子を見るに記憶がはつきりとしていた。幾ら空でもゲームキャラの記憶を創造するのは無理で、だとすればゲームキャラの情報を得るため破壊された部品を回収するために、一度は紅夜の情報したバーチャフォレストに足を踏み入れたことがある。用意周到の空がブラッディハードがゲームギョウ界に来ている事を知っていない訳がない。空は横目で話しに夢中なネプギア達を見つめた。過酷な運命が彼女を待っているとその瞳は語っていた。

「会ってない、けど従者から報告が来てた」

「……その表情だとあまり良くないんですね」

「イストワールだからこそ、はつきりと言う」

直接会ったわけではなかった。ただ保険として冥獄界に残していた従者ポチが重傷の体で提出してきた報告書を見た上での調査だった。下手に刺激を与えれば、どうなるのかは予想がつかなかったからだ。ただ、あの様子を見て結論だけは直ぐに出た。それは今の調子でなららの話ではあるが、遠からずそれは冥獄界と女神の宿命として現実になる惨劇。

「女神候補生の手で女神が救われと同時に紅夜はブラッディハードとして完成され——  
——女神を一人残らず殺すだろうね」

## 浸食（10／8日大幅修正）

——その男はずっと耐える道を選んだ。

この世の全ての負を一身に受け止める事。そうすることで得られる平和。信賴して  
いる女神達が作り出す栄光が男にとって決して落ちる事がない太陽の如き光だったか  
らだ。

だから歯を食い縛った。悪意が満ちる世界にただ一人、居座つてゲームギョウ界から  
降り注いでくる負がモンスターとなつても殺戮し続ける事でこの世界がパンクしない  
ように戦つた。

例えば、腕が挽げても、足を喰われても、頭を角で貫かれようが。何度臍物が混じつた  
血の反吐と吐いたか分からない幾度も感じた痛みで感覚が壊れているかもしれない。  
罪遺物と呼ばれた不老不死の体は本人の意思関係なく再生させる。まるで破滅へ導く  
様に男を戦場へ駆り立てる。

その果ては地獄。人々の負を模つたモンスターを殺し、負に戻つた物を吸収する。

それはつまり、他人の記憶の闇を見る事であつた。

『みんな死ねばいいのに』

もし男が機械のような神であつたのなら有象無象の声は届かないだろう。

もし男が盲目的に己の目的の為に血塗れた霸道を迷いなく歩む暴君であつたのなら。

もし男が未来を憎み妬み黒い熱情に身を焦がしながら世界の為だと殺戮を繰り返す狂人であつたのなら。

しかし、男は不安と期待の間を生きるただの人であつた。

神でありながら人でもあつた中途半端な存在であつた。

『どうして俺がこんな目に合うんだ！』

故にその怨嗟を聞いてしまう。人であつたからだ。自分がただの人間だと疑うことすらなかつた時期があつたからこそ、ただ困っている人たちを救おうと善良に働いていたからこそ、それを受け止めてしまう。

『死ね』





「……め……が……み……」

狂気と殺戮の最後に男はただ一つの望みが生まれた。まだ足りない、女神の存在が絶対であるために誰かが人間達を真の絶望に叩き落とす必要がある。その絶望が晴れたその未来に本当の女神の名の下に訪れる平和があると確信が生まれた。

地獄の中で男は血涙を流しながら天を見つめる。闇の渦巻くその向こうにある筈の光を幻想しながら、世界の救済を叫ぶ、それこそが自分の生きている価値だと言わんばかりに、その狂いに狂った故に生まれた終末思想に相棒であるドラゴンは危機を感じ、ブラッディハードになることを封印した。同時に救いと滅ぼすが同じになってしまうこの速すぎた相棒を誰でもいいから止めてくれ、そう切に願った。



冥獄界での出来事が悪夢であつたように意識が覚醒した。

『目が覚めた？』

頭の中で相棒の声に答えようと口を開こうとするが開かない。目も見えない。不思議

議に思ったが更に体が動かない。まるで魂だけを取り除かさね無機物に入れられた様な感覚だった。

『ボクの全魔力使って編み出した『漆黒の皇神鎧』アールマン・デイメイザスケイルメイが間に合って良かったし、直ぐに紅夜も咄嗟に左手に全魔力集中させて防御結界作ったでしょ……もしお互いに間に合ってなかったら髪の毛一本も残さず焼滅されてたよ』

「……………」

あの忌々しい程に黒いコートを羽織った男が放った太陽爆発と錯覚するほどの熱量を斬撃に乗せた一撃に自分たちは吹き飛ばされたのだ。安堵するデペアとは真逆に紅夜は腸が煮え返る思いだった。

——舐められていた。

殺意を瀑布の様に、出せる全力をぶつけてもあの余裕を崩すことは出来なかった。

『……………今の紅夜の体は木炭のような黒い物体なんだ。再生するまで落ちて、次に繋げようよ』

ふざけるな。

冷たくなった刃のような冷徹なデペアの歡樂的な言葉を切り裂く。

『紅夜の気持ちは分かるよ。ずっと一緒にいたんだから』

デペアは気にせず再び紅夜に語りかけた。



デペアは全魔力を消費して真面に回復していない。

紅夜は狂う様に笑う事は止めたが今に口は笑って受け入れる様な瞳で狼を待っている。

絶体絶命か、と紅夜を見下ろすまで接近したモンスターに思わず目を瞑るが、突然目の前のモンスターの気配が消える。と、同時に異常な事が起きた。原型すら保てなかった手足が復活しておりコートも体中に巻いていた包帯すらレイスと戦い前に戻っているのだに驚愕して声を出せないデペアに紅夜は薄い笑みを浮かべながら、何事も無かったように、墓場で蘇ったばかりのゾンビのような覚束ない足取りで前に進み出した。

「俺には、まだ、やる、こと……が、あるんだ……」

微かに残る自我は既に諦めている。もう自分には戻れないと結論を出している。

誰かの為と働いて感謝され充実感に浸っていた毎日。彼女達と出会い世界を知り、その理不尽を変えたくて支配者を打ち倒して作り出した世界。

その先に選んだ末が常識では見えない者が見える。この地に住まうモンスターの負が聞こえる。そんな選択が来たとしても、それは仕方がないことだと受け止めるしかない。なにより、そんなことはどうでもよかった何者か不明であるが、それを壊そうとす

る輩がいのが問題であった。

冥獄の神は静かに燃やした自己意志は周囲のモンスターを分解させ吸収しながら進む。真面に立つて歩けないだが、絶望の象徴を謳われるその悍ましく禍々しき名を持つ神は己の矛盾に傷つきながら進むしかない。

何度壊れた事か、津波の様に押し寄せる大質量の思念は魂までを穢していく。

吸収できない負はモンスターとなつて顕現され、襲い掛かった。

罪遺物という不死性を持つ肉体故に喰われても引き裂かれても砕かれても痛みと共に意識は覚醒される。

通常では考えられない想像を絶する地獄の中で継ぎ接ぎだらけの魂は既に限界を迎えていた。崩壊しないのは最後の結ばれた糸に女神との温かな記憶が束ねられ最後の線を踏み越えることはない。

ただ、コロンテクレル運命の相手を求めて、生きた死体のように動きに力が入る。

その表情は漸く訪れた光に溢れた未来を見つけた様に悦喜に満ち溢れて、瞳に涙が落ちる。

鮮明に覚えている。

お互いに戦い合っていた女神達が肩を並べ、共に満開の星空の下で共に未来を語り合つた時を。

黎明の果てのように決して届かず一瞬の瞬きのあの時間を場所は、どんな負にも？ま  
れず穢されず確かな形で記憶として残っている。最後の希望は弱弱しくも生氣に満ち  
溢れて炎で闇を照らしている。

「……………は、はは、待ってろ。絶対に、絶対に…」  
助<sup>殺</sup>けてやる。

復讐者でも聖人にも取れるような深い眩き。

闇を抜け、バーチャフォレストを出た。憎たらしい程の青空をそのオツドアイの瞳が  
映す。

大陸を流動する負の流れが、ギョウカイ墓場を目指して川のように流れる女神でも見え  
ないそれを見つめ、表情を歪める負の声が一層激しく脳裏を叩く。

『……………一体何が起きたんだ!?!紅夜ツ紅夜ツ!!』

相棒が声を上げるが紅夜はただ生氣なく頷くと足と手を軽く動かす。酷く喉が渇い  
て、フラフラと近くに合った湖に倒れ込む。冷たい水流に顔から突っ込み、息が出来な  
い。背中に背負っている機械剣紅曜日と二つの魔銃の重量もあつて、徐々に光が遠く  
なっていく。口から泡を立てながら、態勢を整えようと体を動かそうとすると悲鳴が聞  
こえた。

「キヤアアツアア!?!困っているセンサーに特大反応がキター!?!と思ったら水死体!?!」

薄らと見えたのは胸のファスナーが空いたライダースーツを身に纏い赤いマフラーを首に巻いている誰か。不思議と負が聞こえずらい人物だった。躊躇なく湖に飛び込み、無意識に伸びていた腕を掴まれて強引に引つ張られる。細い腕から想像もつかない程に鍛えられた肉体から生み出される力は重量な紅夜を湖から脱出するには十分すぎる程だった。

「——ねえ、生きてる！ねえ!？」

荒く？み込んでしまった水を吐くと、近づく影。凹凸の無い体つきであるが男性のような気もしないそんな少女は紅夜の背中を見て目を開いた。先ほど、高い場所で突き落とされ地面に体を叩きつけた紅夜は一度潰れたトマトのようになっていた。肉体の再生は完了しているが、鮮血を吸い込んだ黒いコートは先ほど水に浸かった事も合って、生々しい匂いを漏れ出している。

「ちよ!?!これ血!?!がすとー!!ちよつと来てええ!!瀕死の重傷者一名ー!!!」

「叫ばなくても分かっているのです。がすとは医者じゃないのです」

瞳だけを動かすと小動物を被ったような帽子が特徴的な幼い顔つきをした少女がこちらを見ている。周囲にお金の良い音を鳴っているのが幻覚として聞こえる。体を動かそうとすると、白い帯が解け、隠されていた物が姿を現した。

「そんな」どうでもいいから!この人、なんか……なにこれ包帯が外れ……?!?!?!」

「……日本一、これはなんですか？ 刺青にしては……生々しすぎるのです。あと趣味が悪すぎですよ」

「そんなこと言っている場合じゃないよ！ どうにかできないの!？」

「だからがすとは医者じゃないですよ。がすとじゃお手上げですよ」

世界の呪いを見た二人は冷や汗を掻きながらそれを見つめた。見つめ返された。

肩がビクツと震えるが、直ぐに持ち直す。もし彼女達が一般市民だったのなら、それを見た瞬間発狂して逃げるだろう。それは負を抱える人が見れば見る程、悍ましい物へと映る。

日本一と呼ばれた少女は紅夜の体を躊躇なく抱えると周囲を見渡す。森を抜けた向こうにプラネタワーが見えた。

「えつと……、確かあっちがプラネテューヌだったね。よし、これも正義のヒーローの務め、今すぐに病院に連れて行って上げるからね!!」

「……物凄い速さで走って行つたです。……報酬は後で請求してやるですよ」

抵抗する気力が抜け落ちている紅夜は疾風の如く駆け抜ける少女を見つめた。大丈夫だとか、もう心配ないとか叫んでいる。

四年ぶりの人の温かみだと感じながら負の合唱の中で彼女だけが静かで心が安らぎ、四年ぶりに眠気に負け瞳を閉じた。



—— 汝、世界を救済する為に世界を破壊せよ。

—— これが私達の運命、世界の為に殺して殺して殺して殺されましょう。

意識が無くなる寸前、民族衣装のような服を着た少女と白とピンクのドレスを着た少女が微笑んで手を伸ばしていた。

## 異物

今日のレイス・グレイブハードの気分は良くも悪くもない複雑な思いだった。

生き別れた兄弟と漸く邂逅して、更にその成長は予想以上の物であったが、同時に想像以上に精神が汚染され安定していない様子だった。

もし、あの場で静止する者がいなかった場合を想像してしまえば確実に二人の命は消えていただろうと断言できるほどに重傷と化している。建前の為の行動が、建前を作る為の行動になって、本人がどれだけ自分の意志で動いているのか怪しいと思うほどに。

「……それなりに成長した青年かと思ったら赤子に銃を渡してしまった、か？」

プラネテューヌの光の差し込まないビルとビルの間が作り出した闇の中で壁に寄り添ったレイスは一人愚痴る。少し目線を外して光のある方に向けば、難しい顔をした人間が今過ぎていく時間の使い方を無意志の中で過ごしている様子を懐かしそうに眺めていると如何にも不良ですと自己主張しているような露出の激しい服装をした少女と目が合った。

「よっ、挽肉買ってきたか？」

「兄貴！ 怪我は大丈夫っすか!？」

マジエコン又構成員であり、レイスが直々にスカウト（拾った）したことから組織の中では、注目の人材ということで日々プレッシャーと戦っているリンダが果物等の食糧が一杯に入った袋を持ってレイスを見上げる。

心配ないとその場で楽々とバク転を決めるレイスにリンダは胸に手を置いて安堵のため息を吐き、面を上げると今度はこちらの視界を締め尽くす闇だった。

「うぎやあああああ!？」

「間違つても女の叫びじゃねエな」

ケラケラとこちらを覗き込むように顔を近づけてきていたレイスは笑う。思わず腰をついてしまったリンダは見る見ると顔を朱に染めて今度こそその顔を拝めてやると掴みかかろうと飛びつくが、それを予想していたようにレイスは、リンダの額に指を置いてそれを停止させる。

「ぐう、兄貴はどうして素顔を誰にも見せないんだ?」

「——俺は死んだんだ。大切な家族と共に業火の中だな、この醜い顔は俺だけが生き残ってしまった罰なんだ」

語るその内容は思わず目を背けてしまいそうな悲観の声は今にでも泣きそうで。

「俺は女神を亡き者にマジエコン又様に語る新世界を造る。それが俺が墓場から蘇った訳だ」

「……兄貴」

「なんだ？」

リンダは飛び掛かった時に零れ落ちてしまった果物を袖を拭いて立ち上がり、真つ直ぐと真剣な眼差しでレイスを見つめた。

「……そのネタ飽きたっすけど」

「テヘペロ☆」

声から考えて二十代ぐらい大人が頭をコツンと戦いて媚を売る様な作り声にリンダは遠い目をした。

最初は地雷を踏んだと大慌てするリンダもレイスの唐突な作り話にすっかり耐性がついていた。それを心底残念と落ち込むレイスだが、直ぐに何事もなかったように切り替え基地に帰る為に二人で歩み出した。

「そういえばあのネズミは？」

「ワレチューか、あいつはいい奴だったな」

「……事務を押し付けてきたんですね。分かった」

ギグリツと隠すつもりのない様子を見せた。今頃、山のように積もれた書類に震える

ペンを懸命に動かさせ、死にかけながらもレイスに呪詛をかけているだろう。

「……ま、いいか」

お蔭でいつもバカ騒ぎにならないし、なによりこの場合は二人つきり。邪魔はいない。自分ならば一撃で血肉へと変換されるだろうマジエコンヌ四天王の中で最も暴れん坊なジャツジ・ザ・ハードの発散相手を務めているその体、そして女神候補生対峙した時は使わなかったが巨大な大剣を二刀流で同格に戦う技術と力を持ちながら、その手の路地裏でしゃがみこむことしか出来なかった自分を心にしみる温かさと共に立ち上がらせた大好きなその手。

至高の宝石に魅入られた様にその手に自らの手を伸ばそう「リーダーあああ!!!」として直ぐに引つ込めた。

「……まずは、落ち着け」

血相を変えてこちらに走ってきたのはリンダと同じマジエコンヌメンバーの一人だった。

着ていて服は鎌鼬でも襲われたように浅い傷跡が量産され、爆風にでも巻き込まれたように砂煙を全身に被っていた。あまりの無残な姿を前にレイスも正気に戻り、前に膝に手を付け荒々しく呼吸を繰り返す男の背中を優しく摩り落ち着かせた。

暫くして、漸く息を落ち着かせた男性は恐ろしい者を見たように肩を震わせて顔色を

青くしながら口を開く。

「バ、バケモノが、工場を襲ってきたんだ。みんな喰われて……うええええ!!」

「うわあ!こいつ吐きやがった」

「一般的な感性の持ち主でリアルの人間捕食シーンを見たら普通はこうなるだろ」

吐瀉物が地面にぶちまけられる。

その生々しい臭いに鼻を抑えてリンダは数歩下がった。瞳に大粒の涙を溜めながら壁に向かって青色に染まってガタガタを歯を鳴らす男性。レイスは異臭のする吐瀉物を前にしても動揺一つも見せず壁に手を置き苦しむ男性が落ち着くまで背中を摩り続けた。しばらくすると未だに顔色は悪くは合ったが先ほどと比べて顔色を良くした男性がレイスに頭を下げた。

「……すいません。リーダー」

「気にすんな。それよりも……お前は確かマジエコノ開発工場の警備員だったろ?嫌な物を見たかもしれないが言ってくれ」

路地裏とはいえ、町中で合った為三人はプラネテューヌの誰も近づかない悲壮感が溢れた廃棄された建物に隠れるように入った。どこに教会の耳があるのか故の対処であつた。

昼時とはいえ陽光の入らないスペース故の暗闇の中で、レイスは手を鳴らすと周囲に

炎の球が出現したそれが躍るように周囲を回る。明るくなった中で何年も使われていない埃っぽい机に座った。レイスの指示で隣にはリンダが不機嫌に椅子に座っているが、この男性にはリンダを気にする精神的余裕はなくレイスと同じく椅子に腰を落とすし、頭を抱えながら机に手を置く。その手は現実であり得ない物を見てしまった様に震えていた。

「お、俺も良く分からないです……外回りしていたらい、いきなり工場の中が騒がしくなつて……窓から中を除いたら……!!」

「化物が人間を喰つていたんだ」。歯を鳴らす声音と共にこの世の者とは思えない邪悪な存在を見てしまった様に恐怖が刻まれている。

誰かがモンスター召喚のディスクを誤作動してしまったんじゃないやねえ？とリンダは下らないように頭を掻きながら呟く。恐怖に染まった表情で男性はリンダの問いに対してダンツと机を叩き、男性は飛び上がるように立ち上がった。

「俺も、最初はそう思ってたんだ！だけど、あれはそんなレベルじゃない！」  
「それじゃ、一体なんだ？薬でもやっていんのか？」

三人しかいない空間に響く机の転がる音。

下唇を噛み、黙る男性。

モンスターでもなく、化物だと彼は言っている。

その事にレイスはまずモンスター召喚のディスクが誤作動という事はないだろうと結論を出した。あれはそもそも召喚するだけでモンスターそのものを操作する機能はない。故に建物内では一定の場所に保管するように指示を出している。

誰かが忘れた……なんて話は予想出来るが、男性が警備していたマジエコン開発工場は正直な所、重要度が低い。故に召喚できるモンスターも人を襲うことは出来ても喰らうような凶暴な者は召喚できないように制限を付けていた筈だ。更に言えば、街から離れていたとしても女神の加護の力はそれなりにあり、人間を喰らう様な凶悪なモンスターが警備員の目を盗んで器用に工場の人達だけを襲う点も不可解だ。

「それは一体だったか？」

「あ、ああ……！」

非力な者でもメンバーは成人した男性が主だった。

逃げ惑う事は想像しても、それならばレイスに緊急の連絡の一つや二つは入る筈だ。ならば、最初から呼ばせない事を前提に襲った。それほど知的なモンスターがああの中、近くに居たのか、ギルドの依頼リストを思い出し知的な凶暴なモンスターを記憶の中で探すか、やはりそんなことが出来そうなモンスターは記憶にない。偶然が偶然を読んだ奇跡と言う可能性もあるが、それはあまりに空想染みていた。更に目の前の男性が正気であることすらも考え始める。



「兄貴。まずはその工場に行つて方がいいじゃないのか？ほら、犯人は現場に戻るとかテレビで聞いたことあるぜ」

「一応確認だ。こいつじゃないだろうな」

リンダの提案を横に振るい、レイスは一枚の写真を取り出す。

荒い画質だが、それでも黒いライダーズーツに赤いマフラーを首に巻いている『正義のヒーロー』と名乗っている見た目少年、中身少女の姿に男性は首を何度も振るう。

「そいつは……」

「ま、一応敵かな？なかなか若々しくて元気な女の子だったぜ」

マジエコンヌの活発場所に突如として現れる正義のヒーローに何人の同士が捕まつた事か、人間としてはヒーローの名に恥じないほどには強く。楽しめたなど記憶を掘り越しながら懐に仕舞う。そのおもちゃを見つけた子供のよう輝かせる瞳に『また女……』とレイスに聞こえない様に呟きリンダは目を逸らした。それに気づいたレイスは、どうしたと頭を傾げるが直ぐにリンダはなんでもないと答える。

「それじゃ、そろそろ話は終わりすまん。嫌な事を聞いて」

「い、いえ……仲間は、どうなったんでしょうか？」

「そりゃ、ほ「リンダ」……ごめん」

レイスが居たからこそマジエコンヌに入ったリンダからすれば、マジエコンヌのメン

バー等どうでもいい。故の当たり前で残酷な他人の反応にレイスは怒りはしなかったが、冷たく口を閉じろとした威圧がリンダの頭を殴るように襲って片目を閉じながら謝罪を言葉を口しながら目を逸らした。

「本当に残念だ。冥福を祈るよ……今日はゆっくりを休め」

「……………ありがとうございます」

フードの奥から呟かれる悲しい声に底辺暮らしの俺達をこうも想ってくれているなんて部下思いだと男性は心の底から感謝した。

机から降り、懐からメモ帳を取り出し頭の中で簡単に内容を固めて書き込み、今日はもう帰っていいぞと男性に言い残し、レイスとリンダは扉に向かって歩き出したのを見て、嫌な気分から解放され清々しい表情で男は二人の後を追いかけるように足を踏みだした——その直後、

白と黒の剣閃が男の頭から生えている様に伸びている『それ』を左右から切り裂いた。

「  
」  
抜いた瞬間、動く動作の予兆すら男性の目には映らなかった。

ただ漆黒の風が自分を通りすがっただけ、それだけしか感じられなかった男性は糸の

切れた人形のように倒れた。遅れてリンダが反応して振り向くと倒れている男性の中心に糸のような物が散っているのは見えた。

「あ、兄貴……？」

「精神仮縫い————か。オマケに生命繊維を魔術兵装を組み込み周囲と色を同期化している。ま、俺はごまかせられなかったけどな」

顕現した二つの双大剣を戻し、レイスが地面に落ちた血管のように赤い糸を指さすと空間を照らしていた一つの火弾が喰らうように倒れた男性の中心に散らばっている赤い糸を？み込んで焼いていく。更に男性の頭からミミズのように這い出ている赤い糸を強引に抜き取り、男性を担ぎ、未だに啞然としているリンダの肩を叩く。

「大丈夫か？」

「……なにがどうなったのか全く分からないけど、もしかしてそいつは操られていた……？」

「大正解。このまま基地に連れて行けばこっちの情報操っている本人に情報が筒抜けになっちゃう、こんなところ人気のない場所ですら逆にあっちの情報を引き出してやろうと思っただけど、面倒になったから辞めた」

「何気に凄い事をしたのか分かったけれど、兄貴……、面倒はダメでしょ……」

「はははは、ダメだダメ。会話中に陽動尋問を考えていたけどいいの思いつかなかった

し、こっちの情報もあっちの情報も何もなし、これぞWin—Winな関係」  
「意味と使い所が全然違うけど兄貴」

相変わらず飄々として掴み所のない人だと思いながら、敵に回したらこれ以上に恐ろしい相手はいないだと同時に感じつつ、徐に差し出された手に反射的に自らの手を重ねてしまい、基地に帰るまでリングの様に顔を真っ赤にしたリンダの姿が見れたとか。

## 当然

白い雲が蒼い空の中を泳いでいく。どこまでも続く蒼穹の下、大地を踏みしめながら彼女達は漸く目的地に到着した。早朝出発したこともあり、白く輝く太陽は空の天辺へ登っていた。鬱陶しい陽光に腕で隠しながら、進むと目的地である街が漸く姿を現し、視界いっぱい広がる。

重厚なる黒の大地『ラストイション』。この国の特徴としてはまずサブカルチャーであることだろう。様々な技術や文化を取り込み独自に発展を遂げていく多様性。ライバルであるプラネテューヌを打倒という女神自身の目的もあり、様々な物を吸収して重厚に重ねていく。未だに発展中であり、黒煙を吐きだす工場が幾つも並んでいるのが遠くからでもよく見えている。

「——ようやく、帰ってこれたわ」

三年ぶりの故郷の風景に嬉しそうに口元を緩ませた。

さっぱりと言うほどでもないが、あの黒鋼の街は最後にここから旅立った時と比べて明らかな変化があった。三年と言う短い時間ではあったが、マジエコンヌによる混乱も含めて更に発展は進んでいるように見える。

「ラストイシヨンに來たのは久しぶりです」

「貴方達、三年間ずっと眠っていたから軽い浦島太郎状態ね」

「早速、ラストイシヨンのゲームキャラさんを探すです。えと、教祖様に話を聞けばいいんですよね？」

三人は頷いた。あれ？とユニとネプギアは異常に気付いて周囲を見渡すが、空の姿はない。ここまで来るのにずっと一緒に居たはずだだと思いだしながら頭に疑問を浮かべると、語ったようにアイエフとコンパはため息を吐いた。

「あいつ極度の人間嫌いなのよ……」

空自身から語られていないが、紅夜から想像も混じった過去とその悲劇を知っている二人は複雑な顔をした。よつぼどのことがない限り、空は人の集まる場所なんて絶対に行かないだろう。知っている身からすれば、憎む相手が間違っていると言うべきか、どうしてそう広すぎる定義で考えるのか理解し難いが、それを本人に言ってもアイエフやコンパは人間であるが故に空は絶対に耳を貸さないだろう。女神も人間に信仰される立場からすれば理解は難しい。

「人間嫌い……って、お姉ちゃんから軽く聞いているけど……」

「本当の話なんですか？」

人間達が女神を殺し、世界が滅んだ話。そんなこと、ありえないと信じているネプギ

ア達だがアイエフ達もどう答えたら良いのか頭を抱えた。紅夜曰くの話で、ありえない！と唱えた女神が詳しい事を聞こうとしたが、その日行方不明となり、次の日に何故か自分の部屋で眠らされていたことから、この話題は彼女たちの間では地雷と認定されている。もし本当の話と考えるのなら初恋の人を無様に殺されてしまった空の憎悪と懺悔は想像もつかない果てない物であることは想像がつく。だからと言って、たった一人の女神を生み出す為に全てを殺そうとしたやり方を認めてはいけないものである。

「私達もそれが本当にあつたことか調べようがないのよ。イストワール様の記録されるもつと昔、原初と言われる最初のゲームギョウ界の歴史は空しか覚えていないし、見ていない。人が女神を殺す……そんな時代なんて想像も出来ないけれども、一つだけはっきりと言えることがあるわ」

「……あいちちゃん」

アイエフは分かっている。空の興味を引いたのは結局の所レイス・グレイブハードと名乗っている彼しかない。

そして女神達、自分たちの相手は犯罪神であり空は特性は恐らく全て把握している。何故なら、一度空が奴を倒しているからだ。それでも蘇っているという事は滅びても幾らでも戻ることが出来る厄介な特性を持っている。

根本は違っているが空もゲームギョウ界の守護者と言ってもいい経歴がある故に犯

罪神をわざと逃がす様な事は絶対にしない。

しかし、空自身はどんなに樺つてもその先に滅びがあると語っている。かと言ってそれを全部受け入れることは絶対にはいけない事で、今は女神とマジエコノヌはシェア率での争い、旧き支配者と新たに生まれようとしている支配者が変わろうとしているだけの戦いに集中すべきだろう。

ゲームギョウ界という形を守護しようとしている空からすれば、この二つの戦力争い等気にする要因には入らない。

——そう、空からすれば最悪ゲームギョウ界の形さえ残っていれば、住んでいる生物はどうなってもいいのだ。

同じものを見ている様で全く別の物を見ている女神と空にアイエフは語り始める。

「貴方達、守護女神と破壊神は相容れぬ存在と思っていた方がいいわ。言葉は通じる、こつちの思いにも理解もある。だけど、それだけなのよ。仲間じゃなく、ただ協力するだけの関係。有象無象の人間より、変えの効きづらい女神だからこそ多少気にかけてくれている。——そういう奴なのよ。あの傲慢なのか謙虚なのか分かりづらい夜天空って人物像は」



「……仲良くは出来ないのですか？」

「結局、ねぶねぶ……女神達に色々教えてくれたんですが、あれは教師と生徒みたいな壁のある付き合いです」

アイエフやコンパが最初に空に会った時は感情を押し殺した無表情だった。助けてくれた事も合ったが、あれは紅夜の精神状態を気にしての救助であって、自分たちは都合のいい道具程度の認識なのだろう。今もそうかもしれない。ネプギアやユニのモチベーションを保ち続ける為に必要であり、もし危なくなったら命ぐらいは助けよう——

「そんな思いなのかもしれない。勿論、もしもの場合は女神優先だろうだが。——（空が人間を忌み嫌いの、レインボハートの事件だけじゃない。もつと、別の事もあ

るでしょうけど……）」

それを聞いてしまえば、明日自分の肉体と魂魄が無事である確信がない。仕事仲間と考えた方がいい。お互いにプライバシーに関与するほどの仲ではない近づく必要性は無い。頬を舐める様な重たい風を感じながらそう説明するアイエフは、今度コンパに胃薬を作ってもらおうと突き刺さる様な痛みがする胃痛に冷や汗を掻いた。

ラストেশヨンの街並みを一面でできる丘から降りて、四人はラストেশヨンの教会を目指して移動し始める。発展して変わった街の景色に目を輝かせる二人の女神候補生をコンパに任せて、遠目で周囲を確認すればビルの屋上で座っている白い影が見せる。

十中八九空だろうと考え、一同はラストेशन教会に訪ねた。

「ようこそいらつしやいました。こちらラストेशन……え？ユニ、様？」

業務スマイルを浮かべ、頭を下げながら、お決まりのセリフを並べて教会の来訪した五人の姿を瞳に映して、若い受付嬢は目を丸くした。

「久しぶりね。早速だけどケイはいるかしら？」

「——は、はひい！今すぐお呼び出します!!」

思考より先に腕が動いた。

幾度もなく押したコール番号を押すその手が震えた。

いつの間にか後ろで何食わぬ顔で立っていた空にネプギア達は驚きながら数分後、教祖は実務中とのことで事務室に教会関係者が案内してくれることになった。

明らかに緊張している先導者の背中を見ながら、世間から隠されているが女神行方不明という事は教会側は理解しているからこそ、いきなり帰ってこれれば動揺の一つや二つは当然だろうと考えながら同時に予想以上に騒がれなかったのは、イストワールが予めラストेशनに連絡していたからであろう。

「ねえ、ちよつと聞きたいことがあるのだからいいかしら？」

「は、はい！どうしたのでしょうか？」

人物像を未だに把握できていない上司が突然声を掛けられたようにビクツと肩を震

えさせ、案内役の男性は振り返る。いい歳をした大人が中学生くらいの女性に腰を低くするのは聊か不気味だが、相手が女神となればそれは例外である。目の前の少女はそこらの業界を締める様な代表取締役の娘の様なご令嬢でもない、この国を治める人の形をした守護の神、その妹なのだから。

「私……私達がいなくなつてラストেশションのマジエコノムによる支配つてどうなの？」  
「そ、それは……」

言葉を汚した男性の反応からしてかなり不味い所にあるというのは察しつく。

最もそれを理解しているのはアイエフと空だけであり、無礼がないようにどう穏便な言葉を使って伝えるのか冷や汗を流しながら内心頭を抱えている男性が憐れに思えた。

「空。ちよつとお願ひ」

「……りよーかい」

お互いだけに聞こえる程の口調で怪訝な顔つきに変わつていくコンパ、ネプギア、ユニを見て空はため息交じりに頭を掻いた。トンツ、とユニの肩に手を置くと当然のようにユニは空の方へ振り向くその隙にアイエフは一步前に足を進ませ男性に話を伺う。先ほどの会話とは全く別の話だ。

「ねえ、この教祖つてあんまりいい評判を聞かないんだけど実際の所、どうなの？」

「ええつと……神宮寺教祖の事ですか？」

「そう、聞く所にいるとかかなりの合理主義者じゃない」

聞けば裏でマジエコノムと取引しているとか。その小さな言葉に男性は大きく目を空けて黙り込んだ。

話しの途中に意識を逸らされ、刃の様に鋭い目つきでユニは睨むが、空からすれば可愛い獣が必死で警戒しているような姿に鼻で笑いそうになる。

「…何よ、空」

「下っ端に状況を行くな、そんな簡単な事は神宮寺教祖トッに聞け、聞く相手が間違っている」

「……………」

「分からない顔をしているなら説明するよ。組織というのは強固な上下関係で成り立っているからこそ安泰している。しかし、君はイレギュラーなんだよ。この国の女神の妹、ブラックハートの後継者であるブラックシスターその肩書きだけで、君自身何もなくても周囲に大きな影響を及ぼす。もう少し、自分の立場と発言の意味を考えて」

肩書きという言葉にぎりつと歯を鳴らす、そんなことは自分が一番分かっている。

胸から沸き立った怒りを深呼吸と共に静めさせた。その反応に空は背伸びした子供の成長を喜ぶようにユニの頭を何回か優しく叩き、それに頬を膨らませて睨まれる姿に可愛い可愛いと声に出さないように笑った。

しかし、ユニの問いは最悪としか言いようがない。何故なら女神は行方不明とされているこの時に候補生だけ帰って、しかも国の現状も理解できていないとなれば、少し頭が回る者であるのなら、直ぐに女神がどういう状況は推測することが可能だろう。アイエフと話をしている男の様に。

「貴方がたはこの国をどうしようとしているのですか。今更女神が来た所で……」

「大丈夫——なんてお決まりの事を言うつもりはないけど、見てなさい。あの娘たちはきつとやつてくれるわ」

女神の栄光しか見た事しかない男性は、唇を歪ませてアイエフから目を逸らした。まるで信じる者を信じれないようにその足先は速くなり、元から近かったこともあり直ぐに目的地に到着した。何も変哲もない扉を前に男性は感謝の言葉を言う前に颯爽とこの場から立ち去った。

「（どう見る？）」

「（どうして救いが無い——女神に裏切られた思いとそれでもマジエコンヌが邪教と知っているから認めらず、自分の信じる柱がなくて拗ねている残念な大人、よくいる悔しいけど静観に回るタイプ、危機はほぼゼロだね）」

仕方がないとアイエフは内心愚痴った。彼だって、信じたいだろうが、その結果は出るはずがない。何か女神様にしたいたいと思ってもその手じゃ何も出来ない事に、そしてな

により一歩踏み出す勇氣すら彼にはないだろう。

その様子を察している空の視線の先には二人の女神候補生。

「崇める暇があれば、自分の力で解決しよう、なんてことは考えられないんだね」

「それは、貴方や紅夜のようなある一定の力が持つ強者の思想よ」

それはそうだねと空は遠くなっていく男の背中を見ながら返した。

緊張しているネプギア達はその場で立ちつくし、久しぶりの再会に胸を膨らませているユニは代表して扉を開いた。

## 国益

風が窓の隙間を入り込むような感觸と共に精神連結が強制的に解除され、同時に激流にも似た情報が一気に頭の中に流れ込む。精神操作した持ち主の思考感情を元に作り出したプログラムは朽ちた木枝のように折れている。既に木偶人形を操る糸は断たれ修復は不可能。

何が起きた。その言葉は内心に眩かれ、常人なら途端に襲い掛かった情報の波に頭を抱え転がるほどの激痛が襲いかかるが顔色一つ変えず米神が一つも揺るぐことはない。だがその内心は動揺が激しく渦巻いていた。

生命纖維と呼ばれるこの世界にはいない生物。見えないほどの細い糸状の寄生虫のような生き物であり、他の生物の精神電流を食料としている。問題と言えばその体内に大量の生命エネルギーを含んでおり、生物によるが体内に入り込んでしまえば、寄生された側がそのエネルギーに耐え切れず死ぬという事がある。生命纖維は宇宙彷徨う者であり、空が偶然見つけた物であり、その生命エネルギーに目を付け人工飼育場を作り暇があればその生命纖維を使って服を編んでいる。

話を戻して、人間ではなくある一種の集合体である空は生命纖維と精神接続所か、

肉体接続すら可能で、生命繊維が感じた情報をダイレクトに情報管理触媒と繋ぐことで生命繊維で相手の脳を巧みに縛り、洗脳する精神仮縫いをした対象の五感と同化するこ  
とが出来るのだ。それ故に空には全てが見えてしまった。鎖で縛りつけたはずの記憶  
がレイス・グレイブハードの声と姿を前にはあつさりとは崩壊してしまった。

希望と絶望が激しく火花を散らしながら交差した。目の前では中性的な顔つきをし  
た神宮寺ケイとユニが再会を喜んでいたが、そんなことは耳にも届かない瞳に映らな  
い。表面的には無表情に微かに影が差した程度の様子で、この場の誰もが空の異変に気  
づくことはない。

そうしている間にも自己紹介を済ませ、本題に移るように空気を変えるためにわざと  
らしく咳をついたケイは静かに口を開く。

「プラネテューヌの女神候補生が来たという事は、ゲームキャラの情報を聞きに来訪し  
てきたということ……そうだよね？」

「はい、古のゲームキャラはマジエコンヌから目を離す為に教祖のみに居場所を教える  
ように、といーすんさんから聞いていますけど」

「確かにこのラストイションのゲームキャラから通達が送られてきたね。さて、申し訳  
ないのだけでも君達の期待する情報を教えることは出来ないね」

淡々と紙に書かれた文字を読むように聞かされる言葉にネプギア達は表情が疑問に



歪む。

「……………どういふ事？」

「薄々気づいているだろうけど、いまゲイムギョウ界の支配者は変わろうとしている。モンスターという脅威を撃ち滅ぼす守護女神と人々に混乱と娯楽をまき散らす犯罪組織マジエコヌ。確かに後者は厄介極まりない、言い方を変えればただのゴロツキの塊で、弱い者は強い者に入り込む様な実力主義組織」

「だ、だからこそマジエコヌに対抗するために、お姉ちゃんを助けるために……」

「ビジネスにとって一番大切な要素はなんだと思う？」

ネプギアの言葉を切り裂く様に呟かれた言葉が止まった。

どうしてそこでビジネスという単語が出てくるのか理解できなく頭を傾げる二人に對して、アイエフは察した様に難しい顔をして空は目の前の結論を出してしまった真実に動揺をして、反応は薄い。謎に困った二人を付き合いの長い故にユニは助け船を出す。

「——『信用』よね」

「正解」

呆れた様に怒っているように呟かれた言葉に一言、ケイは頷いた。

「どういふ事ですか？」

「プラネテューヌ諜報部の所属のアイエフさんはご存じかも知れないが、僕はマジエコンヌの一部の者と取引している。対等にね」

その場の空気が凍った。時間が止まったように、誰も口を開かず時計の音が何度か耳に届いたところで爆発した様にユニは修羅の如き表情でケイに掴みかかった。

「一瞬、私の耳が腐ったと思つたわよ……どういう事よ!？」

「ゲームキャラの力、つまり加護が失われれば女神無きこの街はモンスターにとつて格好の獲物だ。そしてマジエコンヌの一部の者は交通手段等に困つた我々の為にモンスターを狩ってくれているのさ」

「そんな、そんなの……自分から降伏って言っているようなものじゃない!!」

「そうです!今からでも遅くはありません……マジエコンヌとは手を切ってください!」

「いや、そのの教祖をしていることはある意味で最善の選択だよ」

血相を変えるネプギア達を止めたのは先ほどまで黙っていた空。ケイに掴みかかっているユニを引き離したのはアイエフだ。

「まずは現状を把握しようか、女神無きこの街には当然の如く女神の守護の力は失う一方だ。その代わりをゲームキャラが抑えているけど、それは大陸全体の安全を確保するほどの絶対的な力はない。そうなると貿易路や情報網等にダメージを受け、徐々に経済

的に苦しくなる。それを打開する為にマジエコノムを使う、そのの教祖が言った様に所詮ゴロツキの集まり、だけどゲームギョウ界では一般化している組織を使えば国民の多数は納得するよ。ま、隠しているとは思うけどね」

「……あまり言いたくはないけど、現実的に考えれば凄く楽なのよね。下手にラストイションの軍を動かせば街の守護の手薄にもなるし、さつき私も知ったんだけどマジエコノムの一部と取引しているという事は、少なくとも明け渡したわけではない。そして、教祖が信用に値する者と取引しているのよね?」

「——レイス・グレイブハード、僕が取引している唯一の男さ」

全員がその名前に緊張感が一気に高まった。

「彼はモンスター討伐を部下と共に良く引く受けてくれたよ。ゲームキャラの力も流石に田舎の様な遠方だと届き辛くてね。女神不在の今までかなり助けになってくれた。あちらは組織としての運営費確保、こちらは国民の生活を守ることが出来る。いい関係だと思わないかい?」

「で、でも!そんなことをしたらマジエコノムの流通は?」

「勿論、その点はお互いに規制する相手と破る相手なのは変わりないさ」

様は見えない場所なら売買していいということだ。だがそれは、女神をノワールを裏切る行動であることは明白であり、震える程に握りしめた拳が今にもケイに飛んでいき

そんな導火線に火が付いたこの状況。女神の本来の役目である国民を守る事、それ自体は確かに行えている。時には敵すら媚を売らなければならぬ。それを分かっている上でそう判断して屈辱を飲んだこの選択、政治的に見れば明らかな敗北した国。だが、国民の生活を第一に考えればむしろ理想的だと言つてもいい。

だが、所詮信用に値する人物は少数しかいないマジエコヌメンバーとラストイションの教会との異物な関係。そこに切り込みを入れることは、実は簡単な事だ。漸く復活した空は正氣に戻り、ひそつりと要点だけアイエフとコンパから聞くとネプギアとユニを呼んだ。

「女神の価値を今一度考えてね。二人とも」

「……………え？」

「どういう意味よ？空」

「そのままだよ」

指で頭をとんとんと叩くその仕草に不思議と幾分か落ち着いて考え始める。

自分たちは女神であること。その強みは？

ラストイションにおける状況をどうすれば改善できるのか。その方法は？

どうしてマジエコヌと手を結ばないといけない程まで追い詰められている。その

理由は？

「……あ」

「……………ねえ、ケイ」

「なんだい」

そして二人はとても簡単な事に気づいた。

「もしもの話を聞いてくれる?」

「——ああ、いいとも」

嬉しさを隠すように、成長を喜ぶ優しげな瞳でケイは頷いた。

「私達は女神候補生。つまりシエアを回収することが出来る」

「ふむ、一般的常識だね」

「え、えーと。ラストイシヨンの問題は増えているモンスター討伐、それを私達は補つて」

「マジエコンヌとの関わらなくていいように事態を戻す。そうしていけばマジエコンヌを信用するより、私達を信用した方がコストは楽でしょ?」

「ふむ、しかし君達が欲しいのはゲームキャラだ。そしてゲームキャラの力が弱まればいくら君達がモンスターの数を減らしても結局状況は変わらない」

ユニはネプギアと視線を合わせた。

そしてネプギアは察した様に少しだけ寂しそうに頷いた。

「ケイ。貴方の目の前いるのはラストেশヨンの女神候補生よ。少しぐらいゲームキャラの力が弱った所で私が戻った時点で全てノープロブレムよ」

「……ふむ、それでこの国を守るのかい？」

「明日に全てを変えるなんて、無理は分かっているわ。ネプギアが国を回ってゲームキャラを回収、その間に私はここでシエアを回復させて力を貯める。そして時が来ればギョウカイ墓場に戻り込む……どうこの華麗なシナリオ」

「分かっているとと思うけど。それに僕が賛成するだけでも？」

「お姉ちゃんを信用していた貴方だから、私も貴方に同じくらいにそれ以上に信用できるようにするわ」

ケイは暫く黙った。

明日から全ては元通りになる都合のいいことは無い。

だが、このままだとマジエコンヌに世界を支配されるのも時間の問題。そうなれば今の様な生活は難しくなり、暴動や戦争などの混沌とした時代が続く可能性すらあり得る。マジエコンヌとしてはゲームキャラは不要な存在として今まだ誠実したお付き合いをしてきたレイスもいつ牙を剥くか分からない。だからと言って、目の前の二人の女神候補生の危ない橋を国民の生活を抱えて共に歩き出すのもデメリットが大きすぎる。故に

「信用を勝ち取りたいのなら、まず依頼を受けてもらおう」

ああ、何度見ただろうとお決まりのイベントに目を細める空に対してケイは二枚の依頼書を取り出して机に置いた。

「宝玉と血晶、この二つを回収してほしい」

その希少価値は極めて高い二つの素材に憤慨するアイエフも見慣れた様子で空は徐々に青い空を見つめた。

「(もしレイスが彼ならば……、彼女がこの世界に来襲してくる。……このままただの協力者じゃダメかもしれない……な)」

過去を思い出し、改めて自らの犯した愚かさに空は憂鬱にため息を吐いた。

## 白闇

くらくてあかいやみのなか。

ひとりくるってわらうばけものなしようじよ。

なみだをながしてそのてにだいたあたまをなでる。

こわれたせかいのなかでまじんはこどくにわらいつづける。

ぜつぼうしたひとみでうつるけしきはち、ち、ちがひろがるうみのなか。

このあくむをおわらしてこのやみよがはれるそのときを。

ずっと、ずっと、まっている。



目が覚めて一番最初に見たのは白い天井だった。

三年ぶりのひと肌の温かみを感じながら安心して睡眠が出来た故なのか、意識が呆然として目の焦点が合わない。



突き刺す様な頭痛。目覚めて直ぐに誰とも知らない負が容赦なく流れ込んでくる。

眉を細めて痛みの所為で一気に覚醒した意識で周囲を見渡す。生活感の感じられない部屋。どこか分からず流れ込んでくる負に耳を傾け、簡単に分析するところが医療施設だと分かる。思い出したのは勝気な少女が自分の手を握って声を掛けてくれたこと。

「デペア、ここはどこだ？」

『プラネテューヌの病室、あの少女達に運ばれたのは覚えてる？』

「……うつすらと」

心の中で居座っている相棒は、紅夜の声に答え右手の甲から体の一部である黒い宝玉が姿を現して光の点滅と共に青年な男の様な低い声が響く。

『調子はどう？』

「街の中だから負の声が多くて大きくさつきから頭がガンガンする……」

少なくともここより更に負が濃い冥獄界と比べれば精神的にはいくらかは楽だと感じてゐる。

片言から普通に話せている時点で今の所は正常だと言えるだろうとデペアはとりあえず、と安心することが出来た。としても、あまり長居すれば紅夜の精神に大きく負担が掛かるので出来るだけ早くここが出るべきだろう。

「……なあ、デペア」

『どうした？あの娘たちと別れあつちの世界で三年間ずっと戦つて、久しぶり寝れて気持ちのいい夢でも見れた？』

「夢……ああ、あれは夢なんだろう」

血と屍が浮かぶ海の真ん中でブラッディハードのプロセッサユニットを身に纏い、首から下が無い頭を抱き締め撫でる少女の姿。

壊れた顔で狂気に笑う魔神。

全てに絶望して、残つたのは膨大なる力のみ。

故に自身の破滅を女神に縋るように祈り続ける哀然の夢。

「……あんな結末は嫌だな……」

『何を見たのかは知らないけど、後悔だけはするなよ』

「後悔なんてしないむしろ……幸せだ。人が死ぬために生きるように、俺もあいつらの為に殺されるんだ」

ただそれだけの事。

この青空の向こうで囚われている女神を救うことが役目。

巻かれた包帯の手を見ながら諦めて様な自虐した声でそう呟く。

『（もう悟つたように言いやがって）……これからどうする？』

「どうするって……ギョウカイ墓場に特攻だろう？」

『おい、お前はバカか？ああバカなんだろう？ごめんねバカ!!』  
「……流石に傷つくぞ」

元より死なない体なのだ。

冥獄界で無限に生まれるモンスターの相手をずっとしていた。  
頭が切り落とされるなんて事は日常茶飯事だった。

不老不死のこの体を使えば敗北はない。この意志さえあれば永遠と戦い続け、いつか勝利することが可能のはずだ。

「もう一度、あの男と対峙しても問題ない。今度はどんな事をしてきても倒せる」

『あの男って……無理無理無理!!あいつ破壊神並のチートがあるよ!?しかも今の紅夜じゃ勝ってもダメだし負けてもダメだ!』

「……そういえば、お前アイツのこと知っているんだよな」

『——ギクツ!?!』

実に分かりやすいリアクションをありがとう。と内心呟く。

「相棒、お前は何かを隠しているな」

『あ、いや、そのお……(やべえ、いまあの人の事を喋ったら何もかもが台無しだ!というか紅夜も一度会っているよ!?やっぱり女神と取り巻き以外の記憶はぐしゃぐしゃになってるか!?!)』

もし体がそこにあれば全身に冷や汗を掻いていただろうデペアはその頭で何か他の話題を出す為に必死に記憶をひねり出す。

兄を想う弟を裏切るわけにはいかず、あたふたとしているデペアを目を鋭くして睨み紅夜。そんな二人の空気を壊すようにドアが慎ましく叩かれた。

『あーお客さんだよ！紅夜!!』ということで僕は引つ込むね!!』

「おい……何を隠していやがる。空いている」

紅夜の声に暫くして扉が空けられた。

入ってきたのは、一人は十歳にも満たしていない幼女だった。

記憶の中で最も強いと思っている存在と重なる様に似た服装で、孤立感を醸し出す真白色のコートを身に纏い、腰まで伸びた色素の感じない髪。青空の様な澄んだ瞳で、まだ一桁にも満たしていない感情の薄い幼い容姿。まるで童話で描かれる少女のような神秘的な雰囲気な佇まいに上半身を起こしていた紅夜は身に覚えのない少女に対して頭を傾げる。

「……部屋、間違っていないか。俺は君みたいな少女を知らな、い」

どこに出しても可笑しくない美少女。だが、記憶の中を探しても分かるのは初対面だったことだけ。

確認したわけではないが、微かに香る薬の臭いからここは病室であることは想像がつ

く。

だとすれば目の前は少女は誰かの見舞いに来た筈だ。それしか考えられない。不信を抱く紅夜とは対照的に深層心理に引き籠ったデペアは嘘…と呟いて動揺を隠せない震えた声で少女に声を掛けた。

『くうちゃん……なんで、この世界に…?!』

「デペアさん、お久しぶりです……」

ぺこりと上品に頭を下げる名も知らぬ少女。

『アザトースの原初の宇宙に預けられたはずじゃ…?!いや、どうしてこの世界を見つけられたんだ?!』

「ヨグⅡソートスさんの機能を一時的にコピーして…『穴』を片っ端探しまわった…学園の人にも応援を頼んだ…みんな先生の事、心配していたから…」

『……その様子だと【本体】に接触した? ティシフオネは?』

「何も喋ってくれなかったから…見つけたティ姉さんは封印されていたから会話できる状態じゃなかった…また後で行く予定……」

深淵の底にも届きそうな心底安心したため息を吐いた。もしティシフオネが復活していた場合は、それこそ血で血を洗う争いに発展しかねない。あれは子供が無邪気に昆虫の羽を巻るように世界を捻り潰す邪神すら畏怖する存在。蚊帳の外に放り投げされ

た気分の紅夜は、自分には関係ないことなど呑気に結論を出して、ベットに体を落した。デペアと会話するだけなら自身は関係ないと思つたからだ。その様子に少女は語つたように寂しげに眼を細め、震える拳を隠して紅夜に背を向ける形でベットに腰を下ろした。

「私は、空亡……だよ」

「……俺は零崎 紅夜だ」

『(……うわあ)』

事情を知っている身のデペアは非常に胃がギリギリと鳴る構図だった。

「二ついいか？……君は俺が生まれる前の紅夜と知り合いか」

びくつと空亡と名乗つた肩を震わせた。

どうしてだろうと紅夜はその様子に不思議な思いを抱く。

彼女を慰めないといけない。そんな、父性のような感覚があるのだ。決して寂しからせていけないと決して泣かせていけないと、体が魂に語りかけているような理屈では説明できない衝動に混乱する。

「——うん、とても大切な人……」

「万感の思いを抑え込んだ苦し紛れの声にデペアの胃が更に軋む。早く帰つて欲しいという気持ちとこのまま情緒不安定の状態を外に出したくない左右に揺れる想いの天

秤。

「そうか、ごめん……」

「どうして、謝るの……?」

「今の俺には君との思い出とか一切ない。どんな関係だったのか、どんな出会いだったのか、何一つ……」

既知感があつても、それは霧のようで掴めないただ見つめる事しか出来ない。

故に干渉できないのだ。目の前の少女の寂しげに肩に手を置く簡単なことが出来ない無力な包帯で隠された穢れた腕しかない。

権利などない。この空間の中では紅夜と空亡という関係は後者が一方的に知っているだけで二人の関係は他人に近いのだから。

「——死んだんだ。私の知っている人は」

『くうちゃん……!!』

デペアの静止の言葉は届かず、空亡と名乗った少女は颯爽と紅夜に背を向けて部屋を後にする。紅夜はただ静かに天井を見つめていた。その様子に怒りに燃えるデペアの声が大きく木霊する。

『このバカ野郎が!!!』

「あつち俺は知っている。俺はあの娘の事を何一つ知らない。知ったかぶりは墓穴を掘るし、下手に干渉すれば傷つくのはあの娘だ……。もう会いたくないな」

『それでも……。それも……。!!』

例え血という誰もが頷くような確かな印がなくても、確かに繋がっている絆はそこに合ったんだ。

時に喧嘩もして、直ぐに仲良くなつて、温かな場所で宝石の様な輝いていた日常は空亡がもつとも大切にしていた場所だった。

それは木端微塵に破壊された。空亡を姉と慕っていたとある少女の誘拐事件が全てを変え、誰もが傷つき、その終末は殺戮で終わり、後に今まで通りの日常に帰れる訳なく最後には精神的に鬱となっていた空は操られ、破壊神として彼の精神を破壊した。あれは相談一つで解決できたかもしれないすれ違ひだったかもしれない。だが、現実としてあの日常は欠片が散らばり原型はもう残っていない。一番大切な中央の欠片はそれを一番大切した者が誰も見つかからないように隠してしまつたからだ。

『(……畜生が!!)』

嘗て、死の天使と恐れられた墮天使のドラゴンはない空間に自身の腕を叩きつけた。楽園を守護する為のその力程度では、何も出来やしない。盟約によりこの居場所を許され、外の様子をただ眺める事しか出来ていない。



この紅夜は最早生きた死体だ。あの怨嗟と憎悪の世界で殺し、殺される事を定めときれ受け止める人柱となっていたのに不完全の形でここに戻ってきてしまったのだ。

『(キャプテンと連絡が取れれば……!)』

結局、他人の力に頼ることしか出来ない自分に嫌悪感を抱きながらデペアは祈るしか出来ることは無かった。



ラストイシヨンの街の一角は不自然なくらい静かになっていた。

流れる川のような群れを作り出している人間に差し込む刃の様な美しく恐ろしい女性。

誰もが無意識に彼女の行方を避けていたのだ。かつかつと下駄特有の木と地面の接触音はその場にいる全ての生物への脅迫であった。

『気に障ることをしたら殺す』そう語っている訳ではない。そう意識しているだけで周囲の生物は最初に刻まれた防衛本能が自動的に彼女に対して最適された行動を取るのだ。故に誰一人として彼女に振り向くこともなければ、誰一人として彼女を認識するこ



「きひひひひひひひひひひ」

狂気を孕んだ卵は、今か今かと誕生のその時を待っていた。

## 血舞

ラスティシヨン教会に赴いたネプギア達は教祖、神宮寺ケイとの平等な取引を飲み、五人は教会を後にしていた。未だに時刻は昼ごろであり多くの人が川を造るよう流れている。アイエフ達は邪魔にならないように近くの公園に移動して情報整理を行っていた。

「あいつ、情報通り評判が良くないのは納得だわ。結局、血晶と宝玉を取ってこないアイテムキャラの情報を見せてくれそうにないわね」

「あいちゃん、その血晶と宝玉がどこにあるか分かりますか？」

「この二つは市場でも滅多に出回らない超レアアイテムよ。どこで取れるか、なんて分かった物じゃないわよ」

「私も聞いた事があるけれど見た事はないわ」

プラネテューヌの諜報部としての情報網路を使い忙しく携帯電話を操作しているが表情から察するにあまりいい情報がない事に舌打ちをしながら空を見た。なにせ目の前の人物は、ゲームギョウ界にモンスターという概念を作り出した張本人なのだから。視線の先には木の陰で呆然と青い空を見つめて佇んでいる浮世離れた姿に開いた口

から声は出なかった。

「それじゃ、まずそこから調べないとダメなんですね。……空さん？」

「……ん…何？」

「宝玉と血晶の事、知りませんか？空さんなら知っているとと思うんですけど」

「…知らない」

嘘だなとアイエフは思い、同時に隠す必要がある事かと推測する。

恐らく見てきた未来の中では“ネプギア達を成長させる”イベントか、それとも“新しい仲間の加入”イベントかそれとも予期せぬイベントがあるのか予測はいくらでも思いつくが、少なくとも空自身の性格を考えた時に突然死地に送るほど冷徹でもあっても、残酷ではない。

出来ると出来ないの境界線の上でギリギリ出来ない事を言って成長させるのが彼のやり方だ。

「……なんだか、会社をクビにされた怒りより無気力感が勝って黄昏ているサラリーマンの様よ」

「……ははは、そっちの方がまだ救いがあるかもね」

「そ、相談くらい聞くですよ？」

空は何も言わなかった。

この問題がもし正解だと仮定すれば、ただ謝ればいい簡単な話だ。

どんな罵倒が飛んできてもそれは仕方がないと？み込めばいい話だ。

剣を振り下ろされるなら両手を広げて受け入れよう。

殺されても仕方がない受け入れるしかない。

それだけの事をしたのだから。

「……罪を犯し、罰が下される。当たり前前の事だよね——ティシフオネ」

その金色の瞳に宿る闇の視線の先には。

「きひひひひひひ——見つけましたわあ…破壊神」

「——なに、あれ……」

耳に残る甘ったるい声に全員が振り向いた。闇を体現したような女性が薔薇が咲く様に笑っていた。その手には大きく湾曲された死神が持つ様な巨大な鎌を持って。

空を除いてネプギア達は第一に抱いたのは恐怖だった。

蛇に睨まれた蛙どころのレベルではなく、邪神が死地を彷徨う人間を玩具として見つけた様に体中を駆け巡る悪寒。決して逃げられない絶対的な死が微笑む。生まれたばかりの小鹿のように震える体は一切の行動を不可能にする。幾らシエア落ち、弱体化している女神候補生でも例外では無く、一目だけでその存在との差は次元が違うレベルだと本能が訴える。

「あら？ あらあらあら、私を視て正気を保てていられるとは全く破壊神も腰が軽い事ですわね」

「……どうして、ここに……？」

「それは貴方が仰いますか？ ご主人様を壊して逃げた貴方が」

刃の様に尖った瞳が突き刺すように睨んだ。常人であるのなら発狂するほどの濃密な殺気。あまりの感情の放出に周囲の空気は一気に下がり周囲の生き物は一切に逃げ出し、公園に観賞用の植物などはその殺気に命がまるで吸い取られるように急激な速さで枯れ始めた。その場だけはまるでゴーストタウンのような過疎化して、残ったのは

殺伐とした空間だけ。

「……僕を裁きに来たのか？」

「ええ、その通りですわ」

遂に来たんだと空は微かに微笑みネプギア達の前に出た。

彼女が誰なのか、空とどういう関係なのか、理解できない。

ただこれだけは誰もが分かった。彼女は空に明確な殺意を抱き、空はそれを受け入れる気であると。

「……ここじゃ要らぬ被害が出る。この娘達は関係ないから別の場所に移動しよう」

「何か勘違いをしているようですね」

「……………」

「貴方を幾ら傷つけても意味はない」壊れた者をまた壊しても意味はないのですわ。だから……」

その瞳に宿る光が自分に向けられた物でないと気づいたその時、咄嗟に空はネプギア達を庇うように手を広げた瞬間、鮮血の花が咲いた。

金縛り状態の四人はそれを見てしまった。弾けた肉片と砕けた白骨、驟雨のように降り注いだ鮮血は服を汚し、宙に舞うように踊る長い金髪は噴水の如く噴き上がった生々しい温血と混じり倒れた【首から上がない】空を中心に広がり血池を作り出した。



そしてニツコリと鮮血と狂気に彩られた蠱惑的な美貌が微笑んだ。

体を停止と命令させていた金縛りが解かれネプギア達の体は漸く自分の意志で動かせる様になるが、全身が恐怖のあまり膝が地面に付く。ぴちゃと背筋が凍る感触が膝から感じる。広がっている血池。ゴミの様に転がっているのは首から上がなくビクビクと痙攣している物。

激流のように押し寄せてきた嘔吐感を抑えられたのか微かに残っていたプライドのお蔭か、どちらにしてもそれは彼女ののように塵に等しく、反応を楽しむように足元にあつた肉片を踏む潰した。

「二人一人丁寧に慎重に血肉へと削る絶叫が破壊神を苦しめる甘味となりますわ。さあ、甘美な絶叫を響かせてくださいまし小雌共。——清く正しく殺して差し上げますわあ」

頬を紅潮させた恍惚とした表情、発情した女の貌だった。

闇夜を思わせる大鎌が持ち上げられる。雲一つない青空の中心で輝く太陽が彼女の笑みをより深くした。

純粋な恐怖が体を支配する。原初に刻まれた生存本能も彼女前では意味をなさない。

逃がさないと彼女は言った。苦しめて殺して、そうして空を苦しめる材料にすると言つたのだ。ネプギア達という材料をどう調理しようと四人の素材の前に想像を胸膨

らませ、最も近くにいた手と膝を地面についているネプギアの顔を持ち上げる。誰もその動きに気づかない最初から影と影が重なっている程の距離だったように。

「——ひっ、い、いやあ……」

脆くて可愛げのある涙で濡れた少女の貌。

これはいい、最も都合のいいのは活発な幼女なのだが、この純粋な顔を穢せば同じようなことが出来る——、そう考えてその瞳を覗き込み闇の彼女は女神という存在を理解して認識した瞬間、熱した熱が唐突に冷められた気分になった。怒りを超えて呆れたと言った方がいい。

「……なんて酷い祈り、生きている価値もない。解放させてあげますわ」

首を掴み苦しみながら持ち上げられる脆い体。

次の瞬間、ネプギアあー!と誰かが叫んだと同時に大鎌の刃がネプギアの胸を貫通した。

「……………」

口に出そうとしたしたのは果たして誰なのか、それとも命乞いの言葉だったのか、ただ彼女にとってはどんな言葉だろうと目の前のネプギアという存在は材料でしかない。と決定した故に最後の言葉は、心の中から出ることは無かった。

「さて——ああ二人もいるのですか。安心しなさい——価値のない物は慈悲深く刺

那に殺してさしあげますわ」

「ネプギアアアアアアアアアアア!!!」

ゴミの様に彼女の手から捨てられるネプギア。

虚ろな目で胸に空いた斬痕から溢れる鮮血。

その横には頭がない空が血の水溜りの中で大の字で沈黙している

それらを全て余すことなく見る事しか出来なかったユニの中にある物がぶつつきとキレた。

その怒りを目の前の恐怖と死すら凌駕した。瞬間的に女神化され、その手には戦車の主砲にも似た身の丈を超える黒銀の巨大な銃が形成され迷いなく引き金が引かれた。元々集まって話し合いをしていた故に距離は近く狙い定める必要はない。感情のままに込められたシエアエネジーの弾丸に彼女は何もしなかった。否、する必要は無かった。

「なんで、…なんでえ!!」

渾身の力を込めて放った魔弾は彼女に触れた瞬間、まるでガラスのように砕け散った。

吠えるユニを道端に転がる小石を見下ろすような視線の彼女は血塗れた鎌を持ち上げて無造作に振るった。

不可視の斬撃、今のレベルでは到底見切る事も出来ないユニは己の無力と悔しさに頬に一滴の涙が流す時間の猶予だけはあった。また一輪、鮮血の華が咲いた。

「——え……」

だが、それはユニではなく首から上を無くした空の手が斬撃を庇っていた。大きく裂傷が走った腕は今にでも千切れておいてしまいそうなまでに皮一つで繋がっている。

「あら、数億人は発狂して殺し合うほどの呪言を込めましたがこんなに早く解除——」  
次の瞬間には彼女の顔に拳が振りり込まれた。

黒い和服を着こなした強く力を込めてしまえば折れてしまいそうな体が高速で走る車に轢かれたように吹き飛び、木々と薙ぎ倒しコンクリートの壁に遠雷のような音が響き、沈黙する。

地面を染めていた鮮血はまるでスライムのように跳ね、空の亡くなった部分に集まり何事も無かったように顔と頭が形成され、穢れない黄金色の髪が伸びる。

「逃げるよー」

髪がまるで触手のように動き、アイエフとコンパの腹部に巻き付き、両手でユニとネプギアを抱え込んでその場から跳躍する。同時に地面が陥没した。

近くに建っていた八階建てのビルを足場にして更に別の建物へ跳ぶ。正に電光石火の速さでラストেশヨンの街を駆け巡る。それは、風を切り裂くような白い閃光。しか

し抱えた四人はまるで膜を纏っているように高速で変わる景色の中で叩きつける風は感じない真空状態に近い状態で安定されていた。

「っ、なんなのよあれ!! いつの間に昼ドラマの時間に突入したのよ!!」

「詳しい事情は後で話す!! アイエフ、僕の右ポケットに手を突っ込め!!」

先ほどの一戦に対してアイエフは吠えるが、空の叫びにまるで頭を殴られたような衝撃と共に背後を視界を送る空にあの闇の様な女性が追ってきているのだろうかと恐怖に心と体を震わせ正気を取り戻し、空の髪で巻かれたアイエフは指示通りにポケットに手を突っ込んだ。掌で握るには少々大きめの物質を握りしめ取り出してみると、そこには嘗て自分たちがギョウカイ墓場で女神達を復活させるために用意した一回り大きいシエアクリスタルだった。

「!? これ……」

「ネプギアの蘇生に使いえ! まだ間に合う!!」

「生き返すことが出来るんですか?! ギアちゃんを!!」

「女神としての義務や責任で死ぬのはいいさ。けど、これは……!」

あまりに酷すぎる。

自分の手で終わらせようとしたときに、あいつは他人を傷つけることで完結しようとした。

「僕の所為だ……！畜生ッ！」

—— 関わるべきではなかった。その後悔するにはあまりに遅すぎた。

なら出来ることは精一杯の被害を軽度にする事、彼女が力を使えばこんな世界あつという間に滅びるなんて赤子の手を捻る程度しかないかだ。ここは街中、大勢の人が生きている場所。ここで争えば間違いなく幾つもの屍が山になるのは【絶対】だ。ならば戦い場所は、ある程度目途が立つ。目的地のビルの屋上にふわりと降りて、四人を下ろした。ネプギア以外に怪我がないことを確認して覚悟を決めた空は、ゆつくりと立ち上がり彼女たち背中を向ける。

「う、うああ、あああああ……」

「ユニちゃん……」

「泣いている暇なんてないわよ！早くネプギアを蘇生させないと——空！」

その場で蹲り友を何も出来ず見殺しにするしか出来なかった己に泣き叫びユニに聖母の様に背中を摩るコンパであったが、アイエフは直ぐにネプギアを抱えた。

「私はあんたの事、何も知らないわ」

「……そうだね。話す気もないし、意味なんてない僕と君達は元々別世界で生きているから」

「仲良くは出来ないのですか……」

「出来るかもしれない……けど、お互いに肩を並べることが絶対は無理だよ」

無造作に何も無い空間に手を伸ばすと一瞬の光と共に金色の十字架が装飾され鎖に縛られた一冊の本が現れた。

「こいつ等は殺させないよ」

「あら？ あらあらあら、それをお使うになるほどにまで……くふふふつふ」

アイエフ達が認知出来ないほどの速さで既に傷一つない彼女が上空に見下ろしている。

砂埃などで汚れているが、その瞳に烈火のごとく憤怒に燃えていた。それとは対等的に空はただ静かで、目を細め——封印されていた力が鎖を破らんと増幅する。

「テイシフォネ。そんなに僕が憎いか、そんなに僕が苦しむ顔が見たいか、そんなに……そんなに——僕が許せないか？」

「私のしたいことはただ一つ、貴方にもう一度あの時を味わってほしいだけですわ」

空体に纏わりついていた赤い鎖が、その書が強引に開かれようと振動するたびにはつきりと可視化し始め、今にも潰れてしまいそうな空気が一段と重くなる。

コンパは空がゼロハートになると思った。シエアクリスタルを消費する代償を払って莫大な戦闘能力を発揮する形態へと変化する気だと。

アイエフは違った。空は何かになるのではない【元に戻るつもり】だと直感した。空

が弱体化していると聞いたことがあるその鎖をいま破っているのだ。ゼロハートとしての世界の管理者ではなく、破壊神としての本来の力が今解放されようとしているのだ。

「システムU—D——起動」

その声と共に銀色の瞳が悍ましく深い翠色に染まり、書から不規則に這う蛇のような泥が蠢き空の体に纏いつき、空を雁字搦めにしていた鎖を破壊する。

「神縛枷鎖呪術式変換———魄翼解禁」

空の立っている場所を中心にドス黒い、正三角形を組み褪せた六芒星の魔法陣が展開され世界を覆う勢いの大質量の魔力が吹き出す。思わずアイエフ達はお互いに抱き合わなければ吹き飛ばされてしまう想われる程の圧倒的な力。放出される鮮血の如く真紅の色をした魔力はこの世の物とは思えない程の禍禍しい巨人の手を連想させる翼を広げる。

「よくもよくも、マスターを壊してくれたな。よくもよくも、あの日常を壊してくれたな。よくもよくも———変わらぬ顔でここにいな」

失ってしまった事を取り戻そうともせず別所新たな絆を紡ぐなど許さない。裏切り者、逃亡者等を憎悪を膨らませて大鎌に込められる殺意がより鋭さを増して、それは嵐の如き溢れる魔力を受けても微動にしない。今にでも殺しに掛かる相手を前に



空の体を蝨く泥は右手に集まり左右に凶悪な刃と毒々しい刺突の一撃を決める紅い刃が装着されたパイルバンカー式のガントレットになる。

「僕だけを傷付ける事なら……それを受け入れず。この世界を自己満足で破滅させようとするお前を放っておけない。……だから使うよ。明日がある筈の他人の為に」

「血の繋がった娘を強姦した貴方」が？守る所か壊し犯し癒えぬ傷を付けた貴方があ  
!？」

——ティシフォオネは空の最大の地雷を踏んだ。アイエフ達が思わず声を零すほどの信じがたい内容だった。

あれほど荒れ狂っていた空間が突然反転。まるで絶対零度の大地に迷い込んでしまった様に周囲が冷たくなる。

決して触れていけない封じ込めた記憶が鮮明に浮かぶ。

まるで太陽の様に元気な愛していた娘の声がるで呪いの様に頭に響く。

そして白と黒が激しく点滅するノイズが走り、最後に垣間見たのか暗い部屋の中で汚れた娘に押し掛かりこちらの存在に気づいたのか振り返り、道化の様な笑みをするのは間違いなく『夜<sup>由</sup>天<sup>分</sup>空』の姿。

——  
ブチツ。

「ナハトヴァール・エーヴィヒカント  
砕け得ぬ紫微の黒暗天」

世界を覆うように広げる魄翼。

人の手によつて狂われた金色の十字架の魔導書。

まるで永劫に燃え続ける業火のような模様が体に現れる。

これこそが空の本来の姿。忌々しき封印された原初の姿。

世界に滅びあれと、深層意識の中で形づけられた人の意志を体現したかのごとく神々しく禍々しい存在は、この世の者とは思えない化物のような咆哮を上げ、人の形をした闇を黙らせる為に飛び掛かった。

## 空夜

——なあ、テイシフォネ。お前にとって空ってどんな存在だ？

それは数年前の出来事。

あの事件により、空は自室に閉じこもり部屋に入ろうとするのなら例え従者であるポチであっても部屋に入れようとしなかつた無理やり入ろうとすれば容赦なく攻撃してくるか、別次元に逃走するほどに精神的に肉体的にも疲労しきっていたころの話。

紅夜は少しやつれた顔つきで、その膝に縋りつく様に眠っている娘の頭を撫でながらぼそりと呟いた。

——答え、られないか？

テイシフォネは沈黙する。

原初の概念の一部が具現化。世界を構成する元素とも言えるその力は、世界を自由に定める神座すら破壊し、世界を混沌させると言われるほどの絶対的力を保有する彼女



女の子なんだから、そんな陳腐な理由で楽しく生きていく為に必要な知識を教えてもらった。空と主がお互いに大切に思いある仲を見て嫉妬狂いしてしまい迷惑を掛けても、呆れたため息で頭を撫でてくれたのは記憶に新しい。

——なんか、悔しいな。俺達はあれだけあいつの事を思っていたのに、たつた一人の少女が空をいい方向に変えた。空の“望み”を変えられるかもしれないと思うほどに。

立ってないで座れと言うように床を叩く主にティシフォネは静かに腰を下ろした。

——俺の言葉はあいつに届かない。

決意を定めた声音で主はそう言った。ティシフォネは主が何をしようかと察するところが出来た。

こう話している間にも夜天 空は限界に近づいているのだ。悔しい、出来るのなら主が空に抱いている思いも視線も奪いたいと思えるほどにその瞳は覚悟に燃えていた。

だからこそ、その真つ直ぐな思いに嫉妬してティシフォネは強引に主の唇を奪った。貪るように、縋るように、風吹けば倒れるか弱い乙女を見せた。しかし、主はそれを片

手で強引に離して、子供の我儘を苦笑で返すように頭を少し強引に撫でた。空がティシフオネにプレゼントした黄金色の簪が落ちないように。

「……どんな手を使つてもあいつを進ませなきや、何も変わらない。俺はあいつに救われた。どうしようもない殺戮者になつた俺を」一緒に遊ぼう」なんて、ガキの頃のくだらない約束を命を賭けて守ろうとした。そのおかげで俺は変わった。何もかもに絶望した俺が生きようつて歩けるようになった。

恋しき愛しき主様。帰りを心よりお待ちしております。ティシフオネは二人の間に最初から自分が入り込む場所なんてなく、その場所を穢す事、奪える事も出来ない。でも、送り出す事は従者でも出来るはずだと、主に掛かった髪を宝石を扱うように退けて、今度は強引ではなく、愛する者への言葉が飾られた口づけ。

「……ティシフオネ。」

答えるように名前が呼ばれる。しかし長年望み続けてきた返しではなく、お姫様抱っこした主の娘を渡された。血の繋がっていない娘、主がただ可哀そうだとただそれだけで引き取つた世界を敵に回すその災い、その小さな少女を引き取る。

「……何もかも元通りになつたらみんな、花畑でランチしような。」

その後、主「……零崎 紅夜とデペアは共に行方不明となり、ティシフオネは旧神に

操られ人形と化していた夜天空の奇襲を受けて次元と次元の狭間である虚数空間へと封印された。

一人残された零崎 空亡は彼らを探す為に旅に出た。その胸に日常を取り戻すという決意を宿して。



まず空がしたのはラスティションから離れることだった。怒りが思考を支配しようとさせるが、それを手足に流しティシフォネに向かって閃光の如き速さでパイルバンカーの一撃を決めようとするが、紅い刺突の刃はまるで霧を貫いたように感触はない。体を反転させガントレットで振り下ろされた魔鎌の一撃を防ぎつつ、そのままティシフォネの服を掴み一気に街から離れ、山脈地帯へとやってきた。

ティシフォネは勝利を確信した表情のまま、実際空は彼女に勝てるとは欠片の一つも想っていないそれでも、空には戦う理由があった。魔導書を広げ幾千の魔法同時に行使する。それは、世界終末を予感させる美しくも悍ましい光の乱舞のようで一瞬にして爆風と共に地形を変える。

血の様などす黒い魔力、底なしに魔力を生み出し続ける【永遠結晶エグザミアの欠片】

を有している空がするのは酷く単純な事であった。

「吼える巨獣、世界を飲み込め——ジャガノートツツツ!!」

展開された巨大な魔法陣から撃ち込まれる弾丸が空を駆け、音を置き去りにする速さで加速するティシフオネを狙撃するが、確実に直撃する物だけを難なく切り裂く無力化させた。しかし、これは誘導操作可能の広範囲殲滅魔法攻撃。空の意志により弾丸は軌道を変え、ティシフオネに急接近し、——爆発。青い空が一瞬にして暗黒に変える。

——だが、その程度では終わらない。

「ブラッディダガー・ヘルヘイムシフトッ!」

星々の空に見える程の数えきれぬ幾千幾億の闇夜を彩る鮮血の刃、全てが純粹魔力の中に飲まれたティシフオネに撃ち込まれる。

「うああああああ!!」

まだだ。そう訴える様に無限の力を行使する。

——射線の物を焼滅させる星の輝きの如き砲撃が、稲妻を剣に変化させ対象に突き刺し体内で爆発させる攻撃が、空にいくつもの極光花火を咲かせる。その一つ一つに世界が揺れ、大地が裂けていく。

被害を最低限に納めるために『ゲフェンクニス・テア・マギ封鎖領域』を何重にも張り巡らせいるが、空自身の攻撃に何度も崩壊する。その都度に何度も貼り直している。



無限に生み出される永劫結晶『エグザミア』その欠片の限界が近づいても、一切の躊躇なく次の魔法の引き金を引く。

「世界終末の開戦を鳴らせ、終末の笛——ラグナロクツ！」

一層大きく展開された正三角形の魔法陣、各頂点上で発射される異なる効果を持つ三種の砲撃が地震の如き轟音と大地の断末魔を上げ、青空を一色に染め上げる。

「はあ……はあ……はあ……」

ティシフオネの特性上、『絶壊デストロイヤーの審判者』は全く役に立たない。

そして、自身が保有する特殊な能力がある聖剣魔剣も同じ理由で意味がない。

ダメージが期待できるのは限りなく純粋な力、彼女の前では特殊な力は紙くず動揺なのだ。

永劫結晶エグザミアを持っていたとしても、所詮は欠片で大量に消費してしまえばその無限に溢れる魔力が回復する時間を必要としてしまう。

既に星なら塵も残さず、銀河であるのなら微かに石屑が残っているかもしれないほどの常識外れの大火力の魔法の数々を放ちながら、被害がゲームギョウ界に及ばないようにゲームギョウ界を丸ごと包んだ強固な結界魔法を何重に張り巡らして、破壊と創造を何度も繰り返し、空の魔力にも底が見え始めていた。

「やった……わけが、ないッ!？」

核爆発でも起こしたキノコ雲の如き砂煙の中、未だに身動きしなかったティシフォネが動いたのを空は直ぐに感知した瞬間、体の半身の感覚がなくなり、次の瞬間には後方で自身の放った魔法を遙かに上回る破壊力が爆発した。

「ぐう……!?!」

クレーターというレベルではなかった。そこには奈落ができていた。体を一瞬で元通りにするが、消滅させられた体を構成する因子は元通りにはならない。

何重にも張っていた『封鎖領域』はその一撃で完全に崩壊、直ぐにまた貼り直す  
が、その一瞬の際に目の前に不気味に微笑みティシフォネの姿が。

「マスターに愛を貰い、マスターと肩を合わせ、マスターと共に笑い——マスターを傷付けた」

魄翼を形状変化させ、巨大な手となった魄翼をティシフォネに振り下ろすが鬱陶しそうに振るわれたその手に一瞬で吹き飛ばされ、蜘蛛のような指で空の顔が捕まえられる。金色の闇を映す瞳孔が空を捉えながら、お互いの吐息を感じる程まで近づいていく。

「壊したということは無価値だったという事。無価値だったという事は貴方はマスターの想いを裏切ったという事。許さない、許さない、絶対にユルサナイ」

ティシフォネの腕に紫電が走った瞬間。

轟く雷鳴と共に空の体に黒き雷霆が突き刺さる。

「もう帰ってこない。あの人の温もりも笑顔も好きだった。——愛していた。なのに、なのに貴方はあああああああああああ!!!」

——虐殺が始まった。

魄翼による幾度の防御行動も虚しく、ティシフォネは体中を殺しにかかる。

粉上になるまで潰して、血飛沫になるまで切り刻み、炭化になるまで焼き尽くし、原子レベルまで粉々にするために氷結させ、徹底的なまでに空の再生能力の要である因子を破壊尽くし、更に空の体の中にあつた永劫結晶エグザミアの欠片を握りつぶす。

人であるのなら、痛みに発狂しながら死ぬ程の手加減した殺しのパレードに体中を痛みつけられても空は何一つ語る事はない。その行為がティシフォネの怒りを更に大きくする。

「お仲間様がいるでしょう？マスターを裏切つて何食わぬ顔で作つた絆があるのでしょぅ?……どうして助けを呼ばない。どうして、何も、叫ばない」

地面へと投げ捨てた。地震と錯覚するほどに強烈な轟音と共に血だらけの空を中心にクレーターが出来ていた。原型を保っていない肉と骨の塊となつた手足が微かに蠢き、蜂の巣になり臓物が垂れ流れる胴体、半分ほど陥没した顔。完全に潰されていない方の右目だけを動かしティシフォネを見つめる。ちょうど太陽の影になって、その表情

は分からない。

「言った……でしよ……これは、僕の罪、だ。……他人に、手、を助けて……もらうだ、なんて……冗談じゃない……」

「貴方は私の大事なマスターを傷付けた。私を傷付けずに、だから私は貴方を傷付けずに貴方の大事な人を傷付けるのです」

人の手として原型を取り戻しつつあった右手を踏みつぶす。ぐちゃと血と肉が混ぜた身の毛のよだつ

音をたてる。それに空は何も反応を見せない。反応するほどの力を使うほどの余裕もない。

「……君に、全てを、殺戮されるぐらいなら……自分で、壊してしまおう」

「——ッ!？」

あれほど強固にゲームギョウ界を守っていた『封鎖領域』ゲフェンングニス・デア・ワギが解かれる。同時に『絶壊なる審判者』デストロイヤーが発動し周囲の土、空気、大地がまるごと存在しなかったように無に還る。咄嗟にティシフォネは自身の力でそれを封じた。

「君が世界を守る動作をするなんてね」

破壊され続ける無の中で空は立ち上がり、握りつぶされた永劫結晶エグザミアを全力稼働させ体を一瞬にして再生させた。

「正気ですのツ!!」

「僕が正気な訳ないでしょ」

右手のガントレットの爪を向きだし、ティシフォネの体を突き刺す。ほとんど肉体と  
言う概念を持たない彼女にとつて一見その攻撃はほとんど無意味に近い。むしろ取り  
込まれる可能性すら生まれる愚者の行動。気が狂った様にしか見えないかもしれないな  
かった。だが、ティシフォネにとつて空の次の行動は予想がついた。

「エンシエントローマトリックスツ」

血塗れた天を裂くように伸びた槍。それは純然たるティシフォネの力によつて構成  
された物。空の攻撃ほぼ全てに無力化、もしくは耐性があるティシフォネだったが、自  
分自身の元となるとまた話は違ってくる。風が波を造るように、風が波を無くしまふ事  
があるように、いま空が掲げている魔槍は間違いなく、決定打を決める一撃に只ならな  
い。

「ツツツツツ!!!」

ローティシフォネに選択が迫られた。

空は、自分の体をも破壊尽くすつもりで『デストロイヤー絶壊の審判者』を行使している。自分の目  
的はゲームギョウ界にいる空以外の絆を持つであろう物を苦しませ殺す事、ならばこの  
世界が減ってしまった場合は自分の目的は達成できない。故にここで黙って空の一撃

を浴びるか、それともこの世界を滅ぼしてまで、我が身を選ぶか——。

「遅い」

「——があああ!?!」

無慈悲に胸に突き刺される防衛不能の魔槍、空へと投げ捨てられる。

同時に、ティシフォネが抑えていた『絶壊の審判者』が解放され、空自身の破壊と共に世界の無へと誘う破壊が一気に広がり、その中で空はどこか安心したように、決断を決めたような凛々しい顔つきを見せ、『旧神の証』<sup>エルダーサイン</sup>が刻まれた左手を水平にしてその上に右手の爪を立てて置いた。その動作にティシフォネは嗚咽を吐きながら動揺を見せた。何故ならそれはありとられゆる世界を繋がった次元のその中央の近くに座っている空の「本体」を呼ぶ為の前動作だったからだ。

【本体】——システムU・D、無限連環機構、永劫結晶エグザミア。

ありとあらゆる神魔、怪物を人の肉体と魔力を蒐集しつづけ世界の中心に坐する史上最悪の邪神すら傷つかせた人が生み出した可能性の極地、狂気と殺戮の頂点。もし、あれが世界に「本体」が顕現した瞬間——この世界は一瞬で死ぬ。そんなことはさせまいと、魔槍を掴み無理やり体を切り裂いて退かそうとするが。

「ティシフォネ、僕は紅夜のように感覚で戦うようなチートじゃない」

「じゃあ、どうするか。相手を見て相手を知って相手を利用する」

「卑怯だと思つてもいいよ」

「君の恨みを買つては僕達が殺されて発散させて、うんそんなこと僕らの日常の一つだつたじゃないか」

何人もの空がティシフオネの肢体を止めた。

そう、全てはこのためにあつた。無駄に魔力を消費して相手の注意を引きつつ、結果に自身の分身を出して待機して、無様に殺され続け手が無い事を確信させ感情のままに近づき動揺を誘い隙を見せた所に、空の血肉で構成した分身たちを一点に集めてティシフオネの動揺を突き動きを止める為の策。

ティシフオネは直ぐに肢体にしがみ付いた空たちを引き剥がそうとするが、空気がまた重くなる。

「——あとは、よろしく【私】」

「ツツツ!!」

ティシフオネの絶叫が嗚咽と共に響いた。同時にティシフオネの後ろにあつた何もない空間に亀裂が入り、この世の物とは思えない耳を劈く、精神を隅から隅まで犯す様な禍々しいその冒流的な声音は空しか理解できない言語。亀裂の割れた闇から徐々に浮かぶ、それは何対ものしなやかな脚によって支えられた二枚目の貝殻。半ば開いたそ

の貝殻から伸びたのは、先端にポリプ状の付属肢のついた、いくつかの節を持つ円筒状のものが何本か伸び出ている。そして貝殻の造る闇の中には、知性を欠くような身のものもよだつほどの、深く窪んだ緑眼を持ち、輝く黒髪を伸ばした造形らしき無機質な物を感ぜさせる美しい顔つきをした【私】は、答えるように手を振った。

「夜天、空……！」

「良報だよ。君の主は……うん、ちゃんと生きてる」

闇から飛び出した触腕により空たちと共に闇に沈んでいくテイシフオネに最後の言葉を告げる。

「……あ、ああああああ!!!」

その絶叫は一体何なのか、頬に流れるそれは主が生きているから嬉しいからか、目の前にいる空に踊らされていたことに対する憎しみなのか、だが必死に伸ばされたその手を空は同じく涙を流しながら掴む事はなかった。

「……………ゴフツ」

静寂に包まれ瞬間、血の塊を吐き出し空はそのまま地面に倒れる。

「エグザミア……は、生きてるけど損傷重度……因子量……人型維持限界ギリギリ……」



魄翼解放、神縛枷鎖呪術式再構築……」

魄翼は姿を変え鎖となつて空を再び縛りつけ、溶け込むように消えていく。同時に半暴走させていた『絶壊の審判者』は機能を停止。周囲への無差別破壊が止まった。

見渡す限り周囲の環境は死の領域だった。ありとあらゆる生き物が死んでいる。植物も一瞬にして枯れ果て、死の風によつて塵となつて消滅する。大地には巨大な奈落や、

「……一体、何人死んだんだろう。数百万は、行き過ぎかな。数十万ぐらいだといいな……」

例えこの世界に召喚しなくても、一瞬でもこの世界の次元と【本体】に居座っている次元を繋げたのだ。直ぐに塞いだが、それでもあの人間を憎み嫉妬の念はこの世界に浸食して、人間を優先的に殺そうとするだろう。生きた物を憎み嫉妬する死霊のように。

「……少し、休んで……この地形を治さない……と」

自身の流した血沼の中で、空は静かに眠りについた。

雲一つもない青空、何事なかったように太陽は空を照らしていた。

## 被害

ゲームギョウ界で右に出る者はいない超高度建造物プラネタワールの天辺。電波を受信し、送信するための要であるアンテナの上に両手を広げる白い影があった。

「——間に合った…？」

ぼそりとその声は吹き荒れる風に消えていく。巨大な街を見渡せる程の大きさ、その天辺となれば地表面の摩擦の影響を受けない強風に対して、雛人形のような少女は態勢を崩す事は一切ない。勿論、命綱等付けてはいない。少しでも態勢を崩し、落ちてしまえばまず助からない。異常な体重加減と絶妙なバランス力が故に可能とする正に奇跡の技だ。

「喧嘩したら、どつちも傷つくだけだよ…」

悲しげな声でどこかで倒れているだろう彼らに対しての言葉は到底届かないと分かっていたとしても言わずにはいれなかった。

少女——空亡は二人の喧嘩に気づくのが遅れた。大切な人が自分の事を一切覚えていなくて、それがとても悲しくて、誰もいない場所で一人座り込んでいたからだ。気づいたときは既に二人の決着は着きようとしていた。直ぐに後を追うとするが、「本体」

の出現をいち早く察知して、直ぐに後を追うことを停止した。

あれはそこに『在る』だけで災禍をまき散らす嚇怒。空の根源。影であってもその姿がゲームギョウ界に現れてしまえば、例え何光年離れていた距離であったとしても悪影響を及ぼす。邪神特有の妖気と「本体」の嚇怒と極限の憎悪という刃の範囲は無限に匹敵する。

ゲームギョウ界に「私」がその体を現した瞬間にゲームギョウ界そのものを一時的に別異次元に転移させなければ数百万人は狂死していたかもしれない。

しかし、安心はできない。「私」の声を殺す為に広範囲に自身の力を使ってしまった。それはつまり、この町に合った女神の加護も同時に殺してしまったのだ。

「……先生のバカ。ティ姉さんのバカ」

時空と法則と同格存在である邪神『ヨグソトース』の機能を一時的にコピーしておいて良かったと心から思いながら、同時にこれ以上の使用は時空の矛盾を大きくさせ世界軸の崩壊を招く恐れがあり、もう使えないと判断しながら、澄んだ瞳は嵐が過ぎ去ったような青空を映す。

「……どうして、仲良く出来ないの……」

頼られることは無かった。

話を聞いてくれる事も無かった。

何故なら、あの二人にとって自分はただの“子供”だったから。

巻き込んで悲しい思いをさせたり、苦しみながら考える事をさせたくなかったから。

「何が、新世界の唯一神だ……」

そう言われ、誰からも恐れられた。

『バンテオン・エヘクトル神殺しの頂点』、ありとあらゆる神々の力を掌握、否定、拒絶し、全ての世界を破壊、創造することが出来る全能の力を持ったとしても。

「……父さんッ」

彼女の心は幼すぎた。



場所は変わりギョウカイ墓場。ここではマジエコンヌ四天王と幹部であるレイスが一堂に集まり緊急会議を開いていた。

濃密な負の空間に産まれるモンスターすら本能で近づくこともしない聖域とも呼べる場所、亀裂が走ったような禍々しい冥獄界へ通じると言われる出口の前に集まっていた。

「さて今月の恒例会議を始めようか」

四つの異形の存在と人の形をしているだけの化物は円卓の椅子に座っていた。

一か月事にどれだけ忙しくても全員が集まり、変わった事や成果を話し合う会議。マジエコンヌ側の女神マジックは当初これをする意味が理解できなかったが、組織の長が自分の組織の現状理解してないのは愚の骨頂と普段温厚なレイスが強く批判した為、思わず了承してしまったこの会議。

とは言っても、話す事と言えばマジエコンヌの策士であるトリックと実行者であるレイスが意見交換する物というのがほとんどだ。そもそもの話であるが、マジックはマジエコンヌの象徴であり彼女の特長能力である『エミュレート』を使用し、女神の力を解読し取り込むのが主な行動になっており、ギョウカイ墓場から出ることは滅多にない。ジャツジは女神が逃げない様に、そしてギョウカイ墓場の侵入者を討伐するのが業務であるのでこれまたギョウカイ墓場から出ることはない。

トリックは荒事が苦手ということで引きこもりネットを利用して情報操作を行い、ブレイブだけがレイスと共に行動することが多い、主な行動は街に被害を出すモンスターの討伐だ。ここ数年に急激に女神のシエアを奪い、嘘と真実の情報に人々は踊らされ女神に対しての信用を失わせる悪の組織マジエコンヌ、その会議の進行者であるレイスは真剣な眼差しで腕を組み、

「まずだー幼女の下着はうさぎさんが一番だと思うだが」

「レイス、それは確かに興奮するが、やはり純粹無垢な白がいいだろう!」

「確かに飾らぬ美しさ——素晴らしい。だが俺は声を高らかに叫ぼう。幼女らしき幼さと可愛らしさを兼ね備えつつ、見てしまえば思わず心が安堵するその神秘とも言えるデザイン!これに勝るものはそうはないと俺は宣言する!」

「そこまで貴様の心を引き込むか!……ふむ、ならばそれを証明するだけの資料があるのだろう」

「ふっ、少し前に監視カメラをハッキングして偶然映つたのだがな……」

「——お前らしい加減にしるお!!」

ドカバキゴキツモウヤメルンダーオレハニンゲンヲヤメテシンシニナルンダメキツベギツアポカリプスノヴァブレイブソードヨウジヨにイツシヨウノクイナシ!

「……死ーん」

「貴様らは!いつもいつも!真面目に出来ないのかあ!?!」

「マジック!それ以上は不味い!二人が死んでしまうぞお!!」

「離せブレイブうう!!こいつは一度犯罪神の元に送り天罰を受けるべきなのだあ!!」

「Z z z……」

巨大なエネルギーを秘めた鎌を振るうごとに発生する真空刃で、モザイク必須のグロイ状態になっていたレイスとトリックに止めを刺そうとするが、二人それぞれに数十発

は殴ったであろうちよつと血塗れた拳でブレイブはマジックを後ろから抑えて止める。会議ごとく破壊される円卓の机は「またか」と呟いているように、バラバラに散っており、ジャツジは会議が始まる所か椅子に座った瞬間には別世界に旅立っているその速さは、の○太君でさえも驚く速さだった。

「流石我ら同士！俺達に出来ないことを平然とやってのけるッそこにシビれる！おこがれるッ！」

「誰が同士だ!!」

「ブレイブ！貴様だけは私側だったと思っていたのに!!裏切ったのか貴様ああ!!」

「誤解だああああ!!」

いつのまにかマジックとブレイブの戦いになっていた。プロセツサユニットのよる機動力を利用して巨体であるブレイブを地面に叩きつけ、拘束を外し大きく振られた大鎌から放たれる真空の刃により大竜巻を炎を纏った大剣を振り下ろし激突、ブレイブを中心に蜘蛛の巣のように地面が裂ける。

「あ、トリックこの頃どうよ？」

「ふむ、女神候補生が逃げたが今の所はシエアはこちらが独占している状態だ。更に人の中でも女神は消えた等という妄言を吐く者を信じる者もあらわれて順調だな」

「こつちもFDVシステムの量産に成功してな。今はそれを搭載する兵器を開発中だ」

「同士と言っただろ！ならば助けろオ!!」

「ガンバレ、マジエコンヌの常識人代表ww」

「この鬼畜外道共おお!!」

完全に殺る対象がブレイブとなったマジックは周囲に幾多にも展開した魔力で構成した槍を撃ちながら、真空刃の嵐を弾いたブレイブに突貫する。冷や汗を掻きながら、最低限の動きで回避して直撃する物だけを腕で剣で弾き、振り下ろされる大鎌の一撃を危うく回避する。同時に放たれた斬撃は地面を裂きながら向こうの岩石をバターのように切り裂き遠雷に似た轟音を響かせる。因みに未だにジャツジは座ったまま眠っている

「あ、そうそう直ぐ前にさスゲエ魔力反応があつたんだけど」

「ほう、どれだけだ？」

「マジエコンヌ様と俺と四天王、四女神合わせても塵に見えるレベル」

「……………面倒だな」

「ああ、だから詳しい事を調べて報告する。一応そつちでも情報を集めてくれ」

「了解した」

「おとおおいい！お前達重要なこと喋っていないか!?一応恒例会議だぞ!?意見交換場所の大切な機会だおお!!」



「死ねええブレイブうう!!!」

何食わぬ顔で鼻を穿る鬼畜外道の二人にブレイブの怒りも頂点に達した。全力全開の魔力を炎へと変化させ回転をしながら、広範囲に炎の波が迫る。流石にやばいと感じた二人は逃げようとするが逃がすまいと背中中の二丁のキャノンで二人を撃ち落とし、炎の中を身を焼きながら恐るべき修羅の顔で突撃するマジックにブレイブは大きく跳躍し距離を取る。

「——戦いか?ならば俺も混ぜろおおお!!!」

「ジャッジが起きたぞ?!」

「よっしやああ!マジエコンヌ身内大決戦じゃああ!!!」

高熱に目を覚ましたジャッジはハルバートを持って一番近くにいたマジックに攻撃を開始、ブレイブもブチ切れ状態を維持しながら肉薄して切りつけてくるのを黒の大剣で受け流し、空い手でトリックを掴みながら混沌とした戦いにノリノリで突っ込む。

女神すら打倒する強力な力を持ったマジエコンヌ四天王と弱体化したと言っても四女神を相手に圧勝したレイスは最早意味もなく子供がじゃれ合うように周囲の地形を破壊尽くしながら争う。

……因みにお互いボロボロになっても、セロハンテープで補強した円卓の机でちゃん

と情報交換はしました。

## 夢見

それは既に終わった世界、女神という存在を誰もが忘れ、人間が人間の上に立ち生活をするそれは、別の次元軸が向けた新しい時代を迎えたゲームギョウ界の終焉であり始まり。

生まれた新しい女神。

失ったのは古き女神。

ただ一つの世界を支配した小さな女神。

ただ一人、家族も親友も仲間もない孤独の中で懸命に前に進んだ。

女神の使命はモンスター排除、世界を守護することであった。

剣を取り、女神は戦った。たった一人で長い長い間、この選択が正しいと証明するよ  
うに、犯罪神の散り際の言葉を否定し続けるように。

修羅の如き活躍に誰もが、流石女神だと称えたが、流れる時間の中でその声はいつしか消えなくなり、逆に少しでも被害が出ると直ぐに女神の批判の声が上がるようになる

世間へと変わっていく。

女神は何も言わなかった。それが自身の間違いだったことだけと思うしかなかった。人間は悪くない、それが女神の根源に刻まれた呪いのような本能が、人間に否定的な考えを持つことを否定する。

いつしか、女神はモンスターの殺戮マシンとなっていた。感情を殺し、体を自分と相手の鮮血で染め上げ、モンスターを葬るその姿に人は恐怖した。

——もし、女神が人間に牙を向いたら？

そんな場違いな恐怖心が、シエアは急速に低下して女神は女神化できないほどまでに弱体化してしまった。国中で女神に対する排他的運動が活発化、それをネタにして出世の為に利用する思想家。女神のありがたみを忘れてしまった愚かな人種は女神の加護の意味を忘却してしまいモンスターの侵入を簡単に許し、国中を巻き込む大災害へと発展してしまった。女神と人々は懸命に戦い、最悪の被害は防いだが、シエアの低下によつて弱体化した女神は既に使命を全うできる体ではない。女神の守護の中でぬくぬくとぬるま湯に浸かっていた人間は遂に憑かれた様に兵器を作り始め、所詮一人ではない女神の活躍は過去の栄光と成り果てていた。それ故に女神の追放はそう遅くはなかった。

女神は今まで培ってきた全てを無慈悲に奪われたが、それでもそれが正しいことなら

と受け入れ、傷ついた体を引きずりながら人々の前から姿を消した。ただ、人間の温かい未来を信じて。

『……私、もう消えるのかな』

誰も立ち入らない森林の奥。ひっそりと空いた洞窟の闇の中に森の物で作りに出したベットの途中で既にシエアの底が尽きた女神は既に五感が麻痺している状態の中で微風で消えそうな声で呟いた。

『お姉ちゃん……私、正しかったんだよね……』

人の為になんてを奉げた。

未来の為に全てを奉げた。

その結果、守るべきものに裏切られても、後悔はなかった。

ただ、ここで一人で消えるのが恐怖だった。傍で闇を照らす唯一の小さな蠟燭が燃え尽きたら、そう思うと恐怖が体を蝕む。

『……助けて、助けてよう……』

既に涙は枯れてしまった瞳からは何も流れない。

光をなんとか認識できるほどの瞳は既に使い物にならない。

いつも誰かが傍にいた時がまるで宝石のように輝いて、今がとても胸に空いた穴の痛みを強くする。

どうしてこうなった？と思ひ浮かんだ時に浮かんだのは家族との、親友との、仲間との思ひ出。

『……これは罰なんだ』

自分の手を鮮血に染めて、幸せを求める事、そのものが罪なんだ。

「ごめんね」

え？と残った聴覚が女性のような高い声を拾った。

体が持ち上げられ、懐かしい温かみが顔に押し付けられた、もう数千年は味わった事がない懐かしい感覚。次に我が子を慰めるように抱き締めながら頭を優しく撫でられる。

『あ、ああ……！』

既に枯れたはずの瞳から流星のように煌めく涙が落ちる。

感覚があるか曖昧の腕に力が入り、必死にそれを逃がさないと服を掴んだ。その力は彼女の想いに反してとても弱弱しかった。

「……まで良く頑張ったね。ありがとう」

人々の希望の大きさのあまりに、感情を殺してモンスターを殺戮するマシンと化してしまつた女神。当たり前前の事をし続け、いつしか感謝の言葉すら聞こえなくなつたその耳に響いたのは、ずっと欲しかった言葉。

『わ、私は……』

「うん」

『お姉ちゃんのような、立派な女神になれたかな……』

「うん、ネプテューヌも自信を持って自慢できる最高の女神になれたよ」

『そっか……良かった』

頑張つて掴んでいた腕が落ちた。いよいよ最後の瞬間が来たようだ。明かりが徐々に暗くなるにつれて抱き締められている感覚もなくなっていくが先ほどの一人で死を迎える恐怖は無かった。女神として心の底から感謝してくれている誰かが傍に居ることが彼女にとってこれ以上ない幸福だったのだから。

『ありがとう』

見た目の年相応の満点の笑顔で最後の言葉を口にした彼女は砕けたガラスの様に粉々の粒子へと成り、消滅していく。真つ暗闇の中で薄く輝いたのは、女神が唯一その手から離すことは無かった旧き世界を破壊した原因とも呼べる神を喰らいその力を宿す魔剣。

◆ ーそれが最も新しいネプギアの最後だった

「ネプギア!!」

気の強い呼び声が聴覚を刺激し、重たく閉じていた瞳が薄らと光る。体中に鎖で繋がれた鉄球のような重さが襲ってくる。まるで幽体離脱でもしたかのような脱力感だった。

「あいちゃん!ギアちゃんが目を覚ましたです!」

「本当!?!」

ドタバタドタバタと埃が舞い上がるような高い音と共にネプギアの瞳に三人の影が映った。

安堵の表情を見せるコンパ。

胸に手を当て安心した様のため息を吐くアイエフ。

そして今にでも零れそうなほど涙が溢れた赤い瞳で手を握っていたユニ。

「……私……生きてる……?」

死を感じる時間が刹那だったことなのは覚えていた。空が知り合いらしき反応を見せた人の形をした『何か』が、『何か』をして空の頭が弾けた。あまりの出来事に硬直していたら、首にこの世の物とは思えない冷たい手が首を掴み。そして――死神を連想させる鎌が急所を貫いた。

「空が大きなシエアクリスタルを持っていたの。それを渡されて、私達は貴方を蘇生し



たの」

「そう、だったんですか」

確かにあの人なら持っていそうだと思いつつ、体を起こそうとするが力が入らなく、起き上がることにさえ無理だった。無理に体を持ち上げようとすると、隣にいるコンパが毛布を掴んでネプギアの肩まで伸ばした。

「すい、ません…」

「無茶をしないでください……本当に、本当にぎあちゃんが蘇ってよかったです」

「今は何も考えず落としく寝ていなさい。後の事は私達がなんとかするから」

「……はい」

こんな体だと支えがないと真面動くことすらも出来ないかと判断し、諦めて、首を少しだけ動かして袖で涙を拭いているユニに微笑んだ。

「ありがとう、ユニちゃん」

「べ、別にお礼されるようなことしてないわよ!」

「目の下、黒いよ? ずっと心配してくれたんだね」

「こ、これは、違うわよ! ちよつと寝不足だけよ」

慌てて赤くなつた顔を隠すように下がるユニ。良く見れば三人とも怪我がないようにだと分かると安堵のため息を吐いて、もう一度瞼を落した。

違うネプギア<sup>私</sup>の夢がずっと喉に詰まっているように引つ掛かり、もう一度見たいと静かな願いが叶ったのか、ネプギアは直ぐに安定した呼吸音で眠りについた。仲間である三人に見守れながらゆつくりと意識が黒一色に染まった。



なんて、なんて凄まじい力なんだ。

微かに感じ取った魔力だけでも、ネプテューヌ達四女神と自分と合わせても塵にもならないほどの冗談な方な圧倒的力。一般人には強烈すぎて知覚できないかもしれないが、水面を走る様に空全体に走る波動に触れたしまえば肉体と魂共々一瞬にして溶解させる。

『あの二人が会ってしまった…!』

「二人……一人は空だろうがもう一人は？」

『始次元概念体——ティシフオネ』

恐怖に染まったデペアが震える声。デスベリア・ペーゼ・ドラゴン天壤の邪悪龍、神を殺す猛毒を吐く禁忌の龍、死を運ぶ天使サマエルと恐れられたこいつが、凶悪な怪物でも見て震えている。悍ましい恐ろしい、どうしてあんな存在がこんなところにある。そんな感情が深層意識から流

れてくる。ゲームギョウ界とは反転した場所にある冥獄界、ゲームギョウ界の負が集う、そこで俺は変わった。同じものを浴びて、尚且つこの体、『罪遺物』と呼ばれる物の封印を守護するものでありながら、一度も狂わず、恐れる事がなかったデベアが心の底から頭を抱え恐怖に震えていた。

『あの破壊神でも【本体】を召喚して時間稼ぎできるレベル……！でも【本体】が世界に顕現したら世界が死ぬ……ッ！』

「【本体】？ 始次元概念体？ なんだよそれ」

破壊神——空がいつも力をセーブしているのは知っている。デベアの生成する神殺しの毒をブラッディハード両方を使って、かなり弱体化して相手はこちらを殺す気ではなかった、そして情緒不安定だったことも重なって、漸く倒せた空。その本当の実力も見た事はないのに「【本体】」ということは、あいつには大本が居たという事。

『……人によって生み出され、人によって狂わされ、人によって人に憎悪し殺戮する兵器となった。人の可能性の負の極地、狂気と殺戮の忌み子、邪神皇唯一の化身。それが夜天 空の本当の姿なんだ』

「あいつ、人に造られた物なのか？」

『デウスエクスマキナプロジェクトという欲望に正気をなくし、性質の悪い至上主義者共よって生まれた神を超越した者……本人達にとってはこの上ない不幸だったそう

けどね』

毛嫌いしているように見えてデペアは本当は空の事を色々気にかけている。聞いた話では翼を引き千切られて酷い目に合ったという事だが、人に知恵の実を食べさせたと言われているこいつからすれば、人の知恵で狂った空に複雑な思いがあるのだろうか。『次に始次元概念体だけどね。言つてしまえば全ての元、全能なる母と言つたらいいのかな。原初の混沌、世界という概念が存在していなつた太古の流転の中で合つた闇、その一部が具現化した存在。その特性上世界に起きる全ての現象の上位互換であり、特殊能力とかそういうのは一切を無効どころか反射して、しかもある程度の反発できる力がないと、君や女神達の場合だと神であつた現象すら改ざんして下手すれば歴史から抹消され、存在を消滅させることもできる』

なにそれこわい。

『例で言えば自意識を持つた超性質が悪い自然現象。あいつ殺すなら全世界破壊尽くすしかないだよなあ……』

「一に見えて、全の存在であるのか」

『キャプテンと唯一肩を並べることが出来る徒者だね』

キャプテン——デペアがそう呼ぶ人物は本当の本物と呼べる霊崎 紅夜。

数万年生きて冒流的で荒唐無稽の存在である恐るべき邪神の力を手駒にする魔人。

深くは知らないが、空と激闘を繰り広げた結果精神を破壊され、修復する間にこの体を扱う為に俺という人格を生み出した存在。最も越えなければならぬ壁。

「……………」

『……僕はいまから二人の戦いの様子を探知するから暫く休んでいて』

それからデペアが黙り、俺はあの道化のように口調と冷笑するニヤル男と呼ばれた邪神と空から教わった世界の事を含めて『罪遺物』の事を思い出していた。

生きる者には、なんらかの核となる生きる為の器官がある。それは世界にも同じことであらゆる可能性の原点である『基幹世界』と呼ばれる世界にとって心臓とも言える世界がある。その世界の一秒、その刹那に起きた現象の『もしかして』が草の根のように無数に広がり世界を造り出す。

ゲームギョウ界の管理者である空だけではないが、幾多の別次元にある世界の管理者にとつて『基幹世界』<sup>マスターワールド</sup>は自分だけが知る権利があつて、尚且つ誰にも知られてはいけないう重要機密。もし『基幹世界』<sup>マスターワールド</sup>の存在を知り、特定されてしまえば俺達が住んでいる宇宙単位だけの話ではなく多元宇宙単位の規模の被害が及ぶ。あくまで最悪の話ではあるが、それこそ頭の回るような輩が悪用してしまえば、都合のいい可能性だけを抽出して自分だけに幸せな世界を造る事など容易。それは『管理者』として絶対に隠さなければならぬ真実、基幹世界<sup>マスターワールド</sup>がもし何らかの要因で滅んでしまった場合は多元宇宙単位<sup>マルチユニバース</sup>

の消滅、つまりゲームギョウ界ならば、ゲームギョウ界の存在そのものが消えてしまうのだ。

「……………」

そして、この体こそが多元宇宙単位を十六個も取り込んだ本来存在することすら忌々しい禁忌の者、罪遺物。

当たり前に過ぎる今一瞬の未来を神すら怯む程の憎悪を宿した人間である零崎 紅夜と呼ばれる前の存在は手当たり次第に生きる者全てを殺戮し続け、その力を邪神が作り出した『死界魔境法』ネクロノミコン・ディザスターを並行使用して自らの体を改造していき、多元宇宙単位という想像もできない超質量の存在体となった。その全貌は、負が負を呼ぶように内包した世界は常に殺戮と憎悪と暴虐に染まったとんでもない負のエネルギーを未来永劫生み出す無限機関となっている。ビル八階はありそうな身長をしているデペアが心の中で不自由なく生活しているのも、この体の特徴ということ。

その強烈すぎる力から世界に存在していい存在ではないと生物としてカテゴリーを超越し、森羅万象から縛られることない最悪で真の自由者を『円環外れ』と呼ぶようになった。

「……………」この力が使える様になれば」

『無理だよ』

はつきりと無理な夢を吐き捨てる様にデペアはそう言った。

『それは長年の時を使ってキャプテンだからこそ到達した頂だ。確かに円環外れの中でもキャプテンは最上位クラスで十六の多元宇宙<sup>マルチバース</sup>単位の質量と邪神ですら呪殺することが出来る途方もない無限の負のエネルギーを纏った変哲もないパンチを真面に受けて存在出来た奴なんてそうはいない。分身体である空でも全リミッター解除状態でも指ひとつ動かす前に瞬殺できるけど、世界<sup>ユニバース</sup>単位の負で簡単に正気を失う相棒が罪遺物を使用すると——全次元のゲームギョウ界が消し飛ぶよ』

女神に殺されることこそが俺の運命。それは確かに強烈すぎる力だが、それが必要になるかもしれない。

空に別次元に送ってもらい自爆目的で使用するかもしれない。

『女神の為に死ぬつもりか?』

『それが、俺の全てだ……っで、空とティシフォネって奴……!?!?』  
突然口が動かなくなる。

それだけじゃない。

全身が形容しがたい激痛が走る。

『くぅちゃんが力を使って、この世界を守った……!?!?』

『……がはっ!』

口から血の塊を吐いた。それだけに留まらず体中が膨れた風船を裂いたように血が噴水のように上がり、感覚がまるで炎の海に投げられたように滅茶苦茶になる。

『破壊神が【私】を一瞬召喚してティシフォネを自身の異次元に放り込んだ……か。相棒巻き込まれた形になってるけど頑張つて』

「い、あぐつ、がああああああッ!!!」

気絶することすら許さない傷に塩を擦りつけられたような痛み身に覚えがあった。

デペアの神殺しの猛毒を纏った。あの激痛に似ていて、これはその上を言っている。

血だらけのベットから転げ落ち、血だらけの俺はデペアの言葉を理解すら出来ず、肉体より先にもがき苦しみ精神がズタズタに引き裂かれそうになった瞬間、痛みが消えた。

『……生きてる?』

「デ、ペア……さっきのは」

がぐつと、俺を中心に出来た血池に頭を落とし意識がなくなる。

「見舞いを買ってきたよ! どう? 元気に……え?」

「日本一今すぐに医者と呼んでくるのですの!」

「え、あ、ええ……つと」



「速く!!!」  
「りよ、了解!!!」

## 渴望

太陽が沈み、空が暗くなつた頃、空はボロボロの体を引きずるように足を進めアイエフ達と合流した。まだ冷静だつた時にシエアクリスタルと共にもしもの時とラステイションにある空の拠点の場所を記した地図を髪を操作してアイエフの懐に入れていたのだ。居なかつたら居なかつたでそれでも良かったが、扉を開けると葬式途中の酔うな重い雰囲気があつた。まさかとネプギア蘇生失敗？と不安が過り聞いてみるが、それは問題ないということ。ただテイシフオネのあの一言が、まだ若い女性にとつては嫌悪感を抱くには十分であり、露骨に顔を逸らす者もいた。それは仕方ないと割り切り空は空いていた席に座り、腕を枕代わりにして机の上で眠るように草臥れた。

「……あれはどうなつたの？」

「別次元に送り込んだ。……まあ、当分は大丈夫かな」

隣に座っているユニの言葉にやつれた声で返す。体を何度も何度も殺され続け、その都度再結合するのは確かに慣れている。しかし、その数は数億回にも及ぶ殺傷の前に体が不死の体としても限界がある。更に空には『旧神の証』による『人間を何らかの行動で殺す行動』の命が体に刻まれており、あれだけの戦いに街に被害が及ぼうとするのな

ら体が勝手に動き、守りに入り、更に町ごと吹き飛ばすような攻撃を繰り出そうとすれば体の動きが制御され鈍くなりその瞬間、都合のいい生体サンドバックの出来上がり。故にあれば一方的にやられるだけの無邪気な子供と蟻のような戦いだ。

「当分って……貴方でもあればどうしようもないの？」

「あいつを殺すのと全世界滅ぼすのどっちが大変と聞かれたら、ティシフォネの存在を知っているのなら誰もが前者を選ぶね」

例え世界創世を行うための世界破滅が起こってもアレの体を傷付けることは不可能だろう。事実、昼時の一方的な戦いに来るだけの反撃を行ってもティシフォネの体も一つも傷つけることは出来なかった。世界を灰にする力がある魔剣や触れた不純を浄化させる聖剣もどんなものでも貫くような神槍でも、どんな概念や因果律等といった人智を超越した神の如き力でも彼女を傷付けることは不可能で、逆にその力を反射される。

アイエフ達からすれば、理解を超えた魔境に至る存在だ。

この世界、ゲームギョウ界の神と言ってもいい存在は『守護女神』と『冥獄神』だけだ。しかも後者は一般人では知らぬその隠すべき怨念が込められた神の名前、その存在を知りもするがまだまだ分からない部分も多い、目の前の今のゲームギョウ界が生まれる前の原初のゲームギョウ界から介入があった夜天 空という異世界からのイレギュ

ラーに聞いたこともあったが、その点だけは言っても理解は出来ぬと曖昧な答えが返ってきたのは覚えている。

「人の身でも、女神の身でもどうしようもない敵。正に空しか頼れる存在しかないみたいね」

「……………」

ワザとらしく語るアイエフにコンパの横目に見る恐ろしいという感情が宿った瞳が空の顔を写した。その本人は何も語りはしなかったが考え込むような唸る声と共に顔を上げた。

「そういうことになるかな。だからこそ、僕等は別行動が一番いいよね」

その提案に否定する者はいなかった。

「……………」

「……………」ただ、ともう一度零し空は唇を噛むように声を出す。

「ケリをつけたい。そしてあいつの狙いは女神か冥獄神にある。だからもうちよつと一緒にいていい?」

「……………」ケリ?」

「レイス・グレイブハードは僕の知人だ。あいつが関わっている時点でマジエコンをこの世界で未知なる技術が取り入れられているのも想像がつく。君達と一緒にいればあ

いつが自らこつちに来る確実に……だから……」

「性犯罪者をこのまま一緒にいることに賛成するだけでも？あと、それって私達は都合のいい釣り餌よね？……いや、ネプギアやユニの女神はともかく人間である私達はどうでもいい存在よね」

空は何も言わなかった。それが事実であることを濁す必要はないと言うように。

アイエフは、誰にも見えない所で白くなるほど手を握りしめた。

コンパも口を開こうとせず、様々な思いが混じり合った垣塙の中でユニは静かに立ち上がった。

「私は空をこのまま居させていい……だけど、条件がある」

「……………なに？」

照明が生み出した影がユニの表情を一層黒くする。

女神と呼ばれるその慈悲深く感じるその欠片も感じさせない修羅の表情で。

「なんでもいい、私に力を頂戴。もう、私は誰も失いたくない。失わせたくない。――」

――私は女神なのよ」

強硬な意志に燃えるその瞳に光は無い。己の存在理由、存在価値、その全てが壊れかけている憐れな少女に誰よりも口を空けるより早く、閃光がユニの額に打ち込まれそのまま床に後頭部を強打。そのまま糸切れた人形のように意識を失った。そして残った

のは唾然と口を開くアイエフとコンパ、そして髪が人の手のように合わせて放ったデコピンの形のまま停止している。目を合わさずに放った空は、罪悪感があるのか頭を掻きながら小さくため息を付いた。

「君達女神は王道に進めばいい、暗黒面に墜ちるなんて時代の先走りすぎ」

最後の最後まで取り返しの無い所までいかないよとあの魔剣は抜かないつもりだった思いが倒れているユニの姿に歪んでいく。自分が介入した時点で悪いのか、紅夜がそもそもゲイムギョウ界に居ない方が良かったのではないのか、どれだけ議論しても無駄な過去の出来事に頭痛を覚えながらこれからの事を憂鬱に思いたため息を吐いた。



「ここであつたが百年目！天チューう!!!」

レイス・グレイブハードが一番最初に行ったのは、仕事を押し付けられ阿修羅の表情を見せた部下をデコピンで撃退する事であつた。疲労困憊故に完璧な奇襲の思わぬ反撃に割れたハートが尻尾の先端にあり、黒い羽を生やしたネズミ『ワレチュー』は空中

を何回も回転しながら、壁に激突。目を回してそのまま意識を失った。

「ん、(苦勞さん)」

片手に持つているトレイを落さないように来客用の机に置き、仮眠用の布を取り出して床に転がっているワレチュウを掴んでソファに放り投げて布を被せる。トレイに乗せているのはダイコンやニンジン等をよく煮て柔らかくした一人用の鍋だ。作った側からすれば熱いうちに食べてほしいのだが、扉に経った時に向けられた殺気から直ぐに諦めた。

「よし、どこまで進んでいるかなー」

それなりに広く作った個人用の事務室兼来客室。四大陸の物流や盗んだ情報が載った書類、マンガ等を見上げる程の本棚の前に置かれた椅子に座り、机に置かれた書類を一つ一つ目を通してワレチュウが行った書類整理の進行状況を一通り確認して、紙束をトントンと合わせて確認済みをシールが付けられた入れ物に入れる。

「さてと、これからどうするかね……」

レイスは机に座り行儀悪く足を重ねて机に山住になった書類を落さないように置いた。肘掛に肘を置いて拳を作り頭を置いて静かに考えを始めた。

「空は人命より、世界と自然を主軸に考えるからよつぽど大きく動かない限りは本気で敵対することはないだろう。ティシフオネは……まあ俺が言えば簡単にこちら側に付

くが意味ねエな。あいつ俺の状況知ったらラスボス単独で撃破しにいくだろうし、余裕で勝し」

それ自体は別にどうでもいい話。

というより、レイス自身ゲームギョウ界なんて最初からどうでもいい話だったのが、犯罪組織マジエコヌの幹部の座にいる以上は最低限の仕事は熟さなければならぬ。

「正直な所、このままだとゲームギョウ界終焉エンド直行なんだよなあー」

頭を掻きながらモンスターからの被害状況が記憶された書類を一枚一枚退屈そうに読んでいく。犯罪組織マジエコヌの作り出すマジエコンのお蔭でシエアは確保できているが、「汚染化」したモンスターの被害は目を隠せない。組織を使い出現次第、駆逐を繰り返しているが、そもそもモンスターが生み出されるのは人の『負』によるものであり、「汚染化」の原因は女神の加護が弱くなったのが原因だ。このまま活動を続けていけば新種のそれも危険性の非常に高いモンスターが生まれる可能性も十分になる。

なにより、こちら側には女神の様にモンスターを絶対に侵入させないシステムがない。

そして、自分たちの行動は正に自分の首を絞めつけ、苦しんでいるのにそうしないと救われないと勘違いしているバカの愚行。

「……でもな。空の事だから女神がもしゲームギョウ界に置いて守護としての役割を担



うことが出来なくなった場合の対処もあるだろうなあ。まあ、それでも来る終焉を回避できるかは別問題だけど」

更にマジエコンヌ側のシエアは確かに八割とゲームギョウ界を支配しているが、その全員が心から信仰している訳ではない。所詮マジエコンヌのしていることは危険性の高いモンスターを退治し、その活動を大袈裟に宣伝して、マジエコンヌを撒き人々の意志を徐々に女神から遠ざける事。

しかし、長年信仰してきた対象を直ぐに変える程にゲームギョウ界人も非情ではなく今の状況はあくまで女神の関心が薄れていき、マジエコンヌへ向かっているというのが今の状況だ。

「正直、マジエコンヌ四天王を含めたマジエコンヌも人の心の光にはなりえない」

人は姿が見えない大きな者には崇拜を抱きやすいが同時に恐怖を抱きやすい。変わって信仰自由化された際に女神は常に世間にその姿を良く見せ、モンスター退治にも積極的だった。その事によってその姿を見せ、その力を見ている者達にとつては安心感を抱くだろう。更にあの容姿だ。一般人からすれば羨望を越え希望になれる存在だというのも納得が出来る。

——レイスからすれば、女神は神様と言うより嗜好思想の塊。下手に力を得たアイ

ドルという認識でしかない。

「マジックも美人ではあるけれど……正直、万人受けじゃないなあ……。他の奴らはブレイブはともかく他の面子が人に好かれそうな性格と姿じゃない……」

まるで人に媚びる為のアイドルのようだと言及したため息を付き、足を床に戻してノートパソコンを開いた。そこには新型の自立兵器の設計図が映りだされている。それは秘密入りにラステイションで技術を独占していたアヴニールを引き込み、更にリーンボックスで破壊された物を回収して修復した偽造品だが、その性能は女神の力を一時的に封印できる恐るべき兵器。

「FDVシステム……ねえ。確かこのシステムの責任者は……ああ、あいつか」

「もうこの世界に私の信仰すべき女神はいない」。そう言つてマジエコンヌの門を叩いたりリーンボックスの元教院長であるイヴォワール。その顔写真がディスプレイに表示される。元より年寄りの容姿が見える貫禄と教院長まで上り詰めたカリスマ性、故に優秀であつたがレイスが知っている。

邪神に関わる者からこそ、はつきりと分かる狂信に塗れた薄汚れた光を照らす瞳を態度と口でマジエコンヌを信仰しているように見せて、その信仰は別の所へと注がれている事。

「……はあ、絶対にこいつやらかすな。けど勝手に切り捨てる訳にはいかないんだよな……」

レイスの素顔は基本隠されている。どこであっても。幹部という地位で女神に匹敵する実力から頭のまわる者はその正体に気づき始めている者もいるが、顔も見せない奴が幹部という地位でしかもリンドラという下つ端をいつも傍に置いているのだ。出世を狙う者や、只の嫉妬か彼に従う者もいるが、面白く思っていない者もいる。そう言った者はイヴオワールに集まり、大きくなつていないが水面下でマジエコンヌは二つに分かれていると言ってもいい。

話し合いで済ませればそれでいいのだが、イヴオワールはこちらの話聞くように見せて全く聞かない更にこちらに憎悪を抱いている有様だ。その理由は分かるが、こちらもこの声と顔は一種の切り札である以上変える事は出来ない。

「とりあえずテストしないと……えっと、場所はここでもいいか」

手元にある通信装置で同行させるメンバーにメールで連絡を入れると、レイスは憂鬱な気分で山積りになった書類を片付ける為に気合を入れようとパンツと眠気を吹き飛ばすように両頬を叩い取り掛かった。

## 妖精

プラネテューヌの中央都市に來たのは三年ぶり、いまでも懐かしい鮮やかな記憶の中  
では女神達と肩を並べながら夢を語り合ったこの世界に一時の別れを告げたあの日を  
薄らと紅夜は思い出していた。

その記憶の中では、誰もが笑顔になっていた。国の源であるシエアエナジーを奪い合  
う関係だった女神、その仕組みでは当たり前のように引き起こされる女神同士の争いは  
守護女神ハド戦争と呼ばれ、国の繁栄の為にと日頃人智を超えた女神同士の熾烈な争いは、  
この空の向こうで行われていたことだった。

女神自身も守護女神戦争は、宿命だと誰もが思っていた。自身が唯一の女神になるこ  
とがゲームギョウ界の為にすると絶対的な自信を持っていた。だが、それは第三者の存  
在によってお互いに考えが変わっていき、異界から降りてきた者達によって、徐々に明  
かされていくゲームギョウ界のシステムに女神達は共に異議ありと唱えた。女神の価  
値を永續させていくために繰り返される希望と絶望の螺旋。それを誰にも悟られず操  
る支配者にお互いを敵と見做していた女神同士は、初めてお互いに話し合い、そして手  
を合わせそのシステムを破壊することに成功した。

そして今は、自由を手にした人類、捉われた女神。

絶望の神へととなった奈落に墜ちた神は、多大な負担を負いながら再びこの地に立ち言葉を失う。

—— 『負』。

誰もが当たり前前を持つそれを目視できるようになってしまうている。  
誰もが心の中で理由もない陰口を歌うように響きあっている世界。

—— 零崎 紅夜に見える世界は悪意に満ち溢れていた。

だからこそ、彼は決意する。正気を削られていき、狂気のパズルを無理やり組み込まれながら、女神達の夢を守るためにその黒ずんだ双眸で光ある未来を幻視する。

◇

場所はプラネテューヌを象徴するゲームギョウ界一高いと記録されているプラネタワアの中央区。一般人は立ち入りを禁止されている場所で、常日頃に職員が忙しそうにプラネテューヌ中の集まる情報を整理する為に闊歩しているそんな場所、そこには女神

が集まりそれぞれの国の方針をお互いに意見を交換することが出来る特別な会議室も設けられている。そんな、神聖とも言える場所です。右貌と髪以外を包帯で撒いた姿の紅夜、児童が持つているような可愛らしい人形のような姿と容姿をしているがすと、胸が大きく露出しているライダースーツに真紅の長いマフラーを撒いた一見男のような印象を受ける少女日本一は、女神の次に発言力を持つていとされる教祖を勤めている、プラネテューヌ代表のイストワールの元にやってきていた。

「……変わりました。いえ、もう別人になつてしまいましたね零崎さん」

「……………」

懐かしそうで、悲しげに眼を細めたイストワールに紅夜は病的なまでに黒ずんだ瞳で何も語る事はない。否、情報だけ知つてゐる偉人が、まるで知人の様に話しかけられても混乱するのは常識的だと言つてもいい。様子が可笑しいことはイストワールも理解してゐた。だが、あらかじめ何が起きてても可笑しくない火のついた爆弾の様だと空から伝えられてゐた故に顔色を変えず、日本一とがすとの方に体を向けた。

「初めまして、プラネテューヌ教祖を勤めてゐますイストワールと申します」

「……………か、可愛い」

「え？」

ぼそつと目を丸くした日本一から零れた言葉にイストワールは首を傾げる。

「噂でプラネテューヌの教祖は人間じゃないと聞いた事があるのですが、これは驚きですの」

がすとも、まさか本サイズの人間の形をした妖精のような小さな少女が、事実上この国の最高責任者だという事に思わずため息を漏らす。イストワールもああと手を叩いた。この頃の話し相手は自分の部下やアイエフ、コンパ等としか話す事がない。マジエコンヌに監禁されたり、解放されたと思ったら当たり前を破壊した結果の收拾したり、とどめに犯罪組織だったりその事態解決に向けて、とても外に出る余裕も無かったことを思い出した。

「がすとー！お持ち帰りしていいかな!？」

「したらゲームギョウ界指名手配されるのです。やったら絶交ですよ」

「もう二度と考えません」

それでよし、と頷くがすと。早くも二人の上下関係が分かった瞬間である。

「えっと、話を始めてもよろしいでしょうか?」

『うん、いいと思うよ』

このままだと二人のコントで話が一向に始まりそうにない事を感じたイストワールは、わざとらしく咳をつけて生温い空気を区切り、真剣な瞳で口を開く。

「まず、お二人には知っていたいただきたいことがあります。そして、これを知って上でもし

よろしければ私達に協力をお願いしたいのです」

「勿論い「ちよつと待つですの」どうしたの？」

「教祖様も言っているのです。まずは話を聞くのです……全く、日本一にはブレーキはないのですの？」

「はい、はい……」

「……それでは、まず冥獄界と呼ばれるモンスター誕生の地について——」

ストワールが語り始めた内容は日本一、がすもととつて正気を疑う様な飛び抜けた内容だった。冥獄界と呼ばれる人の負が集まり、それが元になって生まれるモンスターについて、女神がギョウカイ墓場に調査してから行方が分からなくなっている事、シエアの低下によって引き起こされる女神の加護の弱体化によってモンスターの「汚染化」が始まった事。

そして、隣にいる零崎 紅夜こそが冥獄界の神、そしてモンスターの王である女神の対極なる存在であるブラッディハードだと言う事。

「……なるほど、状況は把握したですの」

全てを聞いたがすとは舌を丸めながら頷く。こんな事、確かに国家機密になる訳だと思いがながら。

もし、この情報が洩れれば、間違いなくブラッディハードは誰からも魔王と呼ばれる



存在になるだろう数年前に女神の手によって倒された魔王ユニミテスのように。しかし、ブラッディハードがもし倒されてしまえば、冥獄界を管理する者はいなくなり、積もった負の制御できず無尽蔵にモンスターが溢れ出し大災害が引き起こされる。所謂、必要悪の存在はそこに在り続けなければならないが、負の象徴。全ての人類が自分と向きあう事は到底不可能に近く、ブラッディハードの存在は、隠されなければならない。「そういうえば、ちよつと前に突然モンスターが消えて時があつたけどあれは貴方のお蔭だったの?」

『まあ、一応僕等があれこれ働いたからの結果だね。でも、『何か』合つたんだ、『何か』が合つてモンスターはまたこちらの世界に沸く様になつてしまつた。女神がいなくなつたのは原因じゃない、多分もつとんでもない存在が動いている』  
「だから、こつちの世界に来たのですの?」

紅夜の包帯で埋もれた手に浮き出ている宝玉が頷くように光る。因みにここに来るまでに自己紹介は済んでいる。

「……可笑しくない?話を聞く限り犯罪組織のやつていることつて破滅を加速されているよ。まさかみんなが破滅を望むなんてありえないよ?」

「こういう時つて誰かが人類そのものを無意識を意図的にそつちに寄せているとかありそうですけど……現実的じゃないのですの……ブラッディハードが出来そうですけど」

『紅夜の見ている物は、女神と一緒だよ。……君達も見たでしょ、紅夜の体に浮き出ているアレを』

『アレ』まるで生きていたかのように紅夜の体中にある人の顔をした刺青のような物。それが何であるのかを理解した二人の顔が一気に青くなる。

「……無理を、したのですね」

『今も無理をして、無茶をしている所……だよ』

——それでも、こいつは辞める気はないと思うけれど。壊れかけそうな物を憐れんでいるような声でデペアは一人愚痴る。

「それじゃ、ダメだよ」

ぼそつと日本一は紅夜に向けて言い放つ。

『正義のヒーロー』を指してマジエコンヌという悪を倒し、困っている人がいれば助けるそんな人生の中で出会った紅夜と同じ黒いコートを羽織った闇のようなそいつは、大人気ない大人が子供を相手にするように日本一の完全に打ちのめした。道化師のような哄笑と共に。

《自らの発展の為に世界を汚して、問題起これば先送りして若い者に押し付ける人間か？

人の正しさを餌するだけの女神か？

全て生物の父であり母であるこの星か？

——お前は『何の』正義のヒーローだ？

それが定まらない限りはお前は俺の敵でもないぜ》

玩具を見つけた子供のようにはしゃぐように、そいつは精神を逆撫でされられる声で解かれるその言葉に日本一は何も答ええず地面に握りしめることしか出来なかった。それから色々考えて、世間について色々調べる様にした。あいつの言うとおり、私一人がどれだけやつても世界は変わらない。いや、マジエコンヌに敵対することで目を白くされる事も合った。

でも、それでも、がすとはそれでも隣にいてくれた。無理をすれば、直ぐに気を掛けてくる。それ故に日本一は一つの答えを知っている。無理をすれば、直ぐに気を掛

「私もいろいろ合つて、答えを探しているんだけどさ……少なくとも、自分に優しく出来ない奴が、他人に優しくすることなんて……出来ないよ」

「女神を要求する魔剣」

始めて、紅夜がその虚ろな瞳で呟いた。

「……それがあれば、それさえあれば全てを終わらせる」

「突然、どうしたのですの?」

「答えは既に出ていている。あいつらの為に、あいつらと夢を語った時から、俺はもう終わっている」

浮世離れた言葉を口にして紅夜は背を向けて歩き出す。デベアさえ理解できない突然の行動に静止の言葉を掛けるがその足は止まらず、重苦しい扉が空けられ影のような紅夜は扉の奥の光の中に消えていった。

「あれ、もうダメじゃないのですの?あの瞳は、もう女神以外の生命なんて有象無象と語っているのです。あれは最初からああなっていたのですの?」

「……あれは、女神の善意から作り出そうとした輝かしい理想の影なんです。人のように泣きたい時に泣けず、逃げたい時に逃げれず、そんな環境下で夢を叶える為に……あなるしか無かったんです。」

既に零崎 紅夜は形を成していない。あるのは女神の宿敵であるブラッディハードとしての使命と夢を守るために自分自身を犠牲すら問わないドス黒い執念と既に手遅れまでに壊れた信念だけだった。

その背中を静かに見ていた日本一は力んでイストワールに紅夜の武器の場所を聞き、その場から直ぐに紅夜の後を追うように駆けだした。がすとは一瞬、目を丸くするとはあとため息を放ち直ぐに後を追うように走り出す。

「……………私は……………いえ、私しか出来ない事をしましょう」

分の目で、自分の傍でこの事態を解決したいその想いを強引に胸に閉じ込めイストワールはマジエコンヌついて、そして紅夜が零した女神<sup>ゲ</sup>を要求する魔劍<sup>バ</sup>について調べるために、自室へと戻った。

## 空我

——日は昇り始めたばかりの肌寒い時間に剣撃の風を切る音と銃撃音が街はずれの何もない平原で幾度も響いていた。

閃光の軌跡が残る美しいビームブレイドの連撃は虚を切り裂き、スコープの中央に定めて撃ちだされた魔力の弾丸は目的の人物を射抜くことなく過ぎ去る。

相手は無手で、本人曰く『力が半分になって更に十分の一も出せない程に弱っている』と言っているほどだが、二人にとってはただの出鱈目だと思っうほどにその動きは速い。まるで雲を相手にしているかのような錯覚を覚える程に。

しかし、それは二人の勘違いによるものだ。ネプギアとユニ、二人は女神候補生であり勝利すべき存在であるが故に、命を危機にするほどまでに戦い抜いた経験があまりに少ない。反対に彼女たちの相手をしている空は、卑怯と呼ばれるほどの破壊能力や空間操作する力を持つていても、それを無効化されたり、そもそも自分より圧倒的に力の強い子どもを数え切れぬほどに戦い抜き、勝利を収めてきたのだ。潜ってきた修羅場が違いすぎ、生きてきた世界もまた違う。

故に空がしているのは単純であった。ただ彼女達より遥かに判断が速いのだ。

「ユニ、敵の動きを予測してないところなるよ」

まるで残像が残る様な速さで乱舞するネプギアの剣術を、その振られ次の剣撃に移行する刹那の瞬間を狙って拳打が腹部に突き刺さる。かはつと吐き気と痛みによる刺激に動きが止まったネプギアを流れる様に足を払い、態勢を崩した所で掌底が彼女の体を弾き飛ばす。その方向はユニの方角であり、咄嗟に銃口をネプギアから外した隙に、大きく跳躍して撃ちだされた砲弾のように肉薄してきた空の対処に遅れた。急いで銃口を向けようとするが、飛び蹴りによつて得物はユニの手から吹き飛び、視界に黄金の髪が映つた瞬間には腕を掴まれ、そのまま一本釣りの要領で地面に叩きつけられ意識を黒に染まる。

「相手に姿を悟られないスナイパーならともかく、見えている状態だと常に動き回らな  
いと接近された時に言いサンドバックになる。とはいっても彼女の性格上、隠れて撃つ  
のはちよつと向かないから体術の基礎、それと味方と合わせながら敵との距離と予測す  
る多重思考でも教えようか」

「……ッ」

意識を失いぐつたりとするユニから手を離し、空が向き合つたのは拳打と同じ位置に  
掌底を撃ち込まれ腹部を片手で抑えながら立ち上がるネプギア。あの一瞬で同じ場所  
を撃ち込まれ酷い吐き気と痛みが彼女を襲うがその瞳はまだ戦意を失っていない。く

すつと小さく微笑んだ空はゆっくりと歩き出す。その態勢は一見隙だらけだが、それは何時もの事だ。

ネプギアは知っている。その姿勢に自分たちの姉とその仲間が、違う方向から同時に攻撃して、同時に吹き飛ばされた事を。だが、迷うこと無かった。体中全てに力を込めて、風の音すら聞かない程の集中力で地面を蹴った。

「――へえ」

それは最速の攻撃を繰り出す為の構え、両手に持ったビームブレイドを顔の横に添えた突貫の動きに対して、少し驚いた様子で空が息を漏らした瞬間には、刃は空の体に触れようとして、離れた。

「甘い……っつと!」

その動きは直ぐに分かった。そしてどこを狙うのかも見切った故にそれは、足の位置を入れ替えるだけで簡単に躲すことが可能だ。そんなこと、ネプギア自身が一番理解している。

強引に右足を突き刺すように地面に打ち付け、力づくで突撃した加速を抑える。最速の速度を急停止させるために無茶をさせた右足から頭へと危険信号を響かせるが、構うものかと足を反転させ空の方へ向け、左足を軸に飛び掛かる。

「ミラージュ・ダンスッ!!」



奏でる様な軽やかな動きから連続の斬撃。全力で放った突貫を囷にした本命の攻撃すらも瞬間に見抜いた体が派手に後ろに飛ぶ、片手を地面につけて軽やかに一回転を決め、何事も無かったように立ち尽くすがその頬には一閃が走っていた。

「……………まさか、ここまでやるなんて」

「ギアちゃん凄いです!!」

「空を傷付けた……………!?ネプ子でもかなり時間掛かったわよ!」

アイエフとコンパの賞賛の声に無意識に強く握りしめた拳を解いて朝の訓練終わりと伝えると、ネプギアはビームブレイドの刃を消して首を振るう。

「いえ、ただ運が良かっただけです」

「それでも、凄いわ。運を味方にするのも勝負の世界じゃ必要なことよ」

「流石女神候補生、ネプ子の妹です!。あ、足大丈夫ですか?」

仲間から声にネプギアの表情は一切変わらず、ただ光の刃が失った柄を見つめていた。その様子に空は横目で見ながら、倒れたユニの頬を指で何度か突くと紅い双眸が薄らを開く。

「あの瞬間によく受け身を取れたね」

「全然……………ダメ、よ。……………その傷、はネプギアが?」

既に血が止まり塞ぎつつある頬の傷を空は手でなぞる。

「僕もまだまだって事だね。立てる？」

「ええ、これからプラネテューヌに、戻るのよね…」

「君も行くの？せつかく自分の国に戻ってきたんだし、シエア回復に専念したら？」

既にとある人物から唯一ゲームキャラの居場所の情報を持っている教祖ケイから等価交換として要求された超レア素材『宝玉』の情報を得た彼女達は今日出発する予定だ。因みにもう一つの超レア素材である『血晶』を持つとされるモンスターに住処はティシフォネと空の異次元との戦禍に巻き込まれ消し飛んだということで、空がモンスター発生の地である冥獄界に三時間ほど粘って手に入れた。

「……………ねえ」

「力って物はね。何かを犠牲して得る物なんだよ他人から譲り受けた物で合っても、それは同じ」

立ち上がったユニは服についた土を落しながら数日前を思い出す。今は当たり前の生きているネプギア、彼女は一度死んだ急所を貫かれたゴミのように捨てられた。それを復活させたのは空、そして原因を作ったのも空だ。

空はあの悪魔を別次元に飛ばす事には成功したがいずれまた現れて、その標的は空と関わった全てであり一番先に襲うと予測している。そして、あの悪魔に抵抗する手段は、例えば女神で合っても絶対に不可能と言われている。そんな相手に抵抗する為に、ユ

ニはどんな手を使っても力が欲しいと己の無力と憎悪を持つて空に提案したが、返事は気絶するほど強烈なデコピンだった。

「守るための力を得るために何かを犠牲にするって矛盾しているように聞こえるかもしれないけど、それが事実なんだ。もつと払いやすい代償を用意した方がいい、時間を掛けて修行とか困難を仲間と乗り越えてとか、そんな王道的な展開を繰り返しても十分に君は強くなれる」

「……ネプギアもそうなの？」

「あれは、君の知るネプギアじゃなくて僕の知る胸糞悪いネプギアだよ」

空は勝手に髪について土を払ってネプギアに視線へと移す。その瞳は今までネプギアに向けていたどこか保護者のような心配するような物ではなく、懐かしそうな、そして警戒するような意味深い眼差しでユニは頭を傾げるその様子に空は話を続けた。

「あれは何もかも犠牲したのに、手に入れた物は手の間から落ちて最後に自滅していったそういう女神だよ」

「……どういことよ」

「ネプギアの蘇生に使ったのは、別次元のネプギアがゲームギョウ界を統治していた時に作り出されたシエアクリスタルなんだ」

ユニだけにしか聞こえない程の小さな声で話された内容に大きく目を開いてユニは

空を見つめる。

「あの次元のネプギアは唯一の女神、ゲームギョウ界を統治する絶対の神、そんな時代に生み出されたシエアクリスタル、エネルギーの質が全然違うから、意識に影響が出ているんだよ」

こうなることは予想していたけど、とため息と共に吐きだして頭を抱える。こうなったのは自分の行いだと罪悪感に押しつぶされるように。

「確かにネプギア、なんだか別人のようになってたわね。守護女神戦争の時のお姉ちゃんよりも……もつと一人に見える」

ユニが思い出したのは最も高い壁であり厳しい姉の姿。そんな彼女も今は仲間と言う存在が出来たからなのか性格が丸くなってきたが、守護女神戦争時に他国の女神と敵対していた時は常にピリピリとした緊張感を纏って話しかけにくく、正に国の為に全てを背負うとしていた時の姿を思い出す。

今のネプギアはそれに類似していた。アイエフやコンパの言葉もまるで耳に入っていない様、常に別の世界を見ているように疎開感を出している。

「二人で何もかもしなければならなかった。頼みたかったアイエフもコンパもただ人間として頑張れと残して年老いて死んだ。少しでも頼れる人間が次々いなくなつて、だから世界を救うために家族を友達を、その手で殺して孤独になったネプギアは、守護女神

としての機能だけを遂行するための処理装置ハードウェアになった。そうしなければ耐えられなかったから」

目を大きく開き驚愕に染まるユニのその頭に空は手を置いて、壊れそうな物を大事に扱うように撫で始める。

「力はただの道具、それを使うだけの技量と精神がなければ、力は自分や相手を傷付けるだけの凶器になる。そんなのは嫌だよね？」

「でも、私がやらなきゃ、誰がやるって言うのよ。私は女神候補生なのよ……ッ」

人間のように「両親」はいない。夢を与えられる物ではなく、この世に生を享けたその時から既に将来が定められているそれが女神候補生。それが、ゲームギョウ界にとつて当たり前の事、必然の犠牲、その中で生きていかなければならない。拳を握りしめ訴えるユニに空は、まるで手にかかる子供を慰める様にしゃがんで目線を合わせ微笑んで話す。

「大丈夫だよ。君が、君達が諦めない限りは、どんな危ない状況になっても身代わりになるから」

握りしめてくれたその手は、とても冷たかった。

## 墜子

——我は地に墜ちた神。

人という生き方を捨て。

血と暴力の惨劇から生まれた狂気。

幾多にも生まれる亡骸を地獄に送り込み。

その魂と血肉で更なる絶望を紡ぐ。

世界は暗闇に包まれ、人々は女神達に希望を託す。

世界は光輝に照らされ、只一人の女神の掲げる剣には、捧げられた光と有象無象の混濁の魂が宿る。

——願わくば、その光が次なる闇を遠く遠くまで消える事を願い、新たなる墜ちた神、世界の生贄、悪の権化である魔神。

——希望も絶望も不必要。

果ての果て終焉に至る永劫の虚無こそが人から恐怖の体現、絶望の象徴として語れた我らのあるべき姿。



「それは違う、……真実は、必要ない？ どういう意味だ」

『お二人さん、相棒が遂に壊れ始めたでしょう』

プラネテューヌから離れた三人は紅夜を先頭に途方もなく歩いていった。

そして、どこに向かっているか理解しているのか不明の紅夜は虚空に向かってブツツと誰かと会話でもしているかのように呟き始め何度も会話を試みようとしたデペアは匙を投げた。

「斜め三十五度からチョップを叩き込めば？」

「古い電気器具じゃないですの。ま、あの様子じゃそれをしてみるのもいいかもしれないですの。ところで一つ質問ですの」

私？ と自身に指を向けた日本一に空気読めと言いたげにがすとは頭を抱えながらため息を付く。

『ボクに答えられる事なら、なんでも……でもブラッディハードの事はあまり知らない』『そうですの……。』というか、貴方と零崎紅夜は一体どういう関係なのですか？』

『相棒……』だと言いつつ仲だよ。でもお互いに何も支え合えていない失笑ものだけどね』

顔も見えないただ紅夜の手にある宝玉が点滅しながら喋るだけなのに、その自虐的に笑うデペアの声が痛々しい。

「……日本一」

「今様降りる気なんてありえないよ」

がすとは頭を抱えた。

絶対にこれは厄だ。それも特大で、世界の行方すら決めてしまいう様な存在が幻聴が聞こえる程に精神的に病み、その相棒は手を尽くして半ばあきらめている様な空気だ。

本当ならこんな対処は、女神がするべきだろうと内心ツツコミを入れるが、肝心の女神は犯罪組織に囚われ、切り札である女神候補生はシェアエナジーを得るために別の国に居ると言う。

どう考えても、知識容姿技術において天才の錬金術師様と自称正義のヒーローが手を出していい案ではない。

「ここで背を向けたら、自分から逃げることになるから」

「……あの変態も人が相手すること自体が愚かだったのですの。だからあんな奴の言葉なんて気にしない方がいいですよ」

「私の正義は困っている人を助ける事だよ。それは、それだけは絶対に変えたくない、それ」





す。紅夜は、背中に背負った緋曜日を抜き取り、両手で持ち剣先を空に掲げて、負を込めて詠唱を開始する。

「世に希望あれば、絶望を抱き

世に絶望あれば、希望を妬み

暴虐の王は群体と共に世界に名を示す」

濃密な呪祖を込めた言霊が世界に広く響き渡る。そして、欲望が争いを憎しみが悲しむを生むように世界に満ちた負が居るべき場所を見つけた様にその場に収縮していく。人の形をしていながらモンスターと同存在に近い故に隠れ警戒していたモンスター達も鬼哭の咆哮を上げ一斉に分解され、血が凍るような漆黒の風が紅夜の周囲に満ちていき、現世を塗り潰して地獄が構成されていく。

「い、いつたいなんですーの」

砂煙は晴れた先に現れたのは自分たちは知っている女神の姿、守護女神化によく見たー恐ろしく禍々しい存在だった。

「我は凶刃…鮮血と殺戮を求め、あまねく空と地を絶望に埋め尽くす魔神なり……」

『ど、どういう事だ？魂が二つ……いや三つ!?お前ら誰だ!?!』

「どうしたの?」

これが女神化のように姿を変えたブラッディハードの姿と納得できたが、明らかにデ

ペアの様子が可笑しい。全くのイレギュラーに冷静を保てないように。

『いや、ちよつと待て……まさかお前達は』

「早くも辿りつくか楽園の蛇。この闇に染まった体が、暗黒地獄カオス・ザ・ワールドに封印した我たちを招いた。そして応じた……安心するがいい、奴は一時の黄昏の地で眠りついただけだ」

「一体何が起きているのですの!?!意味不明ですの!?!」

「がすと、がすと」

「なにですの!?!」

「……あれ」

声を上げるがすとに日本一は呆然と指を湖が合った方向に向ける。そこには霧を纏った見上げる程の大きな城がまるでそこから最初から合った様に建っていた。発せられた氷刃のような冷たく鋭い女性の声は、間違いなく紅夜から発せられている。その紅夜ではないダレカはその手に握っている銃口がないリボルバーに分厚い刃が装着されたガンブレードの剣先を城に向けた。

「運命の天秤を動かす一握り素質を持った物こそ、この魔剣の眠る聖地に足を踏み入れる事が許される。ただの人、黙示録アポカリプスへの歯車は動き出した。残された時間、仮初の平和をありがたく享受する方が幸せだぞ?」

「ど、どういう意味?」

『ッ、中二病みたいな台詞ペラペラと喋りやがって、その二人逃げろ！要約するとここは人間に踏み入れたらダメ！来るなら殺すぞって言っている！』

当たりだと言いたげに口が月食の漏れた微かな光のように笑い、隠されていた殺気が溢れ、二人の体が硬直する。

「に、日本一……逃げ、逃げるのです……ただの人が神様をどうにかできる訳ないですの……!!」

「……嫌だッ!!」

「まだ言うのですか!」

日本一は獲物を抜いた。ペンギンの形をした銃を二度素早く引き金を引くと、弾薬に込められた魔力が解放され、銃口から光の刃を形成する。

「ねえ、貴方も一緒なんでしょ」

「愚かだ。私自らと戦う事、それはつまり世界を戦う事と変わらぬのに」

「これから戦うと決めた人が、そんなに泣きそうな顔……しないでしょ」

「……………」

紅夜に操っているそれは日本一の言葉に口を囁んだ。口から血が滴れ、痛みを感じない程に溢れる意志が肉体を動かす。

「私の正義は困っている人を助ける事!今はちよつと迷走しているけど、それでも!!泣

きそような人を背を向ける程、私はバカじゃない！」

「人……か、お前には私が人に見えるのか……」

各部のプロセツサユニツトに流血のように広がる線が紅い粒子を吐きだす。更に濃密になっていく殺気に無謀に構える日本一に自棄になって、がすとも杖を構える。

「がすと……」

「日本一のような頭じゃ勝つても迷子になるのですの！本当にかすとかいないとダメな日本一ですの!!」

「……………退け」

『お前が退けや！もう一つの幼女っぽい奴は黙っているぞ！』

「デペアの声を無視ししながら瞳を閉じる。ああ、まだ自分がただの人間で合った時の事を自分にもこんな勇者になるだと謔言をまき散らしながら、勝負を挑んできた愚か者がいたことを。」

「言葉は不要か、ならば我が剣舞の前に散れ」

幾多の仲間だった者を葬り、ゲームギョウ界を蹂躪尽くした口に出すことも悍ましい魔神だと言われた時代、史上最悪の裏切り者、そして世界を一つにした彼女は懐かしく戦火のないこの世界を感じながら、その手に狂気を込めたガンブレードを二人と吸収を拒んだモンスターらしき隠れた存在に向けて、得物を見つけた野獣が笑う様な寧猛さを

見せながら、名乗った。

「元守護武将、アイン・アル——参る」

## 産罪

『日頃の感謝の気持ちを含めて今日はプレゼントがあります!』

ワレチューは這うように丘から顔だけを覗かせ、目の前の現実に心の底から恐怖を抱く。

『歴史あるお城の観光旅行チケットだ』

そう、ここに来たのは男も納得してしまうほどのイケメンで、家事スキルがそこらの主婦より熟練されて、魔性のカリスマで四女神に味方する者を簡単に引き込みゲームギョウ界のシェアを一気に変えた張本人。

そして、自らの上司であり、事務仕事をよく押し付け幽霊のように消える気ままな性格。

『ゆっくり休んで帰ってきた時は感想でも聞かせてくれよ』

その実態は外道で悪魔。子供のような笑顔を浮かべるその瞳には餓えた獣の如き眼光、狙われたら最後首を食い散らすまで止まらない狂人の類であること。

「す、少しでも信じたのが悪かったチュー……ッ!!」

今頃リンダをからかって遊びながら、自身より数倍の速さで事務処理を進めているレ

イスに渡された地図を滅茶苦茶に破り捨てる。

地図通りに来た場所には、不自然なぐらいに球形の形をした湖だった。可笑しいと頭を傾げるとよくレイスに飛びつく日本一の姿が見えたので、身を隠して双眼鏡で様子を見れば、突然湖が光すら通さない程の霧に包まれ現れたのは歴史が深そうな荘厳なる中世の城だった。

「逃げるが勝ち！チュー!!」

レイスの発言から予想すれば個々の様子を見てこいか、それともあの三人を監視しろと遠回しの任務だと推測できるが、そんな事は知ったこっちゃない！とその場から勢いよく逃げる。

人の負で構成されながら人を襲わず確固たる自我を持つ特殊型モンスター、ワルチューは本能で理解した。あの天も地も染め上げる程の血飛沫が、全てを紅く染め上げる地獄を治める恐るべき魔神の気配を感知したからだ。

「あの外道魔人め！例えこの身をが滅びようとも奴に裁きの雷撃を喰らわせない限りは死ぬに死にきれないでチュー!!」

背後から爆音と共に断末魔が聞こえるが、走る速度が止まる。

「グルルルルウウ……」

「マジ、ツチュか……」



見上げれば数体のモンスター。

しかもそれは、接触禁止種と呼ばれる女神でさえも手を焼く危険極まりないモンスター。

「この短い一生の中で、一度くらいは身を焦がす恋がしたかったチュー……」

手持ちのモンスターを召喚できるディスクでは、時間稼ぎにもならないレベルの存在に呆然を立ち尽くすモンスターが突如、頭を下ろした。それはまるで王に従う兵士のように、まさかまさかと震えながらゆっくりと後ろを向けば――。

「塵の中を這う者か、そして人間性を持つモンスター、封印されし時の中でこのような変化が見られるとはな」

「あ、あばばばっばばばばば」

頬に散った血を舌で絡み取る紅きを魔神の姿。

「まあ、どうでもいいことだ。モンスターは死ぬ。慈悲はない」

ワルチューの目の前は真っ黒に染まった。



プラネテューヌの辺境にある名もなき草原を疾走する黄金の毛をした大狼。ゲーム

ギョウ界にて狼型のモンスター、その中でも接触禁止種が大半であるフェンリル系統にも似た姿。地上戦では無類の強さを誇る強靱な肉体と鉄をも切り裂く爪牙は脅威的である。

だが、それは違う。縄張りに侵入する物ならば例えモンスターでも襲う狂暴な性格である筈なのに、人を乗せていた。その隣には円形の半透明のクリアパーツから光の推進剤を吹き出しながら飛翔する女神候補生の姿。

常識的に考えてあり得ない光景だが、その大狼はこの世界のモンスターではなく、異世界から降臨した異常に満ちた者。二人を抱えて飛ぶのは非効率だと言い、姿を変化させたのだ。

「いい加減に状況説明お願いッ！」

凄まじい速度で空気の壁に激突する痛みから、巨体にしがみ付くアイエフは叫ぶ。

ネプギアは今にも泣きそうな、痛みに耐える形相でとても話しかけられる状態ではなかった。

黄金の大狼——空は暫くの沈黙の後に語り始めた。

女神の魂と肉体を生贖して発動する世界救済の魔剣。

——『女神を要求する未来』を。



私じゃない私が語ってくれた。

霧のような薄らと見える光景の中で未来を鏡のように映して見せた。

——そのまま、剣を離すんじゃないわよ。

——早くして。アンタの意志を、アタシに見せて：

映しだされた残酷な現実、私が震える手で血に染まった剣を持っていた。

——最初から、決めていたことだから

——や：いや、死にたく、ない：

——いいから早くして！せっかくのケツシンが、揺らいじやうでしよ：

お姉ちゃんに剣を渡した勢いよく突き刺し、今度は私が、まだ親に甘える双子の幼い命を無情に奪った。

——ええ、私は死ねない：死にたくないのよ。妹のような子を、一人残してなんてね

頭を壊されて、綺麗だと思っていた金色の髪がべつとりと血濡れたそんな姿でも、最後まで血の繋がっていない妹を心配していた。

——お願いだよ。わたしだってゲームギョウ界を救いたいんだよ。  
私は霧の中で私を見た。

家族を、友達を、一番大切な者を自分の手で殺して、その女神の最後は誰も近づかない秘境の洞窟の中で、誰にも感謝されず、誰にも信仰されず消滅した惨めな私。

世界を救うために全てを奉げた女神は、辛い現実を変えるためにひたすら一人で歩み続け、誰にも分からない場所で壊れ始めた。犯罪神の散り際の一言を現実にしたくなくて、その為の人々を幸福で満ち溢れるように努力し続けた。

けど、それは間違이었다。四大陸を一つにまとめた事は同時に競う相手を失ってしまった事、最初は混沌としてそれも収まるにつれて、人々は徐々に墮落し始めた。日々の生活の活気も女神の信仰心も薄れて、女神は力を失いモンスターの進撃を許してしまいくちの人々が亡くなった。

痛みを知った人々は昔の墮落を忘れるように自らの保身の為に兵器を作り始めた。その結果、自然は汚されいっしょか青空を見る事すら稀になっていき、女神はそれを止めようとするが既に人々の中では女神に対しての関心は無くなって、突然『黄金の頂』から現れた四人によって大陸は再び分断され、猛争と鮮血の渦が世界を巻き込んだ。——  
——そして私は過去の異物となって、みんなから姿を消した。誰も私を探そうとするものはいなかった。

絶望の中で、いまシエアエネルギーが尽きて死にかけている瞬間に私を抱き締めてくれたあの優しい光のお蔭で世界に絶望することは無かった。——そう私は優しい笑みを浮かべて、胸に手を当て儂い表情で、私に言った。

——最後まで諦めないで、みんなが幸せになれる選択肢はある筈だから

朝の鍛錬の後、朝食を取っていると私の目の前にプラネテューヌのゲームキャラさんが姿を現した。外形がディスクなので表情とか分からないけど、その切羽詰った声から話してくれた内容は『女神を要求する未来』の封印が破壊された事。

空さんが机を叩いて立ち上がった。私も直ぐに立ち上がり直ぐに部屋から飛び出した。

後を追ってきたアイエフさん達を空さんはユニちゃんに残るように指示、アイエフさんとコンパさんを伸ばした髪で捕まえると、そのまま黄金の毛をした狼に変身して女神化して空を飛んでいる私に追いついてきた。

昼時の空にはプラネテューヌの辺境、あの魔剣が封印されているダンジョン、ギャザリング城が見えた。

空さんは黄金の毛をまるで触手のように動かして、地面に転がっていたネズミ？モン

スター？を拾った。酷い怪我だった。

「コンパ！アイエフ！このネズミと城の前に二人ぶつ倒れている奴をお願い!!」

「空、貴方はその女神を要求する未来で一体何をするつもり!？」

「何もしない…手に入れても何もしたくないッ!!」

空さんは吐き捨てるように叫んだ。

「あんな魔剣は使わない方がいいだ。その方が…いいに決まっている」

大きく跳躍して城の門に到着する。

そこには二人倒れていた。初対面だけど私は知っていた。日本一さんとがすとさんだ。

空さんは人型に変わり、アイエフさんとコンパさんは二人と一匹の治療に取り掛かった。色々と思う所もあるけどそれでもちやんと従ってくれて嬉しかった。

「ネプギアッ!」

「はいッ!」

空さんは、恐ろしいほど綺麗な白と赤の拳銃を構え、私は剣と銃の両方の機能を持つマルチプルビームランチャーを持ち、プロセッサユニットの加速力を上げて突貫した。

ギヤザリング城の中、そのほとんどが「汚染化」モンスターした物だった。

昔の私なら数分も持たない軍勢を空さんより先に動いてモンスターを切り裂く、断末

魔を上げながら地に落ちる。曖昧な記憶でも、犯罪神を打ち倒した私の経験や武力は私に力を与えてくれた。飛び掛かる十体のモンスターを半分撃ち落とし、その半分は飛び蹴りとアクロバットな動きからの銃撃で一瞬で撃破する。

「邪魔だああああ!!!」

「退いてくださいッ!」

女神を要求する未来の場所を把握している空さんを先頭に私は我武者羅にモンスターを倒しながら空さんを追いかけていく。あの魔剣がもしマジエコンヌに渡ってしまったら、そんな最悪の展開が頭に浮かぶだけで息が詰まってしまう。怖い、怖いから。お願い、早く道を空けて!

「ネプギア、魔剣は地下にある」

「は、はい。何か作戦が……」

とても嫌な予感がした。空さんの二丁の拳銃に理解してはいけない術式が描かれた弾丸をセツトした。

「これじゃ埒が明かない——だからこの城まるごと吹き飛ばす」

「守って、くださいね」

「……………りよーかい」

沈黙がちよっぴり怖かったが、空さんはお城独特の縦が異様に高い廊下の奥の闇から

血色に光って向かってくるモンスターの敵軍に照準を向けた。銃口には私の全魔力より多い量が注がれていく、同時に空さんの体中が裂けて真っ赤な血が流れるが、空さんは止まらない。

「ヤグデイサ、ヴォルヴァドス——《神獣形態》ツ!!」

白銀の龍と真紅の龍が顕現され、産声にも似た咆哮を上げながら【汚染化】モンスターの敵軍を一瞬で消滅させ、制御ができないのか龍達が周囲を破壊尽くし、吐血した空さんは私を抱き締めて直後、落雷のような爆音と共にギャザリング城は完全に崩壊した。



## 篡奪

魔劍を封印する場所として隠されていた見上げる程の巨大なギャザリング城は今や瓦礫の山とかかしていた。具現された旧神の力は二匹の龍を模り、互いは城を中心に螺旋を描く様に破壊の限りを尽くした。その衝撃波でモンスター達の巣となっていた城はまるごと消滅、中にいたネプギアと空は地下へと逃げていた。

「……やられた」

「女神を要求する未来が……」

大量の砂埃を浴びた二人は目的の地まで辿りつき空は落胆、ネプギアは絶望色に表情を歪ませた。

ネプギアにとってこの場合は、良き隣人を家族を生贄して世界を救う魔劍を手に入れてしまった罪の始まり。

「(女神を要求する未来の情報)は徹底的に隠蔽してるのに……例えどんな物か分かってても、この場所はどこにも記してないのに……どうということだ……?」

ゲームギョウ界の管理者だった空は冷静に考えを纏める。

まずこの場を知っている者は、ギョウカイ墓場を治めるゼクスプロセッサ・ドラゴニ

スと空のみだ。今まで女神を要求する未来を使わなければならない可能性が出てきた時は空自身が一般人に化けて女神に臆げに情報を出したりしていたが、未来の選択肢を女神達に譲った時点でゲームギョウ界に介入することは辞めている。総合した結果、ゼクスが吐かされという可能性が一番だった。信頼を抱いているが故に信じたくなかったが、こうなってしまったことは仕方ないと割り切るのも大事だと結論付けた。

「ネプギア」

「……………あ、ああ……………」

女神を要求する未来を使い世界を救い、ゲームギョウ界に見放され、人々から忘れられた女神ネプギア。

そのあまりに残酷で無惨な記憶を持ってしまっているネプギアは地面に膝を落とし、魔剣が封印されている筈の祭壇を見つめながら、光泣き瞳から流れた涙が地面に一滴、二敵と墜ちていく。

ポソツ。

「……………あ」

「まだ未来を選択するときじゃない。諦めなくなかったら立ち上がって」

優しく頭に乗せた手にネプギアは砂埃で薄汚れた空の顔を見た。宝石のように綺麗だった。



連絡が終わり、空は通信端末を懐に仕舞った。

「……ゼクスが吐いた可能性を取り除けばそっちの可能性も十分にある。ネプギア、プラネテューヌに一度戻ってバーチエフォレストに向かうよ」

「……『女神を要求する未来は、どうするんですか？』」

「魔剣盗られて、異常事態が発生したんだ。関与している可能性はある……どうする？」

「——行きます」

涙を手で拭いて立ち上がった。その瞳には絶対に魔剣を取り戻す意思が燃えていた。

空は良かったと内心呟き、『神獣形態』を撃った反動で体中の筋肉が切れている状態であっても、体の中でガスを発生させ、それを利用しながら無理やり体を動かした。再生する時間は移動しながらも十分だと判断しての行動だ。魔力を充填させたヴァルヴァドスを瓦礫で埋まっている外へと通じる通路に照準を構えた。

「空さん」

「どうした？」

「私は、ネプギア私に誓います。悲愴な結末を選ばないって……」

「……………うん、頑張ってるね」

口だけで笑みを空は引き金を引いた。

応急措置を済ませ、二匹の龍達によって崩壊した城を前にして慌てるコンパとアイエ

フの前の瓦礫の山は白い閃光が吹き飛ばし、空とネプギアの視線は遥か向こうのバーチエフォレストを睨んでいた。

◇

「ああ、心地いい血潮の臭いが乗った風だ」

木々が生み出す自然の闇の中で黒と緑のレーザーロングコートを着た一人の少年はその手に神を輝し、神を殺す魔剣を地面に突き刺し、鋭く冷たい女性の声が闇の中に響く。「冒険的な輪廻の中で何度も繰り広げてきた猛争の渦の欠片。泡沫のように滅びる世界。しかし、驚いた。監理者は既にその座に存在することはなく、ただの傍観者と成り果てている。奇跡だと喜ぶべきか、悲劇の始まりだと悲しむか……さて」

いま紅夜の体を動かしているのは冥獄界にへ眠っていた、魂だけの存在。肉体は死滅した前代のブラッディハードは、静かにゲームギョウ界に満ちるネガティブエネルギーを感じ取った。人類の負の頂点たる存在と女神候補生だと生きてきた時代の中で見たことがない存在がこちらを見ているような感覚に笑みが零れる。

「私はただ暴虐にて人類を絶望に落す者。希望がどれだけ光輝に満ちた存在であるかを証明するだけの隷属でしかない。しかし、私は知らぬ女神の為に殺され利用されるのは

御免こうむる」

異なる色をした双眸を見開き、『指令』した内容を更に重くする。

所詮多種多様のネガティブエネルギーで作られた自意識が存在しない物は魂まで縛っておかなければ直ぐに寝プラネテューヌに向けて進行するだろう。

それはダメだ。自身の信仰すべき女神がゲームギョウ界の唯一女神になる為に、魔剣を完成させなくてはいけない。

「あの監理者を相手にするために出来れば楽園の蛇も吸収したかったが……まあいい」  
深く闇に夜空の如き血に染まった星の光が蠢く。

それは天敵に対する恐怖、それは強敵に対する武者震い。

地獄の中で猛争と鮮血によって磨き抜かれた狂気と戦意の塊は合唱を奏でる様に咆哮を上げる。

そこに、最早女神の加護等と言う世界を安定させる為のシステムは影響できないまでの深いネガティブエネルギーが渦巻いていた。正に天国を支配した地獄の亡者どもが、豊かな自然を食い潰す蛮族のように世界を貪る。

闇の世界と光の世界は繋がってしまった。最も恐るべき魔神の手によって。

世界に光の輝きの価値を忘却すれば、何度も証明してやると言わんばかりに先代のブラッディハードは女神を要求する未来の毒々しい刃を見つめた。

木々を揺らす風が、一瞬だけ刃を照らした。そこからはこの世の終末と再誕を望み狂信者の病的な顔が映った。



頬を優しく撫でる風、澄み渡る青空、眼下には自然のままに成長し続けた森林があった。日の光が風と共に踊る木々の間を通過して地面に差し込み、その光景はまるで宝石のように美しい。プラネテューヌのまだ秘境の地で空亡は川に足を濡らして長旅の疲れを癒していた。冷たい水がどこか心地よく、温かい陽光は眠気を誘うように優しい。そんな自然を前しながら、空亡の表情には影が差しこんであつた。

「……………ねえ、ゲーさん」

『どうした我が主よ』

無造作に両手を上げると一瞬光が両手を包み込み現れたのは氷のような蒼く、炎のように紅い二つの異なる属性が組み合わさりながら、互いを相殺せずに体現された矛盾を孕む二律背反の双籠手に封印された熾凍逆龍『デウスヴェテイン』は、主の声に目を覚ました。

「これから、どうしよう」

『……………』

「父さんは、私の事覚えていない。……あの様子じゃ私の事、分かかって拒絶した。……それってつまり、あの人はもう私に既知感があるだけの他人。……空さんも【本体】じゃ話を聞いてくれない……この世界に空さんの気配がするけど、力を使って探せば……約束、破る事になる」

『女神の加護……面倒な物だ。これだけ広範囲に付与されている状態で下手に主の力が発動すれば……世界の情勢は一気に傾く、脆い蜘蛛の巣だ』

優しい主だと『デウスヴェテイン』は心の中で呟いた。

この五年間、あの邪神皇の庭に放り込まれ直ぐに脱出した。そして空亡が戻った先には誰もいない自分の家。

父も母親の様な先生も、いつも怒っていた父の従者も、空の従者であるあのスライム執事も、————本当の姉の様に慕ってくれた妹も、誰もいない家を飛び出し、空亡はあらゆる世界を探した。そして見つけた物からの言葉は拒絶の言葉だった。それでも自棄にならず約束を守り、こうして誰もいない場所をひたすら耐える主に『デウスヴェテイン』は主を泣かせた奴に対して憤懣を抱いていた。

「誰もいない家になんか……帰りたくないよ……」

『……主よ』

生きる者が存在していない辺境の地で降臨していた己に親子愛等理解できない。た



だ主の力に一目ぼれして付いてきた彼は幼き主の慰めの言葉はないかと必死に頭を動かすが、全て無駄に終わった。理解できない物をいきなり理解しようとしても頭が痛くなるだけだった。

『む……………主よ』

「どう、したの?」

『天壤の邪悪龍から連絡が来ている。繋ぐか?』

「……………うん、お願い」

突然の同類であるドラゴンからの連絡に主の許可を頂き、『デウスヴェティン』は連絡回路を繋げた。

炎の如き紅蓮の赤を中心に氷結の青白いが覆う籠手の宝玉が黒に染まり、能天気な紅夜に仕えるドラゴンの声が響く。

『お久しぶりです。空亡のお嬢!先ほどは本当にごめんね!ウチの相棒はいっぱいおっぱいな奴で……………』

『……………同じドラゴンとして、もう少し威厳のある言動が出来ぬのか?』

『うるせーよ。ケツドラゴン!!僕はねおっぱいと世界に響かせたいの!でも相棒が今シリアス通り越してダークだからおっぱい講義出来ないんだよ!昔なら思春期の男の子みたいに顔真っ赤にしながら聞いてくれたのに……………』

『誰がケツドラゴンドツ!!燃やされたいか!!凍らせたいか!!』

『破壊神の腰からヒップにかけてのラインを見て鼻血出したのはどこの誰だったかな』

♪

『こ、このおっぱいという萎んでいくためだけの者に執着する愚か者め!』

『あ、あああ!?!』

あーだ、こーだ。口げんかを始める二匹のドラゴンに失った日常を思い出して、懐かしい思いを抱く。

「二人とも、仲いいね……」

『それは否!我は——』

『——宿命の怨敵だ!』

呼吸の合った突っ込みに「うん、やっぱり仲良し」と今度は心の中で呟いた。

「ところで……どうしたの?」

『あ、そうだった……実は助けてほしいのだけど』

『私は反対だ』

『……まだ内容喋ってないよ。早漏野郎』

『ぐっ……、どうせあの男関係だろう?』

デペアは黙り込んだ。それは肯定という意味であの男と、きたら零崎 紅夜のことだ

ろう。と空亡は直ぐに思い浮かんで顔を暗くする。

『怨敵よ。あれは生きる為に死ぬ輩ではない。死ぬことが何事に敵わない祝福、その為に生きている輩だ。そんな奴を救つて何になる。なにより——主を泣かせたことが一番気に入るわね』

『あの体は罪遺物なんだ！もし相棒に異常が起きて暴走してしまつたら……』

『その時は闇女が止めるであろう。あれは狂愛者、例え魂が違つても肉体が手に入るのなら喜んで全力を出すだろう』

「……デーさん」

救済とは相手の運命を変える事、運命を変えた代償は誰が受けるのか、助けた者が責任を受け持つ事。

口癖のように力を行使するあまりに大きな責任について、教えてくれた先生という存在。

『確かに彼奴は女神に討たれる事が一番いい選択だと思つている。世界的に見ても一人の犠牲で世界は安定するなら、凄くいい選択だと思ふよ……思ふけど……』

徐々に声が小さくなつていくデペア。そして素直に空亡もあの男を凄いと思つた。自分の身を犠牲して世界を安定させようとしているのなら、それは間違いなく英雄の行為。口にするのは簡単でも、誰にも出来ない行動だ。だが、感情の問題は難しい、誰だつ

て他人と知人をどっちを助けられるのなら、先に知人に手を伸ばす筈だ。それが世界を救う事にもなり、世界を殺す事にもなりえる。

「……デペアさんにとって、あの人は大事な人？」

『まだ会って十年も経っていない。キャプテンと比べれば全然対して付き合いじゃないけど……誰かの為に頑張る命を張るのってかっこいいじゃないか』

『お前は子供か……はあ、最終決定は主にある。助けるのも助けないのも決めるのは主だ。私は貴方の矛と盾、望むのなら世界を相手にしても戦いましょう』

——あの人は父さんではない。

——あの人は私を拒絶した。

——あの人は世界の為に命を売っている狂人だ。

「先生とその人って、仲いいの？」

『相棒と破壊神？仲良くも悪くもないけど、このことには駆けつけると思うよ』  
「分かった」

それだけ分れば十分だと、空亡は立ち上がりコートで濡れた脚を軽く拭いて、動きやすい靴を履き直ぐに走りだせる準備を整えた

『……いいのか、主よ』

「良いも悪くもないよ。私はただ、『おはよう』『おやすみ』って、みんなが笑っていた……」

あの日々を取り戻したいだけ。熾火と凍獄の双籠手——禁手化」  
 『Deus vet einn dragon over booster!!!』

紅蓮の炎熱と白銀の氷結、異なる二つの属性を併せ持つドラゴンを象った鎧を身に纏った空亡は空へと飛ぶ。全ては日常を取り戻す為。空亡が飛び去った後には小さき炎と一部凍った川だけが残されていた。

## 悪獣

日本一、がすと、ワレチユーをイストワールが派遣していた医療機関に預け、ネプギア達はイストワールの元が集まっていた。厳格で広い空間の会議室に映し出された巨大なディスプレイには初心者が多少苦戦するレベルで合ったバーチエフォレストの変わり果てた姿があった。

「覚めない悪夢を見ているようだわ」

山のように巨大な樹は年老いた老人のようにやせ細りながらも、生命力が溢れた場所。だが、今は鮮やかな緑は一切なく、常闇を思わせる黒色に染まり、ノイズのような不規則で不安定な刺青に浸食された鳥形「汚染化」モンスター達が周囲を飛び回っている。恐らく樹の中にも想像を絶するほどのモンスターの数が潜伏していることは容易に想像がつき、そこはまるで多くの死者が眠る恐ろしき墓場のように見えた。

誰もがその光景に息を飲み、頭を抱えたアイエフの言葉に全員が頷いた。

「空さん、冥獄化した部分を浄化することは出来ませんか？」

イストワールの言葉に全員の視線が空に収束した。ゲームギョウ界という概念が生まれる前から生きて、数年前まではこの世界の管理者を勤めていた存在、ありとあらゆる

る始まりと終わりを記録し続けた者は、初めてのこの事態に悩むように声を伸ばしながら

「……出来ない事はないけど、ダメだ」

絞り出すように答えた。

「出来るのにどうしてダメなの!?! バーチエフオレストはプラネテューヌに近いのよ!! もしモンスターがこつちに押し寄せてきたら一たまりもないわよ!!」

叩きつける音と共に立ち上がったアイエフは声を上げた。

「——切り捨てるんですか」

烈火の如く怒りを露わにするアイエフとは対照にコンパは静かにされど氷のように冷たい声で空を睨んだ。

「アイエフさん、コンパさん落ち着いて……」

「イストワール様! こいつは血も涙もない殺戮者ですよ!! ネプギアを蘇生したことには感謝してるけど、それは結局未来の為! 全部未来の為! それだけであっさりと多くの命を切り捨てるんです! 生殺の権利は一人一人にあつて当然なことで、お前が定めるのは間違っている!!」

「……………」

イストワールの静止の言葉を振り切つてアイエフは空に向かって怒号を叫ぶ。それ

に対して、コンパも誰も見たことがない冷徹な瞳で口を開かず睨んでいるまま。実際空も人の命はシエアエネルギーを生み出す装置で、ゲームギョウ界のバランスを保つための数式を見ているのと言われても、否定する要素はない。昔の自分を思い出せば、そうだと云つていいぐらいなのだから。

「……アイエフさん、落ち着いてください」

「ネプギア!! 貴方もネプ子の妹なら、女神なら分かるでしょ! こいつは女神の価値を見出す為なら他人の生き方なんて簡単に変えるのよ!」

「落ち着いてください!!」

「ツ!!」

温厚なネプギアとは思えない大きな声と共に溢れた圧迫感にアイエフの口が閉じる。

「空さん、貴方がプラネテューヌを切り捨てるとは思えない。そして空さんの実力ならバーチェフオレストをまるまる消滅させることも可能ですよね?」

「……良く分かったね」

「空さんの異次元的な力を見てきましたから」

四女神を相手に大人気なく時に圧倒的な力で、時に翻弄しながら圧倒してきた空の強さを見てきたネプギアは頷く。

「一応言っておくよバーチェフオレストに憑りついた濃密なネガティブエネルギーを完



全に浄化するには、大量のシエアクリスタルと女神の力、そして時間が必要だ。油污れとか簡単に出来るけど、洗い流すのは難しいと同じ。なにより——ダンジョン事態の【汚染化】は世ほどのことがないとならない。それも一気になることはない」

【汚染化】は他人のネガティブエネルギーを吸収し続けて起こる現象。

それはモンスターが出現するダンジョンでも同様の現象が起きた事がある。ただそれは、統治する女神がいない大陸で、女神の加護が無い場所で、しかも自殺スポッドのような負が極度に集まりやすい場所、【汚染化】したモンスターがダンジョンに入りきれず程の数が常に闊歩して、更に長い時間を掛けて大地を浸食していくことで、ダンジョン【汚染化】に繋がっていく。

ゲームギョウ界の歴史の記録者であるイストワールの力があれば、もし女神が死ぬという世界が変革する程の出来事があれば空より早く正確に探知できる。つまりパープルハートが捕まっているこの状態であっても、パープルハートによる女神の加護は、プラネテューヌを守り続けている。とどのつまり、これは誰かが意図的にした現状であることは直ぐに検討がついた。

「……犯人はお兄ちゃんですか」

「それ以外に考えられないんだけど……ブラッディハードとしてのレベルを考えるとここまでの【汚染化】は時間がかかる。それにあいつはブラッディハードで初めて善意に

よる女神の為に必要悪存在になったんだよ。女神が守ろうとする大地を、こんなに穢す行動は性格上おかしい」

そうですか、と頭を下げるネプギアに対して空は再び口を開く。

「——紅夜は乗っ取られているね。それも前代のブラッディハードに」

「空さん、それは……!!」

「女神を要求する未来について僕は一言も紅夜に話してない。けれどこの現象はブラッディハードでないが無理だ。紅夜じゃない誰か——ときたら、それしかない。モンスター化したブラッディハードの魂が憑りついたなら今頃暴れるだけ、知性と理性がある行動をしている時点で察しがつく。相手はネクストフォームに至った最悪のブラッディハードだ」

ネクストフォームという単語に全員が頭を傾げる。それに対してイストワールが説明をいれようかと空をちらりと目で見るが首を横に振った。

「アブネスなら一気に殲滅しにくるだろうし、キセイジョウ・レイは目立ちたがりだからそこらへんで暴れまくるだろうし、うずめならもつと派手に欲求を満たす為に遊ぶだろうし、ニーヴァならまず僕を狙ってくるだろうし——アイン・アルだな」

「……分かるんです?」

「女神を要求する未来についてよく知識があつて、こんな戦う場所を作っている事を考

えて逆算した結果だよ。中二病で、王道的な展開が好みだからね。紅夜と相性は抜群だね」

そういつて、空は立ち上がった。会議の必要はもうないと言わんばかりに。同じタイミングでネプギアも立ち上がる。どうやら付いてくる様だ。

「バーチエフオレストを抹消する。それが僕が提唱する最も犠牲が少ない選択だ」

「……………」

アイエフとコンパも目を合わせて頷き、立ち上がった。

「…………アイエフさんとコンパさんはもしもの時の為に住民の避難誘導をお願いします」

「えっ…………ギアちゃん……？」

自分の知っているネプギアじゃない。コンパは今まさに槍袵の戦場に向かう死を覚悟した兵士のような暗い瞳をしたネプギアに驚きを隠せない。それは隣に座っていたアイエフも同じだった。

「わ、私達、仲間でしょ？どこに行くとしても…………」

「仲間…………ですか。それじゃ尚更です。来ないでください」

はつきりとした拒絶の言葉に二人の思考が追いつかない。そんな二人を無視して部屋から出ようとする空についていく。

「今の僕じゃ内部崩壊させるほどの破壊力しかない。だからバーチエフオレストの中央

区に行く必要がある。……ギョウカイ墓場のように女神の力が十全に発揮できない場所に行くんだよ？」

「覚悟の上です。女神を要求する未来を悪用すると言うのなら、私は誰とでも戦います」  
例え空がここで気絶させようとさせても、彼女は避けるだろう。そして空の行く場所に付いて行くだろう。この世界の女神として、可憐な少女とは思えない覚悟をした瞳に空は複雑な顔で嫌味を言うように呟く。

「……………今の君は神様らしいよ」

「お嫌いですか？」

「うん、嫌い」

そうですか、と含み笑いをしながらネプギアは扉を閉めた。

死に場所を赴く二人に、アイエフ達は呆然と見つめ、イストワールは秘かに調べた判明した女神を要求する未来の一部の情報を思い出しながら

「人の業を冥獄神が背負い、人の願いを女神が背負い……人間は何を背負って生きていくんでしょうね」

と、悲しげにつぶやいた。



【汚染化】バーチエフォレスト。ネガティブエネルギーがゲームギョウ界中に付与されている女神の加護を無効にさせるほどの濃密なエネルギー。故にそこに出現するのは、剥き出した負によって闇の欲望に魂すらも浸食された地獄の悪魔達。

プラネテューヌ教会から発令された非常事態警報によって、バーチエフォレストの近くには軍が防衛ラインを作り出している。他国に比べてシェアの減少率が一番少なく、教会のトップが優秀でありその指示もあつて短時間で必要最低限の事は出来ている。

「……………」

「驚いた？中はもつと凄い事になっているよ」

そんな場所に二人だけ入口に立っていた。

一人はこの国の女神候補生ネプギア、もう一人は元ゲームギョウ界の管理者である夜天空。

一歩踏み出すごとに数えるのがバカらしくなるほどの蟻が大軍を思わせる程の気配

が、近づく程に肌を刺すネガティブエネルギーが乗った黒い風が吹いてくる。

数日前にゲイムキャラを探しに来た時は、まだ光が差し込み自然な美しさがあったが、今は光を通さない漆黒の闇がダンジョンを飲み込んでいた。

「最終確認だ。本当に来る？死ぬ確率の方が高いよ」

「……空さんこそ、怖くないんですか？」

「僕ほど命が軽い奴はいないんだよ。……つで、どう？なんとか出来ても手柄は全部君に——」

全てを言い終える前にネプギアに淡い光が包み込まれ姿が見えなくなる。

光が晴れると、そこには深い紫色のプロセツサクニットを纏ったパープルシスターの姿があった。空は驚いたように目を開き、女神化したネプギアの戦意ある答えに視線を魑魅魍魎が集結しているだろうダンジョンの入り口に視線を変えた。その手には二つの魔銃を握りしめて。

「それじゃいく『黄昏の時間は終わったか』!？」

突入する為に構えた瞬間、ダンジョンの奥深くから切り裂くような声に二人の動きが止まった。

「……貴方が、アイン・アルですか」

『ああ、そして我が手中には女神喰らいの魔剣がある』

「それを聞いて安心した。本当なら色々問いただしたいんだけどは、君を討たせてもらうよ」

『それは、楽しみだ。だが——私は黒き女神以外に殺されるつもりは一切ない。来い我が深淵にて相手をしてやる。貴様たちは大事な世界救済為の生贄だ。私が直々に勝負しよう』

アイン・アルの言葉にネプギアは直ぐに理解した。

このブラッドデイハートは黒き女神にブラックハート——ノワールに殺されたんだろう。それは誰よりもゲームギョウ界を治めれると信じていたから。ブラッドデイハートは少しづつ歪んでいく人の心を絶望によって一度破壊尽くし、女神に討たれることで人の心を再構成する為の必要悪。

そして、ブラックハート以外の女神を女神を要求する未来で殺して、世界の意志は残された希望の女神ブラックハートに集中し、自身が討たれる事でゲームギョウ界を唯一の女神が支配する悲劇ながら希望が残された物語を作り出す。それがアイン・アルの目的。

「……………ふざけないで、ください……………ッ」

「ネプギア!!」

「何のために四人も女神がいると思っっているんですかッ。人が一人で生きていけないよ

うに、女神も一つじゃ……存在する意味がなくなるんですよツ墮落していくんですよツ」

ギリギリと嫌な音を立てながら握りしめられる拳。嘔吐感を必死で止める絞り出す声。

その瞬間には地面を蹴り、バックプロセッサから吹き出す光の推進剤によって迷いなくダンジョンの中に突撃する。少し遅れて空も急ぎで躊躇なく闇が支配する空間に飛び込む。

二人ともどこにアイン・アルが居るかは想像が出来た。否誘導されている事が。

ここは元々木の中のダンジョンだった。故に広大な空間が広がっている勿論それは【汚染化】により、星が輝かない闇夜へとなっていたが、底なしの殺意と餓えを見せる鈍い紅い瞳達が蟻の大軍のように蠢く、それを見れば先の道は自ずと分かった。

「来たか、我らの天敵」

モンスターに一度も襲われずに二人は、数分でアイン・アルの居る空間に到達した。そこは少し前にゲームキャラが居た場所、バーチエフォレストの中央に近い場所であり同時に天上に近い場所でもあった。

「……お兄ちゃんツ！」

「紅夜！デペア！！返事しろ」



「無駄だ。既に我が深淵の中に声を届かせる為には、まず我を倒すことだな」

微かに光が差し込む空間の中で異なる色をした双眸が薄暗い闇の中で微かに見えたのは間違いなく、ブラッディハードの姿をした零崎 紅夜の姿。

「人の心に永遠に刻まれる温かな希望の為に、まずは全ての人類を絶望の坩堝に叩き落とす」

「女神は……女神は複数いて意味を成すんですッ！」

「ネプギア、こいつに言葉は通じないよ。あいつに届くのはブラックハートを賛歌する人々の声だけだ！」

同僚を殺し、女神を殺し、最後に女神に殺された世界を一つにしたブラッディハード。

全ての悪行を背負うことで、全ての絶望を生み出すことで、作り出された光の唯一神。

果たして、その先の未来が幸福が続いたのか、如何なる終末を迎えたのか、それは歴史の闇に葬られた。

しかし、目の前にいるブラッディハードは間違いなく、それを正しいと信じている。

絶対に折れぬ確固たる自我はネガティブエネルギーを取り込み続け、負の意志によつて左右されモンスター化するのではなく、逆に自身で生み出したネガティブエネルギーでモンスターを乗っ取り、世界終末を謳う大軍を作り出した女神すら絶望させた最悪の悪獣を総べる神へと至った。

「さあ、今こそ世界終末の時計を鳴らそう——」

紅夜の体に憑依したアイン・アルが獲物を空に掲げた。

足元から溢れる極限量のネガティブエネルギー、咄嗟に二人の銃口が火を噴いたが、弾丸は漆黒の暴風によって全く別の場所に逸らされ、二人も鉄のような重たい暴風に体を吹き飛ばさ壁に叩きつけられる。

「狂気覚醒——ネクストフォームッ!!!」  
極上の獲物に狙いを定めた獣の如き笑みを浮かべ、  
発せられた呪祖に世界は悲鳴を上げた。

## 魔劍

荒れ狂う嵐の如く激しネガティブエネルギーが、常闇のような空間を作りだし、完全に姿を消した。同時に星海の様な光たち、この世に憎悪を抱き破壊の限りを尽くすように作られたモンスター達が、世界を喰らいように空いた大穴に集まっていく。その光景は冒険的な蠱毒。冥獄界の悪鬼群衆の中で選り抜かれたモンスターをこちら側に召喚させ、取り込む事でそのモンスターの性質を解析、付与させることが彼女の唯一絶対の神格技能ハードモジュール——無尽サルベージ・インフェルノの塵塚怪神。それは彼女の夢、彼女の希望、彼女の全てを持って初めて生み出された王の如き力。

「ネクストブラッディ・ベルセルクシフト——完了」

それが彼女の心の形だった。

闇一色に染まった深い霧が晴れ、重厚な足音が、ネプギアの女神としての本能に反応する。——勝てない、と。

個々は既に女神の加護を受け付けない魔境。本来であるのなら、女神化すること事態が大きく負担が掛かる所をゲームキャラの力で無理に底上げして本来の力を出し切っている。並行世界で死んだ女神の記憶と経験を取り込み、その意志の力はプロセッサユ

ニットを一段階進化させるにも至った。「汚染化」したモンスターすら瞬殺できるであろう女神としても進化した筈のネプギアであっても、あれはこの世で生まれてはいけない存在、それがはつきりと分かった。

「紅夜の体を媒体にすれば、ネクストフォームなんて簡単に出来るだろうね。君なら罪遺物の一片すら使える自我がありそうだ。それに君の手には魔劍がある」

守護女神とブラッディハード。

打ち倒す側と打ち倒される側という決定的な因果関係を破壊するネクストフォームと神を喰らいその力の分だけ力を発揮する呪われし魔劍。

極限の闇で構成されたプロセッサユニット、あらゆるモンスターを吸収して構成されたそれは、強固で柔軟でなにより触れた者を呪い殺し、支配下に送る感染力と殺傷力が極めて高い病原菌を纏っている代物だ。

「行かせてもらうぞ。ゲームギョウ界の平和の為に」

「!?!」

言い切る前に空が、刹那遅れてネプギアが動いた。同時に隕石が墜ちたような爆光と轟音がバーチエフォレスト揺らした。

「ネプギア!!魔劍の攻撃は全部躲せ!小さくても致命傷になる!」

「分かっています!……!けど!」

「行け、極上の希望だ」<sup>えき</sup>

崩壊した足場から跳躍することで魔剣の一撃を躲し、肩を並べる二人。それを鮮血の如き真紅の瞳が捉え、無造作に手を鳴らした瞬間、闇が動いた。

「さあ、殺せ」

それは飛び、跳躍し、乗って空を埋め尽くすように散開した【汚染化】モンスターが作り出した巨獣の手だった。

直ぐに二人は何もない真後ろの空間に飛んだ瞬間、下からも迫っていた手と手が合わり、空間を潰した裂帛の爆音が響いた。その山とも思えるモンスターの山脈にネプギアがM・P・B・Lの銃口にシエアエネルギーを込めた弾丸が穿つが、全く意味を成さない。それほどまでに暴力的なまでの大軍だった。モンスター共も自らの多さを理解していた。質ではなくただ量突きとめた例え数百の同類が滅せられても、一瞬でその穴を防ぐことが出来る展開力。無限とも言える黒き海に大穴を穿ったのは二つの魔銃、周囲の光輝く聖剣がその破壊力を物語る。

「やはり貴様は私の脅威だ」

「……ネプギア、死なないでね。カバーできるほど余裕はないから」

アイン・アルの意識がモンスターに指令を出す。地震を思わせる振動と共に眼前の下にあった黒い大海が持ち上がった。一つ一つがアイン・アルのネガティブエネルギーに

乗っ取られた〔汚染化〕モンスター。女神でなければその爪牙にあつという間に解体される狂暴性と鳥肌が立つ殺気。それ等が一つの大津波となつて押し寄せるのに対して負を浄化する聖劍の流星が再度風穴を空ける。崩壊していく暗き大軍の中で神殺しの気を感じた瞬間には魔劍が振り下ろされ、十字に重ねた魔銃で受け止める腹部を消し飛ばし距離を離す。脚部に人間ならば呪殺するほどのネガティブエネルギーが込められていたが、その程度で精神に異常が出る程、空と言う存在は軟ではなかった。

「そこですッ！」

そしてこの戦いは二人だけの物ではない。空の出方に注意が集中していた隙を狙つて肉薄したネプギアの斬撃がアイン・アルの横腹を切り裂いた。苦悶の表情を浮かべることが、直ぐに他のモンスターを吸収することでプロセッサユニットは何事も無かつたように再構築される。それ以外にエネルギー状に展開してただけのバックプロセッサが硬化化して、機械的で鬼の様な腕へと変化をした。その指先から黒色の鋭いビームブレイドが伸びる。指が人間サイズの蠢きとその先に伸びる光刃はまるで修羅を連想させた。鬼の腕と化したバックプロセッサユニットを翼のように広げ、その手に握る魔劍と合わせて十一の刃が、それぞれ別の角度から襲い掛かる。

「女神はもとより、何故貴様は戦う監理者よ！」

「歴代のブラッディハードは自らの意志で滅びの道を選んで女神に討たれてきた。目的

を果たす前に魂までモンスター化した奴もいたけれど、誰だって後悔しない道を選んだ……だけど今回は違う」

ブラッディハードは誰だってなれる存在ではない。人々の負を受けても己を保ち続ける愚直なまでの確固たる自我と意志があつて初めて資格を得る。同時に女神の転換期というシエアの不安定な時期に、女神の加護が薄くなつた場所で負が集まる場所へと偶然にも辿りつけた者だけが手にする禁断の力。手に入れて時点で運命が決まり、行使した時点で結末は定められる者。そう、ブラッディハードは祭り上げられる女神と同じ、英雄や救世主に近い役割なのだ。それは人という生き物であるが故に様々な形を作り出す。

「君の体は君の物じゃない。だからこそ、止めさせてもらおう」

「誰もが悲しみ苦しむ選択なんてさせません！」

「小賢しいツ!!」

空は周囲を覆うモンスター全てを把握した上での確に捌く星が誕生し生まれるまでの長い時間の中で磨き上げた絶対的な第六感と技能、ネプギアは過去の孤独で戦い続けモンスターを殲滅する為だけに極限まで鍛え上げた洞察力と技能が、戦いの中で遺憾なく発揮された。ビームブレイドを展開させた指先が飛び出し、空中を縦横無尽に駆け巡る。襲い掛かるモンスターの爪牙を受け流しながら、空中にシエアエネルギーで展開さ



せた魔法陣を連続で蹴りながら移動する様は電光石火の如き、それでも躲しきれなくその琥珀のような肌に幾度の傷跡を残していく。それは空でさえも一緒だった。ティシフォネに傷つけられた傷が再生できない程まで握りつぶされた空に取つての核が崩壊させられ、残り少ない魔力も環境再生に使つてしまえば底が見え始める。出来るだけ飛翔に使う魔力をセーブする為に襲い掛かってくるモンスターを足場にしながら、アクロバットな動きで次々仕留めていくが、アイン・アルの猛撃が時に腹部を抉り、穿つ。だが、それでも女神を要求する未来の剣閃は掠りもしなかった。

「こいつはブラッディハードとして最も必要とするものが欠けている！だからこそ、使わせてもらったのだ。ただのモンスター化して災厄を生み出す神、大禍津日神となるくらいなら、有効活用させてもらおうとな！」

「冥獄界で眠っていたのなら見たろ！この子も統一されたゲームギョウ界の中で最後は人々に見捨てられた女神なんだ!!空回りし続け墮落して終わったノワールの終わりを同じことをするのか!!」

「今度こそ私は人の心理に永遠に刻まれない傷跡を刻み付け、絶対なる守護女神を！永遠に信仰される物語を作るのだ！だから、その為にこの魔劍の生贄となれ!!輝かしい次世代の為に!!」

「そんな……そんな身勝手な事の為に祭り上げられる女神の事をなんで考えられないん

ですか!」

荒れ狂う激情を抱きながらM・P・B・Lの砲撃がアイン・アルの左バツクプロセツサを貫いた。即座にそれは周囲のモンスターを吸収して、再生して腕ではなく巨大な砲撃機構を備えた者へと再構築される。アイン・アルはモンスターの大軍の中に姿を消した。それと同時に途方もないぐらいのネガティブエネルギーの収束と共に空とネプギアはモンスターの壁によつて行き場を制限されていく。

「……………本当、こんな時に命が軽いのは助かる!」

「空さん!」

空がネプギアを掴んで、まだ覆っていないモンスターの穴目掛けて投げた瞬間、空間事消滅させる灼熱の砲撃がモンスターを巻き込みながら光の中で消える。衝撃破によつて生み出される鉄の様に重たい風がネプギアの態勢を大きく崩しながら、それでもなお執念深く襲い掛かってくるモンスターによつて頭部のプロセツサユニットが噛み砕かれる。

「は、離れて!」

マルチブルビームランチャー

M・P・B・Lをモンスター突き刺して、無理やり引き剥がし射撃にてとどめを刺す。

左側の視線が真っ赤に染まる手で触れなくても、モンスターの牙が突き刺さってままだという事が嫌でも分かった。痛みに堪えながら、闇の砲撃によつて収まった光の中で、

見たのは。

その胸に深々と女神を要求する未来が突き刺さり宙にぶら下がった空の姿だった。

「……私の勝ちだ」

「……………うそ……………空さんツ!!」

女神を要求する未来が怪しく刃が発光しながら空の全てを喰らいにかかる。その技術、その魔力、その体全てを。アイン・アルにとつてこの時点で自分の目的は達成できたと歓喜に満ちていた。ゲームギョウ界が生まれる前から存在して、得た全てを女神を要求する未来を通して会得することによって誰も知らないネクストフォームのその先すら得られるかもしれない。その力を使つて全人類を永遠に癒えぬ絶望に叩き落とし、唯一信仰する女神の価値を永遠とする目的が「捕まえた」

「な……に……………?」

右半身のほとんどを失った空がゆっくりと面を上げた。残った左腕でアイン・アルの腕を掴み、更に深々と女神を要求する未来を自分の体に突き刺した。今にも死にそうな表情だが、その唇が弧を描くそれはアイン・アルに危機感を生み出すのに十分で、直ぐに魔劍を抜かず空の体を押す前に、左腕の袖から飛び出した黄金の剣『クタニド』を逆手に持ち、女神を要求する未来を持つ手事、切断したと同時に腹部を最後の力を振り絞った閃光の如き脚撃にアイン・アルと空との間が大きく開く。

「ぐ、貴様あああ!!!」

「最初っからこれが狙い、だったんだよね……ネプギア、ゴメン後は君は決めて」

鬼の形相で距離を詰めるアイン・アルに空は女神を要求する未来を抜き取り、ネプギア目掛け投擲する。その瞬間、アイン・アルのビームブレイドを発生した鬼の手の形をしたバツクプロセッサによって生み出された斬撃の嵐を前に散った紅い花のような惨状で、ゆつくりとモンスターの蠢く暗黒へと姿を消した。

「……もう決めていますよ。空さん」

「何をするつもりだ!!それはや、辞めろおおおお!!」

此方に向かつてくる女神を要求する未来。嘗て家族を友人を殺した自身の罪の証。それを前にして、ネプギアは居合の構えを取り、

「魔剣に頼らなくても、未来はちゃんと作れるんです」

光芒一閃。光の軌跡は女神を要求する未来を通過して、硝子が砕けるような音共に世界救済の魔剣は、使われることなく本来の使命を果たさないまま、アイン・アルの絶叫と共に力を失い、ただの鉄屑となってモンスターの大軍の中へと消えていった。

## 神殺

「あ、ああ………！」

手を幾度伸ばそうと既に遅かった。ネプギアの一撃によって切り裂かれ、砕かれた『女神を要求する未来』は力を失ったただの鉄屑となってモンスターの蠢く、黒き大海へと落ちていった。

「これが私の選んだ道です。誰も失わせない、全員が生きて犯罪神を倒すその結末に魔剣は必要ないんです。必要になってはいけません」

ネプギアの声にアイン・アルは反応を見せなかった。

これほどの衝撃は目の前で両親を目の前で食い殺された時か『守護武将』に選ばれた時だけだ。夢の中で選んだ結末の根底から覆ってしまった。唯一女神が絶対的指導権を握るそんな輝かしい未来の為に、魔剣は必要不可欠の存在、あれを無くして幾ら女神を滅ぼしても、残された女神がネクストフォームに至ったブラッディハードを抹殺することは出来ない。絶対的な差を水平にするための魔剣を失ったアイン・アルは今にも泣きだしそうな表情で消えていく刃の欠片を見つめていた。

「犠牲があれば確かに事は簡単に進みますよ。人だって簡単に納得してくれません。それ

でも、私は嫌なんです犠牲前提の未来なんて、絶対に認めたくありません」

「……………世迷言だ」

「そうかもしれない。だけど、後悔だけは、したくないから」

静かに、意志の強さを心の奥に留めたネプギアの言葉がアイン・アルを現実へと戻した。

「……………なら」

黒ずんだ瞳がネプギアを映した。瞬間、嫌な気配を感じ取ったネプギアが後ろに下がったが目の前には瞬間移動を錯覚するほどの速さで肉薄して、鬼の様な腕の先からビームブレイドを発生させたバックプロセッサが、左手を切り裂かれた空間から、ネプギアの体を突き刺した。

「ぐ、ううう……………!?!」

咄嗟にM・P・B・Lで幾つか弾くが、一部のビームブレイドはネプギアの体を貫通

した。臓器を幾つか損傷したのか口の中が鉄味が充満するが、直ぐに腕の関節部分を撃ち抜き事で追撃を躲す。反応が遅れば突き刺さった部分を広げる事で更なる体中にビームブレイドの軌跡が走ることは容易であったが故に判断。それくらいの技量は空が彼女と共に連れてくることを許可した時点から知っていた、アイン・アルは血黒いアームプロセッサをネプギアの喉へと握りつぶすように掴んだ。

「……………」

「貴様の都合のいい夢の中で死んでゆけ、女神ッ!!」

弾かれたビームブレイドを匠に操作してM<sup>マルチプルビームランチャー</sup>・P・B・Lを突き刺して機能を停止さ

せた。反撃の繰り出した拳、蹴りがアイン・アルの体に打ち込まれるが、眉一つ動かず静かな狂気を宿した瞳で首を絞める右手の強さを高める。

「(こ、このままじゃ……)」

空だからこそ戦えたネクストブラッディ・ベルセルクシフト。

ネプギア自身、最初に邂逅した時に真面に戦ったら負けると本能で分かっていたが、逃げたとしても逃げ切れるはずがないのは分かっていた。もし奇跡的に見逃されたとしても、バーチエフオレストを埋め尽くすほどの「汚染化」モンスター達をアイン・アルが親切に冥獄界へ帰すなんて事は絶対にありえなかった。彼女の目的は女神の唯一化、理由は知らないが彼女が信仰しているノワール以外の女神は殺される事も予想が付く。

「(お……お姉ちゃん……)」

薄れていく意識の中で懐かしい記憶が走馬灯のように見えた。

目の前のアイン・アルと名乗る体の持ち主である紅夜と共に最愛の姉であるネプテューヌが事務室から逃げて、プラネテューヌの街中に人に話を聞いて探し回ったり、

空の訓練によってボロボロになった紅夜とネプテューヌを回復させるために回復魔法を習得した時は涙を流して喜ばれたり、楽しかった記憶達が次々に映しだされる。

「……………」

——ダメだ。

ここで倒れたら、何のために生き返った。

女神を要求する未来を破壊する為に命を賭けてくれた空の行為は塵となる。薄れて意識の中でネプギアは自身の舌を力の限り噛んだ。形状し難い激痛によって意識は覚醒、首を絞める腕に両手を掴んで口から、体の至る所を突き刺され血を流しても折れない瞳でアイン・アルを睨みながら、その力で拘束から逃げだろうとしていた。

「いいだろう。そこまで抗うのなら」

空によって切り裂かれた袖から先がない左腕の先が蠢き、骨から肉体をそして鱗重なり合って再構築されていく。

完成したそれは、全てを切り裂く鋭利で逆立った甲殻を纏い、指先には血が固まって黒く染まった禍々しい赤黒い生爪、脈動するように点々と怪しい光を甲殻の間から点々と光る。それは人の腕でもアームプロセッサを装着しているようにも見えない。それほどまでに生々しいそれは、ドラゴンの腕。ブラッディハードがモンスター化した姿である大禍津日神の一片の姿。この世のネガティブエネルギーを超圧縮して、罪遺物を



使つて再構成されたそれはまさしく女神殺しの腕。絶対的な力の象徴が、今まさに消えようとしている炎を懸命に燃やし続けているネプギアを消し去ろうと、闇に光る龍腕を手刀に構えた。

「……ぐつ、な、アブネスツ!?」

『逃げるわよ』

「ふ、ふざけるな!!人間と一匹を見逃してこいつも見逃すのか、憎む女神をどうして貴様が庇おうとしている!!」

『人の話聞いてないでしょ?殺されるから逃げろって言っているのよ脳筋』

「(……今だッ!)」

首を握りしめた力が弱つたのを逃さず、ネプギアは最後の力を振り絞つてアイン・アルの腹部に蹴りをねじ込みその反動で拘束から抜け出した。ゲホゲホつと呼吸をすることに吐血するが、構う事はなかった。どれほど体中が痛もうと、歯を食い縛つて耐える。どういう事が相手が混乱している隙を見逃さずにシエアエネルギーを込めた拳打が見えない誰かと会話して無防備なアイン・アルの顔を捉えた。布で叩いたような音と共に、アイン・アルは大きく後退して、憤怒の瞳をこちらに向けた。

「失せろッ」

目前の下。パーチエフォレストを蠢くモンスター達がアイン・アルの指令の一つで混

ざった。数えるのがバカバカしくなるほどの大地を覆うモンスター達が互いを喰らい始め一つの生者のように、大木のような太きをした蛇の如く蠢く黒柱が重なって、凶悪な牙を幾多に伸びた鋭角、彼女と同じ憤怒に満ちた紅目をしたドラゴンの顔が圧巻するほどの巨大な口を空け、周囲のモンスターを吸い込みネガティブエネルギーへと変換した黒炎の巨弾が凄まじい速度で膨張する。

対してネプギアは肌を焼くほどのネガティブエネルギーを前に拳を突き出したままだった。

どれほどの強固な意志を持って、体はもうとつくに限界を超えていた。

『相手している暇なんてないわッ!?何を考えているのよ!』

『煩い黙れえ、これが私とこいつの闘争だ!手を出すなあ!!』

アブネスと呼んだ彼女の制止を振り切って、モンスターを喰い合わせて作り上げた超巨大なドラゴンの口の中で大陸を一撃で吹き飛ばす程の熱量を持った全てを焼き尽くす黒き炎弾を、狂気を感じさせるほどの意志の強さを示したネプギアを消し飛ばす為に形成された。

「バツハムート・テラフレア!!!塵ひとつ残さず地獄の炎に飲まれ消え失せろオオオ!!!」

大きく仰け反り、発射された超熱量の黒炎弾は触れなくてもバーチェフオレストが発火するほどであり、ゲームキャラの恩恵によって近づく前から軽傷しているネプギアも

ただでは済まないが、彼女はもうすでに全てを出し尽くして、立ったまま気絶している。それを知ってもなお、アイン・アルは一切の慢心を捨てて排除に掛かった。それは彼女の意志がいつかネクストフォームに至るブラッディハードすら打倒し、本当に世界を救ってしまう期待を抱く程であったから、だからこそ力を、現実を示した。少なくとも、この一撃に耐えきれなければ、世界を救うなど譫言でしかない。

「——なに？」

その破壊力は正に巨大な隕石が地表に激突する程。だからこそ次の瞬間に訪れた現実を理解する為に数秒の時間を要した。

「ゲハバイン・ブラックハート・エンド 皇天后土を支配した魔剣……間に合った」

『流石、我が主よ。神殺しの武器を創造するだけではなく、刻まれた経験か可能性を元に再構築するとは』

ネプギアを抱え、ドラゴンを象ったような鎧を身に纏った存在はその手に手に握った黒き一本の剣で大陸を消し飛ばす程の熱量を持った黒炎弾を一刀で切り裂き、分散したエネルギーは凄まじい速度で、氷で構成された枯れた木の枝のような翼の間から溢れる炎の翼膜に吸収されていく。

『……遅かったわね』

アブネスが停止した理由が分かった。分かってしまった。

目の前に存在するのは、『女神を要求する未来』など比べられない程の神殺しの力を持つ存在。このような存在が許されるのかと訴えても答える者はいない。数十妙である全てを吸収し終えた龍の鎧を纏い者はアイン・アルの存在を捉えた。

「あれは……父さんの……偽物？」

『体は同じ様だ。ただ別の存在を上書きしている所為で分かりづらいな』

「……ふーん……」

『所でその娘はどうするつもりだ？』

「ユニ様と似た香りしたから助ける。……悪い神様じゃないよ」

『……そうだといいいのだがな』

幼い子供の声と厳つい大人の声は、親切の子供を心配するようなやり取りをしながら、その二つの視線はアイン・アルを見たままだ。動けば直ぐにそれを潰されると頬に冷や汗が流れる。押し潰される様な戦意のオーラに圧倒されたアイン・アルはその場から様子を見る事しか出来ず、漸く震える口で声を出した。

「きさま、貴様たちは、何者だッ……！」

『我は熾凍逆龍・デウスヴァテイン』

『バンデオン・エヘクトル神殺しの頂点』、零崎 空亡』

ゆらりとその手にアイン・アルの記憶に刻まれた黒き女神の武器をゲハバーン化した

大剣の先を向ける。

「私は貴方と戦う……貴方は、私の大切な人を傷付けた」

『ということだ。精々足掻け神様よ。こうなってしまうた以上、貴様は手遅れだ』

抱えたネプギアに炎と氷が渦巻く結界をアイン・アルから目をは離さず隠すと二人の  
声が重なって、身構えた。

『「神殺し——執行する」』

その言葉と同時にアイン・アルの意識は無限に思えるほど剣閃によって一瞬で切り捨てられた。

## 外伝：アイン・アルの一生

アイン・アルがまだ人であつた記憶の中で、心に残っているのは両親を目の前で食い殺された事だろう。

信仰が薄くなつてしまつた大陸から移動する。女神の加護が薄くなつた場所を通ることは、モンスターに襲撃される確率が高くなる。そんな博打をしなければならぬ程に女神の加護という人間にとつてなくてはならない機能が失われつつある大陸からの脱出の途中にそれは起きた。

寡黙な父が叫び、温厚だつた母が幼きアイン・アルの手を引いて走つた。握り締められた手が引き千切れそうなほど力が込められて、それが痛くて泣きながら走つた。

そして前に走つていた父の上半身が消え、次に母が立ち止まつた瞬間、衝撃と共に体が消えた。

何か大きな物に撥ねられたように地面に転がって、父と母を名前を呼びながら面を上げると目の前には、赤く輝く鮫の様な歯が並ぶ凶悪なモンスターが口を空けている。突然の両親の消失に現実を受け止められなかつたアイン・アルが喰われる瞬間、黒い閃光

がモンスターを一刀両断した。それは意志の強い凛とした容姿で、こちらの無事を確認すると、流星のような奇跡を残しながら周囲のモンスターを次々になぎ倒した。周囲の人は『女神様』『ブラックハート様』つと祝福に歓喜の声を上げていた。だが、アイン・アルは下半身だけ残された父を腕だけ残った母を漸く認識して、受け止める現実に耐え切れなくなるとその場で倒れた。

次に目覚めたのは女神の腕の中で、今にも泣きそうな顔でずっと繰り返して言われた感謝の言葉が自身の無力さと女神さまへの感謝の想いに涙を流した。

その後、施設に預けられアイン・アルは両親を奪ったモンスターを憎悪し、これ以上自分の様な子供を増やさない為に体を鍛えた。同じ施設の中で勇者に憧れる友人も得たことでお互いに高め合い、競い合い、切磋琢磨しながら、多くの人を救うために夢を描いて、自分を助けてくれた黒き女神様の為に、自身の人生を戦いの一色で染める決意をした。努力のお蔭か、それとも才能があったのか、女神の加護を直接付与され人間を超える力と大陸の一部を管理する『守護武将』を友人と共に選ばれ、黒き女神様が任せられた時は歓喜に体が震え、今なら空を飛べると家に帰った時はベランダから何度も飛び降りたほどだった（勿論体中骨折して守護武将就任の初日は病院で書類整理をする羽目になった）

とは言っても、アイン・アル自身はモンスターを打ち倒す為に他の事は全て捨てて生

きてきたが故に大陸の管理なんて難しい事が出来るはずもなく、もっぱな前線で戦い続けた。

朝起きて出撃、朝食、出撃、昼食、出撃、休憩、出撃、晩飯、出撃、就寝という生活リズムに黒き女神には呆れられ、同僚の『守護武将』からは休日になるとどこかに遊びに行こうと強制的に連れまわされるの、モンスターを狩りに行けなかった。勿論、何度か早起きして逃げたが、今度は黒き女神すら味方に引き込んで外出を誘ってくる。理由は何でも武器のメンテナンスや日用雑貨とか、適当な理由をつけて同僚は黒き女神とアイン・アルの三人で、休日は共にいることが多くなつた。

そんな充実した日々も女神転換期になると変わっていく。今まで信仰していた住民が心変わりをしたように女神を批判し始めて、それをタネにした活動家たちの主張が人々の注目を浴びて、女神の立場が徐々に悪くなるにつれて、誰よりも信仰心が深いと言われたアイン・アルは何度もそいつらを殺してしまおうとしたが間際に同僚や黒き女神に止められる。

そんな時だろう、女神の加護が薄くなつた故郷で見つけた禍々しいクリスタルを見つけたのは、その輝き魅入るまま体に含んだ瞬間から変わった。周囲の人々の負がにじみ出るオーラが見えるようになり、不満や怒りの負の声が聞こえる様になつた。それと同時にそれをエネルギーとして女神によく似た、性質が真逆の力を扱える姿に変身できる



ようになった。

そこからアイン・アルは人々の無能と愚かさを知った。日頃黒き女神がどれほど民衆を愛し、その為に身を削ってきたかを当たり前の様に受け入れ感謝を忘れ、適当に並べられた状況に対する発言に理解されていると勘違いを起こした民衆達が、その活動家たちを脚光を浴びて評価されながら、最後に女神の存在を否定し始めるそんな世の中を見て、彼女は決心した。世界を救うために、なにより黒き女神に命を救われた恩を返す為に。世界を殺すつもりで廻ると。

まず人々の力ではどうしもないモンスターを強力な量産し、人々の絶望を大きくするために圧倒的な力を見せながら虐殺を開始。

『守護武将』と肩書を捨て、アイン・アルは自身を魔王と呼び、他の大陸の女神を卑劣かつ卑怯な手で殺してその力を自身の物とした。

ゲームギョウ界の全ての住人が自分に絶望する為に、あらゆる手を尽くした時にどこからか噂が流れ始め、現れた『女神を要求する未来』で、更に女神を二人抹殺した。その頃になると魔王がアイン・アルであることを知った黒き女神から幾度もなく連絡が来たが、女神を助ける為の行動を説明しても、人を愛する女神とは到底、会話が成り立つことはなかった。

同僚はアイン・アルが作り出したモンスターの大军を町の人々が逃げ出す時間を稼ぐ

為に死んだ。とても胸が痛かったがもう人間で無くなったのか、それとも女神の為と猛争の渦で生きていくこと以外を捨ててしまった瞬間から、涙は流れる事は無かった。勿論あれほど救おう鍛練を重ねてきた技術は人間を如何に惨たらしく殺して人々の心に刻みつけるかへと変化していく。

その時から、アイン・アルは知った。

自分は今もう人間を捨てたのだと、これが自分の持ち神格としての力の在り方なのだと。

アイン・アルと守護女神達のゲームギョウ界全土を巻き込んだ途方もない大災害は完成した『女神を要求する未来』を自身が一番尊敬を抱き、信頼していたゲームギョウ界最後の黒き女神が休んでいる瞬間に渡して、民衆の中で派手に暴れ人々の心に更なる絶望を刻み、駆けつけた『女神を要求する未来』を持った黒き女神に安心して戦い、絶望する民衆の中で、最後に残された希望である黒き女神に意思集中していきその中で打ち倒される事で、ゲームギョウ界の意志は一つとなつて黒き女神こそが真の女神であることを己の身を代償にして、『女神を要求する未来』を突き刺され「これが私の出来る最後の恩返しです。ありがとう命を救ってくれて、私が信仰するブラックハート様」と言葉を残して笑顔で消滅した。

「貴方とエステルは掛け替えない友達で、一緒にいい国を作れると思ったのに……  
どうして、どうしてこんなことになったのよ……ッ」

「……黒き女神ノワールが流した涙の意味を知らずに。」

## 現実

人の肌に触れている様な温かな真つ黒い闇の中で、人の輪郭を描いた二つの影があった。一つの影は落ち込んだ様子で膝を抱えて体育座りをしている。もう一つの影は呆れる様にため息を吐いて、こちらを向いた。まだルウイーの双子女神候補生を思い出せる程、その背は小さかったが、歴戦の戦士の如く凄みを感じるオーラを放つその影は穏やかで、幼い少女特有の高い声を発した。

『漸く目覚めね後輩』

誰だ、と声を上げようとするが声は出ない。否、体の感覚すらなかった。ただ茫然と意識がだけがここにあつて、まるで幽霊にでもなってしまった様な奇妙な浮遊感に少女の影はクスクスと笑った。

『本当に半人前ね。貴方はどうしてブラッディハードになったのかしら?……ああ、思うだけで通じるわよ。ここはそういう空間だから』

………。

『答えたくない? 答えられない?——それとも忘れちゃった?』

ルウイーで初めてブラッディハードになった事は覚えている。ただ、なんでそうなつ

たのか、そうさせたのか

どれだけ思い出そうとしても、知らない誰かの記憶が混濁して本当の自分の過去が分からない。

『素質と才能、体すら過去現在未来でもこれほど最高に合う物はない。けれど本人の意志が全然ダメで取り込まれつつあるって感じね……』

はあ、と深いため息を少女の影は付いた。道端で捕食される弱い生き物を見る様な可哀そうな眼差しだった。

『とりあえず自己紹介をしましょうか、私はアブネス。貴方と同じブラッディハードよ。こつちでいじけているのもブラッディハードのアイン・アル』

少女の影はアブネス、体育座りをしているのをアイン・アルと呼んだ。少女の発言に気になる要素があった自分と同じブラッディハードでこちらを“後輩”と少女の影は言った。ブラッディハードという存在は様々な状況と運が絡む為、一体だけしか存在しないということを彼は教えられていたので、少女達が既に滅ぼされたブラッディハードであることが想像がついた。

『アイン・アルが貴方達のゲームギョウ界に迷惑をかけたわね。ごめんなさい……この娘はブラックハートにちよつとおかしなほどに固執しているから』

『……ふんっ』

ブラックハート……ノワールのことだろうか？アイン・アルと呼ばれた影は一瞬こちらに視線を送るとつまらないように口を鳴らして、そっぽを向いた。嫌われる様な事をしたのだろうか。

『気にしなくてもいいわよ。特に意味なんてないだろうし……さて、どこから話したらいいものか』

『……アブネス、こいつに何も期待しない方がいい。ネガティブエネルギーの残留思念に簡単に意志が左右される程度の案山子のような奴は、大禍津日神になる定めだ』

『否定はしないわ。けどそれは私達も同じ、どれだけ力を得ても……必要悪である以上は最低限の義務があるのよ。女神に打ち倒され人々の希望を再認識させる。女神を滅ぼして人類を絶望の深淵に叩き落とす。そういう存在なのは……零崎 紅夜——貴方も分かっているわよね』

この暗黒の空間の中で閃光の様な鋭い眼差しが、例え体の感覚を失っていてもなお畏れを感じさせた。これが女神に打ち倒されたブラッディハード、世界の為に散った滅ぼされる為の悪神。恐怖を感じながら彼——紅夜は体が合ったのなら冷や汗を掻きながら何度も頷いていただろうとアブネスに応対した。

『よし、そこまで分からなくなるまでに他人に乗っ取られたのなら女神を要求する未来に喰われた方が幸せだったわ。……つと、もつと話していたいけど、どうやら時間みた

いね』

暗黒の大地に太陽が照らすように、徐々に白くなっていく空間と同時に意識が徐々に上へ上へと上がっていく。

『あなたに三つ、心に留めてほしい事があるわ』

光が満ちていく中で少女達を取り込んでいた影が露わになった。アブネスと呼んだのはやはり幼い少女で派手なピンク色のドレスを着こんで、釣り眼気味で外に撥ねた金髪の少女。もう一人も金髪で脚まで届く程のポニーテイルをしていた。こちらは少女と言うには二十台を思わせる背で蛮族のような露出の激しい服装をしてアブネス程ではなかったが、歴戦の戦士を思わせる気を感じさせた。

『まず一つ、貴方の未来は過酷でしかない』

紅夜を見上げるアブネスは一つ指を上げる。

『二つ目、女神と最後に別れたあの日に貴方は忌々しい“奴”に目を付けられた』

全てが光に包まれていく、アブネスとアイン・アルの姿は見えなくなるが最後にと続けられた一言は、先の二つより深く響いた言葉だった。

『<sup>ハー</sup>守護女神は人を超えた力で、私達<sup>ド</sup>——冥獄神<sup>フラッティハー</sup>は人を捨てた力よ』



『目が覚めやがったかこのバカ野郎』

「……ああ」

目が覚めて最初に確認したのは、見知った病院の白い天井、起きて早々に辛辣な言葉を目覚まし時計代わりに放つデペアだった。白い清楚なベットと被らされた布から体を起こして周囲を見渡す。

「……は……」

『プラネテューヌの病院……』と言いたい所なんだけどね。僕等監視室にぶち込まれているよ』

そうかと無機質に紅夜は返した。全く動揺を見せないのはアイン・アルが行った行動が脳裏に刻まれていたからだだった。流石に彼女が気を失った瞬間から糸が斬られたように記憶が全くないが、周りにはこちらを睨むように設置されている幾多の監視カメラと分厚い装甲が自分の行った行動の危険性を示していた。

服装は白いシャツと黒い長ツボンとこちらの世界に来る前と変わらない。リーン



ボックスのシンボルマークが刻まれた黒コート以外は。

「あれから、どうなった……?」

『空亡のお嬢…君がプラネテューヌの病院に居た時に来た娘が雑草を筆るようにバーチエフオレストのモンスターを殲滅して、神殺しの中でも特に負に対して強い武器で境界を作ったからもう大丈夫だよ』

「……空とネプギアは?」

『それは…「おはようございます。紅夜さん」……彼女から聞けばいいよ』

無機質な空間の中で、響く幼い声。それはプラネテューヌの教祖であるイストワールの声だと直ぐに理解した。声は部屋の片隅に設置されているマイクから発せられていた。

「……おはようございます。イストワール、すまないが聞きたいことがあるんだけどいいか?」

「ええ、こちらも貴方に伝えたい事があります。少々お待ちください、直ぐに向かいますので」

そう言い残し、ぶつりとマイクから発せられた音が聞こえなくなった。スイッチを切つてこちらに向かってきているだろうとネプギアや空が無事であるかを焦る気持ちを抑えながら、速く来いを願った。こことイストワールの距離は近かったのか三分程で

彼女は分厚い装甲から開けられた扉からふわりと入ってきた。

「ネプギアと空は……！」

「貴方の為にその質問には答えかねます」

飛び上がりそうな勢いで問い詰める紅夜に対してイストワールは感情のこもつてない声ではつきりと言いつ放った。崩れ落ちるようにベツトに腰が落ちる。『貴方の為に』最初に付け足した言葉によつて二人の状況は薄らと想像が付いた。同時にそれを見てしまえば罪悪感で狂つてしまう事も不思議と理解できた。

「アイエフとコンパは……」

「貴方の体を見て、コンパさんが気を失つてアイエフさんは酷い過呼吸を起こして今病院にいます」

「そう……ですか」

紅夜はゆつくりと視界を下に下ろした。

そこには人の腕と化物の腕があつた。体中に浮き上がっているのは人の顔。苦しみに悲しみに怒りに歪み狂い叫んだ悍ましい老若男女の顔達。

それが体中に呪うように浮き出ている。唯一右半分の顔だけが何もない顔であつたが、まるで体に罪人を苦しめる地獄絵図を刻まれた変わり果てた姿に嘔吐感を覚え直ぐに目を離す。

「本当は……」

ぼつりと紅夜は両手を見ながら呟いた。

右は人の憎悪に満ちた顔などが浮かび上がった狂気の腕。左は一つ一つが刃の様に鋭く逆立った血を浴びて黒く染まったドラゴンを思わせる凶悪な腕。

「助けたかったです。そうしなきゃ、俺は本当に何もかもを失う」

自分がこうなったのは結果的に弱かった。ブラッディハードになる覚悟と意志が思いつかないどこかで挫けて他人に乗っ取られる様な貧弱な自分。女神を別れた最後の夜、何を話して、何を感じたのかすら他人の強い憎しみの記憶がその光に溢れていたかもしれない夢を潰してしまった。

もしかしてここで会話しているのは、アイエフ達を知っている零崎 紅夜ですらないのかも知れない。ただそれを思い出すことが出来るだけの別の人格かもしれない。それほどまでに己を証明する材料が不足していた。

なにより、もう、女神の声は覚えていても。

紅夜のかき集められる記憶の中では——ネプテューヌ達の顔は燃やされたように闇の中なのだから。

楽しかった感情が合っても、何が起きて楽しかったと思える出来事は消しゴムで消されてしまった様に思いだせない。

「ブラッディハードについて空さんに聞きました。貴方は超濃縮なネガティブエネルギーを吸収し続け、自己意識は徐々に人々の負の意識に乗っ取られ始められている。今回は前代のブラッディハードの強いネガティブエネルギーを取り込んでしまい体を一時的に乗っ取られたのではないか、と」

「……違います」

それは全く異なっている。何故ならあの時、女神を要求する未来の詳細を聞いたときに紅夜は魅了された。そしてアイン・アルの意志を勝手に自分の意志だと勘違いをして、気づけばゲームギョウ界を滅ぼうとした。既に顔が分からないネプテューヌと共に行ったことがある筈の場所を自分の意志でモンスターが蠢く魔境にしたのだ。

「俺は間違いなく俺自身の意志なんです。何もかもを滅ぼしてして人々に絶望に与えて女神に討たれるって、本気でそう思っ……ゲームギョウ界が平和になると思っ……」

「……少しだけ、昔話をしましょうか」

幾多にも目の様な物が浮かび上がっている左顔とまだ何も穢されていない右顔、その両方から川のように涙を流す紅夜にそっとイストワールは自分と同じサイズのハンカチを紅夜の左手に置いて、ベットに腰を下ろす。

「五年前、世界が本当の意味で自由を得た日に私は少しだけ昔の事を思い出しました」  
イストワールから話してくれた内容は、失われた時代のゲームギョウ界、既に統治していた四女神が人々の記憶から完全に忘却され存在は消滅した。ゲームギョウ界の最大に過酷を極めたと言わされた転換期の話だった。

## 過去

周囲は真っ白な壁、それは中の怪物が暴れても逃げ出さない様に重厚に組み合わされた装甲、無機質な白色のベツトの中で上半身だけ体を起きあげているのは左手はドラゴンのような腕、体中に描かれた人が苦しむ地獄が浮き上がっている一度本気でゲームギョウ界を終わらせようとモンスターを操った存在。守護女神とは対極であり、人の絶望を生み出すブラッディハードこと、零崎 紅夜はそんな世界を終わらせる力を持つ傍で警戒心を見せない女神を除けば国のトップであるプラネテューヌの教祖のイストワールの言葉に耳を傾けていた。

「五年前まで私の記憶は空さんによって管理されていたのは知っていますか？」

「……知っている」

妖精のような幼い顔つき、その背も実際紅夜の片手に乗ってしまうほどに小さいイストワールは丸い宝石のような瞳で昔を懐かしむように話を続ける。

「人は長生きしても百年程度が限界、女神も人間より遥かに長生き出来ませんが永遠に生きる事は出来ない。だけど、私はゲームギョウ界の記録者として空さんに生み出された時からずっと歴史を記し続けている」

イストワールは儂い表情で語り始めた。

彼女を作り出した親とも言える空は、人から女神からすれば外道で悪徳な存在だ。

人の存在を数式の一部のように簡単に人生を時に栄誉に満たし、枯れた枝を折るように破局させたりする。そうやって多くの人を操り、世論を動かすということは同時に女神の活動すら操る事も出来る。女神と人からすれば空こそが世界の敵として認識されても可笑しくはないが、それはあくまで人と女神が作り出した世界の中での話だ。

「あの人は本当にこの世界が好きなんでしょう。だけどそれは私達の意識とは全く異なる物。一切の区別なく、平安な世界。星のあるがままの姿が空さんが望むものだからこそ、人の発展の為に森林を伐採したり、大気を汚す汚染ガスが空へと昇る光景が我慢ならないんでしょう」

『……でもそれが人という生き物だ。自らの発展の為に、自らの欲望の為に、他の者を簡単に犠牲する事。感謝が合っても、罪悪感が合っても、時が過ぎれば簡単に忘れてしまう』

「そして、人はいつか自らの武器を持って主張や信念、欲望の果てにお互いを殺し合う。それに傷つくのは弱き者達とこの星……だからこそ、空さんはプロセッサユニットの要素を変えて、神界を作り出した」

「どうして、そこでプロセッサユニットの話が？」

『ああ、なるほど。守護女神戦争は所謂代理戦争だったというオチか。呆れる程上手く調整してんなあ……』

デペアは全てを納得した様にため息をついた。イストワールはデペアの理解力に驚きながら、紅夜は謎に頭を斜めにしてどういう意味があったのか難しい顔に直ぐにイストワールが補足する。

紅夜や女神の認識ではプロセッサユニットとは即席で作り出したシエアクリスタルを身に纏う事で戦闘能力を底上げる物だったが、イストワールが語った過去は全く違う物で合った。

シエアエネルギーを媒介にして動く兵器の一種として人が“開発”した物だった。人類の英知を結晶させたそれは元から人間が扱える事を一切考えずに女神だけがその性能を手足のように扱える。

そうして、武器を人が作り、それを扱う女神、当然のように距離が近くなった。

そして、戦争が起きた。女神と人間が肩を合わせて己の全てを掛けて泥沼の戦いが起きてしまった。

その規模はあまりに大きすぎた。殺し合って生まれる憎しみは人間の大事な価値観を歪ませるほどであり、女神もその影響を受けて、戦いは熾烈を極めた。

大地は裂け、街は燃え、空は黒く染まり、川は汚され、権力や金がない一般人たちの



中でも弱い子供や老人たちは未来への絶望に泣くしかない。そんな時代を見た空は、人と女神の間が深い物になってはいけない。そう決定するとプロセツサユニットの認識を変化させ、人間の知識によつて生み出されるプロセツサユニットの設計図や人材を“消去”させた。

勿論、空は知っていた。

それでも人は争いを辞めれないと。

だからこそ、国の代表者である女神同士を戦わせる事によつて、人間同士の戦意を削ろうと。

自分たちの代わりに戦ってくれる者がいることで、少しでも争いの火の種を消そうと。

女神同士が暴れてもゲームギョウ界に迷惑が掛からないように神界を作りだし、必要以上に人も女神も肩入れしないように信仰の自由を制限するように世間を操り、暗黙の掟にして女神同士のシェアエネルギーの変動差を一定に保ちながら、シェアエネルギーを媒介に戦闘能力が増減する女神同士の戦いを出来るだけ長引かせることで、変わらぬ安定な明日へ繋ぐ為に。

「……でも、世界は既に変わった。女神達の意志に空さんは折れてくれたのです」

「そして、空が一切知らない未知の未来が今か……」

『その前はイストワールが記した歴史を除いて、あの破壊神が必要にに応じて似た展開時に似た結末を最低限の被害で喰い留める為に君から記録を取った。……結果的に辛い思いも楽しい思いも奪ってしまった訳か』

「本当は今もちよつと憎んでいたりします」

そういつて目を細くするイストワール。だが紅夜からすれば、憎んでいるように見えて感謝もしているようにも見えた。彼女は歴史を記録するだけの存在ではなく、喜怒哀楽とした感情があり彼女自身、女神が捕らわれる前の生活を心の底から充実しているように見えた。だがそれだけではなかつたはずだ。ネガティブエネルギーに精神が犯されていく紅夜と同じように、重い心から生まれたシエアエネルギーは女神の感情すら変えてしまうのではないか、ネプテューヌの女神姿をふと思い出した。

そして、紅夜はイストワールを見てその悔しさと懐かしさを見て直感する。彼女も同じ気持ちなんだと。

「私も声と雰囲気しか覚えていない女神がいます。ほとんど何も覚えていませんがこの頭のヘッドパーツは彼女のプロセッサユニット開発時のあまりの素材を使った同型なんです。……凄く彼女は喜んでいました。それだけか思い出せません」

「俺と……同じか」

「いいえ、貴方は違います」

首を振ってイストワールは否定した。

「貴方は私と違つて奪われていません。忘れてもいない。ただ辛いのだと思います」  
『……………ブラッディハードとしての存在故にか』

只安らぎに言われた言葉が紅夜の心臓を貫いたような衝撃を走らせた。

他人の絶望や憤怒に塗れた負の記憶が入り乱れる意識の闇の中で、紅夜の記憶はあまりに小さい灯火、あつさり闇の中に覆い隠され見えなくなるほどの微かな物であつた。幾千に溜まり詰まれてきた人の恐るべき負は数年の出来事をあつさり隠してしまう。

それがブラッディハードとして完成の為。

人を捨て、世界の為に討たれる必要悪。

女神の価値を輝かせる為に用意される魔神。

だからこそ、人であつた記憶は必要ではない。誰も理解できない修羅道へ進まずに老若男女一切区別なく世界を滅ぼすつもりで殺戮などできる物ではないのだから。

「きつと貴方はその身を犠牲する世界を救うでしょう。でも、それをしてしまえば同じことの繰り返し。それにあなたは納得できますか？ネプテューヌさん達は貴方を殺す手段に納得できているのですか？」

「……………分らない」

記憶が足りない。

物事を決める為の材料が足りない。

ただ、そうしないとアイン・アルのように魔王を演じて手を血に染めなければ、女神の作り出した平和に酔って感謝を忘れた人々の心を覚めさせる方法以外に手段を知らない。血を流す程に拳にデペアが一つ覚えていた事を話した。

『君は、一度ブラッディハードでない時に、女神と相對して殺されようとした。覚えている？』

「……………分らない」

『そう、まあいいや。でもね……………女神を泣かせたよその時、どうしてどうしてって君は心の中で泣いて彼女は瞳から涙を流した』

「……………理不尽だな」

『うん、それは今の状態も同じだよ。ねえ相棒——同じ過ちを繰り返す？』

「嫌だッ」

紅夜は一体何のために力を得ようとしたのか忘れてしまった。しかし、それは魂に刻まれた願い。

例え闇が巢を作ったとしても、その願いだけは無くしてはいけない物だと穢されない領域があった。

「イストワール……………俺にチャンスをください。このまま腐りたくない！例え過酷な運命

が合っても大切な人の涙を見たくないんです。お願いしますッ!!」

「一つ約束してください」

ふわりと宙に浮かび、真摯な表情で紅夜に向かって一つ指を上げてイストワールはただ約束を言った。

「――貴方は貴方自身を救ってください」

この願いが届くのであれば、イストワールは幾星霜の時でも喜んで願い続けるであろう。

零崎 紅夜は英雄でも冥獄神でもなく。誰かの犠牲にならず。

ただ、女神と共に歩んでいける存在になってほしい、と。



イストワールの渡していた小型マイクから聞こえる紅夜とイストワールの会話に全

員が耳を傾けている。僕は仕方がないが、ネプギアも一応という事で入院。ネクストブラッディと相対して普通に生きていく時点でネプギアの実力はネプテューヌに届くかもしれない所まで来ている。

『……青臭いな。とても悪の神とは思えない』

不機嫌に言ったのは空亡ちゃん従龍の中の一匹である熾凍逆龍デウスヴァアティンだ。「必要悪だからと言っても、本人の外道である証明にはならないよ」と念話で伝えると露骨に嫌な雰囲気をだして空亡ちゃんの籠手にある宝石からデウスは黙った。

それより気になるのは、体中生傷だらけで舌を嚙んで喋りにくい様子のネプギアにアイエフやコンパ、おまけに日本一とがすとまでいる。あの薄汚れた灰色のネズミ……ワルチューは傷の治療が終わって少し目を離れた瞬間にはもういなくなっていたのと。

まあ、マジエコンヌに所属しているから事が既に知られているから吐かせる前に回収したのだろう。

「これから、どうする？空亡ちゃんがバーチエフオレストのモンスターを塵殺してくれたらおかげで神宮寺の依頼の素材が大量にゲットされたけど」

アイン・アルがゲームギョウ界と冥獄界を繋いで大量のモンスターをこちら側に引き寄せてくれたおかげでモンスターの素材は山ほど手に入った。しかも、強豪でレアなモ

ンスターばかりなので品質もかなりいいと思う。恐らくこれで本格的にイストワールを中心にプロセツサユニットの開発が始まるだろう。……色々思う所もあるけれど、今のプロセツサユニットはどうしても環境によってその力が増減してしまうから、無から生み出した神秘の力ではなく、最初から形が合ってエネルギーが積まれた女神の手で悪者を打倒してほしいという願いの元で、造られた科学の力で作り出されたプロセツサユニットならある程度、女神に取って不利な土地であつても万全に近い力を出せるだろう。

【お兄ちゃんがもし私達と一緒に来たいと言つてきたら、アイエフさんとコンパさんはどうします?】

「……私は一緒にまた旅をしています。あんな姿になつてもこうさんはこうさんです」  
「貴方こそいいの?……殺されかけたのよ?」

【あれは本当にお兄ちゃんがしたかったことが分かつただけで私は一緒にでもいいと思います】

至る所に包帯で巻かれた痛々しいネプギアはメモで言葉を書いて会話をしている。その姿は正に聖人の如き慈愛に満ち溢れている。自分が死ぬ覚悟すら完了して、仮にアイン・アルが改心したから許してくれと誠意を見れば許すだろう。人間という外殻を壊して神としての道を歩み始めたネプギアを見ていると凄く不安になる。

アイエフやコンパもその場にいなかったことを非に思っているのか、腰低くしつつ返事をしている。

「ねえねえ、その旅に付いて行っていいかな？」

【危険ですけど、それでもいいですか？】

「マジエコンヌを二人で潰してきたんだけど、ちよつと限界を感じてきてね。それでも私はかなり強い！」

「……がすとは、正義のヒーローごっこに振り回されて疲れたですよ」

「え……一緒に来てくれないの!？」

「……………行かないと言っただけですの」

「わーい!!流石私の大親友!!」

「い、いきなり抱きつくくんじやないですよ!痛い痛いですよ!!」

なんとも微笑ましい光景を見せてくれる二人。ネプギアはこちらを向いて申し訳ないように表情を歪ませた。両手両足は食いちぎられ、体中を小さいモンスターが這いまわりながら食い散らされたおかげでミイラと勘違いするまで無惨な姿へとなった僕を見た。

「気にしないで」と念話で送る。声帯器官もやられたので喋られないのは面倒だ。再生しようにも今までの怪我が治らず半死状態でも無理をってしまった所為か当分はこの



まだまだ。役に立たないなあ、僕。

「……あの人が行くのなら、私も行きます」

僕の隣で座っている空亡ちゃんの爆発発言。ネプギアに再度念話で連絡を入れる。

もうすでにみんなにも話したが、零崎 空亡にとつて零崎精神崩壊する前の紅夜 紅夜は『父親』だ。血の

繋がりはないが、異物な形で親子として関係は合った。それを今の紅夜は拒絶した。デペアから話を聞く限り本人も気づいているようだけど、認識することは出来なかつたんだらう。見知らぬ娘が「貴方は私の父親です」と言つて来ても拒絶するのは、酷いけど現実的。

ネプギアに送つたのは空亡ちゃんの力について、全ての神々の力を次元やら時空から引つ張つてきて、無量大数の神智すら超越した力でこの世の全てを破壊し、再構築するほどの力がある。つまり彼女は神殺しであり、新世界へ万象を導きそれを統べる資格を持つ唯一絶対の神であることを。

正直、空亡ちゃんからすれば今の紅夜は不愉快だらう。数年時を得て漸く再会できたと思つたら中身は別人で外形はそのまま、尊敬していた父親とは違う弱小存在へと成り果てているのは空亡ちゃんからすれば裏切りられたと言つてもいい。……どつちも気持ちから分らないと言ふ訳ではないが、近づけばどつちかが爆発しそうで怖い。

【いいですよ】

おい。空亡ちゃんまだまだ自分の力のコントロール微妙なんだよ？使った時点で周囲の女神の加護が軽く吹っ飛ばよ？……先生として嫌、それ以上の感情で接してくれている空亡ちゃんの我儘を叶えたい気持ちもあるが、空亡ちゃんが動けばそれこそ世界単位での騒動に発展する。

【でも約束してください。私はお兄ちゃんを殺すつもりは一切ありません。だから貴方も思う所はあるかもしれないけど受け入れてください】

「……今回は半殺しで引っ込んでくれましたけど、また起きてしまえば今度は三人まるごと殺さないと貴方の世界が危険に晒されます……それを貴方はどう責任を取るって言うんですか」

【無論、私の全てを賭けて】

『主よ……この少女の決意が固いようだが』

空亡ちゃんは黙り込む。こういう難しい事を考えている時は頭を撫でてやると安心するけど、肝心な腕が今はないから何も出来ない。心配するアイエフ達四人の視線に空亡ちゃん決意を決めてネプギアを見た。

「……私は、貴方の想いを信じる事にする……」

【ありがとう】

一件落着いたようだけど、これからどうなるんだろう。

少なくとも、世界は救われても、人々が救われるイメージが一切沸かない。

## 始末

ネクストブラッディの顕現によるゲームギョウ界全体の「汚染化」モンスターの影響は量りしえなかった。特に顕現したその地であったプラネテューヌはダンジョンはともかく、貿易用に開拓された安全なルートでさえ凶悪なモンスターが出現するほどであった。それ故に教会だけではなくマジエコンヌがモンスターの駆逐やら、被害が出た企業の立て直しなどをお互いに不干渉しながら協力し合う事態になるほど。たとえ相容れぬ組織どうしでも同じ星の上で生きている以上、理不尽な災害には互いに協力することで被害を抑えようとする。

勿論納得しない者も両方に居たが、駄々を捏ねるだけで事態が好転するわけがない。煩い輩は双方、無視するか黙っていてもらうかの対処が早急に取られた。

教会は権力を失うと同時に失われた物はマジエコンヌへと自然と集まっていき、同時にマジエコンヌという組織は大きくなっていく。それは同時に犯罪組織という名目から大きくの人からの信仰を得る為に慈善活動にも力を注がなければならず、主に荒くれ者が多いマジエコンヌの参謀役は日々猫の手も借りたい忙しさでこの事件が起きた。

「……この、クソ上司、有休を要請するでちゅ」

「うるせえ、こうなるなんて誰が想像できるか。あと残業も有休も無しな」  
「……………」

故に彼らは修羅場だった。

総務と人事部、それ以外にも補助として幾つも部署を受け持つレイス・グレイブハドの電話は常に鳴りっぱなしで各国の対応に追われ、ワレチューは天井に届きそうなほどに積まれた書類の山に目を回しながらペンを持った指を機械的に動かし、リンダは虚ろな目で書類に判子を押しつけている。彼らの激戦は朝から始まり、太陽と月が二回ほど往復して漸く区切りがついた。

精魂を完全に燃やし尽くした終戦の兵士のように三人は、ソファに転がっていた。リンダは既に死んでいるかのように眠っている。ワレチューは意識が薄れながらもプラネテューヌ病院から奪還？ 拉致？ してきたレイスに辛辣な言葉を投げているがその言葉にはあまりに力はなく、蚊を感じさせる程度の小さな声だ。

「……………起きたら100万ボルトを喰らわせてやるちゅ」

「はいはい、お疲れ様でした。お休み」

弱弱しくも毒を吐くワレチューに対して適当に返すとワレチューも直ぐに寝息を立て始めた。錆びた様に動きづらい体を起こしてレイスは自身の机に座って書類整理を始めた。重要な案件を優先して片付けたとは言っても、まだ書類の山は崩れてはいな

い。むしろ増えてないか?と思うほど。

「……………はあ、腹立つ」

二人が起きないように小さな声で絞り出すように脳裏に浮かんだ憎たらしい顔を八つ裂きにした殺意を抑えながら書類に目を通していく。

あれは——対女神システムを積んだ試作型ロボットをバーチェフォレストのモンスターで実験をしていた時だった。



複数に配置を付いた虫のように動ける災害活動様のカメラ付きの小さなロボットで対女神システムを搭載した六つの砲口を備えた円盤型の兵器でバーチェフォレストのモンスターを相手に耐久度やら火力を実戦で記録を取っていた時だった。

ワレチューの体に刻んでおいた生命保持を目的として魔法が発動した事にモンスターを倒していくロボットが映しだされるモニターを見ながらレイスの肩が震えた。今日はどうしてもいけない理由があったので、ネガティブエネルギーから判断して今日は大丈夫だと判断して向かわせたんだなあ。

「……………どうかしたかグレイブハード幹部殿?」

「いや、なんでもない」

貫禄のある容姿とは思えない挑戦的な目をしているいい歳したおっさん。

リーンボックスの元教院長、現マジエコンヌ開発部責任者イヴォワール、すげえ呼びづらい名前だ。

因みにこいつ俺の事を毛虫の様に嫌っている。

まあ、マジエコンヌという組織を支えている柱の一つということで俺の素顔を知っているのだが、それが自分の積み上げた全てを破壊した奴と顔が似ているのが原因だろう。

「どうでしょう私達が開発した新兵器は」

「それなりのコストと整備性の難航と考えれば釣り合わないな……本丸の実験が出来ない以上はなんとも言えないな」

「ええ、非常に残念です。私達の組織を脅かす者を上の者が放置していなければ実験できたのに……」

女神の居場所くらいなら直ぐに分かるが俺は教えていない。今まさに咲こうと成長している花を踏みつける趣味はない。

後、ロボット兵器に搭載されている女神のシエアエネルギーを吸収して、エネルギーをこちらのエネルギーに変換させる『フォール・ダウン・ヴィーナス』通称FDVシス

テムの基礎理論設計を作ったのは俺だとぼらしてやろうか？それを劣悪品に仕上げて（この世界の技術じゃそれが精一杯なのだが）ドヤ顔を決めるイヴオワールに内心オラオラオララッシュを決めて奴の顔が血と肉の塊になる様を妄想する。

「そうだが、物事には順序がある。肝心のFDVシステムが動いても人間形態としての女神の実力を封殺できる程度じゃなきやガラクタのゴミ山と同じさ」

「ゴ、ゴミだと……！」

ギリツと歯を鳴らしてこちらを睨むイヴァワールは激しい怒りを見せる。心地いいぐらいのネガティブエネルギーを感じながら、周囲の部下達の顔はまた始まったよ、とでも言うようにため息をついた。

いいじゃん、あっちから言ってきたのだから、俺は聖人のように右頬殴れたら左を差しささず、間髪入れずに左頬をぶん殴るタイプ。

「き、貴様、私をバカにしているのか!!」

「被害妄想乙。女神化封じた時点で勝てるなんて甘い、この世に絶対はないんだよ」

肉親の仇とでもいうように今にでも飛び掛かりそうなイヴァワール。俺からすれば器の小さい老害だ。奴の視線を無視して如何にも面倒、時間の無駄と言った雰囲気でもポット兵器のスペックが記載された書類を適当に捲っているとオペレーターの一人在壊れかけた口ポットのように震えながらこちらを見つめた。



「ぐ、グレイブハード幹部。ちよっと、いいですか？」

「どうした？」

「六番カメラを見てください……ッ」

オペレーターが見せたのは俺がゲームキャラを破壊した場所、そしてそこに立っていたのは俺の外形をそのままそっくりコピーした男だった。

イヴォワールが声を上げ、俺とモニターに映し出された男を交互に見る。そして俺はため息を吐いてオペレーターに現地にいるスタッフに連絡を入れる。

「緊急事態発生、今すぐ現地から逃げる。冗談抜きで死ぬぞー」

『は、はあ!? ちよ、待つてください。一体何があつたんですか!?!』

『主任、モンスターですツ!! う、うわあああ!!』

『ひ、逃げろおお!!』

……俺が現地に行けば良かった。

既に遅くマイクからは人の逃げ惑う悲鳴とモンスターが獲物に齧り付き、肉を喰らう不愉快な音に何人かが口を抑えた所でマイクを握り壊した。

それがスイッチであったかのように一斉にモニターが真っ黒の巨体と紅く怪しく輝いた瞳が星空のように映りだされ鈍い音と共にモニターはノイズ一色に染まる。

「何をやっている! 早く何が合ったのかを調べろ!!」

「は、はいっ！」

罪遺物を掌握させないために深層心理から完全に隔離しているのか外からの連絡は通じない。

という事は、少なくとも暴走の危険性はないということで、ゲームギョウ界が消滅する可能性は激減したことには喜ばしいことだが、どっちにしるあの元から破綻している神格が暴走し始めているのは変わりない。

バーチエフオレストに出現するモンスターを余裕で撃退できる奴を集めたのだが、それが一瞬で八つ裂きにされたということは、アレはモンスターを強化するかモンスター事態を召喚するのか、どっちにしても碌でもないことが起きていることだろう。

「観測装置、一つだけ生きています」

「全モニターに映せ!!」

イヴォワールの指示でモニターが復活するが、ゲームギョウ界を覆う勢いで溢れ出しているネガティブエネルギーを感知している俺には全員がその惨状に唾然する前に顔に手を置いた。

生き返ったカメラは運よくモンスターに衝突した勢いで外に飛び出したおかげで損傷が最低限に澄んだんだろう。映し出されたのはバーチエフオレストを埋め尽くす禍々しいモンスター達が蠢く魔境だった。

「……………なんということだ」

「今日は死者と生者が入れ替わる日かもね」

全員の肩が震えた。……やべ、自分で言っておいて地雷踏んだ。

女神の気配を探ると既にプラネテューヌ目指して移動を開始している。

なんとワルちゅーも一緒だ。後で回収しないといけないな。

◇

「イヴォワールの野郎、確かにあの場所を指定したのは俺だけど、それだけで全部俺の所為にするか…?」

レイスが書類を纏め終える頃には既に夜が明けていた。結局三徹したなあと体を大きく伸ばした。

女神と空が現場に駆けつけた所で闘争が開始された。空間を埋め尽くすモンスターを自在に操るネクストブラッディの余波によって遂にカメラはモンスターによって破壊され、何がどうなったかは分からない。

状況を確認したい所だったが、女神達が負けた時の保険として配置されていたプラネテューヌの軍体が邪魔で詳しく調べることは出来なかったが、パーチェフォレスト一帯

が氷漬けになったり轟々と燃え盛ったり、激しい戦闘があったことだけは知ることが出来た。

「汚染化」モンスターの発生は予想していたが、まさかなあ……」

レイスが思い出したんのは薄暗い空間の中で壊れた人形のように笑った同じ顔の少年。ただ、彼の想いを叶える為に武器を与えたつもりだった。それなりの信用を抱いていたが甘かったと言わんばかりに頭を抱えた。

力はただ力、そこに悪や善を入れるのは価値観でしかない。女神が人間の希望たる力を行使できるように、冥獄神は人間の絶望を描く力を行使する。それは人間が日常生活するための無意識上での活動なのか。

あともう少し、女神と空がバーチエフォレストに向かわなければレイスは単独である魔境に突貫していただろう。生み出した者の責任を取る為に自らの欲望を果たす為に障害を排除する為に。

仮に冥獄神を排除できたとしても、数千数万の時を重ねていけばどこからともなく現れるだろう必要悪の存在。

それはマジエコノムがこの世界を支配したとしても、変わらないだろう。信仰は儂い人間の為にあるが故に、境界は自ずと生まれ、意志のエネルギーは二つに集約されていく。

人間の様な知的性が高い生き物であるのなら、必然的にそれは出来てしまう。

産まれた人の意志の塊が何をするのかによって簡単に善神、悪神と分かれている。人の総意の器である人を超えた存在がどんな物であっても、人の興味を引かすのには十分すぎる。

「ま、俺は世界なんてどうでもいいし、朝食作って来ようと。徹夜続きだし胃に優しい物がいいよな、ヨーグルトとか合ったかな……」

今回の失態からイヴォワールが要求してきたのはルウィーに眠る最悪の兵器。嘗て四女神の力で漸く封印できたそれをどうしてイヴォワールが求めるのかそもそもマジエコンヌに入りながら、マジエコンヌを信仰せずに自分自身の溺れた信仰の為に一体何をしようとしているのか凡そ想像は出来ており、それがもし現実の者となればゲームギョウ界という今の形が崩壊することをは知ってなお、気ままに鼻歌を歌う。

世界も人も神も、生きていく以上はどうせ死ぬのだから、そんな軽い気持ちで流して、まずは大切な部下を回復させる方が優先だとレイスはキッチン目指して足を動かした。

## 相対

地獄の業火のように燃え滾る様な憎悪による怨念が聞こえた。

悪意に満ちた空間が立ち並んだ工場から放出される排気ガスのように見えた。

死んでも死にきれない深淵の如き未練の気が空を覆う闇のように広がっている。

それら全てはこの世の地獄目指して集まっていく。

その世界に繋がっているこの体に無尽蔵に入っていく人のネガティブエネルギー。

人で満ちた街並みを遠くから見ながら、思う。

どうして、女神はこんな世界を守ろうとしたのだろうか。

どうして、こんな世界を守っている女神を助けようとしたのか。

零崎 紅夜は零崎 紅夜であるがための目的を見失っている。

その空っぽの器は誰かの意志、他人の心、彼の体の特異性がその浸食をさらに加速さ

せている。

どこまでも続くネガティブエネルギーが満ちたす黒い空を見ながら、思う。

苦しみ、悲しみ、怒り、憎んで、正気を削られていくことすら自覚を無くしてしまっ

た。

ブラッディハードの進化形態であるネクストブラッディへと変身できるようになり、大量のネガティブエネルギーの消費によって保たれている意識の中で、彼はイストワールの『貴方は貴方自身を救ってください』その言葉の意味を答えを同類であるモンスター屍の屍の山に座って考えていた。



『freezes、burn!!!』

宝玉から放たれるデウスの声と共に肉を裂き、食いちぎる爪牙を剥き出した〔汚染化〕モンスターの群れは空亡に触れる目の鼻の先で物言わぬ水像と化して、ある物は灼熱の抱擁に何が起き方理解できぬ間に地面の黒ずみとなった。振り返ると同時に氷漬けにされたモンスター達は一斉に砕け散り、氷の欠片の舞う幻想的な空間の中で、赤子を捻るようにモンスターを絶滅させた空亡に彼女達は目を合わせて苦笑する。

「任務、完了しました」

「あ、うん」

一応退院したネプギアや日本一のリハビリ的に弱いモンスターを狩りつつ、ネクストブラッディの影響で「汚染化」モンスターの大量出現地で予想以上の数に一時撤退を考えた瞬間にモンスターを凍らせ戦闘不能に、更に他のモンスターを氷で閉じ込めて、紅蓮の炎で蒸し焼きにするという二桁も言っていない幼い少女とは思えない鮮やかな手口にアイエフは思わず生返事をする。

「なんとうか、ティシフォネの件といいレイス・グレイブハードといい空に関わる奴って大半貴方みたいなチート能力者なの？」

「みんなが、みんなって、理不尽な程強くはありませんよ……。アイエフさんより弱い人たちが大勢います。あと私はどちらかと言えば、中の中です」

『神殺しの頂点パンテオン・エヘクトルを使えばまた変わってくるが、あれは見境ないからな。主と夜天空は有事の際にしか使つてはいけないという約束を交わしている』

彼女の本来の力である『神殺しの頂点パンテオン・エヘクトル』の詳細は空によって聞いている。一度発動すれば、神を確実に撃ち滅ぼす虚無と畏怖を体現する禁断の力。もしゲームギョウ界で十全に使われれば間違いなく、大陸中に付与された女神の加護は一瞬にして殺され、女神の力によって本来弱体化している筈のモンスターはネガティブエネルギーで満ちている冥獄界で荒れ狂う本来の姿へとなる。そうなれば、マジエコンヌ所ではない。

それ故に空亡は契約したドラゴンの力を借りて戦うことが主になる。それでも彼女



と一番付き合いが長い、デウスは物理法則を完全に無視した灼熱と氷結の技で敵を絶滅する様は、例え別次元の記録と経験を得てパワーアップしたネプギアであっても、全ての行動を回避と防御に振り分けて時間稼ぎが出来るか、出来ないか怪しい程だ。

「約束、ですか」

コクリと頷き小指だけを立てて神殺しの少女は皆で見せた。

全く別の世界からやってきたという事は知っている。そしてこの世界より別の世界がどれほどの数があるのか、大砂漠からたった一粒を探す様な作業だったかもしれない。それでもなお、ここにたどり着いたのはどれだけ空をそして父親であった筈の紅夜に思いを寄せているのか、考えただけで胸が苦しくなる。

「……父さんは父さんじゃなくて他人になったから、先生と一緒に帰ることが今の目標です……」

「……………」

本来ならこの討伐任務も紅夜も同行する予定だったが、空亡と紅夜が目を合わせて同じタイミングで別行動を指定してきた。

記憶を失って新たな道を歩む紅夜にとって空亡という存在は受け入れがたい存在で、取り戻したい空亡からしても知っている紅夜が死んで新しい道を進んでいる紅夜と言う存在は受け入れがたい存在で、そんな反発する同士の磁石のような関係で、二人が近

くにいるほど空気が重くなるのは彼女達からしても、どうにかしたいが子供すらいない彼女達からすれば、この複雑な親子関係に上手くフォローできる自信はなかった。

「……気にしなくても、いいですよ」

気まずい空間を察した様に空亡はダンジョンの出口目指して歩き出した。

「で、でも空亡ちゃん凄く困っている顔してるし、ヒーローである私からすれば放って置けないっていうか……」

「日本一、これは私達がどうこう言える様な案件じゃないですよ」

「……そうですね。私達は世界を救う旅をしています。あの親子がお互いに牽制し合っても、最悪の事態になっていない以上は放っておくのが大切です」

「ギアちゃん、それはそうかもしれませんが……それでも」

コンパはまだ親の温もりを守られる筈の小さい背中を見ながら悲しげに呟く。

「今この瞬間、捕まっているお姉ちゃんが酷い目に合っているかもしれないんです。明確な改善案が無い以上は、私達に出来る事はありません」

冷たく言い放つネプギアは空亡の後を追いかける。

残された四人はお互いに目を合わせた。

「プラネテューヌの女神候補生はいつもあんな感じですか？正直、ちよつと怖いのですの」「全然違うわ。紅夜とねぶねぶの影響で結構なお人よしだったんだけど……」

「……可笑しくなったのは、蘇生した時からです。やっぱり空さんが原因だと思おうです……間違いありません」

暗い瞳で苦虫を噛み潰した顔でコンパはぶつぶつと怪しく呟きながら、その場から離れていく。その背中をがすとを見つめてアイエフへと移す。

「このパーティー崩壊しているように思うのです。このままで本当に世界なんて救えるのですか？」

「え、えつと困ったことが合ったら相談に乗るよ。なにせ私はヒーローだからね!!」

「……………」

胃がねじ切れるような痛みを感じながらアイエフはバラバラになりつつこの状況に頭を悩ませた。



『ぶつちやけて空亡のお嬢と仲良く出来ない?』

「あつちからすれば俺は偽物なんだろ?俺からは無理だ」

何より俺自身余裕がない。とプラネテューヌの首都から少し離れた小さな森の木に背を預け紅夜は呟いた。

『そこをなんとかさー……空気が最悪なんだけど』

「お前、自分が一番慕っている奴の偽物を見たらどう思う？」

『うぐぐ……』

紅夜の正論に黙るデペア。

「どうしようもないさ。俺は彼女に何を伝えても結局それは虚ろから出た戯言でしかない。俺が彼女の父親とそっくりである以上は割り切れるはずがない」

この世界に来るまでに彼女がどれほど苦勞をしたのか、自身が記憶がない状態でゲームギョウ界に彷徨っているのは六年ほど、その全てを彼女は探索の時間に使っていたと考えると、どれほど彼女が空たちを大事に思っていたのか、それらを考えれば自分という存在が彼女にとってどれだけ苦痛を作り出す者になってしまっているのか予想が付く。

「正直、このまま単独で動いた方がいいじゃないか？」

『君はまだまだ不安定で次暴走すれば今度こそゲームギョウ界が終わる。一度ネクストブラッディになっただけで【汚染化】モンスター出現確率は一気に上がったの知らない訳じゃないでしょ？その時に君を確実に排除できる存在がいるんだよ』

再度ネクストブラッディがゲームギョウ界に顕現してしまった際には、それを扱う意思が邪悪な物であれば本当に終末が訪れる。

そして今、世界を新たな舞台へと押し上げる力を持ち、ネクストブラッディを打倒できる女神は囚われの身であり、力の差を補うための女神を要求する未来は既に破壊されている。今確実に災厄の権化である紅夜を滅ぼせるのは絶対的な神殺しの能力を持つ空亡しかない。

『正直な所、女神候補生が集まっても君を殺せない。実力的な意味でも覚悟的な意味でもね』

「……………そうだな」

どこまでも黒ずんだ天と地を見ながら紅夜はため息を吐き、全ての生き者を跪けさせるほどの凶悪な存在感に空を見上げた。

凍るような超低温の水と燃える超高温の炎を纏った二律背反を体現した一匹のドラゴン。

荘厳なる白銀の翼を翻し、天使のように降臨して地面に接触した瞬間に溢れる熱波を感じながら、氷山の様に荒々しく生えた神々しい氷角。心臓の脈動のように光る怪しい王の冠のような突起が関節部分と胸から生えている。その存在感はまるで世界を犯す災厄が形した生物としてのカテゴリーに入れていいのかすら怪しいほど。その背中からこちらを観察する小さな影。

「……………用意は出来たのか」

「はい」

「分かった」

ドラゴンがこちらを睨んでいる。たつたそれだけ冷や汗が止まらない。心臓を鷲掴みにされているような恐ろしさと、その視線が主をこれ以上悲しませたら殺すと語っていた。下ろされた翼から登るとネプギア達もいた。

「怪我はありませんか？」

「……あるわけないだろ。これでもモンスター之王さまだ」

寧ろ会っただけで逃げる奴を追いかけて殺す方が苦労した。と愚痴りながら場所を空けてくれたネプギアの隣に腰を下ろす。ラストイシヨンの方で依頼された全ての素材はイストワールに渡されているので、これでゲームキャラの居場所を教えてくれるとネプギアは笑顔で紅夜に伝える。

「お兄ちゃん、覚えていますか？ここはお姉ちゃんが良く仕事から逃げてここで昼寝していた場所なんです」

「……すまない」

どこか影が差している笑顔から話してくれる内容に紅夜は首を振るった。

それにネプギアは痛い程に紅夜の手を握りしめて、いいよ。と優しく答えた。

「……行きます。デウスお願ひ」

『承知した』

白銀の双翼は大気を掴み、大空へと舞う。

目指すはラストেশション。

様々な事があり歪になってしまった彼女達に待ち受けるのは更なる激情の嵐だった。

## 亡匿

「宝玉と血晶、確かに受け取ったよ」

アイエフの手によって渡された依頼した素材を確認して、神宮寺ケイは安心したように笑み浮かべながら、素材を係員に渡す。漸く肩に押し掛かった荷物が一つ減ったと安心するように、疲れが込められた深いため息をついた。

「これでゲームキャラの場所を教えてくれるんですよね？」

「そういう契約だからね。喜んで教えるよ」

あらかじめ用意しておいた地図を前にケイはここからそう多くないダンジョンを指さした。

「ここにゲームキャラがいるそうだよ。本当はもつと遠い所にいたのだけど、突然こちらに移動したそうさ。汚染化モンスター増加に関係しているのかな？」

「……知っている癖に性格悪いわよ」

「彼のお蔭で連日処理に睡眠時間が削られているんだ。少しぐらい嫌味を言ってもいいだろう？ 首謀者自身がこの場にはいないのは不思議だけどね。彼は真面目だからこちらに来て土下座でもしそうだけど」



化粧で誤魔化しているが、じつと見るとケイの目元には黒い隈が見える。これは相当激戦を潜り抜けたのだと彼女達は苦虫を噛み砕いたような顔をする。アイエフは頭を掻きながらこの場に紅夜がない事を説明する。

「人混みだとネガティブエネルギーが見えすぎるらしいわよ。……街に入ろうとしたら、顔真つ青にして吐いたりしていたから、街外で待たせているわ」

更に空亡も人混みを嫌って入ろうとはしなかった。

片目を瞑つて見るに堪えない者を見てしまった様に震える拳を作つて恐怖と戦っている様な様子だった。無理はさせられないと人気がない場所で待機してもらっている。街外で紅夜と共に待つと言う手段もあったが、二人つきりという空気はお互いに無理のようだ。

「なるほど、中々大変な時期のようだね。……それでも、彼がブラッディハードである以上は責任はあるがね」

「責任つて……」

「ネガティブエネルギーを税金と考えたら分かりやすいだろう？ 国民から集めた者を彼は悪い方にしかも独断で使つたんだ。如何なる理由があつたとしても、人の上に立つ存在である以上は相応の処罰が下されるのが常識だ。君達が彼の何もかもを知つて訴えたとしても、それは結局の所感情的問題であつて、彼を知らない人は納得しない。見知

らぬ誰かに災害を与えて恐怖させるのが、彼の存在意義だからね」  
声を上げようとした彼女達の口が止まる。

ケイの言っていることは間違いなく正論であるが故に。

元より女神を高める為の必要悪なのだから、誰もから寵愛を受ける女神とは逆でブラッディハードはそこにいるだけで誰もが憎悪を抱き、嫌悪する存在なのだから。

女神の夢を守る為に、モンスターを生み出さない為に、たった一人で冥獄界に赴き平和が訪れたと思われたが突然のモンスター発生に平和だった日々はあつという間に変わって、女神も原因を説明しようとするが囚われてしまった。

とどのつまり、ブラッディハードの失敗が全ての始まりだと言えるのだ。

「それでも、私はお兄ちゃんを助けない、そしてゲームギョウ界も救って見せませす」

「……決意があるのなら、僕はただ見ているよ。先ほどマジエコンヌ側の使者からも連絡がきていてね。モンスターは一通り討伐が完了、そして縁を切ったよ。……あつちも予想していたのか、気にするほど余裕がないのか、手早く終わったけどね」

「……あつさりとしているわね」

国を守る為に、マジエコンヌと手を組んだケイの爽やかな表情にアイエフは口を開く。

それに対してケイは目を落して、語り始める。

「正直、この件についても人間にはどうにもならないね」

「……どういう意味ですか？」

「マジエコノヌの四天王、そして四女神を相手に勝利するレイス・グレイブハードと彼らの下にいる部下達、それら全て把握している訳じゃないけど、確認できる戦力だけでの気になれば、二つくらいは国を支配できるんだよ」

幾らゲームキャラの守護は比較的弱いモンスターに効力を発揮するが、「汚染化」モンスターや接触危険種のモンスターとなると話が変わってくる。

そして今回のネクストブラッディの顕現によってゲームギョウ界そのものが傷つき、莫大な負が発生する原因となってモンスターの生活は激変したことによって、良くない事が次々に発生する。ラストেশヨンの軍も総力を持って国の守護に回している事で均衡を保っているが、崩壊する危険性も十分にある。

「彼らたちの目的はあくまでゲームギョウ界の覇権を握る事。しかし、決定的な物が足りない物のお蔭でボクらの国は占領されずに済んでいる」

「女神の守護の力ですか？」

「そう、人々の生活環境を守護する力。彼らは人を人を使って守る事しか出来ない。彼らが崇めるマジエコノヌは娯楽と不正の象徴、モンスターという人の負によって生じる現象を対処できる存在ではない。だから彼は戦力を整えながらも国を乗っ取れない。」

彼らも女神の守護の力によって守られている以上はね」

「……なるほど、確かに人には出来ない問題ですよ」

それは多くの人々を一気に守る人を超えた力、神の如き神祕の御業。

今までゲームギョウ界の歴史には常にそれがああり、ゲームギョウ界人の文化と進化を守ってきた絶対的な物。

女神に対して不穩感を抱き、マジエコンヌを崇める彼らからすれば女神の様に生活環境を永続して守れる象徴はない。

「彼は中々考えていたよ。力で無理やり占拠して封じ込めても、いずれ崩壊がくる。寵愛され続ける女神と信仰し続ける人間の関係も同じように枯れ果てていくとね。だから彼はマジエコンヌという力の象徴を作り出して、女神に頼らない世の中を人間が己の力で力を蓄えモンスターというある種の人間の暗黒面と戦いづづけるそんな世界を。……言ってしまうえば、女神のいない世界の女神の代わりになる『人のための正義』を創ろうとしているんだね」

「……………女神を全否定ね。はは、そこまで行くとむしろ爽快ね」

「マジエコンヌも飾りでしかないって所ですよ。……そいつ本当に人間ですよ？」

「人のための正義って……………なによ。それ……………」

日本一の脳裏にはレイス・グレイブハードの言葉が蘇る。

《自らの発展の為に世界を汚して、問題起これば先送りして若い者に押し付ける人間か？

人の正しさを餌するだけの女神か？

全て生物の父であり母であるこの星か？

——お前は『何の』正義のヒーローだ？

それが定まらない限りはお前は俺の敵でもないぜ》

日本一の正義はただ、弱き者を助ける為、傷つく人の助けになりたい『誰かのための正義』。振り子のようにどこにも簡単に向いて、簡単に離れる半端な物ではない。

「ボクから言えるのはただこれだけだ。ゲームギョウ界の、女神の、人間の絶対悪は——  
—ブラッディハード。それだけしか存在しない」



『厳しい言い方だけど、街から離れてそこまで顔歪めるじゃまだまだブラッディハードの力は使えないよ』

淡々と話すデペアの声に紅夜はラスティションの街並みから目を背ける。

【汚染化】 モンスターの大量発生によって生じる政治的にも生産的にも生じる問題。

一見活発的に見える街並みも疑心暗鬼の声、意味もない暴言、薄汚れた欲望の坩堝、それはネガティブエネルギーを見て感じ取れる紅夜にとっては、人々の集まりは毒沼が放つ瘴気と言つても過言ではない。

しかもこのような事態を引き起こした一片を握る身であり、弱かつたからこそこうなつてしまった事に心が軋む罪悪感は、言いようのない暗鬱とした気分させる。

しかし罪悪感によつて生み出された責任が彼の最後の最後を守っている。

この手を握つてくれた女神がいる。

何もかもを忘れてしまった自分に笑いかけてくれる女神がいる。

故にボロボロに朽ち果てながら、崩れ落ちながらも紅夜の未だ心は折れない。折れてはいけない。

「……………あ」

微かに感じた気配の方に目を凝らして見る。何かがちちらに向かつてくる。

それは人ではない。周囲のネガティブエネルギーと同化しないままの存在は紅夜によつて闇の中に浮かぶ一つ光。

ネプギアが帰ってきたとのか？他の奴らは？疑問を浮かべながらその気配は街を出て、少し離れた紅夜を目指して進んできた。

まさか、と思ったその時には姉そっくりの黒曜石のような美しい髪をした彼女は微笑みながら紅夜を見つめた

「——久しぶり、紅夜と変態」

「……ユニ、か。四年ぶりかな」

『失礼な！僕は変態じゃなくて愛の探究者だよ！』

一瞬、記憶の中のノイズが晴れ彼女の名前を口に出せた。

最後に会ったのは最近のはずなのに、重傷だなど心の中で苦笑しながら紅夜はユニを見つめる。

「酷い目、それに包帯グルグル巻きまるでミイラみたいね」

「……色々合ったんだよ」

「色々、ねえ。ケイから暴走したって聞いたけど」

「ああ、間違いはないな。あともう少し空やネプギアが駆けつけてくれなかったら、本当に俺はこの世界を滅ぼしていただろうな」

ネガティブエネルギーが毒々しい瘴気のように空を流れる風景を見ながら呟く。

「……かつて『黒閃』と呼ばれ女神と同じぐらいに強いと言われ多くの人をモンスターから救ってきた紅夜が今はモンスターを総べる王様って、皮肉ね」

「ごめん、昔の事はほとんど覚えていないんだ」

「はあ?……お姉ちゃんの事もまさか……」

「名前と声、以外はダメだな。もう顔も覚えだせない」

ユニはじつと紅夜の瞳を見て大きくため息を吐いた。

シヨックも合った。それ以上にブラッディハードになるということは、それほどまでに失う者であるか。

そして、記憶の中に合った女神達の夢に共感して目を輝かせた紅夜は、憎悪と怨嗟が満たす冥獄界で染まってしまった事を理解させた。

「辛く、ない?」

その一言に紅夜は言葉の意味が分からない様に頭を傾げた。

「質問の意味が分からないが?」

「……少なくとも、私の知っている紅夜はお姉ちゃんと他の女神と一緒に居る時は心の底から楽しそうだった。目を輝かせていた。それを紅夜は全部失っているのよ?」

「それは重要なことなのか?」

『……はあ』

今度はユニが言葉の意味が分からないように頭を傾げた。



「あいつ等の前で、俺が何を想い何を感じ何を得たのかどうでもいい。大事な事はあいつらが世界の為にちゃんと俺を殺してくれることがゲームギョウ界と女神にとっての輝かしい未来の為だろうか？」

紅夜の言葉の意味を理解するまでの数秒、ユニは暫くその場で動けなかった。

そして理解すると同時に彼女は紅夜に背を向けてラストেশヨンに走り出した。

目的地、否紅夜がいるならば絶対にいるであろう彼女を探す為に。

## 答案

「その言葉にユニは思考が止まった。目の前のすっかり別人のように変わってしまったネプギアの言葉があまりに現実的ではなかったからだ。」

彼女には姉がいる。ラストイシヨンの、ゲームギョウ界の中で最優とも言われる守護女神——ノワール。彼女が、否、ネプギアの言葉は女神全ての行いを非難する事だったからだ。ネプギアの傍にいたアイエフ達も言葉にあるものは哑然と口を開き、ある者は疑う様に目を細める。

「どうしようもなかった。これは結果論でしかないのかもしれない運命の悪戯だとしても——お姉ちゃんがしたことは一人の人生を鮮血と悪性の大海に沈めたんですよ。たった一人で」

なぜ、零崎 紅夜があれほどまでに狂い果てたのか、その答えをネプギアは知っている。性格には教えられたのだ。まだプラネテューヌにいた時に、ラストイシヨンに出発する前夜に空に呼ばれ、話されたのだ。

———どのような善意があっても、全ての歯車が悪い方に向けた。その原因の切欠は人であり、目の前の地獄に背中を押してしまったのは女神であること、と。

「守護女神はお兄ちゃんに呪いを掛けたんですよ。私達の為に死んでくださいって、そんなふざけた事を祝福としてお兄ちゃんを満たしてしまっただんです」

———なにもかも、巡り合わせが悪かった。それを気づくのに、僕も君達もあまりに遅すぎた。そう、あの窓から差し込む月光に照らされた空は、あまりに惨劇を目の前に目を背けたいことを振り絞り耐える様に眩いた。



時間は数日前に遡る。プラネテニューヌを旅立つ前夜、ネクストブラツデイに受けた傷を癒したネプギアはイストワールから伝言に一人である扉の前に立っていた。呼び出した本人はきつと寝る事すら必要のない体であるために、起きているだろうが親しき仲にも礼儀ありという事で、ノックをしようと握り拳を扉に近づけたその時。

『いいよ。ネプギア、入ってきて』

「……失礼します」

中から透視したように、扉を通して聞こえた声にネプギアはドアノブに手を掛けて入室する。病室に白い空間の中で電気すら付けていなかったが、窓から差し込む月の光が足元を照らしていたおかげで問題なく足を進めることが出来た。部屋の片隅にはベッドがあつて、そこにはネプギアを呼んで張本人がいた。

——— 夜天 空。数年前までこのゲームギョウ界の裏の支配者。女神すらその存在は確認出来ておらず、その実力は四女神を相手にしても遊べる程、もし最初から彼もしくは彼女がこの騒動に全力で取り組んでいれが数日で犯罪組織が消滅させていただろう。

「夜遅くすまないね。君の事だから、ネプテューヌとは違って明日の準備はきちんとしているよね」

「……はぐ」

まるで別世界に住んでいる様だとその実力と容姿も合わさって女神すら畏怖される存在は変わり果てている。全身に巻きつけられた包帯、顔も片目以外すべてだ。山を形成できるほどの大軍のモンスターに体中を貪られ、両手両足も喰われ付け根がどこにあるのかすら分からない状態だ。人で例するなら心臓を潰された状態でネクストブラッディに立ち向かった末路だと、本人は笑っていたが、明らかに異常の姿だ。

「ネプテューヌは……そうだな。遠足だったらきちんと準備しているけど、寝不足する。こういった事だと君か仲間が代わりに準備を整えていそうだ」

「確かに、そうですね。でも、お姉ちゃんもやる時は凄いですよ。貴方を倒してあるべき自由を取り戻したんですから」

「そう言われると、耳が痛い」

恐らく呼吸器官すらない体でどうやって話しているのか気になるか、緊張するネプギアを和らげるように雑談をする二人、いつの間にか用意されていたベットの隣に用意されていた椅子に座った腰を下ろして昔の話題に二人は微笑ましく笑い、ネプギアは心を落ち着かせた所で空は、鋭く深くここにネプギアを呼び出した話題を口にする。

「ネプギア、君は紅夜のことを恐ろしくない？」

「……………」

ネプギアの沈黙に拳を強く握る様子に目に入れず空は、容赦なく口を開く。

「ブラッディハードの役目は種のリセット。人間の様な知的生命体は良くも悪くも発展しすぎる自らを絶対と表するように。その過程で空と自然は汚れ、他の弱き生命体は淘汰されていくか環境に適応できずに死していくか……星という数多の生命が暮らす中で、たった一つの種をいつまでも優遇するわけにはいかない」

「…………だから滅ぼすんですか？」

「二つが十に害を成すなら、その一を切り捨てた方がいい。秩序と言うのはそういうものだから」

女神という者は人の為に、冥獄神は星の為に、それは絶対に理解できない同時の方程式。最初から見ている景色が違う、最初から住んでいる世界が違う、最初から生きている次元が違う、一つの種の全てが他の種を思いやることは有りえない。もし、そのような事が起きてしまえばその種は生産性が衰えていき、勝手に滅びるだろう。良くも悪くも生命連鎖の根源は弱肉強食、弱き者は淘汰され強き者が生き残る鉄則。

「けど、過ちに気付く事が出来たのなら……生命の対しての感謝、手を取り合う事によって生まれる団結力によって少しでも善性を持つ者達が増えて、暗き欲望に精魂を浸食された者達を止めて、道徳に外れた者達を裁く者達が現れて、秩序を整えるのなら——その種はまだ進化しつづける意味と価値がある」

「……つまり、ブラッディハードは種に対する試練、なんですか?」

「正解だよ。ネプギア、汚れきった生命に誰もが同調するような絶対悪を造りだし襲わせる。生命の繁栄における最大の障害として、それを乗り越えてこそ、新たなステージに上がれるだろう。……もし、それに協力できずに滅びてしまえば、その種はいつまでたつても変われなかった弱き者——そういうことになる」

つまり女神はその逆、その世界で最も優れた生命を愛し育むのを守る冥獄神とは対極

の存在。お互いその力の根元にあるのは良くも悪くも意志の力。同じ存在の様に見えるが視点が異なり、故に光と闇の様な関係。

……だから、ネプギアはふと思いついていた。彼女に記憶に残る手を取り合う女神と冥獄神の姿は――

「そう、女神と冥獄神が手を取り合う。その事態がお互いに存在を破綻させている。……特に広すぎる視野を持つ冥獄神は特にね」

「――それじゃ、私は、私達はお兄ちゃんの手を取る事が間違っているというのですか？」

「……そもそも冥獄神の誕生は偶然と偶然が上手い事に組み合わせり、強い意思が必要なんだ。……だけど、紅夜の場合は違う、あれは本来の仕様を穢し狂わせた人為的な神格だ」

あれは人を思い、人を愛し、人を守ろうとする女神の仕様に近い冥獄神――だっただけだ。

「その器――紅夜はあまりに幼すぎた。環境と巡り合わせが史上最悪だった」  
「……………何が、ですか？」

「さつきも言っただけど、女神は知的生命体を守る存在――話が面倒だから人を例にするね。あれは人を守る器じゃない、そういうものじゃない。女神に憧れたから、そう

「……はっ？」

「……はっ？」

「憧れる最愛の姉の様に人の為にあるとするとするあの誠実な姿勢を空は、まるで出来の悪い木偶人形の踊りに目も当てられない様に苦い表情で言い放った。

「話をするよ紅夜の過去を、誰かの物になろうとした愚かで幼すぎた子供に手を差し伸べた女神と周囲の人々は造り出した光と闇の大きすぎる境目に狂ったまま、人の総意を受け止める器となることを決意してしまった経緯」

「思い出してみればネプギアは紅夜の事をほとんど知らない。知る機会がなかったといつてもいいし、なにより今の人生を楽しそうにしていた彼なのだから、聞く必要も思いつかなかつた。しかし、人間も女神すらも理解できない深淵の闇には確かに狂気を孕む彼がいたのだ。」

「ネプギア、この話を聞いてまた最初の質問に戻るよ。どうしようもないと判断した時は、並行世界からゲハバーンを持ってきていい紅夜を討て、僕が討つていい有り様によつては、紅夜は世界に住む種を全て塵殺する災厄の化物と化す」

「それは誰も知らず、見えず——巡り合わせと周囲の期待は最悪の狂気の卵を孵化させようとしていた。」



——空が語り始めたのは、紅夜の始まりからだ。

つまり、この世界に来たばかりで記憶がない真っ白のキャンパスのようだった時期の頃だ。

紅夜は、モンスター討伐帰りの緑の大地の女神————ボールに拾われた。女神である彼女は、少し警戒しつつも紅夜を拾い、事情を聴くことになった。結果は記憶喪失、人より遙かに生きているボールはその言葉に嘘偽りがないことを確信することができた。しかし、人はそうでもなかった。当時宗教的に大粛清が行われた事態が終息した時に現れた怪しい人物にスパイではないかと、誰もが疑った。それは、いつも疑惑の視線を浴びる精神的拷問の日々、食事も睡眠も24時間体制での監視、本人は口癖のようにスパイではないと訴えた。誰もその言葉を信じることは出来なかった。

唯一、紅夜によって救いの時間がボールとの一時だった。守護女神戦争の最中故に会える事は少なく、時間も短い物だったが、それでも一日中向けられる疑惑の中で、温かい陽光の様な微笑にまるで弟のように面倒を見てくれたボールに紅夜は心底感謝した。

——そう、誰も信じられない敵の中で唯一与えてくれた。甘い蜜のような毒に紅夜は依存してしまった。

狂信者の誕生である。紅夜は女神の在り方を真っ先に学んだ。ボールの役に立ちたいと血走った目で監視の目も気にせず学び、自分にできる事————モンスター退治

だった。

ベールに感謝される程に褒められるほどにその狂気は加速していく、元より人間の体ではなかつたこともあり限界も分からず、ただ走り続けた。

女神の様になりたい、女神のようになつたら、自分を助けてくれたベールの為にもつともつともつと恩返しが出来る！

女神に固執し、嫉妬し、依存していく……そんな無理に無理を重ねた行為はベールに手によつて収まり、少しずつ人間味を戻して言つていた。そんな時に始まつたのが、ベールの次に信頼できる人だつたから言われた国の発展の為に“女神”ネプテューヌを暗殺せよする依頼を断つた時に紅夜は人の手によつて殺された。

恐らくその時からだろう。零崎 紅夜の形成されていく人間性に罅が入つたのは、最愛の女神であるベールすら敵に回し、成し遂げたのは国の秩序、しかしそれは紅夜にとってはどうでもいいことだつた。

国があつてこそその女神である鉄則を理解できない紅夜は女神の為に、行動を起こすことしか考えられなくなつた。故に善悪すら理解できない。否、紅夜の思考は女神から始まり、女神に終わる。

女神が望まなくとも、女神の為ならばと喜んで身を捧げる——どうしようもない存在の誕生だ。故に世界の重さを知らず、見えず、理解できない紅夜は女神の苦悩を振

り払う為に、喜んで冥獄神となった。そういう物になつてしまった。

冥獄神はその星の種を負を餌に力を増幅させる。しかし、それは常に自爆のリスクを背負う。故にそのシステムを作り出した空は、その大質量の悪性の意志を受け止めても、己の意志を貫く強さがいる者を素材にできる様に手引きしていたが、紅夜という冥獄神はそれを知らない。女神に執着する意思は冥獄神と言う存在を自己破綻する。紅夜自身が冥獄界を殺す毒と成り果てているのだ。それは正気の沙汰ではない苦しみを味わうだろう。

滅ぼすべき人間という種を壊れ始めている紅夜は人々の悪性の根源——自己破滅に飲まれていく。魂まで到達するであろう滅びの熱情に今まで抗えていること自体が奇跡だと言つていい。それが女神の望むべき未来を歪ませていくのも時間の問題、どこまで紅夜の意志の矛盾に塗れた持つのか空にも分からない。

ただ確実に言えるのは、零崎 紅夜はブラッディハードに相応しくなかつたという結果だけだ。

## 考察

空気が凍ったように冷たく、まるで冬の外に放置された鉄の様に。それほどまでに冷めきった中で俯いたまま拳を震わすユニをまるで鏡を映った自分を見つめる様な、寂しさと後悔が混ざったような複雑な物を見つめる様にネプギアは見つめていた。

「(少し……少し前なら、私もユニちゃんのようになっていた……ね)」

思い出せたのは最愛の女神姉の背中。あの頃はどれだけ辛い事があっても、挫けてしまいたいようなことが合っても、女神姉の傍ならきつと大丈夫——そう、当たり前のように思っていた幸福な時間。

だが、それは世界の救世の前では、薄っぺらい今にも破けそうな紙も当然だった。世界を破壊しようとする悪意に立ち向かい、その理不尽すら覚える不滅性を持つ存在から世界を守ろうとして——人は救われ、女神は一人になった。共に競った女神も共に戦った女神も唯一の家族すら、誰よりも好きだった自身の手で最悪の魔剣を起動させる為の供物として奉げた。

残ったのは、世界を救ったと言う高揚感と使命を果たせた達成感でもなかった。ただただ手の間から落ちて行く砂を見つめる様な虚無感。それでも現実から逃げられない

かつたのは、犯罪神の散り際の一言を否定する根気だけで立ち上がった。

〔同時に……色々と零れ落ちちゃった……いや、捨てちゃったかな〕

無くなったのは人間性、今でこそ混ざったお蔭で随分戻ってはいるが思い出してみれば見る程、自身は女神としての機能を果たすための機械と成り果てていた。そうしなければ耐えられなかった、そうしなければ前に進めなかった。以前とは違う、皆で手と手を重ねられるほど、この手は綺麗ではなかった。

大切な者を殺して血に染まったこの手が、女神としての使命を全うできるかすら疑う毎日。人の理想を従うままに、きつと素晴らしい明日が来るはず、だから阻む物を倒して殺して、消し続けた毎日に果たしてどれほどの価値があったのだろうか。

そうやって何度も何度も繰り返していくごとに、いつの間にか人間の身であった仲間達はいなくなっていく、本当の一人ぼっちになって、歩んだ先に待ち望んでいたのは女神が望む未来ではなく、あの犯罪神が言った通りの——自ら破滅を望むように争い、衰退していく愚かな人間達の末路。

そして、誰よりも人の為に働き、人を信じられなかった、人の不信を買い追放された。後悔は今でもしている。それでも、最後の最後で救われた。穢れ捨てられ壊れた玩具をまるで我が子のように抱き締めてくれたあの温かみは例え地獄に落ちてても、忘れることはないだろう。

「……それは、うそです」

「……………コンパさん」

誰もが言葉が出ない状況下で一番先に口を開いたのはコンパだった。いつもの天然気味ながら周囲を和ませる母性にも似た雰囲気はなく、ただ暗い声でネプギアの言葉を否定する。

「だって、めがみさまが、ねぶねぶたちがまちがったことするわけないです。ぎあちゃん、それはそらさんがうそをついているんです。だって、だって……………それじゃ」

カタカタを歯を鳴らす音が聞こえる。それと連動するように体が小刻みに震える。まるで、寒さに怯える子供の様に。それは、形容し難い現実を受け止められないように。

「……………私達のやってきたことは全部間違っていた、ってことになるです!!」

感情が噴火したようにコンパが叫んだ。

「あれもこれも！一体何の為に！モンスターさんからみんなを救ったんですよ！女神様達は空さんが作り出した運命から自由を勝ち取ったんですよ！なのにそれがこうさんを追いつめた?!じゃ、最初っから命を駒のように使った空さんがなにもかも正しかったんですか!!」

「コンパ、落ち着いて……………ッ」

「その通りですの。ここで叫んでも何も解決しないですの!!」

絶叫はいつしか慟哭へと変わり、崩れ落ちる様に顔に手を当てるコンパにアイエフとがすとは寄り添い、何か言いたげそうな顔で氷の様な表情を見せるネプギアに口を閉じて、コンパを引き連れながら部屋から出た。残ったのはただ黙って話を聞いているケイ、まだ理解が落ち着いていない様子の日本一、そしてひたすら口を閉じていたユニは漸く面を上げて、ネプギアを見つめ口を開いた。

「……ネプギア、聞いていい？」

「なに？」

「貴方の中で、空さんは正しいと思っている？」

「正しいとか間違っているとか、そういう次元の話じゃない。だって私達はあくまで人の視線で人を守る存在だけど、空さんが見ているのは星に生きる全体の種。価値観、論理とか根本的な所から別物だよ」

ネプギアはこの誰よりも夜天 空と言う人物像を理解できていた。アイエフが言っていた様に決して相容れぬ存在だということをゲームギョウ界を守るためならば、人や女神すら滅ぼすことも躊躇しない女神とは異なる破壊なる神だということ。それを理解してしまっているネプギアをまるで遠い聳え立つ山を見つめる様に目を細め、ユニは呟いた。

「……そう、いつの間に私はネプギアと全然違う場所にいるのね」

「そう、だね。今の私は強いよ強いだけ、見知らぬ誰かを救えても大切な人は誰一人救えなかった。未来を守れても希望を守れなかった——失敗した女神なんだよ」

昔を思い出すように虚空を見つめるネプギアにユニは、あまりの距離の違いに力が抜けそうになった。一緒に研磨した日々を思い出した勝算はあちらが上で、それが悔しくてライバルとして認定して肩を並べるほどには強くなったと自負しているつもりだった。それは今や、まるでお互いに間に壁があるほどの別離感があった。



「——そう、なんだ」

ぼそつ、と扉の横に立って話を聞いていた空亡は汚れた自身を映した鏡を見た様に呟いた。

『……同情するのか我が主、貴方も同じように他人の記憶と経験に支配される立場であるが、奴はそれを望んで受け入れた。つまり自業自得だ』

「……そうかな？ 私は、そうは思えない」

『主よ。アレは贄なのです。人が害虫を駆除するように、奴は女神に駆逐されるための』



運命体だと思いませんか？」

従者の言葉に口を閉じる空亡、少ししてアイエフ達が彼女の前を通るが互いに視線を合わせても会話することなく、涙を流すコンパを連れていく姿を横目で見えなくなるまで見つめる。その眼は見下す様な、憐れんでいる様なそんな複雑な感情が現れていた。「ふんっ、過ちを幾度となく繰り返す。その責任を他に追求する時点で終っているのだ。人という不完全な存在から生まれた女神が統治するこの世界に矛盾があるのは道理であらうよ」

「そうだね。そう……だからこそ、生命は輝ける」

『……………主よ。貴方の行く道に私は喜んで賛となる覚悟があります。どうか、後悔なきように』

「うん、ありがとう、私の大切な従者」

掌に浮き出た声を放つ宝玉に口づけをして、親愛なる従者に心から感謝をしながら体を伸ばしたタイミングでネプギア達が部屋から出る。光が無い一度修羅に墜ちた者の闇の様な深い意志を宿す目で、隙なく堂々と足を進めるネプギアと複雑な表情で付いて行く日本一、困惑した表情で歩くことすら辛そうなユニと空亡はふと目が合い足が止まり、それに気づいたネプギアも足を止め互いに初対面だったかなと思いつつ紹介しようとして口を開く。

「あ、空亡ちゃん紹介していなかったね。この人はこの国の……」

「お久しぶりですユニ様」

「……貴方、プラネテューヌの時の」

「あれ？もしかして知り合いなんですか？」

プラネテューヌの時に会ったことを簡単に説明するとネプギアも納得した様に頷いた。アイエフ達が歩いて行った方向に空亡を先頭して歩きながら、お互いに話をする。空亡が記憶を失う前の紅夜とは親子関係であることに驚いたり、暗い表情をしていた日本一に空亡が今までの旅でどんなことをしてきたのかを聞いてみたり、空亡を中心に話題は盛り上がった。

「それにしても、一人でマジエコンヌに立ち向かうなんて凄いですね。女神でもないのに怖くなかったんですか？」

「そうでもないよ。口が悪いけど、がすとはいつも私に説教しながら支えてくれたし、辛かったこともあつたけど……うん、正義のヒーローを名乗る者として、困っていることは見捨てておけないと走り回っていたら怖いよりもっと頑張らないと！と思える様になつていったな」

「……………」

握り拳を作つて思い出すように語る日本一に三人は心の底から尊敬の念を抱いた。



して否定しませんが、助けた人が遠くない未来に犯罪を犯した場合のこと、考えたこと  
あります？」

「……………」

その問いに女神でさえも言葉を失った。もし、そんな事態が起これば自身の善行は誰  
かの悪意を咲かせる事に只らない。それは最早、善意でなく、悪意より性質が純粋な邪  
悪でしかない。

「人を助けれる立場は、そういう責任があるんです。貴女はそれを分かっている。だか  
ら、自身の行いが正義に悩む……いいんですよ。いつか自分に納得が出来る答えが出る  
まで、レイス・グレイブハードの問いはそもそも人間に問い掛ける事態、間違えてい  
る。彼らが求めているのは最早生き物全ての意志を自分の意志で捻じ曲げる邪神の類  
ですから」

小さい体、まだ十歳にも満たない体とその容姿から語られる内容とは思えない言葉は  
確かに三人は心酔したように頷いた。

「例え自身の理想が、どれだけ愚かでも、どれだけ醜くても——泥濘の果てに花  
が咲くと信じて、進んでこそその正義のヒーローだと私はそう思っています」

## 深層

海。生命はここから生まれたと言つても過言ではない神秘的領域。

数年前、産業革命時のラスティシヨンの海は工場から流れる廃棄物によつて見るに堪えない惨状であつたが、この地の女神はその海を見て心を酷く痛め、直ぐに美しい海を取り戻す為に動いた。己の利益だけを優先する企業を制する為に様々な政策を造りだし、女神の働きによつてラスティシヨンは工業的な観光領地だけではなく、美しい砂浜と透き通る海が広がるゲームギョウ界でも五本指に入るとされる程の有名観光地になつた。

そんな場所に紅夜達は来ていた。勿論遊ぶ為ではなく、この地のゲームキャラを探す為にやってきたのだ。ラスティシヨン教祖の神宮寺ケイだけが許されたゲームキャラとの通信によるとこの場所にいるという事だ。

紅夜たちは足を進める。日はちようど昼時ということもあつて、多くの人が訪れていて。海で遊ぶ、つまり愉しみを目的とした人がほとんどであり、本都市ほどではないがそれでも、見渡す限りの人混みがあつたが、彼らから無自覚で放たれる負は少なく、紅夜が顔色を変えずに進める程だ。

パーティー中には少しだけ遊びたい者もいるが、自ら課せられた使命にぐつと今は我慢と胸に刻んで、近くの危険性がかなり低いダンジョンに足を運んだ。そして、神宮寺ケイに指定された場所に赴くと――。

「よう、お前ら、最初に会った時と比べてちよつとはマシになったか？」

「……………むぐつ!!」

「……………ぢゅつ!!」

三人組（そのうち一匹はネズミ）は海水浴気分なのか、かき氷を食べていた。因みにレイスは練乳、リンダはイチゴ、ワレチューはチーズ味で、三人海を眺めながら食べている横には黒い靄を纏った鎖がゲームキャラを縛りつけていた。必死に助けを求めているのか声を出そうとするゲームキャラはネプギア達の姿を見た瞬間、更に声にならない声を激しく上げる。

「――何をやっているの？」

「かき氷、喰ってるんだけど？うまいぞー」

「あ、頭があああッ」

「ぢゅうううううう!!」

お前ら何やってんだよーと鋭い頭痛に顔を歪ませる一人と一匹にゲラゲラと笑うレイスはカッパに残ったかき氷を豪快に口に放り込んで、立ち上がる。それと同時に全員

が臨戦態勢に入った。

「ツ————と、さてさて始めてみる奴等や久しぶりに見た奴がいるな」

ある者は屈辱を味わった敵意を、ある者は怨敵を目の前にしたような純粋な悪意を、ある者は人外離れた化物を見る様な畏怖を、ある者は静かに闘気を瞳の中で燃やす者。それらを一通りレイスは確認して——一人、目を丸くして棒立ちする少女を目にして、懐かしそうに静かに笑う。

「日本一、どうだ。俺の出した問題は？お前はなんの味方だ？」

「……………さてね。少なくとも私の正義を間違っていないと言ってくれる人がいるから、アンタを討つ」

抜かれたペンギンのような形状をした銃を手に、今まさに飛び掛かりそうな日本一に満足げに笑みの深さが増す。

「ふむ、つで、あれほど無様に敗北したのに、よく来たな女神候補生のお二人さん？」

「————！！」

「二応、お前ら見つけたら捕縛しろとか言われているから、会った以上は今度こそ手足の二、三本は覚悟してもらおうかな」

レイスがポケットから取り出したディスクにリンダとワレチューは体を揺らして、この不自然に開けた場所の隅っこに緊急避難する。それを確認したようにレイスはその

ディスクを地面に落すと、怪しい空間が地面に広がる。溢れ出したのは精神を逆撫でするような嫌悪感を黒い霧の様な物、その中に怪しく煌めく赤い瞳。

それは化外の物。人に害する人の意志。穢れ歪んだ悍ましき気配は、誰よりも紅夜——ブラッディハードはその正体に気付く。それは、この世の地獄である冥獄界で蝗害の如き数、激流のような激しさと速さで繰り広げられる弱肉強食の人柱。

「ッ——それは!？」

「一時的にこっちとあっちを繋げた。俺自身だと相手にならないが、これぐらい倒せるレベルだよな。」

隠されたフードの奥の表情は、誰もがその声を聞いてだけで狂気があると言わせる程の邪神のような笑みだと連想させた。不安定で不定形な黒い霧は凄まじい速さで体を形成させていく。鋼鉄をも切り裂く鋭い刃、大木を思わせる太い腕。幾多のモンスターを葬ってきたのだらう不気味な赤黒い色をした凶悪で巨大な斧。生半可な刃物では傷つけられない逞しい肉体。餓えた狼のような赤く鋭い瞳は見下ろし。その大きな凶体をより大きく見せる殺意の塊。

「お、流石兄貴、猛争化した接触危険種を呼ぶ出すなんて女神達終わったな」

「ちゆ、可哀そうでちゆ。そもそもお前一人いればゲームギョウ界支配できるんじゃない? という理不尽の塊のような人から見れば、この程度のモンスターを召喚するのは朝



飯前でちゅ」

取り巻き二人は疲労の欠片も感じさせずに息をするように召喚したモンスターに畏怖の念を抱きながらレイスに賞賛する。モンスターとは負の塊、ゲームギョウ界と冥獄界を犯罪神の加護によって一時的に繋ぐことが出来るが、それを操るとなると凡人にとっては自分より弱いモンスター程度しか召喚できない。システムの出来ない事も無いが、その場合モンスターに乗っ取られるか喰われる自爆の危険性が孕んでいる。

「何かしらの力が無ければ、善の行いも悪の行いも等しく、負け犬の遠吠えと変わらぬぞ。故にお前達の力、俺の敵となりえるか見せてくれ」

「■■■■■■■■——ッ——!!!」

レイスが指を鳴らすと同時に空気が振動する咆哮がネプギア達を吹き飛ばす勢いで放たれ、モンスターの姿が消える。刹那遅れて地面が爆発するように粉碎される。

「上ッ!!」

太陽を背に巨体とは思えない跳躍から己が体を乗せた必殺の一撃。紅夜が叫ぶと同時に一人を残して、全員がその場から逃げ出す。

「空亡ちゃん!?!」

「……………」

凶悪なモンスターを居ないように、否最初から彼女が視界に映り認識しているのは一

人しかなかった。脳天目掛けて振り下ろされる凶刃にネプギアの声が空亡に届き、無造作に手を血濡れた斧に向け、自身の従者の名前を呟く。

『Dデeスsクtトrラuクcシtヨiン hハaッvオoクc dドrラaゴn oオーvバーe bブoスoスtトeトr  
!!!』

——その刹那、炎と氷の旋風が巨体のモンスターの落下を止めるほど激しく渦巻く。

「……………ちよつと、貴方は邪魔だ」

それは一瞬の出来事だった。ネプギア達が消えたと錯覚させるほどの速さでモンスターへの懐に潜り込み槍の様な真つ直ぐな一撃が腹部を抉り体内に侵入する。

『Bバーuンrンn!!』

その無機質な声がモンスターの最後だった。体内を蹂躪する猛火は瞬く間にモンスターの肉体を何倍にも膨張させて命の花火を咲かせた。地面に巨大な質量を持つ物体が落ちた様な音と共にレイス以外が啞然としたのは、空亡の姿、滑る様な洗練されたフォルムに氷の中に炎を閉じ込めた宝玉が至る所に光るドラゴンを連想させる周囲を圧倒させる覇気を放つ鎧を身に纏っていた。

「……………な、なんでちよつと……………」

「兄貴の呼び出したモンスターが一撃、チートだ……………」

「……………」

これが現実なのかとリンダとワルチューは互いに頬を振り合い、今や影も形もなく桜のように散る火花に震える。それにレイスは腕を組み、うーんと唸るように声を出す。

「……空気、読めよ。くうちゃん」

「……………」ここは一般人もそれほど離れていない場所です。もしかしたら無用な、被害が出るかもしれません。それにあのモンスター、確かにネプギア様達は、倒せるでしょう。しかし、アイエフさんやコンパさん、日本一さんやがすとさん……誰か一人か二人くらい、確実に死んでますよ?」

「だから意味があるだろう?」

「……………」この邪知暴虐の邪神め」

機嫌良く口笛を鳴らすレイスに龍鎧を装着して平均的な青年程度の背までになっている空亡は忌々しそうに懐かしそうに舌を打つ。誰がどう見ても初めて会う様な関係ではない事は空気で感じられていた。

「あ、兄貴、そこのバケモノと知り合いなんすつか!」

「ああ——こいつは」

「空亡ちゃん、貴方はレイス・グレイブハードの何なんですか?」

「……………」この人は」

鎧を解除して、見知った雪の様な長く白い髪を揺らしながら、澄んだ瞳は悲哀を映して、口元はまるで笑っているように。レイスは表情が見えないが、家族と再会したように喜劇を見た様な弾んだ声で、二人は同時に口を開く。

「久しぶりだな。俺の最愛の娘」

「久しぶりです。私の最悪のお父さん」

——その真実は、紅夜にとってレイスに抱く理解できない殺意を理解させてしまった。

## 爆発

——いま、彼女と奴はなんと言った。

不動の境界線に一滴が落ちて、深く水面に波紋が広がるように、意識が震える。それを理解するなど理性が訴えるが、既に結論は証明され出された答えが体中を支配する。

「……………あ、そうだな。うーん、まあいいか」

そう呟いた男は悩むように唸ったが、直ぐに良しと言って顔全体を隠す程の深いフードに手を掛けて捲った。隣にいたコンパが「……………嘘」と口に手を当てて驚愕に顔色が染まっていた。全員似たような表情だった。俺は、既に目の前の男が誰か分かってしまった故に驚きもしなかった。ただ、新しい鏡に映しだされた穢れに穢れた己の姿を見てしまった様な心境だった。

「——初めまして犯罪組織マジエコヌヌで幹部させてもらっている零崎 紅夜だ。以後よろしく」

それは紛れの無い俺の顔をした男が、俺の名前を口にした。

「え、ええ、兄貴が二人!? 兄弟はいるとか言っていたけど冗談かと……………」

「……………漸く合点がいったでちゅ、アンタのような存在と性格がこちら側にいればそりゃ

顔を隠すでちゅ——リーンボックスの英雄」

「早速わかったがワレチユー、流石俺の部下」

リーンボックスの英雄。人間に害する存在の神となった俺にとつては汚名でしかないその名は一度何もかも失った俺が、もう一度全てを取り戻したくて、結果的にリーンボックスの腐った部分を切り取れた偉業ということになって、そう呼ばれるようになった二つ名。

「あ、貴方は何者なんですか……!?!」

「簡単に言うのだな。このゲームギョウ界に来る前のその俺が造った俺コレが生まれる前の俺オリジナルだ」

………そうだ。思い出した。立ち込める霧に光が差し込むように、俺は目の前の男のことについて思い浮かんだ。元々俺は目の前の男が空との戦い後に精神を破壊され、その精神を再構築する時間の間だけ、この体を管理する為の後付け処理装置——それが、俺と言う人格の正体。

「と言う訳でお前も久しぶりだな。デペア?」

『キャプテン……まあ、最初から合った時に分かったけどね。例え体が変わってもその悪性に見た太陽のように禍々しく輝く魂は例えどのような地獄を見たとしても、一度見てしまえば決して忘れる事は出来ないだろうね』

「デペアが紅夜オリジナルと話す。その声音は今まで俺との会話ではなかったほどの親愛の念が満ちていた。」

ネプギア達は目を丸くして何度も俺と紅夜オリジナルと見比べている。

「見れば見る程そっくりというか……鏡のようにしか見えませんか？」

「うん、つて、紅夜？だ、大丈夫？」

空亡オリジナルと紅夜が相對している現状を見る。俺の視線に気づいたのか、懐かしそうに、一度通った道端に落ちていた石が同じ場所に合ったと感傷的になっているのか、腕を組んで何度も頷く。

それに俺は黙って、背中に背負っている緋曜日を抜いた。抜くだけの力で抜いた刃が地面に落ちて金属音を響かせる。

「……くうちゃん、今度は手を出すなよ。じゃないと手足引き千切るから」

「お父さん、一体何をするつもりですか」

「どれだけ育っているのか、ちよつとした味見だ」

——全力で、地面を、蹴った。一気に紅夜オリジナルに肉薄する。トリガーを引いて、弾

丸が飛び出し、爆熱推進装置が爆炎を放出しながら赤熱した刃を叩き込んだ。

「……いきなりとはな。さあ、日本一はある程度答えに近づいてつまらなくなったから、

今度はお前だ——さあ、お前はダレだ？」



オリジナル

紅夜は地面に突き刺した黒い大剣で防御している。持っている自身ですら熱く感じる熱波を浴びている筈なのに、柵に並べられた商品を見分けるような涼しげな顔をしていた。

全身が熱という熱が暴走するような感覚に襲われた。こいつをなんとかしないと、こいつの口を一生開けないようにしないと、分からなくなる。なにもかも。

「だ、だ、ま、れ……!」

「…………お前は男か？女か？子供か？青年か？老人か？それぐらい分かるだろ？」

「黙れええええ!!」

『紅夜、落ちて着こう!?!何いきなり切りかかっているんだよ!』

イオマグヌツトを抜こうとした瞬間、白い大剣が肩を貫いた。鋭い金属音と共に緋曜日が手元から遠ざかり、黒い大剣がもう片方を貫く、そのまま地面に突き刺され苦痛の音が口から洩れた瞬間、紅夜は両手に持った大剣を振じった。骨が砕かれる音、肉が引き千切れる音と焼かれる匂い、悲鳴が響く様に聞こえた。

「お兄ちゃん!!」

「お、そういえばお前等ちよつと忘れた」

「——絶対に、許さないッ!!墮ちろッ!!」

黒い閃光と薄紫色の閃光が空を駆け巡り、爆発音と金属音が奏でるように交差して鳴

り響く。駆け寄ってくるコンパやアイエフが何か語りかけてくるが、何も聞こえない。全ての意識は紅夜へと向けられているからだ。

俺は、一体、誰だ。

当たり前に答えられる問いを口に出来ない。目の前の存在、俺のオリジナル、今地を這っている俺は……誰なんだ。冥獄神ブラッディハード、負を統括する悪の神、そういう存在なのは分かっているけど、俺はそれを許容できても受け入れる事が出来ない中途半端者だ。

そんな俺でも、守りたい者があつた筈だ。何もかもが染まつた闇の中でも、血達磨にながらも足に力を込め前に進ませた物があつた筈だ。

それが俺であつた証明だつた。

「力が上がっても、やっぱりまだ満足できるほどじゃないなあ!!」

「キヤアアア!!」

「ネプギア!？」

「仲間潰されて余所見しない。という事でチェックメイトツ!!」

オリジナル  
コペー  
紅夜にはない俺だけの全てが合ったはずなのに。

「そんな、二人がこんなに早く……!?」

「アホか、俺はあれより強い女神を四体同時に相手して態々殺さずに捕らえたんだぞ？  
無手でも十分すぎるだろ。常識的に考えて」

……ああ、そうか。最初に会った時に紅夜オリジナルに無尽蔵に殺意を抱いた理由が。

俺は奴の残滓だ。夢を描いて、理想を胸に愚直なまでに進み最後は砕けてしまった心残り。

絶望だけがあつた地獄を造つてしまった本人が、正気に戻つたと勘違いして何を守りたいと、何かを救いたいと決意をした。けれどそれは狂気だつた。紅夜オリジナルがしたかつたのは贖罪故に行動、それ故に守り救うこと自体が目的でありその中に善も悪も関係ない。

また昔のように幾多の地獄を造りだし、守つた者や救つた者に何度も利用され、裏切られても死ぬことが許さない罪遺物という体は世界を滅ぼし続けた。そこに意味は無かつた。<rb>紅

</rb>><rp></rp></rt>>オリジナル</rt>><rp></rp>></rp>></ruby>>にとつての目的は、誰でもいい誰かを守り救う事だから。それは狂気の善意であり災厄の救世主であり——描いて夢が地獄だと知らず、守つて気दैいて、救つた気दैいて己の罪の大きさを見ずに、俺の存在すら真面に理解しなかつた。最低の自己満足であつた。



「……………俺は、本当、誰だよ」

「ど、どうしたの？ 頭でも打った？」

ああ、ムカついてきた。

凄く。無性に、誰かを殴りたい。

ああ、ちょうどいい奴がいるじゃないか。

凄く。都合がいい誰かに意図して舞台を作ってくれたようだ。

ああ、ならやるしかない今までの人生とか何もかも目の前の残滓が造ってしまったものだから。

「が、がああああああアツ!!!」

『いつ!?!ちよ、何をしているの!?!』

冥獄神の機能をフルに使う。周囲の負をかき集め、デペアの認証無しに半場無理やりブラッディハードと化す。肉が幾ら引き千切れようが、骨が砕けようか関係なく、俺から二つの大剣を抜こうとしているアイエフ達を弾き飛ばして自分で抜き取る。噴水のように血が地面を降り注いでいるが、大丈夫だろ。きつと多分。

物理的な要素を感じないエネルギー状の双翼。それは、壊れたテレビなどで見える砂嵐と雑音を刻み紅いノイズ色の翼が広がる。光を反射しない黒色の武骨なプロセッサユニットに血の脈動のようなラインが心臓の鼓動を連想させる様に駆け巡る。勿論、そ

の際に身に纏っている黒い外套はなくなって、ミイラのように体に巻いている包帯もなくなり、赤子少年青年老人と違って男女の負に染まった悍ましい人面図が露わになって、レイス以外全員が言葉を失う。

『……嘘、コントロールでき……いやこれ力づく?』

「ん?……空気が変わった。……あれ?もしかして、只のコピーだったから問題なかったはずが……あ、ブラッディハード化させる為に封印していた黒歴史の一部が漏出してしまってた?」

うあああ、超痛い痛い痛い。両腕が縦に割れている!涙が出る程に痛い。最遺物の不死性のお蔭で直ぐにくっ付いて、ちゃんと両腕が動くけど痛みはまだ残っている。

けど、まだ全部じゃないけどちゃんと思いつけた。ネプテューヌと一緒に旅したところ、ノワールに仕事の愚痴を聞かされたところとか、ブランに貴方の巻いた種とか滅茶苦茶なモンスター討伐依頼を押し付けられたり、特にベール!俺に半裸になる執事服とか着かせやがって、お前は鼻血だしながら写真撮っていたけど、俺は穴が合ったら入りたいほど恥ずかしい想いをしたんだぞ!

「うがああああああああ——零崎 紅夜!!」

「お、おお……」

頭が可笑しくなるほどのネガティブエネルギーを強引に操作しつつ全スラスターを

後方に向け、体を前かがみにする。

「一発、殴らせろおおおつおお  
!!!!」

「わーい、唐突な覚醒イベントに困っちゃう☆」

俺は、絶対、お前を、許さねえ。

## 天性

声が聞こえる。それは憎しみの声だったり、哀しみの声だったり、苦しみの声だったり。それは、世界に満ちる負の声。ブラッディハードという負を総括する怪物の王の供物であり背負う物——そういう物だと教えられた。分かってる理解はしてるし、納得もしている。

だけど、今日は今日だけは、この瞬間だけは、ただの自己満足でこの力を存分に振るわせてもらう。

目の前の怨敵は全ての元凶、ピエロのように深く笑みを浮かべる体型や顔も寸分狂わず一緒の存在、しかしそれは鏡に映る存在ではない。嘗て世界を滅亡させる狂った理想を愚直なまでに押し進め、誰もが彼の様に狂い、結果的に世界を崩壊させてきた邪神の様な存在が形を変えて、信念を変えて、存在を変えて、この世界にいるのだ。絶対に逃してはいけない、ここでケリをつけなければならぬ。

それが、俺の過去であつても、それがもしかしての未来の俺であつても、いまここにいる現在の俺は、奴を否定し続けなければならぬ！

「オララアアアア!!!」



ネガティブエネルギーで構成させた二つの銃剣を最速の速さで斬りつける。一撃目を剣の腹を拳で軌道をずらされ、続く二撃目は体を少し逸らしただけで躲されたが、斬撃の勢いに体に乗せて回転させ、空気を貫く脚撃が確実に奴の腹部を捉えたように見えたが、体を捻る事で微かにずらされた！

「——ニイ」

奴は笑う。紅夜は笑う。邪神は笑う。

背中を舐める様な寒気に腰部の棒状のスラスターを前方に稼働させて奴の追撃を回避する為に広範囲に吹かしながら距離を取り——二丁の銃剣から放たれるエネルギー弾をばら撒く。

「〔名状しがたい邪悪なる皇太子。砂塵と鮮血と共に狂い踊り、惨劇の宴をここに開く〕  
『!?邪神の魔力探知、来るよ。風の邪神ハスターだ!!』

「はあ!？」

デペアの危険信号を伝えるより先に、展開した弾幕の中を掻い潜る気配は俺の背後に。

「——  
【アームズコネクト・ハスター霊刃天成・禍風】

闇を纏った黄金の色をした紅夜がいた。反射神経に最速で斬りつけるがそれを上回る速さで衝撃。既に俺の体は宙に浮いていた。殴られたと知覚したのは、吹き飛ぶ俺を

先回りして、とてもイイ笑顔をしている紅夜オリジナルだった。

速かった。女神の中で最速だと言われているベールより遥かに速い。殴る素振りも見えないのに、既に体中を陥没させる勢いの重い拳撃が叩き込まれていた。既に口の中から血の味しがなく、意識が吹き飛ぶような、嵐のような激しさの中で、無造作に銃剣を振るうがまるで雲を斬るような感触。

「な、なめるなッ！」

紅翼を薄く刃物のような形状にして周囲に展開する。流石の奴もこの状態では接近戦できないと安心した瞬間、デペアが警報鳴らした直後に下から閃光の様な一撃が打ち出された。一切の防御行動していなかった故の強烈な一撃に、意識が真っ黒に――

「紅夜ツツ!!」

誰かの呼ぶ声に思考より先に体が反応して、銃剣を振るっていた。目の前の気配は霧の様に消え、ステージに立っていた。殴られ過ぎた所為か、視界が真っ赤になっている俺もステージに降りて構える。ちっ、両足が早くも震えてやがる。

「だ、大丈夫だよ。まだまだ戦える。それよりお前らも行けるか？」

「……………うん、行ける」

そりゃ助かると左右に立った。ネプギアとユニに笑みを零す。さて、あの速さはどう

やって対抗したらいいかと思つた矢先に奴のコートと髪色が変化して、元の速さに変わつた。

「ふう、やつぱり長時間は無理か」

小走りして疲れた様に紅夜オシナルは呟いた。——アレは長時間できないのか、だとしたら今がチャンス!!

「ネプギア、ユニツ!!」

「はい／オーケーよツ!!」

伝えなくても、同感だつたのか女神化しているネプギアと俺は真つ先に突つ込み、ユニは後方支援に回つた。紅夜オシナルは微かに記憶がある。確か——『死ネクロノミコン・テイザスター界魔境法』と呼ばれる魔導書が何もない所から現れ、開かれると白い大剣と黒い大剣が姿を現して、俺とネプギアの剣撃を受け止める。まるで鋼の壁を相手にしているように押ししても押ししても奴は動かせない!

「ちよつと弱くなつたな。ネガティブエネルギーの使い方がまるでなつてない。少し前のお前の方がマシだつたぞ? —— ああ、アレは俺だつたか」

「……: どういう意味ですか?」

「ネプギア耳を貸すな。後でちゃんと説明するから!!」

『E n c h a n t !!』

背後から感じられる強烈なシエアエネジーに俺とネプギアは素早く上空に避難する。同時に膨大な砲撃が地面を抉り、巻き付くような氷と炎が周囲を巻き込みながらステージを破壊して、更に蒸発と氷結を繰り返しながら彼方まで届き周囲の環境を変えてしまおうだろう程の巨大な爆発を引き起こした。

「……………嘘っ」

「……………直撃じゃなかった（チツ）……………日本一さん」

「兄貴／上司ツ!!」

撃った本人は自然災害級の破壊力に唾然として、恐らく協力した空亡は舌を打ち、取り巻き二人は声を上げると、大きく抉るステージにぽっかりと空いた穴から所々燃えたり凍ったりしている紅夜が肩で息をしながら姿を現した。

「あ、あぶねえ。流石にアレを直撃していたら肉片も残らなかつたぞ……………。つて、くうちゃん！さつきから妙に静かだと思つたら、ずっと力を貯めていやがつたな!!」

「……………さすが父さん、ゴキブリも弟子入りするほどの生命力」

「おい、コ……………ゴブツ!!」

抗議の声を出そうとする紅夜の顔に日本一の流星のように飛び蹴りが突き刺さった。

「……………ふんっ!」

「うわあつ、とと……………全力だつただけだな……………」

ビル三階くらいから飛び蹴りして平気な顔をしている日本一も可笑しいが、それを喰らって顔だけで受け止めて、顔だけで弾く紅夜オリジナル……化物だな。

「兄貴、大丈夫か!？」

「平気……と言いたいが、やべえな。会議の時間に遅れそうだな」

「……へえ？仕事だと付いてきたんでしゆか……」

「あ、それ嘘だから」

「ちゅー……!!!こないつ巻き込まれても可笑しくない人外離れのバトルに連れてくるなんて重要なお仕事だと思つたら、ただの気まぐれちゅか!!!」

「何時もの事だろう。ワレチュー、兄貴は凄いことやつてドヤ顔したがる。自己主張の強い人なんだから。かき氷を奢ってくれた時点でこれぐらいは覚悟しないと」

「チュー!!!どこで人生間違つたでチューか。どこでロードしないといけないでちゅか!!!」

頭を抱えるネズミ(?)は世界が終つたような絶叫に思わず隣のネプギアと共に敵であつたことを忘れて同情する。それにしても、あの不良っぽい服装をしている女性は覚悟完了しているなア。

「それじゃそろそろ帰るか。未成熟で未完成で未発達だけど、今はこれくらいが後々の愉しみが期待できそうだし」

「おい、待て!!」

黒い大剣と白い大剣を消して、『ネクロノミコン・デイスター死界魔境法』を持つと同時に、鼻が曲がる様な酷い刺激を伴った悪臭がする青臭い煙が広がる。

「ワレチュー、リンダ。鼻と目を瞑っておけよ」

「う、……はーい」

「ちよつと待てチュー!またあの犬っぽい生き物を出すでちゆか?」

「すげえなー。あれ見えS A N値減つてないんだ?」

『あれはティンダロスの獵犬!?全員伏せて!!あと目を防いで!狙われたら別世界にも時間を超えても追いかけてくる面倒な奴だから!!』

デペアの尋常じゃない声に全員が目を防いだ。あとはオリジナル紅夜の声と——この上なく恐ろしい者の心配がした。粘膜質がある物が零れ落ち、それを踏みつぶす様な不愉快な音がした。全身が悲鳴を上げる。なんかよく分からないけどヤバイ、ヤバイヤバイ!!

「——つと!?!」

ドンつ、とまるで爆発物でも落ちたような衝撃と音に思わず目を空けると、一瞬化物のような姿が大きく腹部を横に殴られたような姿勢からまるでガラス細工のようにバラバラになり、その残滓は最初から無かったように砂となって消えていく。その様子にオリジナル紅夜は忌々しそうに舌を打ち、されどその表情は歓喜に満ちて声を上げる。

「はははは、お前ならゲームギョウ界で一番高い場所にいればゲームギョウ界全域狙撃するなんて容易【ドンっ!】うほっ!?やげえ、調子乗っていたら脳天ぶち抜かれる!!」  
 ワレチューとリンダと呼ばれた一匹と一人を抱え込み、青白い霧の中に消えていく。  
 直ぐに下半身が消え、上半身が消え、顔だけが残された瞬間、こちらを見て紅夜は叫んだ。  
 だ。

「次行くならリーンボックスに行け!こつちは身内が暴走気味でルウィーは消えても可笑しくねエからな!お前等にはまだ死んでもらっても困るからな!忠告したからな、忘れるなよ!!」

と、最後に手を鳴らす音が瞬間にその場所が大きく爆発した。あいつの言う事が正しければプラネテューヌのそれもプラネタワの屋上で狙撃している事になる。……色々突っ込みたいが、あいつは紅夜オリジナル以上の理不尽の塊みたいな奴だから細かい事は考えないでおこう。

「お前らは無事」

か、と言いかける前に立ち上がった胸に衝撃、なんだと見下ろすとコンパが泣きついていた。

「私達が知っているこうさんがえつてきたでずう!」

「……ただいま」

色々言葉が浮かんだが安心させる為に頭に手を置く。瞳に涙を浮かべるアイエフは小さく良かったと呟いている。

「まるで別人のようですの」

「王道的な燃える展開だね!」

「えっと、日本一さんがすとさんだったか。迷惑かけた、申し訳ない」

全くですのため息を吐くがすとさん（俺より見た目が遥かに幼いが）にもう一度頭を下げて、活力に満ちている笑みを作りこちらに親指だけ突き出して拳を作って向いている日本一。思い出せば思い出す程、彼女達には迷惑を掛けた。ただ、感謝してもたりない。後日なんらかの形で再度お礼しなければ。

「……お前らにも迷惑かけたな。アイエフ、コンパ、ネプギア、ユニ」

「全くよ。こっちはアンタのお蔭で空は死にかけるわ、ネプギアも傷を負ったんだから……それでも……帰ってきてくれて、ありがとう」

「自分でどうにかしたんですね……本当に凄いですねお兄ちゃん」

「……バカ」

アイエフは腕を組んで文句を呟くが最後に呟く声には隠しきれない喜びがあった。ネプギアはキラキラとした目でこちらを見てくる。……ちよつと恥ずかしい。そしてユニ、反論できる要所がありません本当に穴が合ったら入りたい気分です。



「さてと、後でこれからの方針を考えると……まずはゲームキャラ確保だ。ネプギア、ユニ」

「はい、任せてください」

「ふん、あとでたっぷり話したい事があるからね。覚悟しておきなさい」

そう言い残して、先ほど紅夜オリジナルが封印を解除していただくゲームキャラがセツトされた祭壇のような場所に二人が歩き出す。周囲は先ほどの戦いでクレーターだらけ

だが、奇跡の業と思える程に一発も当たっていなかった。もしかして、あの鎖になんらかの加護があつたかもしれない。

「ゲームキャラさん実は——」

因みにゲームキャラの交渉は直ぐに終わった。

……まあ、邪神の如き実力と掴み切れない禍々しさを目前で縛られながら見せられ、その一片も味わったゲームキャラは快く力の一部を貸してくれた。むしろ涙混じりの声で早くなんとかしてくれと懇願された程だった。

## バットエンドルート。『人の世界』

## 空亡

荒ぶる銃撃音が儂い悲鳴と混ざった曲を奏でている。黒ずんだ瞳で絶望を、狂気に孕んだ瞳で希望を映しながら、お互いに守る物を守る為に、或いはこの戦禍の坩堝に身も魂も飲まれ、永遠に殺し合う日々が、終わりが見えない争いを続けていくだろうか。

ここはそう、地獄。こうなることを確定していると忠告された上で彼女が祈り、私が作り出した弱き、醜く、懸命に生きようとする人の世界。

単刀直入に、この世界には最早女神は存在しない。

今は、誰もが忘れ去られた犯罪組織『マジエコンヌ』と呼ばれる組織があつたことだ。『マジエコンヌ』は言つてしまえば、裏で世界を征服をしようとする一般的に悪の組織と呼ばれる目的があつた。彼らは人に強大な力と麻薬のような娯楽を示した。こちら側を信仰してくれば更なる欲望の解消を約束すると——その数年前に大きな出来事に未だ整理が追いつけていない人類は、その甘い誘惑に誘われたつた数年で信仰すべき女神を蔑にした。勿論、その目的を知らずとも人々の未来を守る存在である女神達

は立ち上がり、犯罪組織『マジエコンヌ』と戦い、そして囚われた。

次に囚われた女神を救うために、小さな勇気と小さな希望、大きな未来を託された女神達の妹である女神候補生達が立ち上がった。彼女達は猛々しく戦い、各地で様々な人々の協力を受けながら、遂に女神達を救出することに成功した。

そして力を回復させていき、女神の威光を取り戻していく一方で、犯罪組織『マジエコンヌ』は弱まっていく。悪が栄えたためしなし、と女神と共に戦った正義に燃える彼女ならそういうだろう。

四天王と呼ばれる『マジエコンヌ』の中でトップの実力者すら女神の手によって打ち倒され、勝敗は決したと誰もが疑わなかった。……私自身も、同じだった。

だけど、女神の敵である犯罪組織『マジエコンヌ』は最初から目的を果たす為の駒でしかなかった。『マジエコンヌ』の創立者であり人々の負の神と呼ばれる『マジエコンヌ』は本来既に昇天した存在だ。『マジエコンヌ』は『マジエコンヌ』が行った悪行を元に作り出された全くの別の存在であり、己の存在を隠し、都合のいいように動かすための木偶人形だった。

全て、遅かった。マジエコンという『マジエコンヌ』の力によつて生み出されたあらゆるプログラムをハッキングして違法インストロールできるツールの本当の機能は、

人間自身の性質を書き換えるものだった。

その事實は『マジエコノヌ』を作り出したゲームギョウ界全ての負の集合体と呼ばれ、冥獄界とゲームギョウ界を繋げる禁地として作り出されたギョウカイ墓場に封印されていた史上最悪の人が生み出した真の黒幕、絶望の神『デイスペア・ザ・ハード』しか知らなかった。

アレは……、否、彼女は、禁断のスイッチを慈愛の瞳で押した。

結果、四大陸中のマジエコノ所有者全員がその場で人々の脅威であるモンスターへと変貌させた。

……後は、地獄の祭りだった。彼女の目的通りに四大陸中全てに大ダメージを受けた。本来女神の加護のお蔭で絶対に無事だと思われた街中での人だったモンスターの襲来は、無実の人々を多く殺めながら、女神に急速に葬られた。

モンスターは本来負の塊から生み出される物、当然モンスターへと変貌してしまった元の人の理性はなく、ただ暴れるだけの災害となる。……問題は女神は『人々の未来を守る機能』として生み出された『デイスペア・ザ・ハード』のような神格ではなく、人道的に生み出された存在だという事だ。

例えモンスターだとしても、それは数分前に紛れもなくゲームを楽しんでいた人であった。

女神達は、人を守る為に、モンスターをいっぱい殺した。

人は女神の加護が信じられなくなり、必死でモンスターを殺す女神達を糾弾した。

モンスターを殺せば人々は女神を信仰する。その当たり前だったシステムの根元から破壊されていた。

女神を非難することは間違っているという女神と共に旅をした仲間達は女神を擁護したが、既に大いなる哀しみと怒りを納めることは無理だった。

むしろ問題は、次誰がモンスター化することだ。直ぐにマジエコンを所有者が割り出され強引な手段を使ってでも回収されたが、マジエコンを通じて負の浸食を受け、破滅願望を灯された人々は抵抗をする。そもそも一番ひどい時期は『マジエコンヌ』の信仰率が7割を取られていた時もある。誰がマジエコンを持っているか完全に調べる尽くすことは非常に難しい。マジエコンを持たぬ平常な人々すら隣で何気なく歩く人を疑った。

——もし彼、彼女がマジエコンを持っていたのなら。

疑惑は恐怖、恐怖は防衛本能、防衛本能は——暴力に。

隣人を愛せよ。聖書に書かれているそんな人々の愛と温かな平和へと込められたそんな言霊は、このゲームギョウ界には最早戯言以下の譫言へと堕ちていた。

同時に、人々と世界の未来を守る守護女神——彼女達にもバグが生じ始めた。人を守る為に人を殺し、当然の様に人を殺し人に避難を浴びるそんな日々……気が、狂い始めたのだ。

私の異母姉弟となるだろう霊崎 紅夜さんはそんな女神達を必死に身を削りながら助けた。だが、気が狂い始めた女神達にそんな言葉は通じず、ある日雑草が抜かれる様に誰かに殺されていた。抵抗した様子は零崎さんには無かった。

私のお父さんは静観の姿勢だった。この地獄を造り出した最も近くで協力したと思われる人。だけどその性質は邪悪の一言。……それに『デイスペア・ザ・ハードは人々の負の集合体だった故にこの結果も人が望んだ事だろう？それを曲げる権限を女神は持ち合わせてなかった。それだけだろうか？』と扇動した立場とは思えない言葉を当たり

前のように口にするだけだった。

そんな屑なお父さんを一発殴り飛ばして、私は——何も出来なかった。

——私は神を殺す存在だから。神格を持つ『デイスペア・ザ・ハード』を滅ぼすことは出来るだろう。しかし、この問題は黒幕を滅ぼしても何も解決しない。そもそも相手は負の集合体なのだ。たとえ消滅しようとも、負があればまた別の形で復活するのは明白だった。

それにあのクラスの神格は消滅させるのも手間がいる。私の力は善であろうとも悪であろうとも等しく滅ぼす——故に、私が力を行使してしまえばゲームギョウ界に張り巡らされている女神の加護は完全に消滅する。前の様に、一定場所をまるごと別時間軸に飛ばすことで女神の加護が死んだことを無理やりなかった事にしたことがあるが、因果に叛逆する程の行為は世界そのものに大きな負担を掛ける。

最悪の場合、自己矛盾に耐え切れなくなり、ゲームギョウ界全てが消滅するだろう。

自分の手を紅く染めて不気味に笑うラムちゃんやロムちゃんに話しかける事が出来

なかった。

感情を捨て機械のように人なのか、負によるモンスターか関係なく射殺するユニ様は話を通じなかった。

唯一女神の中でまだ正気を保っていたネプギア様は本来守るべき人々に憎悪と不信を剥き出していて話を聞いてくれなかった。

私の母親代わりの最も信頼して尊敬している夜天 空さんは『デイスペア・ザ・ハード』の正体に誰よりも動揺して、彼女の言葉に心が折れて彼女の優秀な部下として、話掛けても石の様に無関心だった。

——私、は、何、も、出、来、な、か、つ、た。

私が動けば世界は救われるだろう。その代わりに世界が終わる。今まで築き上げてきた人々と女神の歴史を永遠の闇に葬ることになる。

だから私は震えるだけだった。私には最初から、先生とポチさん、父さんとティー姉さんとピーちゃんがいれば良かった。それだけで良かった。みんながいる世界で私は完結していた。



顔も知らない多くの誰を助ける為に、世界の業を背負う神殺しをする決意できるわけがない！

もし、やつとしてもその先の世界に私は先導者として導くことは出来ない！

私は生まれ売られ非道な実験と多くの人やその他の物に配合させられてきたんだ！

そんな私が私を凌辱した同じ人間をあの女神の様に人に優しく接することなんて出来ない！

教会の権威は完全に崩落、女神の協力者は誰一人行方は分からない。耳を塞いでも、外を見てしまえば嫌でも状況が分かかってしまい、部屋の片隅で震える日々、私の元に女神様がやってきた。ネプギア様だった。

彼女は疲れ果てた様に、血だらけの体で、あの優しい顔は呪詛に刻まれた修羅の様に、あの鈴を転がすような声は、地獄の底から聞こえる悍ましい声で、私に命が灯火が消える直前に会いに来ていた。

ただ一言、私の悩みを背中から押し切る為に、親愛なる姉を殺した人々に更なる地獄へと落としその中で苦しむ様子を頭に思い浮かべ笑う様に。

『この世界、カラ、神を、殺して』

その呪いの言葉を口にして光となってネプギア様は消えた。  
そして私は愚かしくも、それを実行してしまった。



「神を正当性させるために争いが起きるってことは、同じように神を生み出す為に争いが起きるってことだ。あの地獄の中で、誰かが身を犠牲にしても神を人々に幻想させるか、それともみんな滅びるのは……まあ、人間って奴は愛しい程に醜悪で呆れる程にしつこいから、何らかの形で結果を出すだろうな」

「……………アア、ア、ア」

「先生、動かないでください……涎が拭きにくいです」

私はそうやって、死んだ魚のような生気が全くない虚空を見つめる瞳の先生の口元に流れる涎をハンカチで拭いた。両手両足を更に先生の力を封じる為の特製の車椅子を押す父さんは静げな顔で、この桜満開の墓場を見渡す。

「……………墓場、にしては綺麗すぎるな」

「消しますか？」

「やめろ。墓場で武器を取り出すなバカ」

はい、と静かに宇宙誕生並みのエネルギーを内包した闇を武器として形作っていたティ姉さんは、父さんの言葉に忠犬（中身は狂犬だが）のように従うと、武器を消した。あれほどのエネルギーがある物を一瞬で周囲の環境を全く傷付けずに。

「えーと、優れた美人、純潔、精神美、淡泊だけつか？空らしいな。お前が女神に込めた祈りも同じ様だ。純潔の混じりけのない美しい祈り、それが時を重ねれば簡単に散るし、又は汚れる」

私は作業を開始する。とは言っても、綺麗にした女神達の遺品を新しく立てたお墓に供養するだけ。……手伝いしましょうかと先生の従者であるポチさんが問い掛けてくるが、いいと言いつ返す。ネプギア様の願いの通りに絶望神『デイスペア・ザ・ハード』は完全に消滅させた……そして、私は女神様を巻き込んでしまった。女神の加護は完全に失われ、女神が女神として活動できるその根元から死滅して、女神達は疲れ果てたように絶望に染まりきった瞳で消えていった。

私が殺してしまつたんだ。だから、これは自分でしなければならぬ。例えば、頼まれた事を忠実に行つたとしても、取り返しの出来ない事をしたことは紛れの無い事実だから。

「まるで今にも消えそうな花ですわね。生命の瞬きのようですわ。美しく、けれど栄養にするのは決して綺麗とは言えないような物ですわね」

「そう言つてやるなティシフォネ。世の中、善と悪、正義と不義、男と女と全く正反對の存在があつたほうが成り立ちやすいんだ。……この場所は、善に正義に誠実に生き続け、人に忘れられた女神達を奉る神聖な場所だ」

ネプテューヌ様、ノワール様、ブラン様、パール様。ネプギア様にユニ様……友達になつてくれたラムちゃん、ロムちゃん。

「ごめんね。一緒に、一緒に、ゲームしようつて約束したのに……」

踏み潰された二つのゲーム機を一つの墓場に納めた瞬間、胸が苦しくなつた。目が燃える様に暑い。——だけど、泣かない。泣く権利すら、彼女達を殺した私にはない。

この場所はゲームギョウ界を守つてきた全ての女神達を先生が弔つた場所。そして私は、女神達の築き上げてきた全てを破壊してしまつた大罪者。

立ち上がり、空さんの娘——ということになるだろう。イストワール様は絶望した表情で静かに涙を流す。彼女のお兄さんであり、偽りの『マジエコンヌ』の器にさせられたゼクスと呼ばれたモンスターは、女神の手により討たれている。

そして空さんは『デイスペア・ザ・ハード』の真実に、彼女の言葉に心を破壊された。……元通りにする方法はゲームギョウ界に関する全ての記憶を抹消すること、それで回復すると父さんは言っているので任せていいだろう。先生絡みになると父さんは絶対的な信頼を抱くことが出来る。

「父さん、私は」

「……見届けるのか？この世界の行方を」

言い切る前に父さんは呟いた。それに私は頷くとため息一つ付いた。

「まあ、愛娘の心から決めた選択だ。とやかく言うつもりはない……寒くなったら帰ってこいよシチューぐらい直ぐに作ってやる」

「愚妹。愛しき恋しき主様の慈悲ですわ——期待を裏切ることないように、でなければ五体分割では済みませんわ」

「……テ・テケリ（……お嬢、お元気で）」

「アッアッアッ」

強い風が吹く。大量の桜花が舞い散り一瞬、父さんの姿を隠すとみんなの姿がはそこにいなかった。そしてこの場には、イストワール様と私だけが残された。

「……どこで、どこで選択を誤ったのでしょうか。これが運命であるのなら、私も女神様達も……都合のいいプログラムでしか無かったのでしょうか」

「……ごめんなさい。私には、それを答える権利、すらない」

イストワール様は何も言わない。きつと彼女が私を出来る限り意識しないようにしているんだろう。だって、そうしなければ耐えきれないから。

「ああ、でも、もう一度、許されるなら、私は——」

私達が今いる神界。ここは教会にあるゲートを通じてしかこれない、そして教会と言う組織、建物は完全に破壊されているので、ここに来れるのは何らかの次元を突破する力がある私ぐらいだろう。

この場所は封印しなければならぬ。ここには余りに哀しみはありすぎるから、ここは人間が足を踏み入れていい場所ではないから。

先生が残した神界の機能の一つを使い、何も無い空間に投影されるゲームギョウ界。どこまでも不毛な大地が続く、多くの人々が争いモンスターも人々を襲う。絶え間なく続く負の連鎖が完成してしまっている。この連鎖を断ち切る方法は女神無き今、人間の手できない。

誰もが救いを求めている。誰もが苦しんでいる。なのに、私は何も出来ない無力な観測者。

そして、この世界をこういうゆうにした大罪者。

狂ってしまいそう、いつそ全部を破壊してしまつたらどれだけ楽になるから分からぬい——けど、目を背けてはいけない、逃げてはいけない。

この誰も想像できなかった「未知なる未来」の行方に、少しでも富と幸せがあることを祈り続け、いつか私に罰が下されることをずっと、ずっと、待ち望もう。

## ノーマルルート。『神の世界』

## 女神

空を仰げば気持ちよさそうに飛ぶ鳥たちが目に入った。この蒼穹の空の向こうの先に目指す者はどこにあるだろうなんて、ロマンチスト思考するほどの余裕が出来た俺は、その場で含み笑いをしてしまう。

数日前までは空はずっと黒かった。人の目からすればただの青空も、俺にとって人から無意識に溢れる負のオーラが空を浸食するように漂って、ひたすら嫌悪感を抱いていた。それが今は人と同じものを見える様になっている。

「……………いないな」

ふと寂しくなった左手を見た。なんだかんだ誰よりも付き合いがないデペアはこの場にはいない。否、元に戻ったと言ってもいい。今の俺の体はオリジナル、零崎 紅夜によつてモンスター生まれの地である冥獄界で作られた特注品、罪遺物という十六の世界分の世界そのものを邪殺するほどの負を溜めこんでいる肉体ではなく、人が当たり前前に抱くような、ありふれたしかし厳選された限りなく白に近い純粋な負によつて構成

されているので、昔は近くの人々から呪詛のように聞こえていた負の声も、神経を研ぎすまなければ聞けないレベルだ。

かと言つて、俺の力——ブラッディハードとしての機能は全く衰えていない。

導く様に俺の相手してくれたオ리지ナルの零崎 紅夜。現実を伝えながら答えを共に考えてくれた異母姉弟の零崎 空亡。そして——何が合つても諦めなかつた女神達の力のお蔭で、俺は俺だけの次世代ネクストフォームの力を手に入れた。

女神と人間のハーフ故に狂い堕ちた邪劍エクリプス浸食のアブネス、女神の為に結果的に世界を滅ぼす因子になつてしまつた塵塚怪王ベルセルクのアイン・アル、その他の悲劇と憎悪のブラッディハードとは全く異なる想い、守れなかつた未練や成し遂げられなかつた後悔、善も悪もなく進歩し続ける悍ましく輝く人の純粹なる欲望の力を意思を借りて至る純血光刃ライジンクの力で、女神と共に災厄を撃ち滅ぼした。

『ゲームギョウ界に遍く生を受けし皆さん』  
「ん、始まつたか」

足を進めていると聞きなれたいつもの凜々しき声だ。空を見上げると宙に投影されたディスプレイに彼女達が映っていた。

『革新なる紫の大地プラネテューヌ』その守護女神であるネプテューヌ。

『重厚なる黒の大地ラストイション』その守護女神であるノワール。



『夢見る白の大地ルウィー』その守護女神であるブラン。

『雄大なる緑の大地リーンボックス』その守護女神であるベール。

そして彼女達と共に紅い絨毯を歩く女神の候補生であるネプギア、ユニ、ロムちゃんとラムちゃんがいた。

「こんにちは」

「おーす。体の調子はどうだ？」

『へーい、久しぶり〜』

「……………ちっ」

「こんにちは、……………ね、「空亡でいい」…空亡ちゃんと兄貴この体は最高だな。デペアも元の主人に戻れて機嫌がよさそうだな。あと「呼ばないでください、殺しますわよ」あっはい」

感想で言えば棘の鎖を脱げたとってもいい、俺のオリジナル——色々とややこしいからみんなレイスと呼んでいるが俺にとつて、こいつがいなければ生まれていない。だとしたら父親と言つてもいいが、本人が「お前みたいな可愛げ皆無の息子いらん、一億歩譲つて弟」ということで兄貴と呼ばせてもらっている。問題は兄貴の従者であり、兄貴に対して狂気の愛を向けて俺に対して殺意全開のティシフォネさんだが、目を合わせないようにしよう。合わせて瞬間、首が飛びそうだ。

さてと、と俺は腰を下げて兄貴が押している車椅子に頑丈に固定されている金髪の光がない死体の様な目をした人物と目を合わせようとしますが、何も映らない虚無色だ。

『共に降り注いだ忌むべき犯罪組織からの魔の手からの解放、そして大地に傷跡を残した大いなる災いから私達は共に協力し、その脅威を退け、今ここに皆さんの前にいます』  
「……空、お前の祈りはちゃんと女神に届いているからな」

ブラッドディハードの上位互換。ゲームギョウ界全ての負の集合体である最悪の女神『ディスプレイ・ザ・ハード』。彼女はゲームギョウ界全ての始まり、そして誰も知りえない始原の女神『レインボハート』が人々の邪悪な意志に汚染され、押し込められ、狂い狂い果て語りを開いた史上最悪の敵だった。

彼女の狙いは世界の再臨。

この世界は間違っている。

誰もが不平等に、誰もが苦しく生きている。

だから救おう、この世界の根本から間違えていると、だから世界の全てを滅ぼし新たに無敵の生命と完璧な秩序、完全なる人生を作り出そう。

だから、涙を流しながら苦痛に耐え———なにより自分の創造する未来に希望に溢れた顔で俺達と戦った。

生きる事を放棄した未来を実現してはいけない。その想いでネプテューヌ達はネク

ストフォームに至り、同じようにネプギア達も四人の力を一つにすることで、女神同士の融合という女神というシステムを一から作り出した空でさえ『あり得ない』と驚愕するほどの奇跡を起こした。

まあ、俺も含め総勢六人のネクストフォームに至った無敵集団に慢心していたわけではなかったが揺るがない勝利が抱いていたが、空が敵に回って大変だった。だってあいつ、俺はともかく女神のいままでの全てを見ているから、ラスボスに繋がれて記憶と経験を憑依させて、こっちの戦い方とか癖とか全部筒抜け状態だったんだ。

そして人に裏切れ、魂の底まで凌辱されたレインボハートの女神としての散り際の一言が今まで空のゲームギョウ界に抱く思いを正気を留めていた。

何度も女神の希望に満ちたあるいは絶望に満ちた最後を見届け、心から好きになった相手ももう一度現れる事を信じて、何度も何度も身を削りながらやり直しを繰り返して、その結末は自分のした事が全て無駄だったという残酷な真実。

空がゲームギョウ界に抱いていた本当の思い。

ずっと壊したかった。復讐したかった。漠然と生きるだけの人間に。

都合が悪ければ簡単に女神を捨て去った人間に。

過去の女神を想い出すことなく新しい女神に蠅のように集まる人間に。

レインボハートが願った理想に近づければ近づく程に、人も女神も同じことを繰り返

す機械になる。

争いは無く、誰もが幸福に、誰もが不幸にならない。故に完璧な世界に感情も信仰も知性もいらぬ。

だけど、それはもう、立って息をして同じことを繰り返す生きて<sup>リビング</sup>いる死体<sup>デッド</sup>と同じ。

『ありがとう、私達がここにいられるのはいついかなる時も私達を信じてくれた皆様のおかげです』

それを心の底から痛感させられた空の想像を絶する痛みだったんだろう。狂ってしまうのも分かる気がする。この題名に今は俺達が向き合わなければならぬが、答えなんてないかもしれないとみんな笑った。俺も笑うしかない。

「——本当に真面目な奴だよこいつは」

兄貴がそういつて頬に掛かった髪を掬って耳元に掛ける。その瞳には親愛と優しが含まれていた。……今更だが、こいつのお蔭でマジエコンに仕掛けられていた恐るべき機能を封じる事が出来たんだよな。正確にはロムちゃんとラムちゃんが空亡ちゃんに色んなゲームを見せたり、プレイしたりさせて、偶然にマジエコンに触れる機会があつて神経関係に恐ろしい程に敏感だった空亡ちゃんが何かおかしいと調べ、発覚して、そ

の頃マジエコンの製造責任者であった兄貴が黒幕だと勘違いした空亡ちゃんが完全にぶち切れて、殴り込んで発覚したんだよな。

因みにマジエコンの人間をモンスターに変える機能なんだが、本来『デイスペア・ザ・ハード』しか操作できないのだが、元々この体、魂だけの兄貴が冥獄界に来る前に封印状態で力を蓄えていた『デイスペア・ザ・ハード』に喰われて、喰い返して、逆に占領しようとしたら肉体の一部と共に吐きだされたという経緯がある。

つまり、兄貴はゲームギョウ界の負を相手を簡単に圧倒したという、とんでもない奴だ。

『そして謝罪を。私達はゲームギョウ界をより良い物にという思いで信仰自由化を皆様の意見もなく決定し、実行しました。その原因で皆様に多大な混迷を齎したこと、深くお詫び申し上げます』

「空は大丈夫なのか？」

「もう何十億……気の遠くなる時間を狂気と正気と共にゲームギョウ界に執着してきたんだ。その願いが託された相手であるレインボハートによって壊されたこいつのメンタルダメージを測りきれないだろう。……だからゲームギョウ界に関する全ての記憶を破壊してもらおうさ。空の本体に」

「……そうか」

空の本体については深くは知らない。ただ、人が自分の名前を呼ばれたら反応するよ  
うに、その強大する存在は見ただけで魂ごと存在を破壊するはた迷惑な存在故にそれ  
に耐えられる物でなければ詳しいこと話せないと言う、別次元の問題だったのでこのこと  
は俺達の間は深追い禁止ということになっている。

『これから迎える未来には、数々の問題があるでしょう。恐るべき人をモンスターに変  
えてしまうマジエコンの回収、未だ癒えぬ傷ついた街の復興、これからも向き合わなけ  
ればならないモンスターの存在……』

「……いい顔ですね」

「ああ、そうだな初めて会ったそういう形だからそういう物であろうとする作り物みた  
いな顔じゃねエ、いい女の顔になったなあ」

「我が愛しき恋しきご主人様？それは——」

「ま、俺はお前のほうがいいけどな。ハハハハッハ」

そういつて何気に地雷回避する兄貴。ちよつとでも選択ミスったら神の上位存在と  
して君臨するティシフォネさん、ネプテューヌ達を殺戮しに行くんだろな。……う  
ん、やつぱりおかしいよな色々。

空亡ちゃんも針金のような細い目で顔を紅潮させて妄想の海を泳ぎ始めるティシ  
フォネを見つめる。ド畜生な父親とキ○ガイなお姉さんをもって大変ですね。

「分かって、くれますか（；ω；）ブワツ」

「ああ、正直最初っから自重なかつたら俺達女神側数日で敗北してたし」

『かといって、それやったら破壊神がぶち切れてやり返して、レインボハートの掌で二人とも見事に踊らされていたね』

あの二人が好き勝手したら星の知性生命体なんてあつという間に滅びるよ。マジで。

聞くには、間接的にあの二人の所為で空亡ちゃんの世界は色んな異世界から侵略受けて毎日戦争中、日刊世界崩壊危機らしい。死んでも行きたくない。

『——その一つ一つに私達は全力で取り組み、そして輝かしい未来の為に前進みと思っています』

「あ、そろそろ終わりそうだぞー。ってお前等なに励ましあつての？デキてんの？」

「……………」

空亡ちゃんと間違いなく思考が一致した。こいつ後で一発殴ると。

視線を場面に映すと、女神全員が同じ場所に集まって手を繋いでいた。

その光景に涙が出そうになった、ブラッディハードの宿命は今だ消えなくとも、遠い未来にいつかネプテューヌ達か、ネプギア達か、それとも新しい世代の女神と戦わなければならぬとしても、今ここに俺はあいつと出会って本当に感謝している。

『『』——大地に、空に、そしてゲームギョウ界全ての生命に幸福があらんことを』

!』』』

「——幸福あらんことを」

例え立場や別の場所でも、俺達は同じ夢を見れる——これ以上に幸せなことはない。



## 女神Ⅱ

プラネタワ―で開かれた小さなパーティー。先ほどのマジエコンヌという脅威を打ち破った祝祭とは違う二次会みたいなものだ。

「―― やつと来た。待ちくたびれたよこうちゃん！」

「ああ、待たせてすまん」

と言いながら、予定時間より三十分早く来たつもりなんだが。と思いながら手を引く張るネプテューヌについていくと、既に片づけられた会場に大きなテーブル一つを中心にこの事件の真相を知る関係者が集まっていた。

四女神とその候補生、教祖たちに、アイエフやコンパ、日本一、ガスト、兄貴や空亡ちゃん等々。全員集合している。

「はい、お兄ちゃん」

「ありがとう、ネプギア」

ネプギアに渡されたジュースの入ったグラスを受けとり、ネプテューヌを代表に全員がグラスを掲げた。

「えー、ゴホンゴホン。本日は大変お日柄もよく——」

ネプテューヌらしいネタ混じりの挨拶が始まった。みんなこんなキャラだとは知っているので誰も突っ込まない。というより疲れている。深夜のもう日付も変わっている時刻だ。

ブランの両方に立っているロムちゃんやラムちゃんはこくりこくりと今にでも眠りそうだし、ユニやネプギアも眠そうに眼を手で擦っている。

ノワールは真面目に聞いているが突っ込む気力なし、ブランは右から左と無関心状態、ベールは目を閉じて感傷に浸っているように見えるが寝てる。その他も同じように眠そうだ。なのに、ネプテューヌは元気な声で今まで起きたことを面白おかしく語っている。

「そこに私の次元一閃が炸裂！ぐわあくやられたあくと倒れる悪の幹部！」

いや、あれ直撃すれば死ぬから。防御不能の概念切斷攻撃はチートだろう。ふとテールの向こうで懐かしそうに眼を細める兄貴。ネクストフォームの四女神相手にマジック・ザ・ハードの最終調整の為の時間稼ぎという偉業を成し遂げている。ノワールの未来予知と同等の気の遠くなる戦闘経験と少しでも可能性があるのなら迷いなく実行する覚悟に、ベールやブランの神格技能ハイド・モジュールを攻略して、立つことすら可笑しい程にボロボロになりながらも恐ろしいほどの万遍の笑みは、巡ってきた修羅場の違いを見せつけ

られた。

……まあ、そんな兄貴にマジック・ザ・ハードが焦って自身の神格技能（ハード・モジュール）が未完成状態で戦線に突入してくれたおかげで勝てたんだが。

「ラスボスは私達の遠いご先祖で、空はそっちに協力するし。うん、本当に……色々合った」

正直な所、それは空亡ちゃんと兄貴が居なかったらゲームオーバーだったな。彼らが居なかつたら、ゲームギョウ界と冥獄界を衝突させられてこの世界は完全に崩壊されていた。

冥獄界から無限に溢れ出したモンスターを見た時は終わった。と思つたが、空亡ちゃんが冷静に兄貴に声を掛けて

『父さん、この世界の人類全員の記憶を弄れます？』

『はあ？ 舐めんなお前の父親を誰だと思つてやがる？』

そうですかと言いつ返して、何事かと思つたら空亡ちゃんが契約しているデウス以外の全てのモンスターを召喚した。数では当然空亡ちゃんが呼びだした軍勢が負けていたよ？ だけど質は天と地ほど変わっていた。数百メートルを超えるような怪物としか言いようのない龍、獣、蟲が放つた極光はこの星ごと粉碎してしまうと焦るほどの破壊力だった。空亡ちゃん曰く手加減はしていると云い放つ、デウスを召喚して悠々と四大陸に

押し寄せるモンスター達を開かれた冥獄界の扉に押し込んでいる様は、異世界の住人怖いという認識を植え付けられた。その後、兄貴が空も使っている生命繊維とかいう糸の様な寄生虫を使って、ゲームギョウ界の人類全ての記憶を弄った。レベルが違う、というか一桁クラスが最高のステータスのゲームにステータスが八桁以上のキャラの蹂躪を見た。……その後、空が持っている時間操作する道具を兄貴が使って、空亡ちゃんが行った破壊の進軍の傷跡が違和感ないように修復する様は頭おかしくなりそうになったが。

「……頭、痛くなった」

俺と同じように思い出したネプテューヌが頭を抱えて呟いた。空亡と兄貴以外の全員がその場で激しく頷いた。

「ご、ごめんなさい……」

「貴方は悪くないわよ。むしろアレなかったら今頃ゲームギョウ界破滅していたし……」

「は、はいです。むしろこっちは感謝しないといけない立場です……」

「やろうと思えば女神も洗脳できるぜ。いやここは人類全員を操作してシエアを盾に嫌々女神達を木偶人形の様面に面白おかしくするのもいいな」

空気の悪さに空亡ちゃんは深く頭を下げた。そして外道兄貴、お前は少し黙ってるな

?その一言で俺も含めて反射的に女神化&冥獄神化して他全員が武器を抜いたけど。

「はははは、冗談だよ。冗談」

「お前の冗談は軽く流せるレベルじゃないんだよ。それにお前は私達に仇と言う名目でそれをする事が出来るからね」

日本一の鋭い言葉に兄貴から笑みが消えて目を細める。俺達が犯罪組織マジエコン又を壊滅したそのトップである四天王を倒したも当然俺達だし、それにマジック・ザ・ハード、彼女の散り際の一言は妄信の類ではなく、兄貴に対する恋する乙女だった。

兄貴が一体どういう風に四天王たちと付き合っていたのかは知らない。だけど、それでも、兄貴の言動は彼らとの生活を本当に楽しそうだったと物語っていた。だから、俺達は憎まれる側である筈であるが、兄貴は少しだけ寂しそうな表情をして笑って返した。

「お前達は勝者、俺は敗北者だ。……確かにお前らに復讐してこの気分を晴らすのもいい……が、知ってのとおり俺には絶対厳守の優先順位がある。その頂点である空はお前らの死を望まない。なら、俺は敗残兵のままだ。それでいい」

というか、何でこの場に俺を呼んだ?と愚痴りながらグラスに口を付ける兄貴。俺達は目を合わせる。結論はやっぱり空の様な思想も感情すらも別次元の存在ということだ。空も俺達に言っていた通りに気にしないようにする。

『真に同感しようと思えば同じ存在、近い存在になるしかない。その過程で自分の大切な者を失うかもしれない。僕を理解するのに、そんな代償いらないでしょ？僕にそれだけの価値は君達にはないから』と空も口酸っぱく言っていたし。

「……おっと、時間だ。そろそろ”あいつ”に会えないといけない。くうちちゃん、後は頼んだぞー」

「いつてらっしやい父さん、先生をお願い」

任せろーと言い返し、その場全員が動作すら見切れず兄貴は消える。不穏な空気に空亡ちゃんは、両手を叩き背筋を伸びるような渴いた音を響かせた。

「父さんは人でも神でもない別存在なので、軽く受け流すぐらいがちようどいいです。……きつとそれが父さんも嬉しいです。それに今日の祝祭は一時のお別れ会なんですよね？だったら私達ではなく、主演の紅夜さんの話を聞きたいです」

と、全員の視線がこちらに変わる。ふう、と空亡ちゃんに内心感謝しながら汗が流れる。俺自身そこまでコミュニケーションが高いという訳じゃない。そして、言おうとしたこととか全部ネプテューヌが喋ってしまったのが痛い。

「あー、えーと、……そうだな、これお別れ会、か」

「また、会えるわよ」

「あ、ああ。あの時とは違う。好きな時に俺はこちらに帰ってこれる。モンスター全て

を制御するのはすまん無理だ。だから少しづつギョウカイ墓場を通じて排出させてもらう。その結果、罪のない人が傷ついてしまうかもしれない」

はいと女神達は頷いた。あの数年前の時と同じように、俺は全ての負を操作することでゲームギョウ界に一切モンスターは溢れないようにした。結果は失敗、むしろ人を守ろうとした冥獄神として矛盾した考えにデイスペア・ザ・ハードに目を付けられ、無理な過剰を持たされて幾度も暴走して迷惑を掛けた。

そして今回の事件で、遂に国家秘密であるブラッディハードの存在がばれた。これから人々の記憶の中では俺は負の寄り心として、いついかなる時も俺を憎み続けるだろう。それが一番楽だから。

「……俺は一生、人々から畏怖され続ける存在になった。この世界に俺が住めるような場所はない。けど居場所はある。俺の事を知ってくれてくれるお前達がいるから、俺は安心して地獄に墜ちれる」

「これからも理不尽なことがいっぱい起こるだろう。その中には俺が原因になる件も多々あるかもしれない。女神と冥獄神は衝突しなければならぬその関係は、俺達であつても変わらない、変わつちやいけない」

人とは混沌の生き者だ。光と闇を持つ人だ。

不条理で理不尽で、不確実で不平等で、だからこそ叔父の様に、親の様に、兄の様に、

姉の様に、導くための神。人の未来を守るための神格であり、同時に人の未来を見定め裁く事ができるのが俺達。

「例え、俺達が人によって望まれずに生み出された物で合っても、人と世界の未来を守る物であるように、俺達の関係は変わらない」

——— ああ、だからこそ。

「俺達の行いが新しく生まれる命に夢を持てるように、憎しみや悲しみ、未練や怒りは俺が背負ってやる。喜びや楽しみをネプテューヌ、お前達が分かち合ってくれ」

女神達が頷く。その眼は俺の憧れた女神そのものだった。

永遠に届かなくなった女神の様になりたいという夢、だけどその夢は誰かが拾ってくれるその切欠を造れる存在に俺はなれた。そのことを誇りに思いたい。

「……………例え、違う場所であつても例え空を見ていても———俺達の夢はいつも繋がっているから」

この星空の下。俺達はまた違う道を歩くだろう。

この選択は、互いに険しい荒谷の道。

けれども目指す、遙か理想郷の黎明の光があることを信じて、次にこの胸にある輝きを託せるようにして、誰も知らない【未知なる未来】に巡る希望と絶望を想像しながら、俺達は、また一歩前に踏み出した。





## トウルーエンド 『眞実』

## 未知の未来

それは、血まみれになりながらも、必死に手を伸ばして掴んだ結果、絶望的に死亡した残された者の物語だった。

我欲に塗れた人は、自らの作り出した檻を壊して未来に羽ばたいた。それは、進化と呼べる新たな意識の始まり。だけど、その為に人は今まで守り温かみをくれた飼い主を道端に生える雑草を抜く様に殺した。人を守る者として、誰よりも人を愛した神様が人の為に作り出した全ては、満開に咲く花畑を焼き尽くす行為だった。

創造は破壊なくして成立しない。例えどれほどの苦行を克服し、困難を乗り越え、自身と言う限界から超克した素晴らしい神様がどれだけ人を愛しても、人は神様の純潔にして純粹な愛を拒んだ。

本来なら、そこから神様からの解放、人の真なる自由と混沌が始まる———その筈だった。

『呪いあれ!!人類種に永劫の呪縛を!人類種に永遠の闘争を!人類種に癒えぬ終極の絶望輪廻を!!この人類史上最も禁忌の可能性とされた邪知極点!決して沈まぬ黒い太陽、蒼穹は明けぬ深夜、故に砕け得ぬ闇!故に世界終末の夜の具現——我が名は『黒闇天の魔導書!!』』

私達が……いや、お兄ちゃんが相打ち覚悟で倒したこの世全ての悪とされ、全ての人の負を抱え込んだデイスペア・ザ・ハードより深い負の奔流を持つそんな私達の常識じゃ一片も理解しちやいけな存在が、女神達希望を絶望を一度ゲームギョウ界の全てを滅ぼして、作り出した。

全ては人間という種に対する復讐心で。大好きな人を殺した人間達を束縛して、ずっと苦しめる為に。

永遠に与えて、永遠に奪う続けて、その絶望する表情を何よりも喜びとして、その希望の表情を何よりも痛みとして、自分自身も血反吐を吐きながら、もう偽りでしかない光を幻想しながら、ずっと、ずっと。

それは、何のために涙を流しているのかも分からなくなった。とても、悲しい、邪神になってしまったモノの物語だった。



『マジエコンヌ騒動』——人々の中では、そう記憶に刻まれた事件から一年の月日が流れました。プラネタワウの頂上に設けられた私室のバルコニーから見下ろす景色はあの時と比べて順調に修復できています。

「……あれは、凄かったなあ」

天地を覆うモンスター。デイスペア・ザ・ハードの意志であるレインボハートは空さんを仲間に引き連れて、行ったのは冥獄界とゲームギョウ界との融合。それが意味するのは新しい世界の誕生と共に私達が住む世界の破滅でもありました。しかも、レインボハートはこちらの脅威を見做して、並行世界とアクセス権を持つ空さんを利用して異なる並行世界の冥獄界をこちらの冥獄界と繋いで、それこそ那由多まで届く恐怖を超えて傍観するだけしか出来ないモンスターの軍勢を呼ぶ出したのです。

それでも、やるしかなかった。冥獄界の深部にて他の世界を繋いでいる空さんを止め

る為にレイスさんと空亡ちゃん、ティシフオネさんが悪夢のような数をしたモンスター  
の軍勢に突貫。空亡ちゃんが置いて行ってくれた従者とお姉ちゃん、マジエコン又四天  
王の皆さんが四大陸の守護。

そして、私達女神候補生とお兄ちゃんが全ての元凶である元女神レインボハートを討  
伐することになりました。

「——ネプギア？」

「あ、うん。どうしたのユニちゃん」

振り返るとユニちゃんが少し不満げに腕を組んでいました。

「なに、ポーつとしていいるのよ。急ぐわよ——今日が約束の日なんだから」

「……うん、そうだね。今日……なんだね」

約束の日。そう、今日が、お兄ちゃんが私達の目の前から消えた日。そして帰ってく  
ると約束してくれた日。

「ラムちゃんやロムちゃんは？」

「あの子達なら既に行っているわよ。プラネテューヌで一番ギョウカイ墓場が近くに  
合った場所に。……というか、現地集合してみんなで決めた事でしょ!？」

「……そうだっけ?ごめんね」

もう一度ごめんなさいと頭を下げるとユニちゃんは深いため息を吐いた。うう、凄く

呆れられてる……。

私が申し訳なくて、頭を上げられずにいるとユニちゃんは私の隣に立ってプラネターから見下ろす事が出来る光景を目にした。

「……まあ、気持ち分からなくないわよ。あの時、本当にみんな必死で、出しきつて……結果、世界は守れたわ。最低限の被害でこれ以上ない程に理想的にね」

皮肉が込められた声、だった。多分空さんたちに深く関わる事がなければ、もつと爽やかな気持ちでいられてだろう。でも、私達が知っている空さんがどんな思いで、人を守り続けてきたのか、どんな祈りを女神達に教えてきたのか。

「神様は栄光と破滅両方を与える。それをどう使い愚かになるか進歩するかは自分自身の選択」

「……レイスさんの言葉だね」

「空亡」といい、レイスといい。この世界以外に色んな物を見てきた人たちの言葉は本当に訳分からないわよ。でも——心に刺さる言葉だらけよ」

私達は知った。本当の神様は人から与えもするが、奪う事も平然とすると。ただ与えるばかりする私達はそのような権能を持たされた人工的に作られた神格だと。

それは空さんが作り出した物、人を守る為に人を縛る為に人の可能性を操作する為の端末が私たち守護女神という仕様だった。

頭を上げて街並みの景色を見ながらここから始まった旅を思い出しながら呟いた。

「私達よく耐えたよね」

「……レイスより空亡が一番きつかったわ。あの子、私達の事は好きだと言っていたけど、守護女神というシステム自体は吐き気がするぐらい嫌ってみたいだから、言葉の一つ一つが私達の存在意義を否定しているような気がして……」

がくりと肩と頭を落すユニちゃんを見ながら苦笑する。あれでも、そうとう私達を気にかけてくれたとレイスさんが言っていたし、本気ならそれこそ私達の心をあつという間にブレイクしちやいそう。でも、空亡ちゃんは気持ちには同情してしまう物、けどその権利は私達には無い。だって、ずっと神様に呪われて、殺されかけて、何より大切な家族を引き裂かれて恨まずにはいられない。

そして、私達の女神としての行いに対していつも疑問を抱き問い掛けてくる質問は考えたことも無い事だけど、人の人生を大きく左右する私達だからこそ深く慎重に考えなければならぬことばかりで凄く勉強になった。……ユニちゃんが言う様に心折れるかと思っただけ。

「……本当に色々あったわね。まさかマジエコンの四天王がこちらに寝返るとか」

「あはははは、レインボハートさんの目論見がばれた時点で『マジエコンヌ』という犯罪組織はほとんど無意味だし、あのマジエコンの所為もあつてあつという間に解散された

ね」

マジックさんは元より最初から姿かたちもないマジエコンヌを妄信するように洗脳されていたし、ジャツジさんは強い奴と戦えればそれでいいバトル脳、ブレイブさんは未来ある子供たちの未来を滅ぼそうな奴なぞ成敗してくれる！と一番先に離脱して、変態<sup>トリック</sup>さんは……うん、ブレイブさんと同じような理由で離脱したけど色々酷かった。主にロムちゃんとラムちゃんが泣く程に。

因みにマジエコンの本当の機能は平たく言えば人をモンスターに変えてしまう恐ろしい機能。それは私達<sup>ヘッド・モジュール</sup>が使える神格技能に似た能力で、神様に対して絶対的優位性を誇る空亡ちゃんが直ぐにそれを見抜いて、レイスさんに激昂しながら殴りかかって真実が発覚したのが犯罪組織崩壊の一步だった。

「そういえばあの人(?)達って今頃どうしているのかな?」

「ブレイブと変態はこつちの世界に残って活動中、他二人はレイスが帰った世界に付いて行つたみたいね」

空亡ちゃんから異世界からの侵略が日常茶飯事で毎日世界崩壊の危機だということを知っている身からすれば、絶対に行きたくないけどマジックさんは私達と同じ恋する乙女で、ジャツジさんは戦闘狂だからちようどいいのかもしれない。因みにティシフォネさんと空亡ちゃんもまた遊ぶに來ると帰って行つて、その時にレイスさんの直属の部



下だった下つ端さんとネズミさんも付いて行った。

「——つと、ネプギア。そろそろ時間よ」

「うん、今日帰ってくるんだよねお兄ちゃん」

「帰ってこなかったら私達でネクストフォームになってあらゆる手を使ってでも探し出すわよ」

ユニちゃんの言葉にくすつと笑い返して私は頷いた。お姉ちゃん達は一人で発動できけるけど、私達四人揃って初めてなれるネクストフォームの神経技能ハイド・モジュールは瞬間移動で究める事が出来れば次元突破も出来るだろうと空さんからお墨付きを貰っている。

走り出すユニちゃんを追って部屋から出ると直ぐに目に入ったのはイストワールさんとそのお兄さんで車椅子に座っているゼクスさんだ。

「ネプギアさん、少し待ってください」

「は、いっ？」

「感動の再会なのは十重承知で大変喜ばしいことなんですけど……ネプテューヌさん、今日の仕事全部投げているですが」

イストワールさんは胃痛に顔を歪めた顔で辛そうに声をだす。

数日前から落ち着かなかったお姉ちゃんの事を思い出して、思わず頭を抱える。

「……………あ、あははは、で、出来る限り早く帰ってくるように言ってみます……………」

「お、ね、が、い、します……」

「うむ、行つてくるがいい。英雄の凱旋だな」

手を振るう二人に返しながら、ユニちゃんの後を追いました。

場所はそれほど遠くは無く、女神化して空を飛ばば、それこそ数分で到着する程で私とユニちゃんはその場所に——何もない崖、向こうにはギョウカイ墓場の残骸が見えるだけの海にやつてきました。

「おーそーい！」

「ネプギアちゃん……こんにちは……」

「みんな遅くなってごめんね？」

諸事情でみんな来れないけど、女神達全員に私達を含めた女神候補生、アイエフさんやコンパさんが集まっていました。

「ネプギア！もうお腹すいたよー」

「はい、サンドイッチ持ってきたよ」

朝から、いや日付が変わった今日の夜からずっとこの場にいたお姉ちゃんに私はサンドイッチの入ったバスケットを渡す触れ合ったその手は、まるで氷のように冷たかった。

「わーい！ありがとうございます……あれ？」

「皆さんの分も用意しました。……皆さんならお姉ちゃんのように待っていると思いましたが」

「……………本当に良く出来た妹ね。ネプテューヌ」

「ええ、勿体ないですわ。ネプギアちゃん、もしよろしかったら私の妹になりませんこと？」

「コラー!!ネプギアは私の妹だから！誰にも渡さないよ！」

私を抱き締めて猫のようにベールさんに威嚇するお姉ちゃん。その肌はやつぱり寒かった。

最後の姿、お姉ちゃん達はお兄ちゃんを見る事は出来なかった。その理由、デイスペア・ザ・ハードの意志はレインボハートで私の最後の一撃が彼女を堕ちた者ではなく、女神としての意識を戻した。その時に教えてくれたのはデイスペア・ザ・ハードの本質、つまり人間の負の集合体であるが故に指向性のない恐るべき自己破滅の奔流を抑える役を必要とする事。

放置してしまえばまたレインボハートは負に汚染され元踊りになるだろう。かと言つてこのまま世界を滅ぼそうとしているレインボハートの意志を完全に倒してしまえばデイスペア・ザ・ハードの本質は誰も主体となる意思がなく、それは理性のない

獣と同じで、近いうちにまた同じことが、しかも今度はただ暴れるだけの災害が引き起こされる内容だった。

そうしないために、お兄ちゃんは新たなデイスペア・ザ・ハードの核となった。

一刻を争う状況で判断して決意したお兄ちゃんは感謝と慈悲を持つてお兄ちゃんの<sup>ハード・モジュール</sup>神経機能を全力稼働させて冥獄界そのものを吸収して放った一撃は、レインボハートの意志を汚染された部分ごと完全に滅ぼし、私達はレインボハートが空さんに伝えてほしい遺言を受け取った。その遺言のお蔭で空さんは今頃どこかの空の下で元気でいられているとのこと、レイスさんや空亡ちゃんはちゃんと場所は教えられて、一人旅をして気分を落ち着かせてやりたいと言っていた。

「……全く、時間も決めてないのにどうしてこうも集まるのかしら」

「そういうブラン様はどうして私達より速くに？ネプ子より遅くだとしても、もう六時間以上は待っていませんか？」

「ツ、ひ、暇だったからよ。……悪い？」

「全然悪くないです。ブラン様もこうちゃんのこと大好きなんですわね」

「うせえ、あいつには色々デカい貸しがあるから礼を言わないといけないだけだー！」

みんなそれぞれ旅を思い出を語っていると、もう日が落ちかけているのが目に見えました。けれど、誰も帰ろうとはしません。だって、信じているから、世界を覆う責務を

笑って引き受けて、私達と同じ夢を見続けたいと心から行ってくれた大切な人がいるだから。

ギョウカイ墓場と冥獄界はありません。つまり負が集まる所がありません。

それはつまり、今までと違って女神の加護が薄い場所なら又は負が集まってしまった場所ならゲームギョウ界どこでもモンスターが出現してしまう可能性が生まれます。

モンスターの負によって生まれてしまう物。それは誰かひとりが背負っていい物ではありません。誰もが見続けなければならない。誰かが背負う事が当たり前なのです。

私達、守護女神はこれからもずっと戦い続けるでしょう。

人を守る為に、そう在れと定められたからではなく、自分の意志で、時に人を裁く機会もこれから多くなってしまうかもしれません。

だけど迷わない。私達が歩いた道を辿り多くの人が夢を歩めるように。

「——ただいま。みんな」

『おかえり!!』

風と共に懐かしい声に私達は振り向き歩き出します。この先にある【未知なる未来】に幸福あれと祈りを込めて——